

東京国立文化財研究所年報

1998年度

東京国立文化財研究所

— 美術部 —



木村莊八筆 日比谷公園 1912年 小杉放菴記念日光美術館蔵 (20頁参照)



木村莊八の「日記」(1920年) (20頁参照)



河北省湾漳北齐墓壁画調査 (18頁参照)



黒田清輝巡回展 岡山県成羽町美術館 (126頁参照)

— 芸 能 部 —



翁（白色）伝日光作
〈三井文庫蔵〉（24頁参照）



新潟県 下野の綾子舞「小原木踊」（90頁参照）



いざなぎ流日月祭「舞神楽」（高知県香美郡物部村市宇十二所神社）（90頁参照）

— 保存科学部 —



低酸素濃度処理による殺虫実験



低温処理で文化財材質に生ずる歪の測定実験

(27頁参照)



綿貫観音山古墳 (28頁参照)



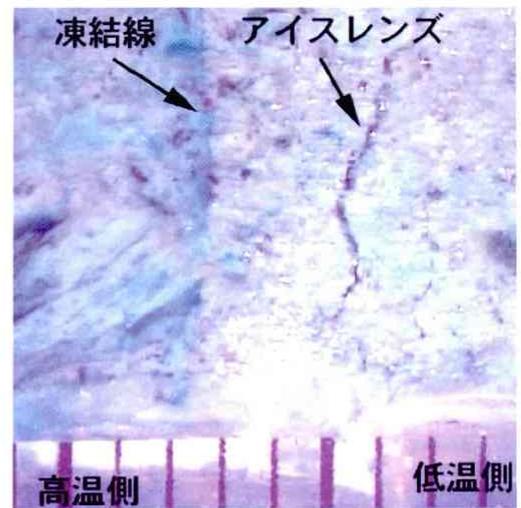
表面黒色化した丁銀資料

(45頁参照)



新鄭発掘現場からの出土銅製品

(65頁参照)



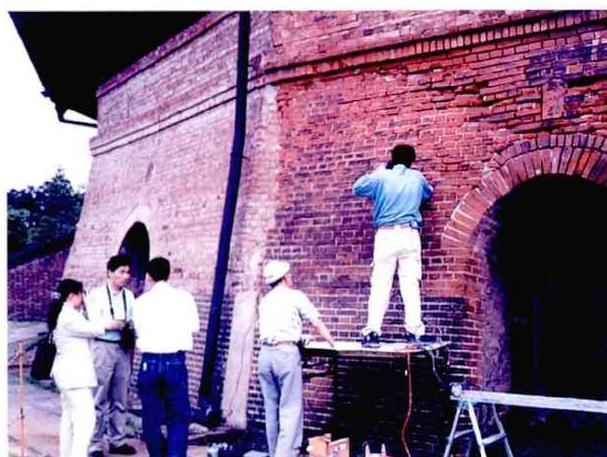
大谷石試料中に生じた水晶析出によるクラック

(63頁参照)

— 修復技術部 —



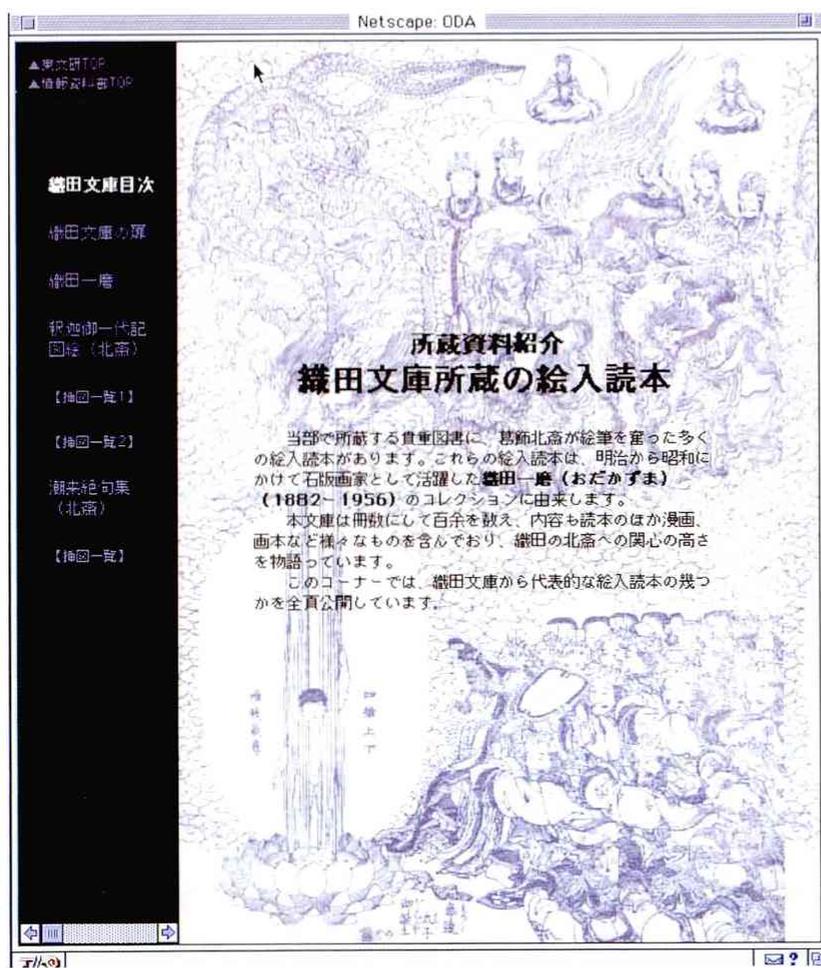
重要文化財・旧下野煉瓦製造ホフマン式煉瓦焼成輪窯（30頁参照）



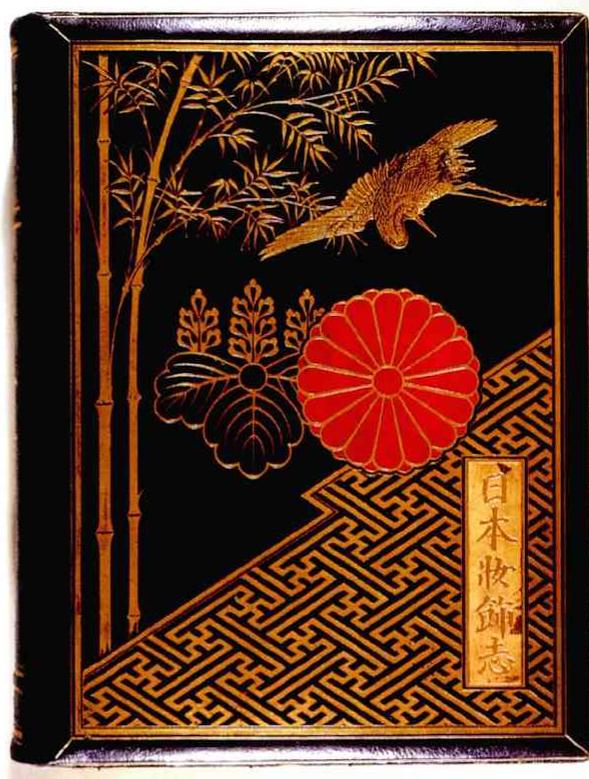
ホフマン式輪窯劣化状況調査（30頁参照）



韓国国立文化財研究所で測定中の総合気象環境測定機（36頁参照）



情報資料部では所蔵貴重書の一部をホームページで公開している。これは織田文庫の絵入読本紹介のカバーページ。



所蔵資料紹介

The Ornamental Arts of Japan (全2巻) 1882・1884
年にロンドンで刊行された。内題は『日本装飾志』。

— 国際文化財保存修復協力センター —



タイのアユタヤ遺跡（マハタート寺院）



アユタヤ遺跡におけるレンガの劣化（マハタート寺院）



遺跡保存のための日タイ共同研究セミナー（1999年3月、バンコク）

緒 言

当研究所は昨年度において始めて「東京国立文化財研究所年報 1997」を出版した。これまで各部の活動状況は「東京国立文化財研究所の概要」として明らかにしていたが、通常の機関の概要として出版されるものは機関の機構図、施設の状況を示すに止まっており、名称からくる誤解は避けられないことと、当研究所は文化財保護に係る様々な活動を広範に行っており、それらの全てを示さなくては当研究所の個性と存在する社会的意味が理解され難いと考えたからである。作業した結果としての年報にはまだまだ不満は多いが、この作業を通して各部・各人がお互いの活動の内容を認識するようになるという望外の果実を得た。1998年度版年報は前年版の改善に意を用いているが、折から、政府の附属機関等の独立行政法人化の作業が進んでおり、今後、府省に置かれる研究評価委員会の評価をも念頭に、内容の進化と充実を図って行きたいと思っている。

政府予算が計上されている研究主題は継続性のものが多く、大きな変更は無いが、それぞれの研究は着実に研究が進められている。その中では、予算的には小額であるが特に重要と見做している研究が、生物被害の防除の新技术の開発研究である。これまで生物被害の防除には臭化メチルが使用されてきたが、オゾン層の保護のために、2005年にはその使用が全廃となるからである。有効な代替技術が開発されなければ、国内の文化財保存のみならず、海外展にも影響が出るのは必定であるからである。また新しい研究として、近代の文化遺産の保存保護のための研究を開始した。近代産業の生産物や構造物については文化財として保存の意識は十分には成長していない。従ってその保存修復も、よかれと思ってなしたことが文化財の価値を失うことにもなりかねないという危険を孕んでいる。近代の文化遺産の保存修復に関する研究は、そのような問題意識を持って始められている。この関連で「近代の文化遺産の保存と活用」と銘うった国際シンポジウムを開催した。この種の討論の場が設けられることの期待は予想以上に大きなものがあり、当研究所は将来にわたって相応の力を発揮しなければなるまい。

国際的な交流業務も確実に行われているが、例年行われているアジア文化財保存セミナーで新しい動きがあった。1998年度は「世界文化遺産の保存と活用」という主題で行ったが、出席者から、このセミナーを海外で行えないかという希望が出されたのである。我が国の予算制度のもとでは、行うことは出来ないが、アジア文化財保存セミナーがアジア諸国から評価されたことの証明ともいうべき希望であり、その実現の機会を待ちたいと思う。1998年は政府の行政改革の関連で附属機関の独立行政法人化の作業が進められている。作業の過程と結果には不満は存するが、せめて国際協力の多様な需要に見合う活動が行えるよう制度設計がなされることを願っている。

1999（平成 11）年 11 月

東京国立文化財研究所
所長 渡 邊 明 義

東京国立文化財研究所 年報 1998 年度

目 次

緒 言

1. 機 構

1. 組 織 図	1
2. 組織の概要と職員	2
(1) 庶 務 課	2
(2) 美 術 部	2
第一研究室	2
第二研究室	2
(3) 芸 能 部	2
演劇研究室	2
音楽舞踊研究室	2
民俗芸能研究室	2
(4) 保存科学部	3
化学研究室	3
物理研究室	3
生物研究室	3
(5) 修復技術部	3
第一修復技術研究室	3
第二修復技術研究室	4
第三修復技術研究室	4
(6) 情報資料部	4
文献資料研究室	4
写真資料研究室	4
(7) 国際文化財保存修復協力センター	4
企 画 室	5
環境解析研究指導室	5
保存計画研究指導室	5

2. 研究活動

1. 各部の研究活動	6
美 術 部	6
芸 能 部	7
保存科学部	8
修復技術部	9
情報資料部	11
国際文化財保存修復協力センター	12

2. 研究一覧	13
3. 中長期研究計画・特別研究	15
4. 受託研究	45
5. 文化財保存修復に関する国際交流促進事業	50
6. 文部省科学研究費補助金による研究	54
7. その他の共同研究	69

3. 個人の研究業績

.....	70
-------	----

4. 事業

1. 研究集会など	84
(1) 国際研究集会	84
(2) アジア文化財保存セミナー	86
(3) 各種の研究協議会	88
1) 文化財保存修復研究協議会	88
2) 国際文化財保存修復研究会	89
3) 民俗芸能研究協議会	89
4) 近代の文化遺産保存研究会	91
(4) 研究会・講演会など	91
2. 調査指導など	97
(1) 所外経費による調査指導	97
(2) その他の調査指導	102
1) 文化財の材質に関する調査	102
2) 美術館・博物館等館内の環境調査	103
3) 文化財の虫害等被害に対する調査指導	105
4) 文化財の修復および整備に関する調査指導	105
3. 研修	107
(1) 「紙の保存修復」国際研修	107
(2) 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修	109
(3) 資料保存地域研修	111
(4) 海外学術調査員および研究者のための保存修復講座	112
(5) 博物館学実習	113
4. 文化財修復協力	114
(1) 在外日本古美術品保存修復協力事業	114

5. 講座など	115
(1) 公開学術講座	115
(2) 夏期学術講座	117
6. 大学院教育	118
7. 出版	119
(1) 定期刊行物	119
1) 美術研究	119
2) 芸能の科学	119
3) 保存科学	119
4) 日本美術年鑑	120
5) 音盤目録	120
(2) シンポジウム等の報告書	120
1) 国際研究集会プロシーディングス	120
2) アジア文化財保存セミナー報告書	123
3) 国際文化財保存修復研究会報告書	123
8. 公開・出品	125
(1) 公開	125
1) 黒田記念室	125
2) 資料閲覧室	125
(2) 黒田清輝巡回展	126
(3) 所蔵作品等の貸与	127
9. 年度内主要事業一覧	128

5. 研究交流

1. 職員の海外渡航	129
2. 招へい研究員等	132
(1) 海外	132
(2) 国内	136
3. 海外研究者等の来訪	144
(1) 来訪研究員	144
(2) 表敬訪問	144

6. 主な所蔵資料

1. 図書資料	145
(1) 美術関係図書	145
(2) 芸能関係図書	145
(3) 保存科学・修復技術関係図書	145

2. その他	146
(1) 美術関係資料	146
(2) 芸能関係資料	146
(3) 保存科学・修復技術関係資料	146

7. 研究所関係資料

1. 設立の経緯	147
2. 年代別重要事項	147
3. 歴代所長（昭和5年～平成10年）	150
4. 名誉研究員	151
5. 1998（平成10）年度予算等	152
6. 関係法規	154

1. 機 構

1. 組 織 図

東京国立文化財研究所

TOKYO NATIONAL RESEARCH INSTITUTE OF CULTURAL PROPERTIES



2. 組織の概要と職員

所 長 渡 邊 明 義 (美術史)

(1) 庶務課

課 長	與那原 進	会計係長	庄 司 義 則
課長補佐	長谷川 洋 一	会計係員	真 鍋 浩 二
庶務係長	小 関 仁 志	事務補佐員	村 上 浩 子
庶務主任	飯 田 猛 継	事務補佐員	堀 江 祐 子
事務補佐員	松 本 洋 子	事務補佐員	工 藤 幸
事務補佐員	小 林 芽 生	労務補佐員	菊 地 廣 吉
事務補佐員	竹 岡 祐 子		

(2) 美術部

日本・東洋の古美術、ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関連する西洋美術について基礎的な調査研究をすすめ、その成果の公表を行っている。

第一研究室 江戸時代までの日本美術および東アジア地域の美術に関する調査研究、ならびに資料収集、成果の公表を行っている。

第二研究室 明治以降の日本近代美術とこれに関連する西洋美術および日本近世の洋風美術の調査研究、ならびに現代美術の動向に関する資料の収集と調査をすすめ、その成果の公表を行っている。

美術部長事務取扱	渡 邊 明 義 (美術史)
主任研究官	山 梨 絵美子 (日本近代絵画史)
主任研究官	岡 田 健 (東洋彫刻史)
第一研究室長	中 野 照 男 (東洋絵画史)
第二研究室長	田 中 淳 (日本近代絵画史)
同 研究員	塩 谷 純 (日本近代絵画史)
調 査 員	青 木 茂 (日本近代絵画史)

(3) 芸能部

無形文化財・無形民俗文化財としての日本の伝統芸能を対象に、とくに技法・演出に関する実際的な調査研究をすすめ、その成果を公表している。

演劇研究室 歌舞伎・浄瑠璃など古典演劇の演技演出について、歴史的な考察と現在の伝承への具体的な提言を行っている。

音楽舞踊研究室 古典音楽・舞踊・能・狂言の技法、演出について伝承と文献の両面から調査研究をすすめている。

民俗芸能研究室 民俗芸能・民俗行事を実地に調査し、それらの継承・復活・活用に資するために必要な研究を行っている。

芸能部長	星野 紘 (民俗芸能)
主任研究官	高桑 いづみ (日本音楽史)
演劇研究室長	鎌倉 恵子 (日本近世演劇)
音楽舞踊研究室長	羽田 昶 (日本中世演劇)
民俗芸能研究室長	中村 茂子 (民俗芸能)
調査員	児玉 竜一 (近世演劇)
調査員	石井 倫子 (中世芸能)
調査員	串田 紀代美 (民俗芸能)

(4) 保存科学部

文化財の材質・構造やそれを取り巻く環境を様々な科学的方法で調べて、保存の現場や美術史、考古学など歴史研究に役立つ研究とその成果の公表を行っている。

化学研究室 青銅や鉄など金属製文化財を中心に、各種の X 線分析装置や鉛同位体比分析装置などを用いて、材料・錆の化学組成や原料産地などを明らかにする研究を行っている。

物理研究室 温湿度、空気汚染などを測定して文化財公開施設における保存環境を評価し、文化財の劣化を防止するための研究と、X 線、赤外線などを用いた非接触調査手法の開発を行っている。

生物研究室 生物が原因となった文化財の劣化の機構を調べ、防除する研究を行っている。現在は特に、環境に被害を与えることの少ない防除法の開発に力を入れている。

保存科学部長	三浦 定俊 (物理計測)
主任研究官	佐野 千絵 (光化学)
化学研究室長	平尾 良光 (無機化学)
研究員	早川 泰弘 (分析化学)
物理研究室長	石崎 武志 (地球科学)
生物研究室長事務取扱	三浦 定俊 (物理計測)
研究員	木川 りか (生物化学)
調査員	山野 勝次 (応用昆虫学)
客員研究員	千葉 光一 (分析化学)

(5) 修復技術部

歴史的な文化財の修復に関する調査研究、科学的修復方法の開発研究とその応用をすすめ、その公表を行ってきているが、近年の社会的環境の変化によって保護の必要が生じた近代の文化遺産の保存・修復研究も行っている。さらに、文化財保護の国際協力として、文化財修復の国際研修や在外日本古美術品の修復協力などを実施し、国際的な責務を果たしている。

文化財は複合的な材質で製作される例が多く、以下の研究室も、修復に際して主に問題とすべき材質別に、便宜的に3室としているが、実際の修復上の問題に対処するためには、室をまたがって取り組む場合が圧倒的に多い。とくに、近代の文化遺産については、3室が連携して対応している。

第一修復技術研究室 文化財の修復に際して、木材、漆などの損傷や修復技術、またそれらを修復資材として扱うことを主な研究課題として取り組んでいる。第一研究室が研究対象とするおもな文化財には建造物や彫刻、漆工芸品などがある。

第二修復技術研究室 文化財の修復に際して、紙、布またその他の天然・人工有機材質などの損傷や修復技術、またそれらを修復資材として扱うことを主な問題として取り組んでいる。修復資材として必要な合成樹脂もこの室で扱う。第二研究室が研究対象とするおもな文化財には、絵画、文書、衣装、民俗具に加えて建造物などがある。

第三修復技術研究室 文化財の修復に際して、金属、石材その他無機材質などの損傷や修復技術、またそれらを修復資材として扱うことを主な問題として取り組んでいる。第三研究室が研究対象とするおもな文化財には、建造物・考古資料・美術工芸品などがある。

修復技術部長	増田勝彦(装潢技術)
第一研究室長	加藤寛(漆芸技法)
第二研究室長	川野邊涉(高分子化学)
第三研究室長	青木繁夫(考古学)
研究員	早川典子(有機化学)
技術補佐員	井口智子
技術補佐員	犬竹和* ¹

*1 平成10年9月30日まで

(6) 情報資料部

文化財に関する研究資料の作成・収集・整理・保管・閲覧等の業務を行い、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかっている。

文献資料研究室 文化財に関する図書・雑誌、調査研究活動によって収集された研究資料各種の整理・保管・閲覧を行っている。また日本・東洋古美術関係の文献目録の作成とともに文献データベースの開発を行っている。

写真資料研究室 研究用写真資料の作成・収集・整理・保管・閲覧を行うとともに、各研究者の調査活動に協力して研究資料を撮影し、資料の充実につとめている。また美術史研究への画像処理技術の応用および画像情報のデータベースに関する研究を行っている。

情報資料部長	米倉迪夫(日本中世絵画史)
主任研究官	井手誠之輔(東洋絵画史)
文献資料研究室長	鈴木廣之(日本近世絵画史)
研究員	勝木言一郎(東洋絵画史)
事務補佐員	中村節子
写真資料研究室長	島尾新(日本中世絵画史)
研究員	津田徹英(日本彫刻史)* ¹
専門職員	野久保昌良(美術写真)
調査員	玉蟲敏子(日本絵画史)
客員研究員	伊與田光宏(情報工学)

*1 1999(平成11)年1月1日着任。

(7) 国際文化財保存修復協力センター

世界の文化財の保存・修復に関する国際的な研究交流、保存事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用など

を実施し、文化財保護における国際的な責務を果たしている。

企画室 国際協力事業の企画・運営、諸外国や関係機関との連絡、調整などの事務を行っている。

環境解析研究指導室 世界の文化財の保存・修復に関する調査研究を進め、また国際協力事業の技術的内容についての調査・指導を行っている。

保存計画研究指導室 国際協力の相手国の伝統材料・技術を生かした形での保存・修復計画の立案に寄与するため、経済・社会・文化など、文化財を取り巻くさまざまな環境や、人材養成のあり方などについて、幅広い視点からの調査・研究を行っている。

センター長	宮本 長二郎 (建築史)
企画室長	大久保 政博
企画係長	松下 冬樹
(併任)	吉野 貴子
調査員	大江 佐知子
調査員	松原 美智子
環境解析研究指導室長	西浦 忠輝 (材質改良学)
研究員	朽津 信明 (地質学)
事務補佐員	二神 葉子
保存計画研究指導室長	松本 修自 (建築史)
客員研究員	松本 健 (考古学)
客員研究員	宗田 好史 (地域開発)

2. 研究活動

1. 各部の研究活動

美術部

(1) 美術作品の実証的研究

美術部の研究調査は各時代にわたり、絵画、彫刻、工芸の各分野の作品について、作品そのものと文献資料の両面から実証的な研究を進めている。本年度は、美術作品の実証的研究としては、「明治後期から昭和初期の美術団体、内外博覧会に出品された作品およびその作家の研究」、「美術に関する基礎資料の研究 —中国日本拓本資料・室町時代水墨画資料—」、「日本における外来の美術の受容についての研究」の3テーマを研究の中心に据えて、関連領域の作品を含め、精力的に調査、研究を行った。調査にあたっては、光学機器等を利用した科学的鑑識法を積極的に活用している。また、近年におけるコンピューター技術の進展、普及にともない、新たなデジタル画像処理技術をとりいれ、これまで行ってきた光学的作品分析の精度を高める努力をしている。また、美術部では、情報資料部と共同で研究会や協議会等を開催し、当研究所がこれまでに蓄積してきた研究資料の活用を基盤とした研究者間のネットワークづくりをすすめ、日本における新たな美術史研究の方向性を示唆できるようにつとめている。

(2) 美術史学の今日的な課題に関わる研究

美術作品および美術に関わる諸現象を社会的なコンテクストの中で問い直すことによって、美術に関わるさまざまな問題を解き明かす研究を行っている。「東アジア美術における造形と社会」では、請来画像の意味とその機能、美術作品の流通と価値観の形成、技術や素材からみた美術など、多様な視点を設定して、研究を進めている。「日本における美術史学の成立と展開」では、明治20年代以降、国家の制度や機構と密接な関係を維持しながら、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築に寄与してきた美術史学の歴史をふりかえることによって、美術史学の今日的課題と今後の可能性や展望を明確にしつつある。

(3) 基礎資料の収集と集成

美術部は、情報資料部との緊密な協力のもとに、さまざまな作品のデータや研究情報を収集し、今後の研究に資すべき高度な研究資料として整理している。調査研究においても基礎資料の収集を積極的にすすめており、「日本近代美術の発展に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集成」では、大正期を中心に各美術団体の展覧会出品目録を収集調査し、これをもとに同時代の美術界の動向を総合的に分析、研究するとともに、その研究成果として『大正期美術展覧会出品目録』（仮称）の刊行を準備している。

(4) 研究成果の公表

調査研究の結果は、機関誌『美術研究』（昭和7年創刊）やその他の学会誌に発表し、研究報告書も随時刊行している。また現代美術の動向に関する資料の収集と研究の成果は、毎年、『日本美術年鑑』（昭和11年創刊）として刊行している。さらに、情報資料部と共同で、毎年1回、公開学術講座を開催し、研究成果の一部を一般に公開している。

(5) 所蔵作品ならびに研究情報の公開

美術部は黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所を前身とする。現在も黒田清輝の作品やその他関連資料を保管しており、毎週一回（木曜午後）、黒田記念室（本館二階）においてそれらを公開し、さらに昭和52年以降、毎年一回、他美術館等との共催で、巡回展「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展」を開催している。また、インターネット上の当研究所のホームページに「黒田清輝記念室」を設け、その芸術の理解を深められるように、黒田に関する研究情報の公開を積極的にすすめている。

芸 能 部

芸能部は、無形文化財・無形民俗文化財としての日本の伝統芸能を対象に、実際的な調査研究を進めている。研究目標としては、諸芸能の史的展開、理念、構造、技法、演出などに関する基礎研究を行うと同時に、無形文化財・無形民俗文化財の指定、選択等の行政に対応すべく、諸芸能の現状を把握し、保存と継承のあるべき姿を追究するよう努めている。研究の成果は、刊行物（『芸能の科学』『音盤目録』『日本舞踊譜』）、夏期学術講座、公開学術講座、民俗芸能研究協議会などによって公表してきた。

また芸能部では各種芸能の技法を、録音・録画・スチール写真などの形で記録することを、重要な業務としてきた。現地での実況記録ばかりでなく、実技者を当研究所に招き、部員の企画のもとに特別に演技や演奏を依頼して、芸能部の舞台や録音室で行った記録も多い。とくに東大寺修二会の調査をはじめとする寺事（寺院行事・寺院芸能）の研究は、当芸能部が先鞭をつけた分野であり、その成果の一部であるレコード「東大寺修二会観音悔過（お水取り）」は、1971（昭和46）年度芸術祭優秀賞を受賞している。技法の記録は、今後も引き続いて行いたい。

芸能部は、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室によって構成されている。日本の伝統芸能は、多くの種目が演劇・音楽・舞踊の要素を併せ持っているので、錯綜した諸芸能の相互交流の様相を明らかにするために、広い視野から課題を設定することを心がけている。

○中長期研究計画「伝統芸能の継承方法に関する調査研究」（5年計画1年次）

後継者不足、特殊用具調達の難しさ、時代感覚の変化に伴う変質など、伝統芸能にはさまざまな問題が山積している。そのような芸能の実態に即して個々の調査を行い、芸能の継承のあり方について考察するものである。演劇研究室では、文楽の伝承に関して、歌舞伎に移された後の変容、国立劇場後継者養成と関わった稽古方法について調査研究を行い、成果の一部を夏期学術講座で発表した。音楽舞踊研究室では、能・狂言の現代的再生の諸相と国立能楽堂後継者養成について問題点を指摘し、各種講座等で発表した。また、文化財を支える用具・原材料の確保、および大英博物館所蔵和書・和楽器に関する調査研究を行った。民俗芸能研究室では、第1回民俗芸能研究協議会をスタートさせ、成果の一部を『芸能の科学』27に公表した。また「里神楽の技法」をテーマに公開学術講座を行った。

○中長期研究計画・特別研究「近代歌舞伎の伝承に関する研究」（4年計画3年次）

近代の歌舞伎は俳優の世代交代、社会の急激な変化に伴う俳優の生活環境や意識の変化、観客の嗜好の変化、興行のあり方によってその姿を変えつつある。上演演目の減少と固定化、演技・演出の変質等がその例である。こうした歌舞伎の歩みの中で、演技の伝承について考察し提言する。今年度は、近代歌舞伎の一つの到達点である昭和30～50年代の舞台写真1,900コマをフォトCD化し、上方歌舞伎の歩みについて聞き取り調査を実施した。また、芸能部所蔵の附帳写真282件の目録を作成し、『芸能の科学』27に公表した。

○中長期研究計画「翁の技法集成」（6年計画5年次）

「翁」は、現在、能楽師が伝承し上演する演目の中では最も古い芸態を残している。その技法の全容を捉え、全役籍全流儀の譜を収集し、比較総合して「翁」の全体像を把握するのが本研究である。今年度は、芸能部舞台において、小鼓方4流の翁・三番叟の演奏を撮影録音し、技法に関する聞き取り調査を行った。また、すでに収録済みのシテ方・囃子方の全流儀・全技法のうち、三番叟と千歳を除いた「翁」部分の所作と囃子を整理し、『芸能の科学』27に公表した。

○その他の個人研究

①「地方に残る雅楽・能楽の古楽器調査」（高桑）

文部省科学研究費補助金による他機関の研究者との共同研究。

②「新史料翻刻による花祭りの芸能史的な位置づけ」（中村）

文部省科学研究費補助金による他機関の研究者との共同研究。

③「民俗芸能にみる猿楽の諸相」（中村）

能楽大成以前の伝承である猿楽の伝播と地方的変容についての研究。成果の一部を『芸能の科学』27に公表した。

保存科学部

保存科学部は文化財の材質・構造・技法及び劣化機構に関する研究を行うとともに、文化財のおかれている保存環境の研究も行っている。またそれらの研究を基に、文化財保存の現場に生かせる技術開発を行っている。すなわち文化財の産地推定など自然科学的手法による歴史的研究と文化財保存のための科学研究を軸としている。化学研究室は青銅や鉄などの金属製文化財を中心に、各種の分析装置を用いて材料・錆の組成や原料産地などを明らかにする研究を行い、物理研究室は温湿度・空気汚染などを測定して、文化財公開施設における保存環境を評価し、文化財の劣化を防止する研究と、X線・赤外線などを用いた非破壊検査手法の開発を行っている。また生物研究室は生物が原因となった文化財の劣化機構を調べ、防除のための研究を行っている。

研究テーマの設定に当たっては、①行政施策面からの必要性、②学問分野における先端性と発展性、③博物館など保存現場からの要望などを考慮し、化学、物理、生物の研究室ごとに中長期の研究テーマを設定して研究を進めている。

○中長期研究計画・特別研究「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」

行政施策と保存現場からの強い要望に基づいた研究として、物理研究室を中心とした「文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究」がある。この研究は国指定文化財の公開（文化財保護法第53条）に関わる研究として文化庁美術工芸課と密接な連絡を取りながら進めているもので、これまでに室内汚染物質の問題、美術館用免震装置の問題、ハロンに代わる消火剤の問題などを取り上げてきた。当初は一般研究費を利用して研究を行っていたが、1995年度（平成7年度）から特別研究として予算措置された。関連した研究が文部省科学研究費補助金などを利用して実施されている。

○中長期研究計画・特別研究「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」

オゾン層破壊防止のために行政上の緊急性を持って実施されている中長期研究が、生物研究室を中心にした「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」である。1997年のモントリオール議定書締約国会議で、2005年に先進国では臭化メチルの使用を全廃することになり、1999年1月からは使用量の25%削減が始まる。臭化メチルは文化財の殺虫燻蒸に広く利用されている薬剤であるため、文化財の保存に関する研究部を持った唯一の国立研究機関として、臭化メチルに代わる薬剤や代替法を文化財材質や人間の健康への影響も考慮し、関係機関と連絡を取りながら研究が行われている。この研究も当初は一般研究費を用いて行っていたが、1997年度（平成9年度）から特別研究として措置された。さらに1998年度からは関連した研究が文部省科学研究費補助金を用いて実施されている。

○中長期研究計画「古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究」

国際的な学問の広がりや先端性を持って進められている中長期研究が、化学研究室を中心にした「古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究」である。この研究では日本国内の青銅試料に関する研究だけでなく、過去に行ったアメリカ、スミソニアン研究機構との共同研究をさらに発展させて、中国の中国社会科学院と共同で中国古代青銅器に関する研究（文部省科学研究費補助金-国際学術）を進めている。

○その他

この他、中長期研究計画として上がっていない重要な研究として「文化財保護に関する日独学術交流」に基づいた、漆工品の保存に関する研究をあげることができる。この研究は文部省科学研究費補助金（国際学術）により「漆・ニス等伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存に関する研究」（1993～95年度）、「文化財の微量試料分析法の開発」（1996～98年度）と、主に輸出漆器の保存に関して、修復技術部及び外部の研究者と物理研究室を中心に行ってきた。研究を通じて、多くの国々の研究者同士の密接なつながりができたことから、在外日本古美術品保存修復協力事業への寄与が期待されている。1999年度からは「彩色文化財の材料と技法に関する科学研究」（1999～2001年度）として新たな共同研究が予定されている。

修復技術部

修復技術部は、従来、伝統的修復材料および技法の解明と新たな修復材料・技術の開発を大きな柱として研究を行ってきた。しかし、近年、文化財を取り巻く社会的環境の急激な変化に伴って、1)文化財の積極的な活用に耐え得る保存・修復技術の開発、2)新たな保護対象である近代の文化遺産などの保存・修復の概念と技術の開発、3)環境悪化による文化財への影響の評価と対策などが強く求められるようになった。

従来の保存・修復技術に加え、さらに過酷な条件下で文化財の維持を可能にする技術、近代の文化遺産に関連してこれまで対象としてこなかったゴムやコンクリート等の材質や橋梁・トンネルなどの巨大な規模に対応できる技術、従来見られなかったものの環境悪化の影響で顕著になった劣化状況に対応できる技術、がそれぞれ必要になってきた。

これに加えて、世界文化遺産登録などに見られるような文化財分野での国際協力が進行するにつれ、世界各国から文化財の保存・修復への援助や研修の要請も増大の一途をたどっている。その多くは、現地の特事情を勘案した保存・修復技術の開発・研究が必要なものであり、現地指導も含めて当部の業務の大きな部分を占めている。

以上のような問題意識から、修復技術部では以下に述べるような研究テーマを設定して実施している。

中長期研究計画

○「文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究」

重要文化財鳥取県仁風閣や国宝東大寺金銅八角灯籠などの文化財に対して、酸性雨や大気汚染ガス等による深刻な被害が起きている。その影響を調査し、対策を立てるために、鎌倉市高德院（国宝鎌倉大仏）、東大寺、重要文化財島根県日御碕神社に観測ステーションを設置して、気象および環境汚染物質の測定を行っている。鎌倉大仏では、環境汚染物質の輸送経路が明らかになり、大仏表面の錆の発生状態との相関関係を見出すことができた。また赤外線域を含む画像解析により、大仏表面にみられる経年変化の解析システムを開発中である。東大寺については国宝金銅八角灯籠の保存を視野に入れた環境測定などを行っている。1996（平成8）年度より、韓国国立文化財研究所と共同研究を行っており、環境汚染物質の測定方法の共通化や修復材料の耐久性試験などを実施している。

○「近代の文化遺産の修復に関する研究」

文化財保護法の改正を伴った、近代の文化遺産保護への取り組みに、研究機関側から支援する体制を維持するため、平成10年度から特別研究としたものである。

本研究には、関連する組織、学会、研究機関などが、従来より大きく拡大するため、昨年度の国際研究集会において、欧米と日本国内における取り組みを概観した。フィールドの一つの煉瓦焼成用大型窯では、煉瓦壁面崩落原因分析、地盤、窯本体精密測量など、新しい取り組みを行っている。

○「漆の加熱硬化メカニズムに関する研究」

焼き付け漆の技法は、古くから建築金具や金属工芸品の防錆あるいは下地作りとして行われてきた。本研究では、現在伝承されている焼き付け漆技法の実態を明らかにし、文化財保存技術の観点から、技法を確立することを目的としている。

平成9年度までは、焼き付け漆の塗膜としての物性に視点を置いた研究を行い、加熱温度・時間による差異に注目したが、今年度から、硬化メカニズムに視点を移して研究を行う。本年度は、文化財修復用技術に求められる硬化膜の安定性について暴露試験を行った。

○「近世輸出工芸品の実証的研究」

欧米の美術館において日本工芸品に対する関心が高まるのにもとない、その保存および修復に関する問い合わせが多くなっている。特に漆などの近世輸出工芸品は、泥下地で製作されるなど従来の文化財とかなり違った方法で製作されたものが多く、その修復は難しいものである。また一般的に、わが国の漆工芸品の修復は、漆を使用して行っているが、欧米ではワックスなどを使用している。ワックスなどを使用して修復した漆製品をふたたび漆を用いて修復することはかなり困難なことである。このような問題を解決するために実際の修復および欧米の修復家との技術交流

を通じて実証的な研究を実施している。

このほかに、国際交流研究ないし事業として「敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究」、「紙の保存修復国際研修」、「在外日本古美術品保存修復協力事業」などを担当し、国際文化財保存修復協力センターに協力している。その他、文化財の保存修復を行ううえで基本的な情報整備を行うために、当部が関わった修復や重要文化財修復記録のデータベースの一環として、X線写真のデータベースを作成し、昨9年度に『東京国立文化財研究所所蔵X線フィルム目録』として刊行、配布した。

情報資料部

情報資料部は、前身となる美術部資料室が行ってきた美術に関する研究資料の作成・収集・整理・保管・閲覧等の業務を拡充発展させるとともに、当研究所における5部およびセンターの活動に関わる研究資料の情報の統合化を図ることを研究活動の目的としている。当部はこれらの研究資料を広く内外研究者の利用に供し、文化財に関する研究資料センターとしての役割を果たしてきている。

近年の学術情報の増大化と多様化にともない、これらの現況に対応できる資料の効率的活用を図ることが新たな課題となっている。当部では、こうした課題に取り組むため、コンピュータを導入し、研究データの生産・蓄積・活用を一貫したシステムのもとで行う体制を整えてきた。また、逐次、所蔵研究資料のデータ化を進め、その活用の質的向上を図るとともに、出版物とインターネットのホームページ等を通して研究資料の公開につとめている。また客員研究員や外部から招へいた研究者を交えた研究会や協議会を開催し、文化財に関する研究情報の共有化についても提言を行っている。

当部では、長期研究計画として「美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—」（1989～98年）、中期研究計画として「美術情報における語彙の研究（検索辞書システムの研究）」（1994～98年）と「デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究」（1994～98年）の、3つの柱を中心にして研究を行っている。

長期研究計画は、当部の研究活動の中核に位置づけられる研究で、将来の文化財研究情報の共有化をめぐる環境の変化を視野にいれ、逐次、システムの整備と強化を図ることを目的としている。また2000（平成12）年度の新営後に予定されるシステムの再構築に対し、その計画・立案を準備する役割も担っている。

2つの中期研究計画は、長期研究計画にしたがって、情報資料部を構成する文献資料研究室と写真資料研究室がそれぞれ中心となって行っている。

文献資料研究室は、文化財に関する図書・雑誌、調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行うとともに、日本・東洋古美術関係の文献目録の作成と文献データベースの開発を行っている。各年ごとの文献目録は『日本美術年鑑』（美術部）に掲載し、これを一定期間ごとに総合・増補した『日本・東洋古美術文献目録』を刊行している。中期研究計画「美術情報における語彙の研究」は、現在進めている1966（昭和41）年～1985（昭和60）年分の編集作業と関係し、文献から抽出された検索語彙間の関連付けを行い、有効かつ円滑な文献検索の実現を目指している。その成果は当部の文化財情報全般の検索システムに統合される。

写真資料研究室は、美術工芸品を中心とした研究用写真資料の作成・収集・整理・保管・閲覧を行うとともに、各研究者の調査研究活動の一環としてさまざまな写真撮影を行い、資料の充実につとめている。また美術研究所の創立以来、60年あまりにわたって蓄積されてきた写真原板のデジタル化をすすめ、中期研究計画「デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究」にしたがって、文化財研究への画像処理技術の応用と画像情報のデータベースに関する研究を行っている。

国際文化財保存修復協力センター

文化財は人類共通の遺産であり、国家、民族を越えて、その保存・修復に当たらなければならない、そのためには国際協力が不可欠である。この意味で、多くの文化財を有し、文化財保護のための体制が整い、研究、技術の進んでいる我が国が果たす役割はますます増大し、世界各国からの協力要請も年々増加している。

国際文化財保存修復協力センターは、世界の文化財の保存・修復に関する国際的な研究交流、保存修復事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用等を実施し、文化財保護における国際的な責務を果たすことを目的として、平成7年4月に従来の国際文化財保存修復協力室を拡充し発足した。今後は研究所内のみならず、国内の関係機関との連携協力を推進し、世界各国の文化財の保存・修復に関する国際協力の我が国における中心的な存在として、その組織の一層の充実が求められている。

センターにおいては、在外日本古美術品保存修復事業、「紙の保存修復」国際研修、アジア文化財保存セミナー、国際文化財保存修復研究会、文化財保存のための国際研究集会、日中共同研究－敦煌莫高窟の保存修復などさまざまな国際交流事業およびこれらの事業に伴う海外からの研究者の招へい、職員の海外への派遣を円滑に進めるための企画、連絡調整、調査業務などを行っている。また、国際交流事業を中心とした事業に関する広報活動を行っている。

国際文化財保存修復協力センターの調査研究としては、以下の項目を中長期研究計画として研究を実施している。

○世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集と提供

世界、特にアジア諸国の文化財の保存状態および文化財保護にかかわる組織・機構・人材・活動状況等についての情報を収集し、さらにその問題点を検討することにより、より有効かつ円滑な文化財保存国際協力の実現に貢献することを目的とする。海外の情報のみならず、国内関係機関、研究者に関する情報も収集する。収集した情報は、データベース化し、インターネット上で公開する方法により提供する。

○屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究【国内】

屋外の石（レンガ）造文化財の保存は最も重要な課題の一つである。本研究は、屋外石（レンガ）造文化財の劣化原因、過程を地質学、岩石・鉱物学、水理学的に検討するとともに、気象環境と劣化現象との因果関係を考察し、さらには、実際の保存修復処置についての実験ならびに応用研究を行って、保存修復対策についての基礎的データを集積し、石造ならびにレンガ造文化財の保存技術を向上させることによって、世界の文化財の保存に貢献することを目的とする。

○屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究【海外】

建造物、遺跡等の屋外石（レンガ）造文化財は世界の主要な文化財であるが、その多くが現在崩壊の危機に瀕しており、保存対策の策定が急務である。本研究は、タイ、パキスタン等において海外の屋外文化財の劣化原因、過程を地質学、建築学、材料学的に検討するとともに、気象環境と劣化現象との因果関係を考察し、実際の保存修復についての実験ならびに応用研究を行って保存修復対策についての基礎的データを集積し、世界の屋外文化財の保存技術の向上に貢献することを目的とする。

このほかに、日本古代建築に関する研究や彩色顔料の分析調査等でも成果を上げている。センターの調査研究は保存科学部、修復技術部との緊密な連携の下に進めている。

2. 研究一覽

中長期研究計画一覽

日本における美術史学の成立と展開	15
日本における外来の美術の受容についての研究	16
東アジア美術史における造形と社会	18
美術に関する基礎資料の研究－中国日本拓本資料・室町時代水墨画資料－	19
明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に出品された作品およびその作家の研究	20
近代歌舞伎の伝承に関する研究	23
「翁」の技法集成	24
伝統芸能の継承方法に関する調査研究	25
文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究	26
無公害な文化財生物劣化防除法の研究	27
古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究	28
文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究	29
近代の文化遺産の修復に関する調査研究	30
漆の加熱硬化のメカニズムに関する研究	32
近世輸出工芸品の実証的研究	33
敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究	34
美術情報システムの研究－データの共有化を中心として－	37
美術情報における語彙の研究（検索辞書システムの研究）	39
デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究	40
世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集	41
屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究【国内】	42
屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究【海外】	43

特別研究一覽

日本における外来の美術の受容についての研究	16
日本近代美術の発展に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集成	22
近代歌舞伎の伝承に関する研究	23
文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究	26
無公害な文化財生物劣化防除法の研究	27
近代の文化遺産の修復に関する調査研究	30
文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力	36
文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究	44

受託研究一覧

江戸期銀貨の品位と保存に関する研究	45
装潢材料の物性研究	46
花籠車蒔絵鞍・鎧の修復処置研究	47
茨城県新治村武者塚古墳出土金属製品の修復研究	48
国宝「源氏物語絵巻」の調査研究	49

文化財保存修復に関する国際交流促進事業一覧

スミソニアン研究機構との国際研究交流	50
文化財の保護に関する日独学術交流	51
敦煌文化財の保存修復に関する研究協力	52
文化財の保存修復技術に関する国際共同研究—文化財の保存修復に用いられる新材料—	53

文部省科学研究費補助金による研究一覧

研究種目	研究課題	
基盤研究 (A)	文化財収蔵庫の庫内空気環境調査法の公定化のための基礎的研究	54
〃	日本における美術史学の成立と展開	55
〃	世界の文化財の保存—わが国による国際協力体制構築のための調査・研究—	57
〃	古建築の保存を目的とした石材強化保存用合成樹脂の物性評価	58
〃	文化財の新たな総合的虫菌害防除対策 (IPM) のシステム構築に関する研究	59
基盤研究 (B)	下張り文書剥離のための澱粉糊の老化技術	60
基盤研究 (C)	極楽浄土を表象するモチーフとしての迦陵頻伽の諸相とその文化的特質 —鳥と人からなる動物を通して見た東西文化の交流とその中国的受容—	61
〃	地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究	62
〃	多孔質材料の凍結・融解による劣化機構の解明とその防止対策	63
〃	新史料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ—大神楽から花祭りへ—	64
国際学術研究	古代東アジアにおける青銅器の変遷に関する考古学的・自然科学的研究	65
〃	文化財の微量試料分析法の開発	66
〃	タイ国アユタヤ遺跡の保存修復に関する研究	67
特別研究員奨励費	絹などのたんぱく質材質試料の劣化状態の Py-GC-MS による評価手法の確立	68

その他の共同研究一覧

シリア・アインダーラ神殿遺跡保存修復プロジェクト	69
--------------------------	----

凡例

課題名・目的・成果・研究組織の順に配列した。

研究代表者には○印をつけた。

また必要に応じて備考を付けた。

3. 中長期研究計画・特別研究

日本における美術史学の成立と展開

(5年計画の第2年次)

目 的

西洋近代の学を範として1887(明治20)年前後に始まった日本の美術史学は、近代国家として西洋に認知されようとする国情を背景として、国家的制度や機構と密接な関係を維持し、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築に寄与してきた。今日、一般的に用いられる美術史の言葉や思考が、こうした美術史学の歴史のなかで形成されてきたことは、美術史研究者がひろく認識すべき問題となっている。

本研究は、このような問題意識にたち、明治以来の美術史学の歴史を振り返ることを通じて、美術史学の今日的な課題と可能性を問い直すことを目的とする。

成 果

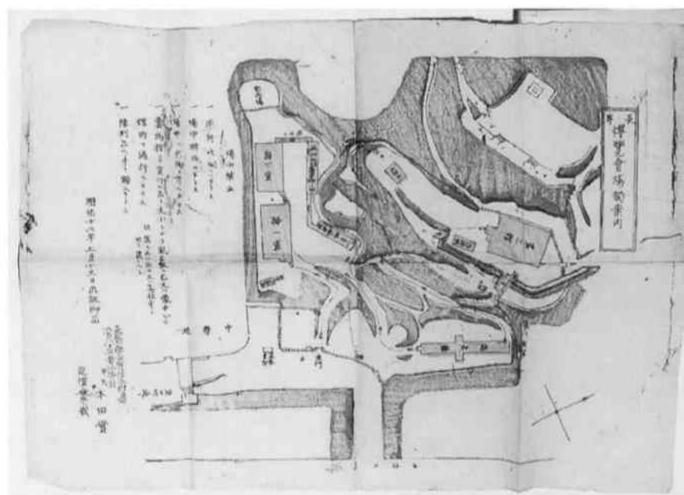
本研究は美術に関する言説の歴史を振り返ることにもつながるため、基礎となる資料の収集とその整理が必要となる。今年度は、明治初期の博物館行政の中心となった町田久成、蜷川式胤、田中芳男等の資料を収集するとともに、明治期の写真家小川一真の写真集等も購入、保存することとした。

また、「美術」という外来の概念が日本に確立される以前に制作された物品が「美術」として位置づけられる過程を跡づけるため、明治期博覧会等に出品された「古美術品」の出品目録に注目し、資料のデータ化を、昨年ひきつづきすすめた。あわせて、長崎、佐賀、福岡、奈良、京都等で博覧会関係資料の現地調査をおこなった。

本研究に関わる研究会としては、本年度では美術史学の制度をめぐる問題についてより多角的に検討を加える目的から、建築史の分野から研究者を招へいし、研究会と討議をおこなった。その他、本研究の中間報告としての意義をもつものとして、平成9年12月に開催した第21回文化財の保存に関する国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」の報告書を刊行した。(内容の詳細については、7.出版の(2)シンポジウム等の報告書を参照されたい。)

研究組織

- 田中 淳、中野 照男、岡田 健、山梨絵美子、塩谷 純(以上、美術部)
米倉 迪夫、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英(以上、情報資料部)



長崎博覧会場案内 長崎県立図書館蔵



博覧会陳列品ノ位置概略
朝日昇著 長崎県立図書館蔵

日本における外来の美術の受容についての研究

(5年計画の第1年次)

目 的

日本には、長い歴史の中でもたらされた中国や朝鮮、欧米の美術品が数多くあるが、一部の作品を除いては、日本にもたらされた経路など、具体的な状況について明らかにされていないことが多い。また、それらが日本でどのように受入れられてきたかを時代をおって跡づけることも不足している。本研究は、そのような中国・朝鮮・欧米の美術の請来と日本での受容の様相を具体的に把握し、文化的な背景を含めて研究しようとするものである。日本にある中国・朝鮮・欧米の美術が、本来どのような地域で作られ、どのような人々によって、いかなる動機で日本にもたらされたかを具体的に把握し、さらに日本における収蔵、流通、鑑賞の歴史を明らかにするとともに、従来不十分であった作品の伝来についての基礎データを整備する。

成 果

本年度は、基本的な資料を収集するとともに、研究会等の開催を通じてテーマの共有と深化をはかった。

(1) 研究会の開催

日本における外来美術の受容の諸相について研究実績をもつ研究者を招いて、研究会を行い、同時に問題の所在や今後の研究方向、方法などについて討議した。今年度の研究発表者と発表内容は次の通りである。

井上一稔 (奈良国立博物館) 「鑑真和上と仏像」

仏教における修行の一つに仏の姿を心中に念じる「好相行」があるが、日本では鑑真が『梵網經』を請来して以降盛んになったと考えられる。鑑真はどのような仏の姿を理想としたのか。唐招提寺に現存する木彫群と関連作品を通してその具体的な姿を考察した。

安藤佳香 (中京女子大学) 「仏教荘嚴美術の構成要素に関する一提言」

日本の仏像の歴史においてしばしば現れる顕著なインド的要素についての関心を出発点として、その重要なモチーフの一つである蓮華の表現が、インド以来の「次々に生まれてくる永遠の生命性」という観念とともにアジアの広い範囲に広まった状況を考察した。

(2) 作品調査

① 福岡市美術館等で開催予定の「ラファエル・コラン展」に伴い、同美術館学芸員ほかの研究者とともに当研究所所在のコラン作品を調査した(98.6.30-7.2)。それによって、当研究所所在の素描類が後に油彩で描かれた作品とどのように関わったかの一端が明らかになった。また、黒田清輝の作品との関わりについても新たな一面が見いだされた。

② トリノ市立近代美術館およびリッツィ・オッディ美術館蔵アントニオ・フォンタネージ作品を調査し、両美術館学芸員との協議を行った(98.3.21-29)。これにより、フォンタネージは、イタリア近代絵画史上、いち早くフランス画界の動きを受容し、古典的な歴史画神話画が主流をなしていた当時のイタリアの画界にあって風景画家に専心したという意味からも、また、作風の点においても独自の位置を得ていることを知ることができた。フォンタネージのイタリアでの弟子たちと日本での弟子たちの作風の比較、およびフォンタネージについての日伊の言説の比較から、明治初期におけるイタリア美術の受容に関して新たな知見が得られた。

(3) 基礎資料の収集

中世における日中交流の実態を明らかにする第一段階として、「禅林墨蹟」「続禅林墨蹟」に掲載された墨蹟の画像と基礎データのデータベースを作成した。

(4) 研究成果の発表

この研究に関連して、以下の論考が発表された。

井手誠之輔「『境界』美術のアイデンティティ——請来仏画研究の立場から」(『文化財の保存に関する国際研究集会 今、日本の美術史学をふりかえる』99.3.)

研究組織

○中野 照男、岡田 健、田中 淳、山梨絵美子、塩谷 純(以上、美術部)
米倉 迪夫、島尾 新、鈴木 廣之、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英、(以上、情報資料部)

備 考

一部特別研究



ラファエル・コラン筆 夏 スウェーデン・イエテボリ美術館蔵



黒田清輝筆 花野 1907-15年 東京国立文化財研究所蔵

東アジア美術史における造形と社会

(5年計画の第5年次)

目 的

造形がそれ自体で自律的に発展するという旧来の美術史観は、すでに見直されつつあり、美術を社会的コンテキストのなかで再評価する作業が始まっている。本研究は個々の美術作品と美術に関わる諸現象を、社会と文化、さらに具体的な人間の営為のなかに置き直し、そのなかで生み出された関係に着目することによって、美術のもつさまざまな問題を捉らえなおそうとするものである。

成 果

(1) 唐本・宋本画像の意味と機能

日本に請来された宋元仏画のなかから、①古来より中国仏画と混同されてきた高麗仏画について、華嚴思想との関係からその領分を明らかにするとともに、②高麗仏画や日本の中世仏画とされてきた作例のなかに、逆に中国仏画が混入している可能性を指摘し、このような作品をめぐる国籍の混同が、いずれも東アジア地域の個々の美術作品を、中国・朝鮮・日本という3つの地域分類の枠組みに対応させて分類・思考する近代の美術史学の方法に起因することを明らかにした。さらに、こうした概念上の「境界」に位置する作品のアイデンティティを、オリジナルな社会的・文化的文脈のなかで明らかにする作業が、相互に関連したダイナミックな東アジア絵画史の構築のために、有効な視座と方法を準備することを示した。(『文化財の保存に関する国際研究集会 今、日本の美術史学をふりかえる』99.3)

(2) 室町時代における美術の流通と価値観の形成

『室町殿行幸御飾記』をもとに、室町殿会所に飾られた唐物のデータベースを作成し、各室の飾りのもつ象徴的機能を分析する作業をほぼ終了した。成果は次年度に公表の予定である。

(3) 技術と素材についての史的研究

『营造法式の研究』などから採録した技法・素材に関する用語をもとに、『元代画塑記』の注釈に着手し、元代の壁画制作について考察を開始した。また、河北省湾漳北齐墓の壁画、および元～明代の壁画の実例として河北省毘盧寺の壁画などを調査した。

研究組織

○中野 照男 (美術部)、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔 (以上、情報資料部)

美術に関する基礎資料の研究

—中国日本拓本資料・室町時代水墨画資料—

(5年計画の第5年次)

目 的

- (1) 研究所所有の中国・日本拓本資料 3,000 枚の点検整理
- (2) 室町水墨画に関する基礎資料の調査研究

成 果

(1) 拓本資料の点検整理

東京国立文化財研究所には、明治・大正期の美術史家らが収集した中国・朝鮮・日本の金石文・工芸品等に関する拓本が約 3,000 枚所蔵されている。これらはこれまでも数次の点検作業を経て約 550 袋に整理されているが、今回は全拓本についての調査カードを作成し、貴重な美術資料として活用するための方法を検討している。

本年度は、すでに昨年度までに調査の終わっている龍門石窟造像銘記 2,000 枚について、その目録を完成するための準備として、『龍門石窟の研究』（1941 年、東方文化研究所、京都）および『龍門石窟碑刻題記彙録』（1998 年、龍門石窟研究所編、中国）に所載の石刻録全文をデータベース化した。本年度までに龍門石窟分を含む約 400 袋までの点検を完了した。

(2) 室町時代水墨画資料

本研究は、室町時代的水墨画に関する基礎資料の整備を目的として、1)作品の調査・撮影、2)画家別の関係資料と研究史の整理、を中心に外部の研究者の協力を得ながら行っている。また収集した資料はデータベース化を進めている。

本年度は、「関東水墨の二〇〇年」展（栃木県立博物館・神奈川県立歴史博物館）および「禅寺の絵師たち」展（山口県立美術館）に出陳された作品約 150 点を調査し、基礎データを蓄積した。研究会は「禅寺の絵師たち」展及び東福寺所蔵絵画の調査（京都府、京都国立博物館協力）の成果を踏まえて「東福寺所蔵の肖像画について」「東福寺の明兆系作品について」の題で小シンポジウムを行い、また「雪村の印章の編年について」の題で雪村印の編年の緻密化を進めた。

研究組織

○岡田 健 (1) (美術部)、島尾 新 (2)、井手誠之輔 (2) (以上、情報資料部)

左：長樂王夫人造像記（495 年）拓本
右：比丘慧成造像記（498 年）拓本



明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に 出品された作品およびその作家の研究

(4年計画の第3年次)

目 的

日本近代美術史は学会・美術館等を中心に拡大し、かつ多様化してきており、実証的調査研究に基づく作家、作品の史的位置づけの再検討が求められている。本研究は個々の作家・作品について調査研究を行うとともに、美術団体・展覧会活動・美術雑誌等の基礎資料の収集、データベース構築を目的とし、前記の状況に寄与しようとするものである。

成 果

明治後期からは美術団体が急激に増加し、小団体や短命であった団体のなかにも日本近代美術史上、重要な動きを示したものが多数認められる。そのため、昨年度は当研究所の所蔵する美術団体目録の総リストを作成し、欠けているものを東京都現代美術館等の他機関で複写して資料収集した。本年度も、ひきつづき資料の収集につとめるとともに、本研究の成果を、『大正期美術展覧会出品目録』（仮称）等の刊行物として公刊することをめざしており、その編集に先立つ作業として、すでに論文や公刊図書のかたちで報告されている美術団体に関する調査・研究についての情報の収集もあわせて行った。

また大正期の動向を史的に位置づけるための基礎研究も平衡してすすめた。本年度のその成果のひとつとして、フェウザン会、草土社、春陽会等の美術団体で中心的な存在であった洋画家木村荘八（1893～1958）の未公刊の「日記」があることがわかり、複写収集するとともに、その一部を購入し、保存することとした。明治末年から昭和期の美術史をあとづけるために、貴重な資料であり、その活用と公開がのぞまれるため、1911年から13年までの「日記」三冊を試験的に読み起こし、デジタル入力をした。このデータは、これを所蔵する小杉放菴記念日光美術館と共同で、次年度から研究協議会等をもちながら、その活用と公開について協議をする予定である。

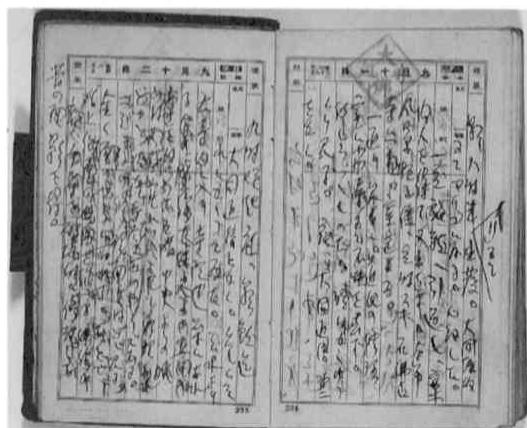
その他個々の作家・作品研究としては、昨年度につづき情報資料部と共同で、作家の自筆文献等のデータベース化をすすめた。今年度は、高村光雲（『光雲回顧談』）、小山正太郎（『小山正太郎先生』）をデジタル入力し、岡田三郎助、和田英作についても自筆文献入力のための準備作業をはじめた。

また、美術部第二研究室で保管する近代美術関係資料の整理とデジタル化については下記の二項について着手した。

- (1) 林忠正宛書翰（約860通）の研究と公開を目的に、日仏の比較文学・文化を専門とする小山ブリジット氏（武蔵大学助教授）と共同研究で読み起こしとデジタル入力の作業に着手した。
- (2) 黒田清輝宛書簡の整理と目録化を目的に、黒田が保管していた名刺（約2000名）をデータ入力し、人名索引を作成した。これをもとに次年度から、書簡、葉書の整理とデータ化による索引作りに着手する予定である。



「牛肉店帖場」製作中の木村荘八（1930年）



木村荘八の「日記」（1920年）

その他個別的な実地調査としては、下記の三ヶ所においておこなった。

- (1) 岩手県立博物館が所蔵する萬鉄五郎の写生帳の撮影調査。
- (2) 佐野常民記念館（佐賀県）における万国博覧会関係資料の調査と複写による資料収集。
- (3) 愛媛県美術館・今治市河野美術館（愛媛県）等で明治期日本画の作品調査をおこなった。

研究組織

○田中 淳、山梨絵美子、塩谷 純（以上、美術部）

備 考

一部特別研究

日本近代美術の発展に関する明治後期から 昭和初期の基礎資料集成

(4年計画の第3年次)

目 的

現在の日本近代美術史観の形成過程を、その形成因子である創作活動と美術ジャーナリズムの双方から実証的検証を行い、併せて美術団体・展覧会の活動、美術雑誌の資料整備を行うものである。

成 果

既刊『明治期美術展出品目録』(1994(平成6)年3月刊行)『内国勸業博覧会美術品出品目録』(1996(平成8)年2月刊行)『明治期万国博覧会美術品出品目録』(1997(平成9)年3月)(中央公論美術出版)に続く資料集の刊行をめざして、本年度は明治後半期から昭和初期にかけて結成された美術団体について、当研究所が所蔵する出品目録・図録のリストに基づき、昨年度から継続して欠けている資料を他機関の協力を得て資料収集した。

また明治後期から昭和初期の美術の動きを史的に位置づけるための基礎研究も平衡してすすめた。本年度は、その成果のひとつとして、フェウザン会、草土社、春陽会等の美術団体で中心的な存在であった洋画家木村莊八(1893~1958)の未公開の「日記」があることがわかり、複写収集するとともに、その一部(「日記」、「生活帖」、「制作帖」、「手帳」等43冊、関係図書81冊)を購入し、保存することとした。明治末年から昭和期の美術史をあとづけるために、貴重な資料であり、その活用と公開がのぞまれるため、1911年から13年までの「日記」三冊を試験的に読み起こし、デジタル入力をした。このデータは、当該の「日記」を所蔵する小杉放菴記念日光美術館と共同で、研究協議会等をもちながら、その活用と公開について次年度から検討を予定している。

研究組織

○田中 淳、山梨絵美子、塩谷 純(以上、美術部)



白日会第七回展覽會目録・昭和5年



第三回東光會洋画展覽會出陳目録・昭和10年

近代歌舞伎の伝承に関する研究

(4年計画の第3年次)

目 的

近代の歌舞伎は俳優の世代交代によって、正統な演技の伝承が危ぶまれている。また、社会の急激な変化に伴う俳優の生活環境や意識の変化、観客の嗜好の変化、興行のあり方によってもその姿を変えつつある。上演演目の減少・固定化、演技・演出の変質等がその例である。こうした近代歌舞伎の歩みの中での演技の伝承について考察し提言するために、記録の作成および聞き取り調査を行う。

成 果

俳優が演技を伝承してゆく上で、また研究者が参考とする上で、舞台写真は重要な資料となるものである。そこで、近代歌舞伎の一つの到達点である昭和30～50年代の歌舞伎舞台写真(石井雅子氏撮影・所蔵)1,900コマをフォトCD化した。これによって今は亡き名優たち(市川猿翁、十一代目市川团十郎、尾上多賀之丞など)の舞台姿を、複数の研究者が共同で研究できるようになった。この作業は本年度も継続中である。

衰退の危機に瀕している上方歌舞伎については、制作・演出に携わる中川芳三氏(関西松竹株式会社常務取締役)から近年まで上演されていた演目の演技・演出や、故人となった脇役俳優の事績、古い型や技法の現行歌舞伎への導入等についての聞き取り調査を行った。たとえば、古い作品や近年上演の絶えている作品を復活上演する際に、研究者による文学的・歴史的考察も重要だが、一方では興行として成り立つために、現代の観客に訴える、新しい演出がたえず工夫されなければならない、というような課題のあることが明らかにされた。

また近代の音楽的演出を考察するための重要な資料である、芸能部所蔵の明治30年代～大正期前半の附帳写真282件を整理して目録を作成し、『芸能の科学』27に公表した。これは音楽面のみならず、当時上演されていた作品の検討にも、おおいに寄与することになる。

なお上記の成果に関連して、フォトCDや附帳などを今後、資料として利用する際に問題となるであろう肖像権・著作権等の扱いについて、浅原恒男氏(日本俳優協会事務局長)を講師とする研究会を行った。

研究組織

○星野 紘、鎌倉 恵子、羽田 昶、高桑いづみ、中村 茂子、児玉 竜一(以上、芸能部)



「仮名手本忠臣蔵」道行旅路の花聲(石井雅子撮影)背景の違い

(左) 9代目市川海老蔵(11代目团十郎)7代目尾上梅幸
〈1960年12月 歌舞伎座〉

(右) 17代目中村勘三郎 7代目尾上梅幸
〈1977年11月 歌舞伎座〉

「翁」の技法集成

(6年計画の5年次)

目 的

「翁」は、現在、能楽師が伝承し上演する演目の中では最も古い芸態を残している。しかし、従来、秘事として扱われ、譜は公開されず、流儀差も大きいので、技法の全容を捉えた研究は行われていない。本研究では、全役籍全流儀の譜を収集し、比較総合して「翁」の全体像を把握することを目的とする。

成 果

今年度は芸能部舞台において、小鼓方幸流曾和博朗・曾和尚靖、同幸清流幸清次郎・森沢勇司、同大倉流大倉源次郎、同観世流宮増純三氏の翁・三番叟の演奏を撮影録音し、技法に関する聞き取り調査を行った。

また、すでに収録済みのシテ方・囃子方の全流儀・全技法のうち、千歳と三番叟を除く「翁」部分の所作と囃子を整理して、『芸能の科学』27に「翁の技法」と題して発表した。

研究組織

- 羽 田 稔
- 高 桑 いづみ
- 石 井 倫 子 (以上、芸能部)



観世流 (浅見真州)



宝生流 (金井 章)
翁の型：天ノ拍子の流儀差



喜多流 (友枝昭世)

伝統芸能の継承方法に関する調査研究

(5年計画の第1年次)

目 的

伝統芸能や民俗芸能の継承については、後継者不足、用具の調達難しさ、時代感覚の変化に伴う変質など、さまざまな難しい問題が山積している。個々の芸能の実態に即して調査研究を行い、芸能の継承のあり方について考察する。

成 果

民俗芸能の復活再生方法に関する調査研究 (星野)

今日、各地の無形民俗文化財保護行政において課題となっている民俗芸能の復活再生方策に関し、いくつかの伝承事例について、現地調査および資料調査を行い、現時点での調査検討結果の報告を『芸能の科学』27に公表した。

文楽の伝承に関する研究 (鎌倉)

奏演者の稽古法の変質について調査した。太夫(語り手)・三味線ともに国立劇場で養成された奏演者が増加した結果、内弟子志望者が激減している。また、カセットテープの普及、若手奏演者の価値観の変化等により、老練な奏演者(昭和初年生)がかつて受けていたような、マンツーマンの密度の濃い稽古がされにくくなったという問題点が指摘される。

また、近松門左衛門の作品の再演以降の改作の様子および歌舞伎に移されてからの変容について検討し、成果の一部を芸能部夏期学術講座で発表した。

近現代における能楽技法の伝承に関する研究 (羽田)

復曲能(番外曲の復活上演)、新作能、薪能と称する野外能、他ジャンルとの交流など、能楽の現代的再生の諸相について考察し、各種講座、研究会で発表した。

また、国立能楽堂15周年を機に、公演の企画制作と後継者の養成のあり方について総括し、問題点を指摘した。

大英博物館所蔵の和書ならびに和楽器の調査 (高桑)

大英博が1990年代以来所蔵している和書ならびに和楽器の目録作成に協力するため、同博物館に赴き、調査を行った。現在、基礎調査を続行中である。

文化財を支える用具・原材料の確保に関する調査研究 (高桑)

文化庁の委託を受け、主として能楽で使用する楽器の原材料について、選定保存技術保持者の林豊寿・鈴木理之氏などから現状について聞き取り調査を行った。

民俗芸能の継承と変容に関する調査研究 (中村)

花祭り伝承地域では過疎による伝承者不足の中で各伝承地が独自の努力を続け、その一環として東栄町では平成3年から「花祭りフェスティバル」を実施している。この実態について調査し資料収集を行った。また、江戸里神楽の伝承形態について、公開学術講座で公表した。

研究組織

○星野 絃
鎌倉 恵子
羽田 昶

高桑 いづみ
中村 茂子(以上、芸能部)

文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究

（5年計画の第4年次）

目 的

各地に博物館・資料館などの文化財施設が建設される中、文化財にとって安全な保存・展示の科学的基準の明示が望まれている。本研究は、温度・湿度・照明・空気汚染をはじめとする広い項目にわたって、関係の研究者の協力を得ながら、その測定方法や評価方法を検討し、文化財の保存と公開活用に資することを目的とする。

成 果

本研究は、従来当所の行ってきた文化財の保存のため科学的な基礎研究を充実させながら、かつ現場からの問題提起を受けて研究を拡充し、研究成果をすぐに現場にフィードバックする、現場との有機的なつながりを重視する形をとっており、毎年2回、研究成果報告および他機関との連携のための研究会を開催している。研究項目は大別して(イ)文化財収蔵空間の空気環境、(ロ)従来の保存手法の見直し、(ハ)緊急災害への対応の3つに眼目をおいている。

本年度おこなった研究会は下記のとおりである。

平成10年7月3日 テーマ：展示ケースの今後の課題

平成11年2月19日 テーマ：他機関との研究協力および連携

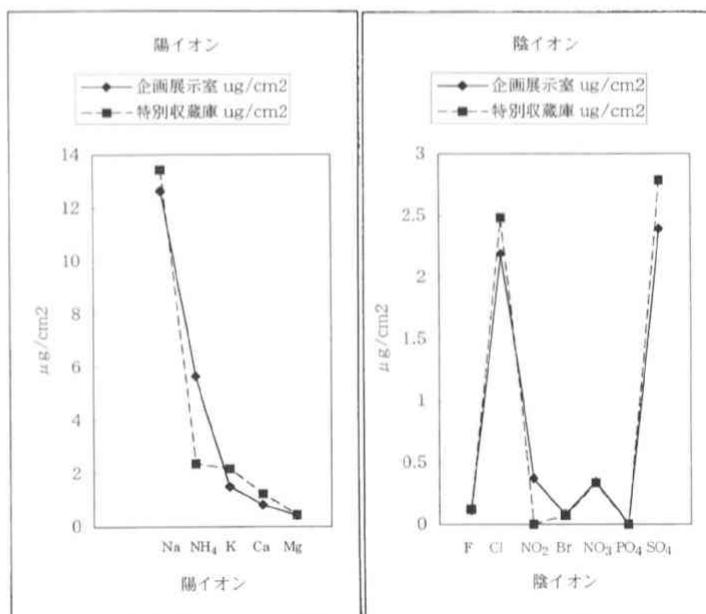
本年度第1回目の研究会は、(イ)に関するもので、特に仮設展示ケースの問題を取り上げた。欧米の研究状況、実際の被害事例、現場での材料選定の事例、オンタイムの測定手法、材料評価の可能性について、報告を受けてメンバーで検討を行った。この(イ)については従来、あまり基礎研究が充実していなかった保存環境研究分野であり、別途文部省科学研究費の援助を受けて基礎研究を行っていた。本年度が科研費の最終年次であり、当初予定していた研究内容を終了したので報告書を作成し、特別研究の研究会メンバーに対しても配付して研究成果を公開した。

本年度第2回目の研究会は、来年度で当初の研究予定を終了する本特別研究の今後を模索するためのもので、本研究の成果を確認し、今後の研究協力のあり方について検討した。国立研究機関の研究者、都道府県の行政側の管理者、都道府県立および公立博物館・美術館の保存担当者、私立博物館・美術館における学芸員など、さまざまな立場での制約や協力の可能性、ネットワークの充実の方向について協議した。基礎研究と現場への即時の成果公開が重要であること、研究レベルと現場での管理レベルの相違を重視すること、現場の保存担当者への成果公開にあたって多様な手法が必要であることを確認した。

研究組織

- 三浦 定俊、平尾 良光、早川 泰弘、石崎 武志、佐野 千絵、木川 りか（以上、保存科学部）
- 大塚 英明、森田 稔（以上、文化庁）
- 中村 康（京都国立博物館）

空気環境がアルカリ性を示している施設の館内空気中の汚染物質質量



無公害な文化財生物劣化防除法の研究

(7年計画の第2年次)

目 的

オゾン層の保護のため、かねてより文化財燻蒸ガスとして広範に用いられてきた臭化メチルの全廃時期が1997年9月に2005年に前倒しとなることが決まり、これに代わる方法が以前にも増して緊急に求められている。本研究では、化学物質を主とする従来の方法に変わり、文化財材質にも影響が少なく環境や人体への影響も考慮した文化財生物劣化防除法の検討・開発を目指し、具体的な対処法の策定を目指すものである。

成 果

1. 展示収蔵施設における総合的害虫管理法の策定の準備

欧米では害虫、カビなどの生物被害を単独に考えずに総合的な資料保存の一環としてとらえ、きめの細かい対応を行おうとする総合的害虫管理 (IPM (Integrated Pest Management)) の考え方を博物館等でも採り入れようという動きが既に開始されている。今年度は、総合的害虫管理について、研究会や実地見学会を通して海外で実際にこの方法がどのように活用されているか知り、今後わが国の気候やシステムにおいてはどのような形の IPM が可能なのかを策定するうえでの基礎資料とした。

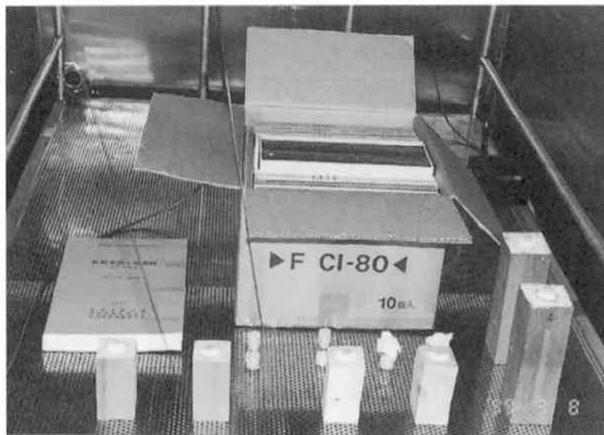
2. 新たな虫害防除法に関する基礎研究

人体に安全かつ無公害な虫害防除法である低酸素濃度殺虫法について、実際の文化財について処理を開始し、具体的処理条件を検討した。また、日本の文化財害虫を耐性および加害形態によって3つのグループに分け、低酸素濃度殺虫法、二酸化炭素による殺虫法の両方について、具体的な処理仕様案を策定した。今後は、実際に被害の出た材質を用いてその有効性を確認したうえで仕様として提案していきたい。

さらに、欧米、東南アジアなどで書籍などの収蔵品の殺虫法として採用されている低温処理法についても、日本の文化財への適用の可能性を探るため、各種の文化財材質に及ぶ物理的な影響を低温恒温恒湿で実験し、解析を進めている。また、新たな防虫剤・防霉剤などの化学物質が文化財材質に対する影響試験の骨子を具体的に策定することを目指し、昨年度より行っている顔料・金属に引き続き、今年度より紙などの素材についても試験サンプルを作製し、試験を開始した。

研究組織

○三浦 定俊、木川 りか、山野 勝次、佐野 千絵、石崎 武志 (以上、保存科学部)
増田 勝彦 (修復技術部)



低酸素濃度処理による殺虫実験



低温処理で文化財材質に生ずる歪みの測定実験

古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究

(5年計画の4年次)

目 的

中国・朝鮮半島・日本など、東アジア地域における青銅製作技術の発達、青銅製品の生産・交流・消費の歴史を化学組成や鉛同位体比等の自然科学的な方法を利用して、理解しようとする。従来の考古学的な理解に加えて、自然科学的な方法を応用し、より幅広く、古代の青銅に関する歴史的な変遷を解明しようとする。

成 果

本研究は5年間を継続期間として予定した。本年度は第4年次に相当した。資料は各時代の違い、日本、朝鮮半島、中国という地域の違いを反映させた。このため本研究では、

- 1) 中国における銅資料。中国における銅文明に関しては、西周時代の資料、商時代の資料に関して測定を進めた。今までに測定された各時期・各地域の資料に関して、まとめた。これら資料の採取・測定には文部省科学研究費の国際学術研究費を利用した。
- 2) 朝鮮半島の銅資料。朝鮮半島は政治的、民族的な感情からも資料採取が非常に難しかった。これからの問題として残したい。それでも、朝鮮半島の資料として帯金具に関して、発表することができた。
- 3) 日本の銅資料。日本に関して金属文化は弥生時代から始まる。そこで本研究においては始めの2年間は日本の弥生時代資料に焦点を絞り、銅剣・銅矛などの祭器、銅鏃・銅釦などの装飾品に関して、重点的にきめの細かい資料集めと測定を行った。今年度を含めた、次の2年間は古墳時代資料に焦点を集め、古墳時代の出土馬具や銅容器など、多様化した青銅製品に対して測定を進めようとした。

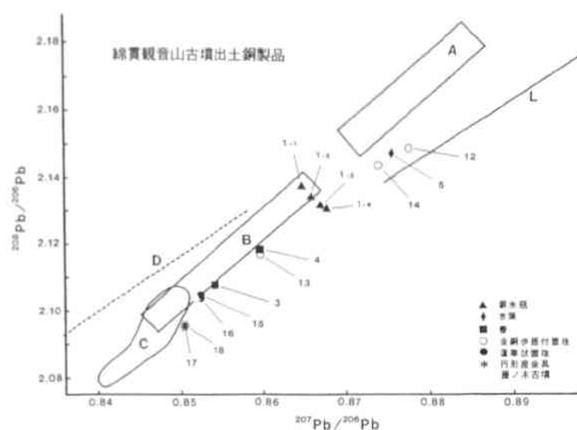
今年度は日本の弥生時代資料として、東京国立博物館所蔵の銅剣・銅矛など約50点、各県教育委員会所蔵の銅資料約50点等を初めとし、古墳時代資料を含めて約200点の鉛同位体比を測定した。今後も引き続き、資料集めと測定を続ける。できれば化学組成を測定できる資料を採取したい。

研究組織

○平尾 良光、早川 泰弘 (以上、保存科学部)、井上 洋一 (東京国立博物館)、難波 洋三 (京都国立博物館)
柳田 康雄 (福岡県教育庁)、森田 稔 (文化庁)



綿貫観音山古墳



出土銅製品の鉛同位体比

文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究

(5年計画の第2年次)

目 的

環境汚染の原因となる酸性雨などで、屋外に展示している文化財が腐食したり、建造物の石灰岩が溶けるなどの被害が急速に増加している。これらの被害の実態調査を行うとともに、劣化と環境汚染の相関関係を把握し、文化財にあった調査法および修復法の開発に関する研究を行うものである。

成 果

環境汚染物質が文化財に与える影響の調査フィールドとして鎌倉市高德院（国宝鎌倉大仏）・奈良市東大寺（国宝金銅八角灯籠）に観測ステーションを設置して大気汚染ガスや酸性雨の汚染の程度とその季節的変動及び気象との相関関係を調査している。

鎌倉大仏では、1998年6月から1999年3月の年平均はpH 4.7～4.5程度であり、降りはじめの雨の酸性度が低く雨が降るにしたがって高くなる傾向を示す。

また、国宝東大寺金銅八角灯籠の修理に伴い、化学組成、X線調査、クリーニング方法や防錆処理方法などの指導を行った。とくに、防錆処理方法については各種の樹脂やワックス処理を行った試験サンプルをキャス試験などの腐食試験を行い、最も腐食耐久性に良かったインクララックとカルナバワックスを併用した方法を開発して適用した。

研究組織

○青木 繁夫、川野邊 渉、松田 史朗（以上、修復技術部）

三浦 定俊、石崎 武志（以上、保存科学部）、朽津 信明（国際文化財保存修復協力センター）



国宝東大寺今銅八角灯籠（修理後）



八角灯籠 防錆処理後組立作業

近代の文化遺産の修復に関する調査研究

(5年計画の第1年次)

目 的

栃木県野木町の重要文化財・旧下野煉瓦窯の保存に関して、煉瓦の劣化状況調査と保存対策に関わる調査を行っている。同窯では、煉瓦壁表面に塩類が形成されることに伴って、煉瓦の表面崩落が引き起こされているが、調査では、その表面崩落のメカニズムを解明することと、それに基づく保存対策の策定を試みている。

成 果

まず、塩類の成長後退の季節変化をモニターした結果、表面の白色物質として観察される塩類は、冬場に多く夏場に少なくなる傾向が見られた。またそれを鉱物の種類で見ると、析出し始めの時期には結晶水の余分についての形の加水塩が目立っていたものが、冬場の塩類最盛期にはその脱水された形の塩や易溶性塩が卓越し、また減少していく時期には加水塩が目立つという変化が観察される。壁面崩落物の量に注目すると、季節的には5月頃にそれが極端に多くなり、他の季節にはそれ程でもない状況であった。

これらの状況と、温度、湿度、蒸発量、含水率などのデータを総合して考えると、煉瓦の崩落には以下のような傾向が言及できる。

- ・一階と二階で比較すると二階が、そして同じフロアで比較すると北に比べて南側がというように、環境変動の大きい場所ほど、壁面崩落量が大きくなる傾向が見られる。
- ・煉瓦表面における塩類の分布量は、おおよそ廻りの湿度の上下や含水率の上下と整合的に変化し、冬場には湿度が低下して含水率が低下して塩類の分布が増し、夏場には湿度が上昇して含水率が上昇して塩類の分布は減少する。
- ・しかし、壁面崩落量の増減は、塩類の分布変化とはそれ程相関せず、むしろその増減は、蒸発量の変化と類似した変化を示す。

このことから、壁面崩落は、単純に環境の乾燥化に伴う塩類の表面への析出だけで引き起こされるのではなく、むしろ温度上昇も関係した湿度と温度の兼ね合いなどによる蒸発量増加によって、塩類の析出フロントが煉瓦表面から煉瓦内部に移行することに伴って引き起こされるか、あるいは一旦表面に析出した塩類自身が水和する際などの結晶変化に伴う体積膨張や既存の塩類の潮解・崩落に伴って引き起こされているかであろう。

こうした表面崩落を防ぐには、環境を改良していくとともに、煉瓦自身に何らかの処置を施すことも必要になるかも知れない。煉瓦にシリコンを主成分とする撥水剤および防水剤、炭化水素を主成分とする防水剤など各種の薬剤を塗布して、上述のようなそれぞれの典型的な環境に放置し、その表面の変化を継続的にモニターしている。また、水分の進入に関する対策としては、原因となっている水が地下水の上昇ではなく、雨水を初めとする表面水である面が大きいと考えられるので屋根と雨樋の改修、周辺地盤の排水対策、基礎部分の防水処置などに関して修復方法、改良方法の立案を行っている。

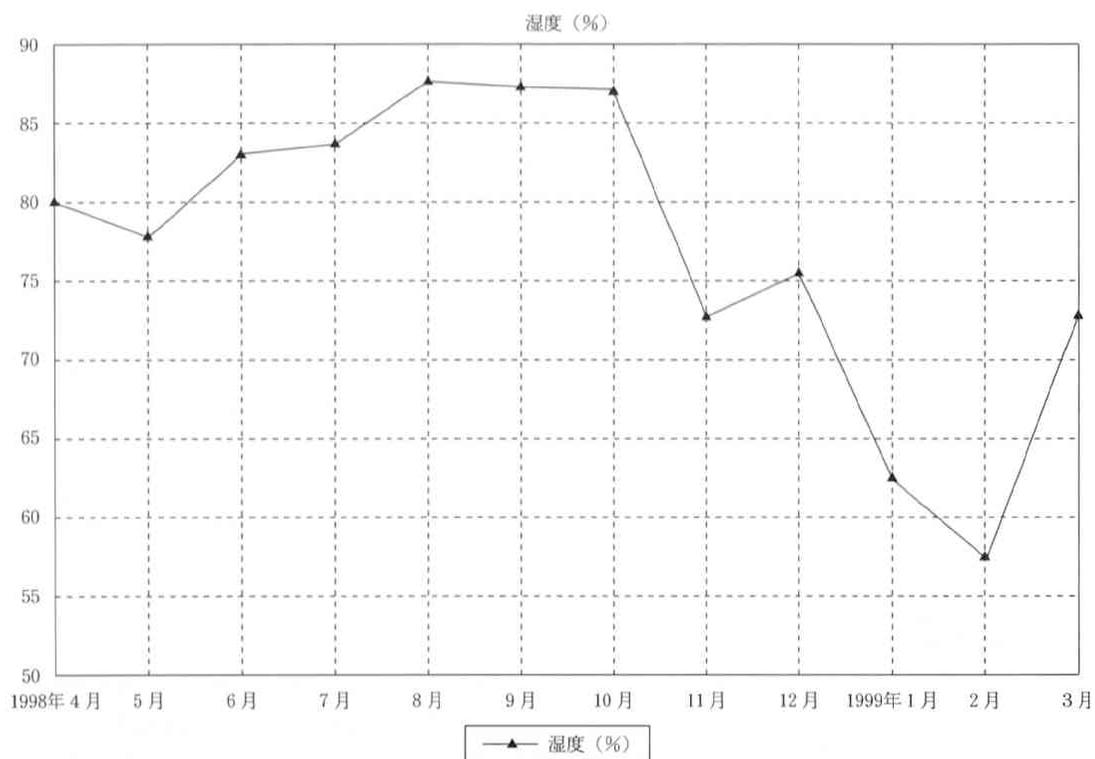
また、地盤及び窯本体の精密測量を継続し、それらのデータは極めて安定しており現状では短期間に大きな変形を起こす可能性は低いことが明らかになった。その一方、温度変化によると考えられる鉄製枠の伸び縮みによって煙突本体の長さの変化が観測され、亀裂の原因と推定される。これに関しては既存の鉄製枠の除去とその影響の評価とその後の強化方法の検討を行っている。さらに枠に固定されているワイヤの効果とデメリット、さらに枠とワイヤのシステムの代替策を検討中である。

次年度以降所有者である㈱シモレンの利用計画に沿った総合的な修復強化対策の立案を行う予定である。

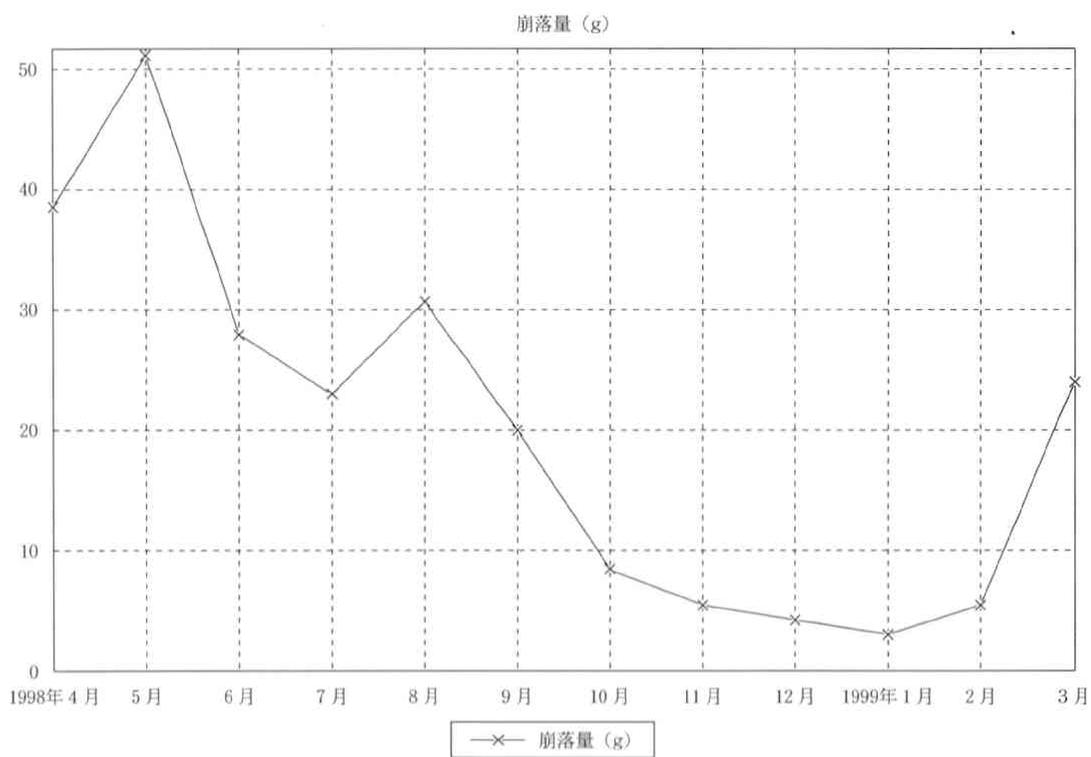
研究組織

- 増田 勝彦、青木 繁夫、川野邊 渉、早川 典子、加藤 寛、井口 智子（以上、修復技術部）
朽津 信明（国際文化財保存修復協力センター）、石崎 武志（保存科学部）

備 考
一部特別研究



窯内湿度の季節変化



崩落量の季節変化

漆の加熱硬化のメカニズムに関する研究

(3年計画の第1年次)

目 的

指定建造物修理報告書に記載されている、建築金具に対する漆の焼付方法には数種類の仕様が見られる。漆の焼付技法は、いまだ具体的な調査が行われておらず、その効果や物性についても未知な分野といえる。すなわち、金属表面と漆膜との密着性や表面硬度などを高めるために行うか、または急速乾燥をさせるための利用であったかなど判然としないのが現状である。

漆塗膜の厚みや温度の違いなどの焼付方法、表面硬度や耐候性などの物性測定から伝統技法調査の一貫して行い、成果を修復現場において活用することを目的とする。建造物修復で使用される金具に施される焼付漆の技法について、平成7年度からの3ヵ年で、歴史、加熱条件、硬化後の漆膜の物性について進めてきたが、今年度から新たに、焼き付け漆塗膜の安定性に関して、および加熱硬化のメカニズムに焦点を当てた研究テーマを設定した。

成 果

焼き付け漆の研究3ヵ年で、工房で行われている焼き付け漆技法の調査、焼き付け条件による、漆塗膜の硬度と付着性などの物性を実験し、従来の文献にある記述と、実際の焼き付け条件に差があること、下地準備方法などでも工房により異なること等が明らかにした。実験では、表面温度270℃で焼き付けた漆塗膜が付着性、塗膜硬度、光沢などの総合評価で優秀であった。

1998(平成10)年度は、120℃で4時間といった低温焼き付けを含む焼付漆の耐候性について実験を行い、結果について検討した。伝統的技法としての漆の焼き付けの理由は「常温乾燥では金属に対しては付着製が悪く、膜が剥がれてしまうため」であったが、実験の結果、耐候性試験では常温乾燥も含めたすべての焼き付け条件で剥離は起こらなかった。伝統的な焼き付け法は、炭火を使用していたために低温焼き付けを行えなかったが、120℃で4時間の焼き付けによるサンプルの塗膜の残存性が良好であった。これら実験で作成した手板は暴露実験を継続し、検討材料とする。

1999(平成11)年は、実際に社寺で使用されている金具に漆を焼き付け、立体物での条件を検討する。

研究組織

○加藤 寛、川野邊 渉、早川 典子(以上、修復技術部)、木下 稔夫(東京都立産業技術研究所)
宮田 聖子(東京芸術大学)

近世輸出工芸品の実証的研究

(5年計画の第2年次)

目 的

海外所在の日本工芸品に対する関心の高まりの中で、海外美術館などから、所蔵工芸品に関する問い合わせが開始している。しかし、従来この分野の研究は国内でも十分に行われておらず、詳しい調査もできていない。

輸出されてから百数十年を経過して、損傷が顕著になってきたことから在外日本美術修復協力事業の対象として、近世工芸品が日本に来る機会を捉えて調査を行うものである。

成 果

平成10年度は、ドイツの2カ所の美術館から3件の輸出漆工品を継続して修復事業を行った。さらに、アメリカ・メトロポリタン美術館から4件の武器武具類を輸入して修復を行った。

昨年度、ケルン東洋美術館の「瓢箪蒔絵鞍」は、解体後、雁皮紙の薄片を糊付けして塗膜の仮止めを行い、表面全体のクリーニングをした。今年度は、螺鈿平文を貼り戻し、表面と膜の強化を行って組立てる。また、「桜蒔絵器局」は、金具を外し、塗膜および蒔絵の一部に雁皮紙の仮止めを行い、表面に付着したワックスを取り除いた。今年度は、ヨーロッパで行われた修復箇所除去と復元、表面の強化、金具の取り付けを行う。この器局の、金具を外したところオリジナルの金具面が現れた。当初、現状の金具より一回り小さな日本製の金具が止められていたことが分かり、周囲にはオリジナルの蒔絵があることが確認できた。ドレスデン市のビルニッツ城博物館の蒔絵花瓶一对は、破損部分から口縁、筒、台の3部分を別々に作り、組み合わせることが確認できる。この作品は、1721年のインベントリーの最初に紹介される。すなわち、アウグスト・ストロングによって注文された、製作年代の明らかな作品の一つである。陶磁器の形状を模すために特殊な木地構造で作上げたことがうかがえる。今年度は、破損した口縁部の木地の復元と塗りを行い、展示効果を復旧する。

メトロポリタン美術館からは、「菊紋螺鈿鞍」「鳳凰蒔絵螺鈿矢筒」「野郎形兜」「雑賀鉢」の4点を輸入した。菊紋螺鈿鞍は、菊紋の他に鱗紋を切貝で、さらに地文として微塵貝や割貝など江戸初期の青貝装飾の典型といえる。現在、貝全体が浮き、剥落寸前の状態である。今年度は、雁皮紙による仮止めを行い、貝の表面をクリーニングする。鳳凰蒔絵螺鈿矢筒は、底にある「重広」の螺鈿銘から、富山藩おかかえの柚田師「柚田重広」であることが分かった。富山県立博物館には江戸時代の柚田細工の作品を収蔵しているが、その中でも重広の製作した硯箱が含まれている。今年度は、乾燥によって破損している木地を張り次ぎ、円筒状に復す。その状態で麦漆を使用して接着する。野郎形兜は、17世紀初頭の製作で、左右の吹返しの上に手甲と思われる金具を止めている。後世の修理で取り付けられたものである。今年度は、鉢、しころを解体し、吹き返しの上の金具を外す。欠失した眉形としころの波形の復元を行い、組み立てる。雑賀鉢は、紀州の雑賀衆が着用した実戦用の兜で、鉢、眉庇、腰巻の部分が残っている。兜には鉄地の上に薄い下地を付け、黒漆を塗っただけの簡素な技法がうかがえる。今年度は、浮き上がっている黒漆の塗膜を剥ぎ起こして、鉄地の錆を落とす。さらに、漆による防錆処理を行い、塗膜の裏についている錆を酸洗いする。塗り替えをしない鉄製漆塗りの本格的な修復は、日本で最初の例になろう。

研究組織

○加藤 寛、川野邊 渉、早川 典子（以上、修復技術部）

朽津 信明（国際文化財保存修復協力センター）、佐野 千絵（保存科学部）

敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究

(3年計画の第3年次)

目 的

昭和61年(1986)、東京国立文化財研究所と敦煌研究院は、莫高窟壁画、彩塑の保存・修復に関する共同研究を開始した。本研究は、保存・修復技術を確立し、将来にわたって理想的な保存・修復が行われる事を最終目標とし、平成2年(1990)12月には正式に合意書を交わした。平成3年(1991)4月から合意書に則って、環境・病害・修復材料の3つの研究班を組織し、日中共同で調査研究を行っている。また、平成8年(1996)からの第2期3ヵ年共同研究は、修復材料をテーマとして修復技術部が中心となって進めている。

本年度は、第2期3年目に当たる。

成 果

昭和61年(1986)～平成2年(1990)

文化庁長官裁定「敦煌文化財保護に関する協力事業実施要項」にもとづき、第1回「敦煌莫高窟壁画保存協力者会議」が10月21日に開かれ、第1回訪中団が昭和61年(1986)11月9日から20日まで、北京、蘭州及び敦煌を訪問した。以降、平成2年(1990)までの5ヵ年で、協力者会議を6回開催し、訪中団を7回派遣した。

平成2年(1992)12月26日付けで、当研究所と敦煌研究院の間で、合意書「敦煌莫高窟第194窟、53窟の保護に関する日中共同研究」が作成された。

第1期

平成3年(1991)～平成7年(1995)

平成2年(1992)12月に作成された合意書に基づき、平成3年(1991)から5ヵ年を第1期とし、第194窟と53窟をフィールドとして研究を進めることとなった。

日本側研究者は、年間2回敦煌を訪問し、調査、測定、試料採取を行った。主に、温度、湿度、日照などの測定機器の設定、設置、データ読み出し等、また、病害原因研究のための試料採取を行った。

平成3年(1991)5月と10月の訪中を含めて、平成7年度(1995)までに計10回の訪中を行うとともに、敦煌研究院保護研究所の若手研究者は、年間2名が3ヵ月間当研究所で研修を行った。

協力者会議は、平成6年度(1994)まで3回開催した。

平成5年(1993)10月に、敦煌で開催された国際シンポジウム「Conservation of Ancient Sites on the Silk Road」において、共同研究2件を発表した。

平成8年(1996)2月に奈良において、国際シンポジウム「敦煌莫高窟の保存と関連の研究」を開催し、4件の発表を行った。

第2期

平成8年度(1996)～平成10年度(1998)

平成8年(1996)11月11日作成の合意書に基づき、第53窟をフィールドとし、修復材料に関する研究を共同テーマとして、年間1回の訪中、敦煌側研究者の当研究所での年間2名の2ヵ月間研修を含み、3ヵ年継続している。本年度はその最終年度に当たる。

平成8年度第1年次：

1. 損傷地図の作成のための基礎作業として、写真測量の予備試験を現地で行い9年度本測量のための機材選定を行った。

2. 赤外写真撮影および CCD 赤外カメラによる、彩色下の変更や下描きの探索を行ったが 53 窟では発見できなかった。
3. 補修用擬土の基礎試験用に、現地で補修用擬土の試料作成を行った。
4. 下地強化の使用樹脂及び技術選定のための、実験を、来日する敦煌研究院職員と東文研で行った。以下、3 年間継続。
5. 用語集の作成のため、語彙を敦煌研究院の論文、報告書から収録し、意味の記述を敦煌側に依頼した。東京国立文化財研究所では、日本語の語彙の収集を進めた。以後 3 年間継続する。

平成 9 年度第 2 年次：

1. 53 窟壁画の写真測量を測量専用カメラにより撮影するとともに、撮影地点の測量を行った。
2. 壁画修復方法の調査として、敦煌研究院で行っている修復方法を、ビデオ撮影と記録として、編集した。
3. 合成樹脂による試験施行を、53 窟北壁下部の一部でテスト施行（以前敦煌研による処置が行われた箇所）で行った。
4. 足場を設置することなく、高所を調査、撮影するための装置を開発し、53 窟でテスト撮影を行った。

平成 10 年度、第 3 年次：

1. 現地で写真測量を行った壁面について、損傷地図を作成した。
2. 本来の下地の土壌学的検討として、粒度分布、含水比、水分蒸発、収縮限界、液性限界、可塑性限界、混合物等の調査測定を行った。
3. コンピュータによる当初画像の復原（色、図像等）のために、非接触遠隔測色計による彩色部分の測定を行い、顔料分析の結果と合わせて、基礎データを作成した。
4. 3 年で収集記述した、用語集の語彙と意味の確認作業を、現地で敦煌研究院、東京国立文化財研究所双方で進めた。

研究組織

○宮本長二郎（国際文化財保存修復協力センター）、国際文化財保存修復協力センター、修復技術部、保存科学部、美術部、情報資料部



敦煌研究院での測量システム構築協議



写真測量

文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力

(5年計画の第2年次)

目 的

経済活動の活発化に伴い、アジア諸国は酸性雨などの環境汚染物質による文化財の被害地域として注目されてきており、これはアジアの文化財の保護にとって無視できない問題である。この問題は国境を越えた問題であり、アジア全体の問題でもある。これらの国々と協力して文化遺産の保護を進める必要から、1995年（平成7年）度から韓国国立文化財研究所と共同研究を開始した。

成 果

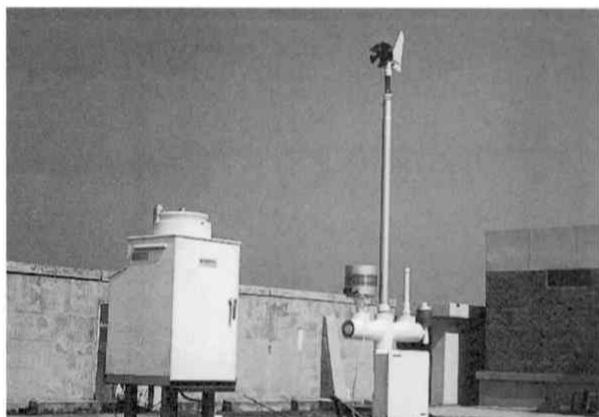
日韓で文化財に対する環境汚染物質の影響を比較研究するためには、その基礎になる測定方法を共通化する必要がある。協議の結果、測定場所、測定項目、分析手法などの共通化が図られ、1996（平成8）年からソウル景福宮内にある韓国国立文化財研究所屋上と徳寿宮内にある観測ステーションおよび暴露台を設置して観測を行っている。

暴露試験台においては、金属や大理石の共通仕様のサンプルを共通試験方法で耐久性試験を実施している。

研究組織

○増田 勝彦、青木 繁夫、川野邊 渉、大竹 和、松田 史郎（以上、修復技術部）

三浦 定俊（保存科学部）、朽津 信明（国際文化財保存修復協力センター）



韓国国立文化財研究所で測定中の総合気象環境測定器



韓国国立文化財研究所に設置してある環境汚染評価用暴露台

美術情報システムの研究

—データの共有化を中心として—

(11年計画の第10年次)

目 的

人文科学研究における学術データベースの構築例の増大と、パーソナル・コンピュータの普及にともなう研究者個人によるデータ生産の日常化とが近年顕著である。一方、多様な目的・種類に有効利用できるデータベースの利用環境が十分に整備されているとは言いがたく、データの生産・利用に関する具体的システム像を多角的かつ総合的に検討することが強く求められている。本研究は、こうした視野に立ち、美術史の基礎資料のデータベース化と、広範な研究者による相互利用システムの確立を通じ、資料の共有化と研究支援環境の整備を具体化することを目的とする。

本研究は平成10年度をもって終了する予定であったが、平成12年度の新営移転にともない新たなシステム環境の検討・構築など、本研究と関連する課題が残されているため、平成11年度まで継続することにした。研究の総括は、最終年度にあたる次年度に行うこととする。

成 果

(1) 共有データの生産・蓄積

・文献・図書データ

定期刊行物所載文献、所蔵図書データの入力を継続するとともに、平成12年度における新営化の準備として、所蔵図書台帳と現蔵図書の照合作業を進めた。

・美術史研究資料

『日本美術年鑑』のデータ化を継続し、5年分5冊(昭和44年～48年)を入力した。また昭和61年以前の近代美術関係展覧会情報、同カタログ・冊子のデータを入力し、新営以後の受け入れ作業の準備を進めた。黒田清輝及び白馬会関係資料として、高村光雲・小山正太郎の自筆文献資料を全文テキストデータ化した。中国画論の中から『画品叢書』について全文テキストデータ化した。

・画像データ

4×5インチ・カラーポジフィルム(2500件)をデジタル化し、CD-ROMを作成した。

・近代美術基礎資料の所在調査ならびに収集

明治期展覧会及び万国博覧会等に関する資料について、佐賀県立図書館、佐野記念館、鍋島報効会徴古館、福岡県立図書館、長崎県立図書館、京都府立総合資料館、京都市美術館で調査・収集を行った。

・貴重美術雑誌等のマイクロフィルム・CD化

経年劣化の著しい明治・大正・昭和初期の貴重雑誌から、『美術新論』についてマイクロフィルム化をおこない、また明治～昭和初期の美術界関係逐次刊行物(日刊美術通信他)をCD-ROM化した。

・芸能関係研究文献目録の作成

芸能関係研究雑誌の中から『謡曲界』について掲載文献をデータ化した。

(2) パイロットシステムの構築

・データベースの運用・評価

定期刊行物所載文献データベース及び所蔵図書データベースは継続的に運用中である。

・ローカルエリアネットワークシステムの整備・運用・評価

マッキントッシュ機とウィンドウズ機を併用するネットワーク環境の整備を行うとともに、異機種間のマルチアクセスが可能なデータベースの運用について実験を行った。

・画像データベース構築のための基礎実験

プロフォトCDマスターに入力した画像について、画質・容量等の諸条件を検討するとともに、フィルムス

キャナーからの入力条件と画質との関係について実験を行った。

- 検索辞書システムの研究

美術史関連の論文及び有形文化財関連の記事を有効活用するために必要な、効率的なデータ検索の方法と手順の実現に向けた見通しをつけ、成果を報告書にまとめた。

- インターネット環境におけるホームページの運用・評価

ホームページのカヴァーページと英文ページ全般について、その修正と拡充を行った。各研究部のページは、自主的に随時更新されている。黒田記念館のページの中に、新たに白馬会関係を中心とするページを作成することになり、関連する美術館の研究員とともに、全体の構想と運営方針について協議を行った。同ページは、現在、平成 11 年度内の公開にむけて構築中である。

(3) 「共有化」環境の検討

- 「共有化」環境をめぐる諸問題についての研究会の開催

関連研究分野の研究者 3 名を招へいし協議を行った。

- 文化庁を中心とする文化財情報ネットワークシステムへの対応

ホームページを通じて所蔵資料の公開を進めている。

- データベースの有効利用

学術情報センター・国文学研究資料館など学術利用を目的とする各種データベースの利用を通じて、将来のインターネット環境における所蔵データベースの公開に向けた諸条件を検討した。

(4) 平成 12 年度の新営に伴う準備

新営以後のローカルエリアネットワークの環境について、そのスペックを検討するとともに、具体的な設計案を協議中である。情報資料部の管理する図書や新営以後に新たに管理すべき図書・カタログ類については、新たなデータ化や既存データと図書類との照合作業を進めている。情報資料部が現在管理している既存データの新たなネットワーク環境における管理と活用の方法・手順については、本研究で作成したパイロットモデルを参照しながら、適宜、協議を行っている。

研究組織

○米倉 迪夫、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英、中村 節子（以上、情報資料部）
田中 淳（美術部）、伊與田光宏（客員研究員）、玉虫 敏子（調査員）

美術情報における語彙の研究（検索辞書システムの研究）

（5年計画の第5年次）

目 的

本研究所に蓄積される研究資料は多様な分野に及んでいる。これらの資料群は順次データベース化が進められている。これらさまざまなデータベースに対しては、豊富な語彙群からなる検索辞書をもった一つの検索システムからアクセスできることが望ましい。

本研究ではこのような観点から、まず検索語彙に焦点をあて、美術史研究文献や文化財関係文献などを対象として語彙の収集と分析を行い、語彙の広がり、語彙相互の関連などの検討をふまえて検索辞書のモデルを作成することを目的とする。

成 果

今年度は本研究の最終年度にあたるので、これまでの成果をまとめ、報告書を作成した。この研究により、美術史関連の論文および有形文化財関連の記事を有効活用するために必要な、効率的なデータ検索の方法と手順の実現に向けて見通しをつけることができた。また、既刊の『日本東洋古美術文献目録・昭和11年～40年定期刊行物所載』の続編刊行を目指した作業の開始が次年度に予定されているが、本研究の成果はこのための有力なモデルになるものと期待される。

(1) サンプルデータと検索項目

情報資料部文献資料研究室が各種定期刊行物から逐次的に採録している記事データのうち、1993年から1995年にわたる3カ年の刊行物の記事3,768件を取り上げてサンプルデータにした。個々のデータには基本的書誌データのほか、記事内容に応じた①ジャンル別コード（美術工芸・建築およびその他の分野を含む）と②国別ないし地域別コードなどのコード類が採録の段階で付けられているが、今回、検索の効率化をはかるために③見出し語と④グループ見出しの2項目を新たに付加した。

(2) 見出し語とグループ見出し

見出し語は、記事内容に応じて適宜付加したもので、主として固有名詞を選んである。また、グループ見出しは、見出し語の種類を特定するためのもので、「作者」「神仏」「産地」など28種の用語を選んだ。サンプルデータには、たとえば「作者_狩野探幽」「神仏_阿弥陀」「産地_萩焼」のように記述されている。

(3) データ検索の効率化

サンプルデータ3,768件のほぼ50%に④グループ見出しが付加されたので、①ジャンル別コードと②国別・地域別コードとの組合せによって高い検索効率が期待できるようになった。また、①～④の4項目すべての値が一致する重複データの件数を低く押さえることができた。グループ見出しに選ばれた用語の見直しなど今後の課題が残るものの、以上のように検索項目を整備した結果、4万5000～5万件規模のデータ件数を処理する場合でも、十分に対応できるだけの見通しをほぼつけることができた。

研究組織

○鈴木 廣之、米倉 迪夫、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英（以上、情報資料部）

デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究

(5年計画の第5年次)

目 的

美術史研究においては、いうまでもなく作品に関する視覚情報が重要になる。一方、近年のコンピュータ開発は、デジタル画像データの利用を可能にしている。デジタル画像は、高性能コンピュータ処理による活用によって、他の方法によっては得がたい能力が発揮されよう。本研究は、将来の実用化をにらみながら、デジタル画像データベースを中心にすえた画像データの蓄積と活用について見通しをつけようとするものである。

成 果

1) 4×5 カラーポジフィルムのデジタル化

昨年度に引き続き、写真資料研究室の保管する4×5インチ判カラーポジフィルムからプロフォト CD マスターを作成した。本年度は、2,500枚のフィルムを入力し、既に登録されているカラーポジフィルム 7,500枚のデジタル化を終了した。

2) X線フィルムのデジタル化

昨年度に引き続き、科学研究費データベース刊行費による「有形文化財データベース」(研究代表者 東京国立博物館資料部・高見沢明雄)に参加し、X線画像のCD-ROM化を進めた。今年度は700枚を入力した。また、絵画関係のX線フィルム約4,000件についてデータベース化を終えた。

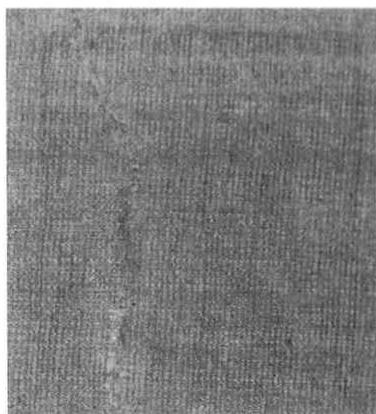
3) 「源氏物語絵巻」の撮影と画像のデジタル化

受託研究「源氏物語絵巻の調査」により、徳川美術館蔵「源氏物語絵巻」について赤外線・X線写真等の撮影を行い、画像の一部はデジタル画像化し、蛍光X線分析の結果等と総合してデータ解析を行う準備を進めた。

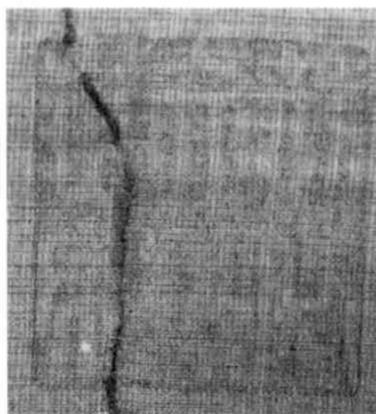
研究組織

○島尾 新、米倉 迪夫、鈴木 廣之、井手誠之輔、勝木言一郎(以上、情報資料部)、田中 淳(美術部)
伊與田光宏(客員研究員)

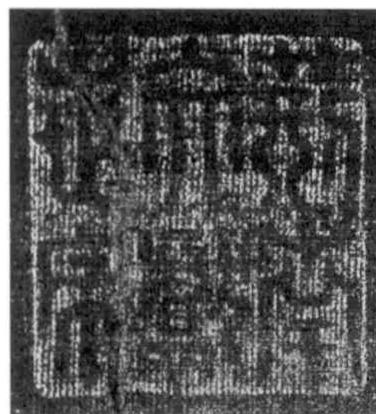
蛍光写真と画像処理による印象の鮮明化 雪舟筆四季山水図(東京国立博物館)の館蔵印



通常写真



蛍光写真



画像処理後

世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集

(10年計画の第8年次)

目 的

世界の貴重な文化財の恒久的保存のため、世界の国々に対しその保存に協力する際には、各国の文化財の状況について調査し理解すべきであることは言うまでもないが、同時に、各国における文化財保護体制を把握し理解することが重要である。

本研究は、世界、特にアジア諸国の文化財の保存状態および文化財保護に関わる組織・機構・活動状況について、情報を収集し、さらにその問題点を検討することにより、より有効かつ円滑な文化財保存協力の実施へ貢献することを目的とする。

成 果

海外の専門家からの情報収集

1990年から毎年、東京国立文化財研究所などの主催で行われているアジア文化財保存セミナーにおいて、各国からの参加者（文化財保存の実務に携わる専門家）がそれぞれの年度のテーマに基づき、自国の文化財の保存状況に関する報告を行っている。これらの報告やセミナーの場で交わされた議論は、アジアセミナープレプリント（予稿集。英文）およびプロシーディングス（報告書。和文、一部英文）に収録されており、プレプリントについては順次整理し、国際文化財保存修復協力センターのホームページ上で公開している。また、セミナー参加者から提供された各国の文化財保存に関わる研究機関や法律、文化財そのものに関する資料を収集、整理している。

平成10年度のセミナーは、「第8回アジア文化財保存セミナー—アジア地域の世界文化遺産：考古遺跡の活用しながらの保存—」として、アジア9カ国の文化財保存の専門家と文化財保存の3つの国際機関の代表者を招いて平成11年2月に奈良で開催された。セミナーでは世界文化遺産リストに登録されている遺跡を中心とした遺跡の保存および保存のための活用のあり方について調査、討議が行われた。5日間にわたる議論の結果、アジアにおける世界遺産の保存に関する勧告（Conclusion）がまとめられ、国際文化財保存修復協力センターのホームページ上で公開された。また、本年度には、平成8年に実施された「第6回アジア文化財保存セミナー：考古遺物の保存」の英文プロシーディングスが刊行された。

また、タイ、パキスタンなどにおいて遺跡や遺構の現地調査を行うとともに、専門家との協議を通じて、当該国の文化財保存に関する現状や問題点に関する情報を収集している。

国内専門家からの情報収集

国内専門家からの情報の収集としては、1997年から行われている国際文化財保存修復研究会の参加者を中心とした専門家を対象にアンケート調査を行い、保存修復国際協力事業の相手国の実状について調査を行っている。また、文化財保存人材データベース（非公開）のデータ収集、整理を行うとともに、情報交換のための人的ネットワーク作りを行っている。

その他

インターネットを利用して、世界各国の文化財保存に関わる機関や、文化財関連の情報を掲載したホームページの情報を収集している。収集・整理した結果の一部は、国際文化財保存修復協力センターのホームページで文化財保存関連情報リンク集として公開している。

研究組織

○宮本長二郎、西浦 忠輝、松本 修自、朽津 信明、大久保政博、二神 葉子

(以上、国際文化財保存修復協力センター)

屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究〔国内〕

（10年計画の第8年次）

目 的

屋外の石（レンガ）造文化財の保存は重要な課題の一つである。

本研究は、屋外石（レンガ）造文化財の劣化原因、過程を地質学、岩石学、鉱物学的に検討するとともに、気象環境と劣化原因との因果関係を考察し、さらには実際の保存修復処置についての実験ならびに応用研究を行って、保存修復対策についての基礎的データを集積し、石ならびにレンガ造文化財の保存技術を向上させることによって、文化財保存に貢献することを目的とする。

成 果

洞窟、磨崖仏等の調査研究を行っているが、北海道余市町、国指定史跡・フゴッペ洞窟において特に詳細な調査を行った。これまでの調査で、緑色微生物の付着、黒色のマンガン酸化物の沈着などが保存上の問題として考えられた。これらはいずれも水の影響があると判断されたため、洞窟内外での含水率変化を連続自動計測した。その結果、洞窟のある岩体に水が染み込む状況を考えて、雨水よりも融雪水の方が遥かに多量に浸透していることがうかがえた。従って、保存対策としては、融雪水の浸透を減じることが考えられる。ただし、洞窟内の含水率変化は洞窟外ほど顕著ではなく、実際に水が供給される経路や、そのタイムラグのようなものは判っていないので、今後引き続き調査することにより具体的な保存対策を模索する。また、緑色微生物に関しては、水以外に光の問題も関係していると考えられるため、その微生物を特定し、光学的性質を調べることにより、生物の繁茂しにくい光源および公開環境を考察している。

福島県小高町、国指定史跡・薬師堂石仏において劣化状態調査を行った。同磨崖仏では1980年代に保存修復工事が行われており、その後の状態調査として行ったものである。特に析出塩類の分布季節変化を観察し、併せて周辺環境を調査した。その結果、塩類は蒸発量が大きくなる秋から冬にかけて増加し、逆に蒸発量の小さい夏には減少する傾向が見られた。また、岩体の含水率調査から、改築された覆屋の外側から一部水が供給されることによって、このような現象が起きていることが観察された。ただし、塩類の析出量は保存工事以前に比べて格段に減っており、保存工事の効果は10余年が経過しても十分維持されていると評価される。また、磨崖仏の脇で屋外の岩に実験的に施された保存処置の効果を観察した。これは、何も無い岩崖面に仮想石仏を想定し、その周りに孔をあけて撥水性シリコーン樹脂を注入、含浸し、岩体内部に撥水層を形成して、地中水の浸入を阻止することによって仮想石仏の劣化を防止する試みである。10余年が経過した段階で、仮想石仏面は他の部分に比べて突出した形で良く保存されており、含水率も周りの岩体に比べて著しく低い状態に維持されていた。当初の目的であった地中水の浸入を阻止するという効果は十分に達成されていると評価される。ただし、樹脂含浸を行わなかった地表面付近は、含水率が高く、表層が崩落し後退していた。

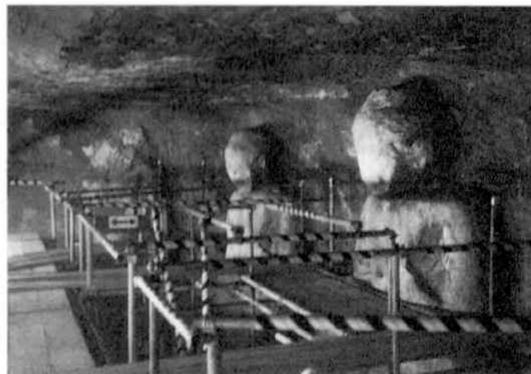
研究組織

○西浦 忠輝、朽津 信明、宮本長二郎（以上、国際文化財保存修復協力センター）

石崎 武志（保存科学部）、松本 健（国士舘大学）

渡辺 邦夫（埼玉大学）、尾崎 哲二（青木建設）

三田 直樹（地質調査所）、大石不二夫（神奈川大学）



福島県小高町・史跡・薬師堂石仏

屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究〔海外〕

（10年計画の第8年次）

目 的

屋外石（レンガ）造文化財は建造物、遺跡等世界の主要な文化財であるが、その多くが現在崩壊の危機に瀕しており、保存対策の策定が急務である。本研究は、海外の屋外石（レンガ）造文化財の劣化原因、過程を地質学、岩石学、鉱物学的に検討するとともに、気象環境と劣化原因との因果関係を考察し、さらには実際の保存修復処置についての実験ならびに応用研究を行って、保存修復対策についての基礎的データを集積し、石ならびにレンガ造文化財の保存技術を向上させることによって、世界の文化財保存協力に貢献することを目的とする。

成 果

タイ国のスコータイ遺跡、アユタヤ遺跡等において、環境条件と劣化現象についての測定、解析を継続的に行ってきた。スコータイ遺跡ではスリサワイ寺院、スリチュム寺院での気象観測と解析を行っており、また、スリチュム寺院大仏の保存に関わる水分の影響についての測定とコンピュータシミュレーションを行った。その結果、地中水よりも雨水の影響が遥かに大きいことが確認された。更にトラバントラン寺院の保存修復パイロット事業を開始すべく事前調査を行った。アユタヤ遺跡ではラチャブラナ寺院での気象観測と解析を行っており、またマハタート寺院をフィールドとしたレンガ造建造物の劣化と水分の挙動についての調査、測定、解析およびコンピュータシミュレーションを行った。その結果、雨水が滞留する場所が集中的劣化（塩類風化）を起こすことが明らかにされつつある。また、東北部クメール石造遺跡の劣化と保存修復対策に関する調査を継続的に行っている。

パキスタン国ガンダーラ遺跡群の調査を行った。ガンダーラ遺跡では雨水が劣化の主原因であるが、確たる保存対策はなく、当面の維持策が課題である。ガンダーラのラニガト遺跡において、建造物遺構への雨水の浸透を防止するため、粘土によるキャッピング技術について、現場実験を行っている。粘土と撥水性シリコン樹脂および強化用アクリル樹脂を併用することにより、良好な結果が得られている。

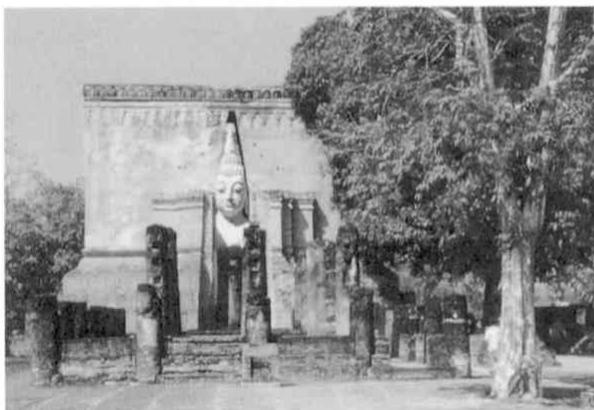
中央アジア、ウズベキスタン国の日干レンガ造仏教寺院遺跡の保存修復に関する調査を行った。日干レンガは水に弱いため、遺跡の多くが崩壊、消滅しつつある。応急的な処置が必要である。

その他、カンボジアのアンコール遺跡群、インドのアジャンタ、エローラ石窟群、イランのペルセポリス遺跡、トルコのゴールデンMM古墳等の保存修復に関する調査を行った。

研究組織

○西浦 忠輝、宮本長二郎、松本 修自、朽津 信明（以上、国際文化財保存修復協力センター）

石崎 武志（保存科学部）、松本 健（国土舘大学）、渡辺 邦夫（埼玉大学）、増井 正哉（奈良女子大学）



スコータイ遺跡のスリチュム寺院



ガンダーラ・ラニガト遺跡における現地実験

文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と 保存対策に関する調査研究

目 的

近年急速に劣化が進んでいる国内外に所在するレンガ造文化財の保存、修復に貢献するため、レンガの劣化現象と保存対策についての調査、研究を行い、有効な保存対策を開発し国内外のレンガ造文化財の保存技術の向上に貢献することを目的とする。

成 果

栃木県、重文・旧下野煉化窯などのレンガ造建造物をフィールドにして、レンガの劣化に関する基礎的な調査、研究を行った。その結果、一口にレンガの劣化と言っても、そのもとの物性によって劣化挙動が大きく異なることが判った。塩類風化を例に取れば、一般に、透水性が大きく、保水性が小さいものほど劣化を起こしやすい傾向が観察された。すなわち、「レンガの劣化」とか「レンガの保存対策」という一元的な発想ではなく、保存対象のレンガの劣化状況を詳細に調査するのはもちろん、そのレンガの物性を正確に把握することが必要なのである。つまり、レンガの劣化状況を数値的に表現できる「風化度」という概念と、今後の劣化の可能性を表現する「ポテンシャル風化度」の概念が必要となろう。前者としては、弾性波伝播速度、針貫入抵抗強度など非破壊的な方法を考察中である。一方、物性が同じレンガでも置かれている環境によって劣化状況が異なることが明らかとなっている。これは、水が豊富に供給され、蒸発が盛んな条件で劣化が促進される傾向として認識される。従って、保存対策を考える際には、そのレンガの物性に応じた劣化しにくい環境を特定し、その環境に近づけることが必要である。この観点からの調査、研究を現在進めている。

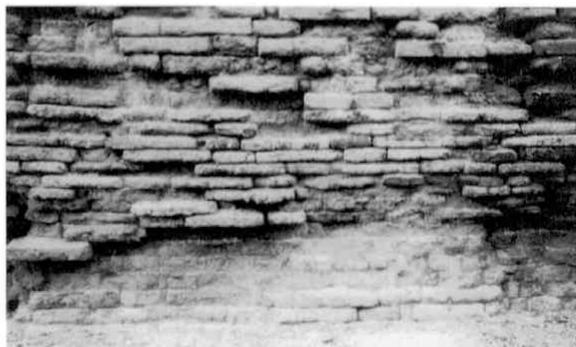
海外においては、タイ国のアユタヤ遺跡を中心に同様な調査を行い、日本の事例との比較を行っている。アユタヤ遺跡の中心であるマハタート寺院の一部の特にレンガの劣化の著しい箇所をフィールドとして、含水量の変化と塩類の析出について継続的に調査、研究を行っている。水の供給は雨水であり、雨水が滞留し徐々に蒸発する場所で塩類風化が起きている。従って、レンガ構造物内の水の挙動を知り、雨水が滞留しないように排水を調整することが保存対策として重要である。地下水（地中水）の影響はこの場所に関する限りほとんどない。アユタヤ遺跡内にレンガ造の実験用柱を設置し、年間を通してのレンガおよび地中の含水率の変化を測定、解析している。含水率は雨季に高く、乾季に低いことは言うまでもないが、その値は柱の上部と下部、モルタル上塗りの有無によって、かなり異なり、またその変化にタイムラグがあることが明らかとなっている。

研究組織

- 西浦 忠輝、朽津 信明、宮本長二郎、松本 修自（以上、国際文化財保存修復協力センター）
石崎 武志（保存科学部）、松本 健（国土館大学）、肥塚 隆保（奈良国立文化財研究所）
渡辺 邦夫（埼玉大学）、尾崎 哲二（青木建設）、三田 直樹（地質調査所）



旧下野煉化窯におけるレンガの劣化



アユタヤ遺跡マハタート寺院におけるレンガの劣化

4. 受託研究

江戸期銀貨の品位と保存に関する研究

目的

日本銀行金融研究所貨幣博物館が所蔵する江戸期の銀貨について、その品位を正確に測定するとともに、多くの銀貨表面に見られる黒色化の原因を突き止めることを目的とする。江戸期の銀貨 15 資料について、表面のごく一部を精密ドリルで研削して金属面を露出させ、その金属部分および黒色部分の化学組成を蛍光 X 線分析法によって測定して組成の違いを検討した。また、蛍光 X 線分析法による銀貨分析時の測定値の信頼性についても併せて検討を行った。

成果

日本銀行金融研究所貨幣博物館が所蔵する江戸期の銀貨の中から、丁銀資料 5 点、豆板銀資料 10 点の計 15 点を選定した。銀品位は 13~80% にわたり、表面に銀色光沢を残しているものから、黒色化が著しいものまで様々である。これらの資料すべてについて、表面のごく一部を精密ドリルで研削して（約 $\phi 1$ mm、深さ約 0.5 mm）金属面を露出させ、その部分の化学組成を蛍光 X 線分析法によって測定した（入射 X 線ビーム径： $\phi 0.2$ mm）。同様の条件で測定した表面黒色部分の結果と比較すると、金属面露出部での銀濃度は黒色部分の銀濃度に比べて一様に低く、従来言われていた銀品位の値は両者の中間に位置する資料が多かった。一方、銅および鉛の濃度はまったく逆の傾向を示し、金属面露出部の方が高い値を示した。さらに、黒色部分の測定では多くの資料から硫黄が検出され、これが黒色化の原因の一つであると考えられた。

また、二つに切断されている丁銀資料について、その切断面を X 線分析顕微鏡によって観察した。銀、銅、鉛、硫黄、塩素などについて、切断面内の元素分布を調べた結果、資料の最表面 10 μ m 程度の厚さで銀が濃化し、銅が欠乏している層が存在していることを明らかにした。

研究組織

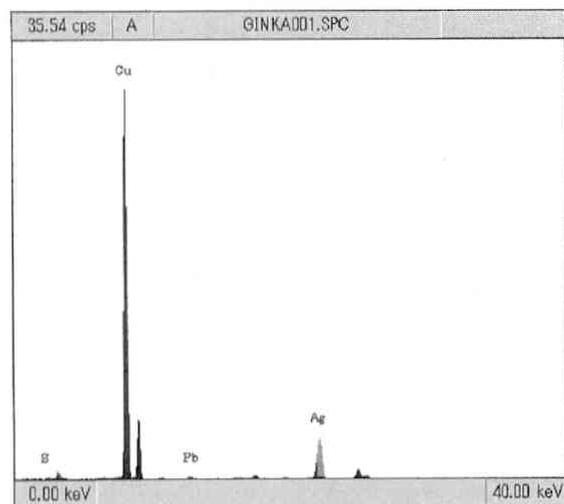
○三浦 定俊、早川 泰弘（以上、保存科学部）

備考

当受託研究は日本銀行金融研究所より依頼された。



表面黒色化した丁銀資料



蛍光 X 線スペクトル

装潢材料の物性研究

目 的

紙本や絹本などに生じた「汚れ」は保存に大きな影響を持つだけでなく、修復作業時にその拡散や変質・固定によって作業を困難にし、文化財そのものの価値と寿命に大きな影響を与える。「汚れ」に関しては、従来から種々の分解物の混合物であろうとの類推が成されてきたが、その化学的な組成や原因物質などについて系統的な研究が行われたことはない。また、自然科学的な意味での「汚れ」すべてが文化財上から除去の対象となるものであるか必ずしも明確ではない。自然科学者と文化財関係者の共同研究によってその境界が少しでも明らかになることは文化財保存技術により多くの選択肢を与えることとなる。本研究では、「汚れ」の発生原因・機構を解明し、文化財に及ぼす影響と文化財上での挙動に関する基礎的なデータを収集する。さらにそのデータに基づき、文化財の質による「汚れ」の処置方法を開発しようとするものである。

本年度は、紙本から水を用いて「汚れ」を採取し、分析を行っている。SEM 写真によると「汚れ」の部分と通常の表面には明瞭な違いが認められ何らかの物質が薄膜上に分布していることが確認できる。また、「汚れ」部分では、硫黄、カリウム、カルシウムがより高い濃度で検出され、この部分にドウサ由来の成分が濃縮していることが示唆された。また、赤外線スペクトルから多糖類とアミド類が存在することが推定された。このことから糊類あるいは布海苔などから多糖類と膠からのアミド類が「汚れ」の主成分となっていると予想される。さらに次年度以降、分子量分布、部分構造の確定などによってこれらの「汚れ」が糊あるいは布海苔、膠それぞれから発生しているということを確定する予定である。従来予想されたセルロース分解物由来の汚れは、主な成分としては現時点では検出されていない。

また、紙本上の「汚れ」のみならず、木造建造物の部材上の汚れも極めて似た物性を示すことも非常に興味深い。さらに絹本における「汚れ」の分析にも進む予定である。

GPCによる分子量推定、液体クロマトグラフィーによる各成分の分取、それぞれの成分の構造決定、より多くの試料からの採取、等を検討している。これらの結果を基として「汚れ」の安全かつ効率的な除去方法の開発、「汚れ」の文化財上での移動及び濃縮の機構とその防止対策などを研究する予定である。

研究組織

○川野邊 渉（修復技術部）
早 川 典 子（修復技術部）

備 考

当研究は株式会社岡墨光堂より依頼された。

花籠車蒔絵鞍・鎧の修復処置研究

平成 10 年度受託研究「花籠車蒔絵鞍・鎧」

「花籠車蒔絵鞍・鎧」は高知県安芸市歴史民俗資料館が保管する典型的な 18 世紀の蒔絵馬具である。鞍は、桜材を削って木地を作り、表面に黒漆を塗る。さらに、金銀の高蒔絵で、梅や牡丹の花枝の文様をあらわしている。

本受託研究では、糊漆、麦漆など漆を中心とした接着剤による、漆芸品の修復技術の確立を探るために、合成樹脂の使用を避けて、修復を行った。

損傷箇所は以下の通りである。1. 居木先の木地の欠失箇所。2. 前輪の手掛け、海正面、居木との接面にある打痕と思われる傷み部分。3. 後輪の背面中央と居木との接面の損傷箇所および爪先の黒漆剥落箇所。4. 全表面の汚れ、および塗膜表面の紫外線による劣化。

これに対して次の 4 項目の修理方針を立てた。1. 両輪と居木を組み立てている紐はオリジナルであるために、今回の修理では両輪と居木の解体を行わず、現状のままクリーニングを中心に修理する。2. 従って、左側の居木先の復元は行わず、展示効果を考えた修理にとどめる。3. 両輪の表面にある亀裂並びに剝離箇所には、糊漆や麦漆などの漆の接着剤を使用する。4. 鞍の表面全体は、塗膜の亀裂や浮き部分の修理が終わった後、摺漆による表面の強化と艶の回復を行う。

以上の方針に従い、以下の処置を行った。A. 組紐の穴に詰まった汚れをクリーニングした。穴中から虫の死骸を発見したが、他に生存している虫は居ないとして、殺虫燻蒸は行わなかった。B. 居木の裏側にあった古い虫損部分に刻苧を充填し、穴埋めを行った。C. 前輪山形中央部、および後輪の内面にあった塗膜の亀裂及び浮きの部分に麦漆を含浸し、クランプで圧着し、きわ錆を付けて塗膜の段差をなくした。D. 居木先の欠失部分は、摺漆の後、麦漆の含浸を行い、きわ錆をつけて違和感を取り除いた。E. 紫外線で劣化した塗膜表面に摺漆を行い、表面の艶を回復し展示効果を上げた。

本研究では漆による修理方法を採用した。麦漆は接着性の高い素材であり、乾燥まで約 1 週間を要する。そのため、充填したあとに滲み出る余分な麦漆を、乾燥までの数日間にわたって確実にクリーニングすることができる。今回、合成樹脂ではなく漆での修理を選択した理由は、将来、再修理が必要になった場合でも漆の使用が可能であることを示すためである。

研究組織

加 藤 寛（修復技術部）

備 考

当研究は高知県安芸市より依頼された。

茨城県新治村武者塚古墳出土金属製品の修復研究

目 的

武者塚古墳は、7世紀代の円墳である。この古墳では毛髪や刀の鞘などの有機物がよく保存されていた。これらは保存科学部の指導で、保存環境を制御する方法で保存を行っていたが、刀が腐食したり、鞘の木材が腐朽し、漆膜が剥れたりして環境制御だけでは保存することが不可能になっていた。このようなことから本年度から3ヵ年計画で修復を実施することになった。

成 果

本年度は、銅製柄杓、銀製带状飾金具の2点の修復処置を行った。

銅製柄杓についてソックスレーを用いた脱塩処理後、ベンゾトリアゾール処理を行い錆の安定化を図った。その後、インクラックを減圧含浸して強化を行った。折損部分はエポキシ樹脂などで補修を行った。

銀製带状飾金具は機械的方法で塩化銀を除去し、脱塩処理を行った。曲がっている部分をなおした後、アクリル樹脂を含浸して強化した。補強が必要な部分には、ガラス繊維を瞬間接着剤で接着して強化した。

研究組織

青 木 繁 夫（修復技術部）

備 考

当研究は茨城県新治村より依頼された。

国宝「源氏物語絵巻」の調査研究

目 的

徳川美術館が所蔵する国宝「源氏物語絵巻」について X 線撮影などの光学的調査を行い、作品研究の基礎的知見を得ると同時に将来の修理のための情報を得ることを目的とする。

成 果

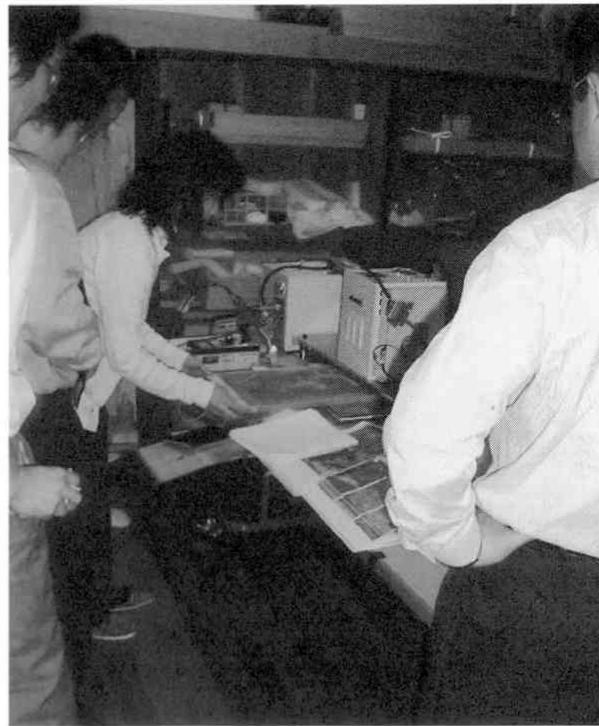
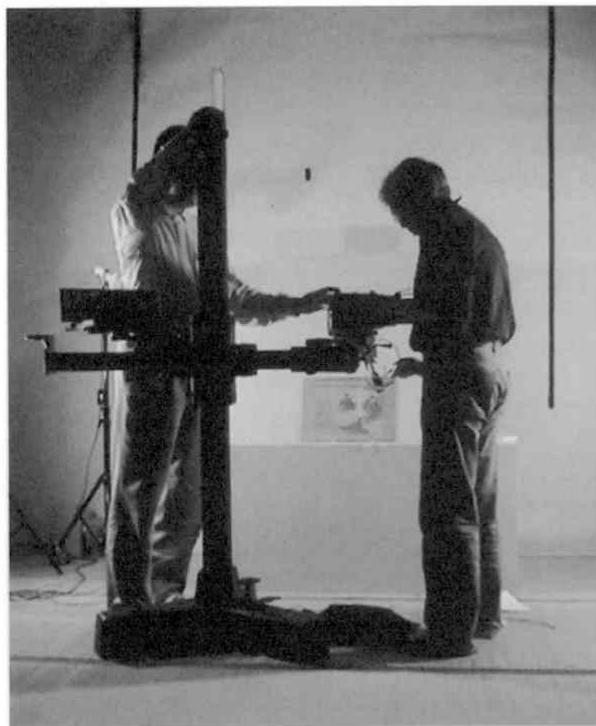
「源氏物語絵巻」十五面について、通常撮影及び赤外線写真の撮影を行い、またそのうち三面について X 線及び顕微鏡写真の撮影を、四面について蛍光 X 線による顔料の元素分析を行った。撮影及びデータの収集は、次年度も継続する。本格的なデータ解析も次年度に行うが、現段階で鉛白・朱等、従来 X 線写真等によって推定されていた顔料のいくつかを特定することができ、また画面による描方の違いを推定するためのデータを得ることができた。

研究組織

○米倉 迪夫（情報資料部）、三浦 定俊（保存科学部）、増田 勝彦（修復技術部）、早川 泰弘（保存科学部）
島尾 新、井手誠之輔、津田 徹英、野久保昌良（情報資料部）

備 考

当受託研究は財団法人徳川黎明会徳川美術館より依頼された。



源氏物語絵巻の調査撮影

5. 文化財保存修復に関する国際交流促進事業

スミソニアン研究機構との国際研究交流

目 的

アメリカのスミソニアン研究機構は、フリーア・サックラー美術館のように東洋の美術品を集めた美術館や文化財の科学的研究を行っている保存分析研究所など様々な博物館、美術館、研究所を持つ、世界最大の文化財研究機関である。その研究者と文化庁の博物館・研究所の研究者が、文化財保存に関する共同研究を行うことを目的とする。

成 果

本研究の始まりには次のような経緯がある。昭和63年(1988年)5月に文化庁の大崎仁長官とスミソニアン研究機構のアダムス長官(いずれも当時)が、文化財の保存技術について日米が提携することで合意し、奈良国立文化財研究所、東京国立博物館、国立歴史民俗博物館等の協力を得て、東京国立文化財研究所を中心に共同研究を開始した。主要な成果は奈良国立文化財研究所からの文部省科学研究費補助金研究成果報告書の中で報告される予定である。

本研究は当初より主要な研究費は科研費によってきた。平成8~10年度にも引き続き「陶磁器文化の交流に関する科学的研究」という課題で国際学術研究(共同研究)の交付内定を受けたが、研究代表者であった西川杏太郎所長(当時)が平成7年3月に退官したので、代表者を奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの沢田正昭研究指導部長に交替し研究を遂行している。

研究組織

○三浦 定俊(保存科学部)、町田 章、沢田 正昭、西村 康、巽 淳一郎、村上 隆(以上、奈良国立文化財研究所)、齋藤 孝正(文化庁)、二宮 修治(東京学芸大学)、L.V. ツェルスト、R.L. ビショップ、P.B. ヴァンディパー、L.A. コート、P.R. ジェット(以上、スミソニアン研究機構)



フリーア・サックラーギャラリーにおける共同研究会



フリーア・サックラーギャラリーの入口ロビー

文化財の保護に関する日独学術交流

目 的

日本とドイツ両国は、古い歴史と多くの文化財を持っている点だけでなく、第二次大戦の惨禍から急速に復興し高度に産業化された社会を作り上げたが、その反面、古来の文化や文化財が衰退や破壊の危機に晒されている点も共通している。本研究は互いの国の文化財保護に関する知識や経験を交換し、それぞれの国の文化財保護に資することを目的としている。

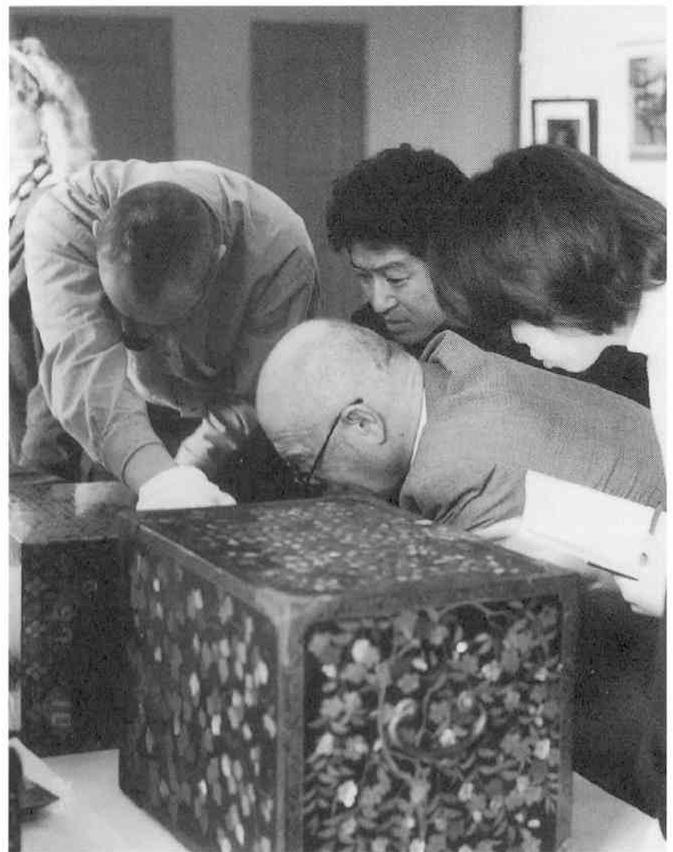
なお本研究の背景には次のような経緯がある。日本とドイツの間では、昭和49年（1974年）に科学技術に関する学術交流のための協定書が調印され、医学・物理学などを中心に日独学術交流が行われてきたが、平成2年（1990年）の第13回日独科学技術合同交流委員会においてドイツ側から「文化財保護に関する日独学術交流」の提案があり、平成4年（1992年）から交流が開始された。日本側では東京国立文化財研究所が、ドイツ側ではミュンヘンのバイエルン州立文化財研究所が、それぞれ事務局となって共同研究を行っている。また建造物の保護に関する学術交流も行っていて、ドイツ側ではヘッセン州文化財保護局が中心となっている。

成 果

ライプチヒの国際見本市において漆の保存に関するセミナー、ミュンヘンにおいてICOMOSドイツ国内委員会などとの共催による国際シンポジウムなどを開催し、この他、漆の保存に関する日独共同出版のために日本語の研究論文の翻訳などを行ったが、詳細については文部省科学研究費補助金（国際学術研究）「文化財微量試料分析法の開発」の項目を参照。

研究組織

○三浦 定俊（保存科学部）、渡邊 明義（所長）、佐野 千絵（保存科学部）、加藤 寛（修復技術部）、宮本長二郎、松本 修自（以上、国際文化財保存修復協力センター）、沢田 正昭、木村 勉（以上、奈良国立文化財研究所）、日高 薫（国立歴史民俗博物館）、斎藤 英俊（東京芸術大学）、宮腰 哲雄（明治大学）、北村 昭斎（漆芸家）、M. ペツェット、M. キュレンタール、K. ヴァルヒ（以上、バイエルン州立文化財研究所）、G. エンデルス（ヘッセン州文化財保護局）



ドイツ国内の輸出漆器調査

敦煌文化財の保存修復に関する研究協力

目 的

敦煌莫高窟の壁画の保存と修復を目的として、東京国立文化財研究所と敦煌研究院保護研究所の交流を図る。

昭和61年(1986)「莫高窟壁画、彩塑の保存・修復に関する共同研究」を開始後、平成2年(1990)12月作成の合意書に基づき、第1期共同研究として、平成3年(1991)4月から5ヵ年間で、環境・病害研究を中心に行った。現在は、平成8年(1996)からの第2期3ヵ年共同研究として、修復材料をテーマに、修復技術部が中心となって進めている。

本年度は、第2期3年目最終年度に当たる。

成 果

第2期共同研究。平成8年度(1996)～平成10年度(1998)

現地で行った壁面図作成のための測量と撮影、国内における図面化作業は、日本側を中心として行い、修復用合成樹脂の実験は、現地での実験とともに、年間2名2ヵ月間敦煌側研究者が主となり当研究所で実施している。選定した修復用合成樹脂についての物性試験を行った後、敦煌側から提供された修復材料としての泥上に合成樹脂を含浸した場合の物性などについてそれぞれの合成樹脂の比較実験を行っている。

壁画の保存と修復に必要な語句を集めた日中英の術語集の作成は、当研究所で行い、敦煌研究院側が中国語を担当協力し、今後、英語の語彙に進む計画である。この計画はさらに語彙を増やして採録することが必要とされるため、今後も続けて作業を行う予定であり、第3期においても編纂を継続する。

研究組織

宮本 長二郎(国際文化財保存修復協力センター)

国際文化財保存修復協力センター

修復技術部

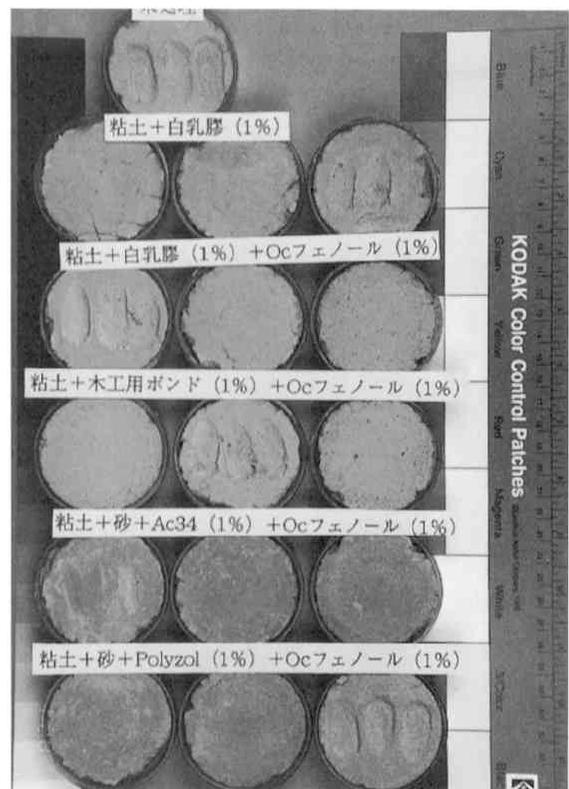
保存科学部

美術部

情報資料部



作業風景



スクラッチ試験後の敦煌土サンプル

文化財の保存修復技術に関する国際共同研究

—文化財の保存修復に用いられる新材料—

目 的

本国際共同研究は、文化財保存・修復の最先端技術について、この分野の先進研究所であるベルギー王立文化財研究所と研究を行うと同時に、実際上の問題を多く抱えつつも、東南アジアの中で比較的研究体制の整っているタイ国立博物館とも研究を行うものである。本研究は三国間の協力事業として、文化財の保存技術の向上をめざし、もって世界の文化遺産の保存に貢献することを目的とする。

成 果

タイ国において建造物、遺跡等屋外の文化財の保存、修復に用いられている合成樹脂についての調査を、タイ国政府芸術局考古部と共同で行った。特に東北部のクメール石造遺跡、アユタヤ遺跡、スコータイ遺跡、さらにはチェンマイ、ソンクラの木造寺院の調査と現場実験を行った。劣化石材、レンガ、木材の強化保存材料について実験室ならびに現場実験を行った。東南アジア地域では屋外文化財への雨水の影響が甚だ大きく、防水性を重視した処理が必要である。この点は生物劣化との関連も大きい。

ベルギー王立文化財研究所が進めている石造建造物の保存、修復に用いられている合成樹脂の物性評価法の標準化について、種々の情報を収集した。石材の組成や物理的性質によって、保存材料（含浸強化材料）の効果が大きく異なることが明らかにされており、石灰岩を中心としたヨーロッパと、凝灰岩、砂岩が多い日本との違いを考慮した試験方法の策定を行っている。

タイ国等東南アジアで、美術工芸品、考古遺物、民俗資料、古文書等、博物館、美術館の収蔵品を中心とした、屋内に保存されている文化財の保存、修復に用いられている合成樹脂についての調査を、タイ国立博物館保存部と共同で行った。東南アジアでは天然樹脂もかなり用いられており、合成樹脂との使い分けや、その根拠などについても調査を行っている。併せて、タイ国の研究者を日本に招へいし、修復用合成樹脂の物性についての研究協議を行った。

タイ国の屋外文化財、特に石造、レンガ造遺跡、建造物の保存と修復に関する国際研究セミナーをタイ国のバンコクで2日間にわたり開催した。15件の発表とディスカッションが行われた。日本からは下記の5件の発表を行った。

- ・「タイ国と日本との保存の方法論の違いについて」宮本長二郎
- ・「タイ国スコータイ遺跡のスリチュム寺院大仏の保存処置」西浦忠輝
- ・「タイ国アユタヤ遺跡におけるレンガ造建造物の塩類風化」朽津信明
- ・「タイ国の歴史的建造物における水分移動の解析」石崎武志
- ・「シリアで発掘された建造物遺跡の保存：アインダーラ神殿遺跡（BC10C）保存プロジェクト」西浦忠輝

研究組織

- 西浦 忠輝、宮本長二郎、松本 修自、朽津 信明
（以上、国際文化財保存修復協力センター）
- 石崎 武志（保存科学部）、大石不二夫（神奈川大学）



タイ国バンコクで開催された共同研究セミナー

6. 文部省科学研究費補助金による研究

文化財収蔵庫の庫内空気環境調査法の公定化のための基礎的研究

(3年計画の第3年次)

目 的

最終年度にあたる平成10年度は、アンモニア、ホルムアルデヒドに加えて主要な博物館内汚染物質であるギ酸・酢酸などのカルボン酸(有機酸と総称されることもある)を主に研究対象とし、(イ)日本画顔料への影響調査、(ロ)室内濃度の測定—精密定量と簡易定量、(ハ)吸着量の把握の3点を検討した。

成 果

(イ) 日本画顔料への影響調査

緑青、群青、鉛丹、鉛白、胡粉、黄土、水銀朱、ベンガラなどの岩絵の具、岩白などの新岩絵の具について、もっとも細かい粒度の顔料をにかわを用いた伝統技法で塗布して試験片を作り、高気中濃度・高湿度下で暴露試験をおこなった。試験温度は20~27°C、約12時間の日照のある室内で3日間放置した。酢酸蒸気は速やかに鉛丹の変色を誘起し、黒色と白色の生成物を生じた。また、液体クロマトグラフで各顔料への酢酸の吸着量を測定したところ、胡粉や黄土などの他の顔料に比べて鉛・銅を含む顔料には多量の酢酸が吸着しており、特に親和性が高いことがわかった。この結果は、酢酸の気中濃度があまり高くなくても銅や鉛を含む顔料に酢酸が濃縮する可能性があることを示しており、実際の施設での保存環境の判定には気中濃度だけではなく吸着濃度も考慮すべきであることがわかった。

(ロ) 室内濃度の測定—精密定量と簡易定量

国内数ヶ所の、あらかじめ変色試験紙法で酸性を示している博物館施設で実際の気中濃度を定量した。75%RH以下の環境で銅板に被害が生じるとされるレベル0.43 mg/m³を越えている施設が多数あり、緊急に改善が必要であることがわかった。換気やアルカリ性の吸着剤を用いた強制除去により、3ヵ月程度で改善する施設が多かったが、中には、濃度レベルの下がらない要注意の状況のところも、少数ではあるが残った。

(ハ) 吸着量の把握

吸着量をおおよそ把握する方法の一つとして、変色試験紙上のような無機イオン・ギ酸・酢酸が吸着されているか定量した。今後は、汚染物質の気中濃度と吸着量との相関性を検討する必要がある。

(ロ)・(ハ)については、「保存科学」38号で成果を公開した。(イ)については、1999年夏にフランス・リヨンで行われるICOM-CCでの発表を予定している。

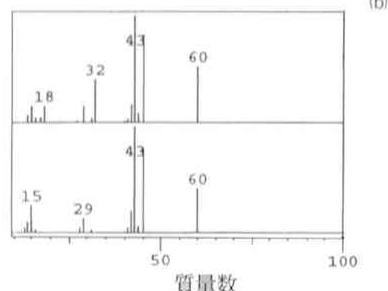
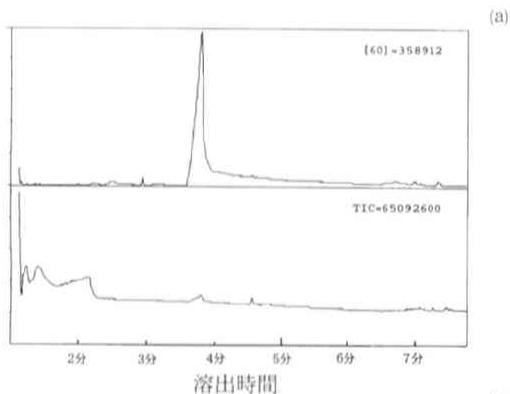
年度最後に、この3年間の研究成果報告書を作成、発刊した。

研究組織

○佐野 千絵、三浦 定俊、木川 りか、早川 泰弘、石崎 武志(以上、保存科学部)、二宮 修治(東京学芸大学)

収蔵庫内の分析例

- (a) 上段：質量数60の質量クロマトグラム、下段：TIC
(b) 上段：溶出時間3.8分のピークの質量スペクトル
下段：酢酸の質量スペクトル



日本における美術史学の成立と展開

(4年計画の第2年次)

目 的

西洋近代の学を範として明治20年前後にはじまった日本の美術史学が、その成立当初から、国家的制度や機構と密接な関係を維持し、国民が共有しうる美的価値と歴史の体系を形成してきたことを、近年の研究成果は明らかにしている。それは近代国家として西洋に認知されようとする国情を背景として、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築をめざすものであった。今日、一般的に用いられる美術史の言葉や思考が、こうした美術史学の歴史のなかで形成され、意識化されない制度として働いていることは、美術史研究者が広く認識すべき問題となっている。

本研究は、このような問題意識にたち、日本における美術史学成立期以来の資料を収集するとともに、1)美術行政・美術教育と美術史学、2)「作品」概念の成立とその社会的機能、3)日本におけるアジア美術研究、4)美術史家の美術批評と創作、5)近代の言説と日本美術史観の形成という5つの観点から美術史学の歴史に分析を加え、美術史学の今日的な課題と可能性を問い直すことを目的とする。

成 果

1. 資料収集

初期の博物館行政の中心になった町田久成（東京大学史料編纂所）、蛭川式胤（国会図書館）、田中芳男（伊勢神宮徴古館・農業館）について資料を収集した。また明治の写真家小川一真の写真集“FAIR SCENES IN THE MIKADO'S EMPIRE”“JAPANESE COSTUME BEFORE THE RESTORATION”等を購入し、明治期の美術出版資料の収集に努めた。

2. データ化

前年度に引き続き、明治期の博覧会・展覧会目録9件を入力した。また次年度の研究に備えるため、長崎・福岡・奈良・京都等の地方で開催された博覧会の関係資料の現地調査を行い（長崎県立図書館・佐賀県立図書館・福岡市立図書館・天理図書館・京都府総合資料館）、関連資料を収集、次年度におけるデータ化の準備をした。

3. 分析・報告

前年度に引き続き『京都日の出新聞』（明治18～24年）の美術及び文化財関連記事（1626件）を収集、冊子化した。また前年度の国際シンポジウム「今、日本の美術史学をふりかえる」の報告書を作成、研究分担者による以下の論文、および各セッションでの討議内容の総括（田中淳・井手誠之輔・島尾新）等を掲載した。

金子 一夫「近代日本美術教育の発端と風景画」

北澤 憲昭「日本美術史の枠組みについて」

高木 博志「日本近代の文化財保護行政と美術史の成立」

佐藤 道信「世界観の再編と歴史観の再編」

岡田 健「龍門石窟への道—岡倉天心と大村西崖」

井手誠之輔「〈境界〉美術のアイデンティティ——請来仏画研究の立場から」

山梨絵美子「日本近代洋画におけるオリエンタリズム」

長岡 龍作「〈仏像の語り方〉の境界——『貞観』『弘仁』彫刻の語り方が示すもの」

4. 研究会の開催（平成11年3月10日）

美術・美術史学の制度をめぐる問題についてより多角的に検討すべく、今年はとくに建築史の分野から研究者を招へいし、研究会と総合討議を行った。

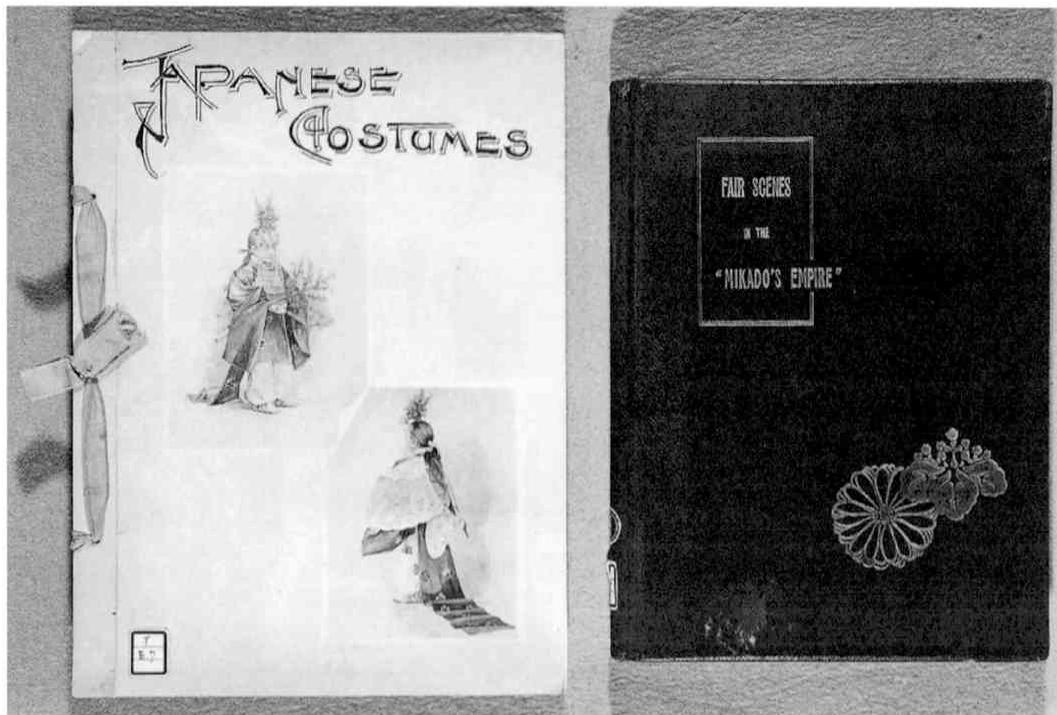
〈発表者・発表内容〉

青井 哲人「明治期の“建築史とアジア”」

中谷 礼仁「日本建築における近世と近代」

研究組織

○米倉 迪夫 (情報資料部)、中野 照男、田中 淳、山梨絵美子、岡田 健、塩谷 純 (以上、美術部)
鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎 (以上、情報資料部)
玉蟲 敏子 (調査員)、三輪 英夫 (九州大学)、金子 一夫 (茨城大学)、北澤 憲昭 (跡見女子大学)
佐藤 道信 (東京芸術大学)、安達 直哉 (東京国立博物館)、高木 博志 (京都大学)、長岡 龍作 (東北大学)
横溝 廣子 (東京国立博物館)、古田 亮 (東京国立近代美術館)



小川一写真真集

左：“JAPANESE COSTUMES BEFORE THE RESTORATION” (1895)

右：“FAIR SCENES IN THE MIKADO'S EMPIRE” (1912)

世界の文化財の保存

—わが国による国際協力体制構築のための調査・研究—

(4年計画の第1年次)

目 的

人類共通の遺産である文化財の保存に対し、この分野で進んだ技術を有するわが国の役割は大きく、諸外国からの協力依頼も数多く寄せられている。このような背景の下、かなりの数の国際協力事業が行われている。しかし文化財の種類、材質は多様であり、保存修復に携わる研究者の専門分野も広範囲にわたり所属学会も異なるなどの理由から、意見交換の場が得難く、情報交換や人的ネットワークづくりが遅れており、事業を実施する中で得られたノウハウが他の事業に有効に生かされていない現状がある。また、専門家、実務者からも事業についての情報を得たいという要請が多く出されていた。

本研究では、日本が行った、また現在行っている文化財保存国際協力事業の実態を総合的に調査、研究し、問題点を明らかにして、解決方法を検討、考察する。また、事業を行っている（または行った）研究者間の情報交換のためのネットワークを構築する。このことにより、文化財保存国際協力事業が適切かつ効率的に行えるようにあり、人類共通の貴重な文化遺産の保存に寄与すると同時に、わが国の文化面での国際貢献に役立てることが本研究の目的である。

成 果

国際文化財保存修復研究会の実施および成果の刊行

文化財保存修復国際協力事業に積極的に携わっている日本国内の専門家、実務家による「国際文化財保存修復研究会」を平成10年9月、平成11年2月の計2回実施した。研究会は専門家による国際協力事業の事例紹介と、発表に関する質疑応答・討議という形で進められ、文化財の保存修復に関する技術的問題についての議論はもちろん、事業の運営上、財政上の問題を含めた総合的な議論が行われた。また、研究会における報告・討議内容をまとめた「国際文化財保存修復研究会報告書」を2回刊行した。さらに、過去5回の研究会の場で提起された、事業に関する問題点やその解決の事例を整理し、「我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点(Ⅰ)—国際文化財保存修復研究会からの知見(1)—」(保存科学38号)にまとめた。

データベースの作成、作成環境の整備

文化財保存修復に携わる専門家・技術者について、Microsoft Accessによるデータベースを作成し、検索を可能にした。また、日本の専門家が行った文化財保存修復国際協力事業に関するデータを収集するとともに、GIS(地理情報システム)を利用した地図情報と組み合わせたデータベース構築のために、ソフトウェア・ハードウェア環境を整備した。

海外での現地調査

タイ、カンボジア、パキスタンにおいて、文化財保存修復事業についての現状や問題点のレビューを行った。

研究組織

○宮本長二郎、西浦 忠輝、松本 修自、朽津 信明(以上、国際文化財保存修復協力センター)

松本 健(国士舘大学)、工楽 善通(奈良国立文化財研究所)

古建築の保存を目的とした石材強化保存用合成樹脂の物性評価

(3年計画の第3年次)

目 的

近年の急速な化学工業の発展により、様々な新しい合成樹脂が開発され、応用されている。これら合成樹脂は文化財の保存、修復にも応用され成果を上げている。しかしながら、これらの合成樹脂は、優れた性能を有しているというものの、もともと文化財の保存（石材の強化保存）のために開発されたものではない。従って、実際に文化財の保存、修復に用いるためには、十分にその物性を評価し、状況に応じた使い方をしなければ、満足な結果が得られないばかりでなく、却って劣化を速めてしまうこともある。現在、石材の強化保存に有効とされる新しいタイプの合成樹脂が多く開発、販売されており、その使用について修理の現場で混乱をきたしているのが実状である。

古建築の保存を目的として、劣化した石材に合成樹脂を含浸し強化する技術は極めて特殊な分野であり、一般工業界にはない技術である。従って、かかる研究を行っているのは東京国立文化財研究所、奈良国立文化財研究所などごく一部の研究所のみであり、独創的な研究であるといえることができる。これらの研究所では、従来からこの点についての基礎的な研究を個々に行ってきたり、研究報告もされている。また、種々の石造文化財についての処置も実際には行われている。しかし、システマチックな総合的な研究は行われたことはない。そこで、本研究では、石造古建築の保存を目的とした石造強化保存用合成樹脂について、実験室およびフィールドでシステマチックな評価試験を行う。そしてその試験結果を解析、考察、検討し、最適な樹脂の選定と施工技術の向上を可能にする。

成 果

石造古建築の保存、修復に用いられている石材強化保存用合成樹脂および近年開発された新しい合成樹脂の基本的な物性、即ち、石材への浸透性、石材への凝集力の付与効果（強化力）、処置効果の持続性（耐久性）等についての実験室および実験フィールドによる評価試験を行ってきた。一昨年度、昨年度に行った基礎物性試験により、良好な結果が得られた数種のシリコン樹脂溶液、アクリル樹脂溶液、エポキシ樹脂溶液について、最終的な確認試験を行った。浸透性については、石材が水分を有している場合の、石材の含有水分量と樹脂溶液の浸透性との関係を詳細に調べた。強化力については、樹脂の含浸深さと凝集力改善効果との関係を綿密に調べた。また、樹脂処置による石材の気体透過性の変化について、水蒸気透過性を指標として定量的に測定した。樹脂処置効果の持続性については、様々な劣化促進処理を行って比較検討した。実験フィールドにおける現場作業性試験では、表面からの樹脂溶液の浸透性について特に詳細に調査した。以上の試験の結果、以下のような知見が得られた。現在、これらの研究成果を取りまとめ中であり、近々に研究報告書として刊行する。

- ・含水状態にある石材への合成樹脂溶液の浸透性については、溶剤タイプが水溶性タイプに比べて格段に優れている。また、粘度の影響が乾燥時より顕著となる（粘度が低いほど浸透がよいという傾向が高まる）。
- ・樹脂溶液を毛細管現象により石材表面から含浸させると、外側面において石材の強度がより高まる傾向にある。これは、溶剤の揮発に伴って樹脂分が外側面に移動するためと考えられる。この傾向は樹脂濃度の低い（溶剤分の多い）場合により顕著であり、アクリル樹脂、エポキシ樹脂の場合がこれに相当する。
- ・樹脂処置された石材の水蒸気透過性については、撥水性シリコン樹脂を含浸した場合かなり低下する。水蒸気が石材内で液体化することにより、撥水層を通過できなくなるためと考えることができる。

研究組織

○西浦 忠輝、朽津 信明、松本 修自（以上、国際文化財保存修復協力センター）

木川 りか（保存科学部）、肥塚 隆保（奈良国立文化財研究所）、大石不二夫（神奈川大学）

文化財の新たな総合的虫菌害防除対策（IPM）の システム構築に関する研究

（4年計画の第1年次）

目 的

文化財の虫やカビなどによる生物被害は全国いずれの場所においても起こり、またその進行は著しく速いため、生物被害の防除は極めて重要な問題である。しかし、このほどオゾン層の保護のため、かねてより文化財燻蒸ガスとして広範に用いられてきた臭化メチルの全廃時期が2005年に前倒しになることが決まり、これに代わる方法の導入が現場から強く要請されている。しかしながら、臭化メチルの効果を完全に代替できる適当な薬剤は、世界的にみても未だないというのが現状である。その状況のなかで、虫・カビなどの生物被害を単独に考えずに総合的な資料保存の一環としてとらえ、害虫とエコロジーに対する知識を総合的に活用してきめの細かい対応を行おうという総合防除対策（IPM (Integrated Pest Management)）に対する関心が、欧米などを中心として高まりつつある。

本研究は、このような観点から、臭化メチル燻蒸に文化財の害虫対策を全面的に頼ってきた我が国の従来の体制から、環境や人体への影響も考慮した総合的な資料保存体制への移行を目指し、具体的な対処法を検討・開発することを目指すものである。本研究では、現場のスタッフとともに、収蔵庫のデザイン、掃除の仕方、被害のモニタリングの方法、被害作品の隔離スペースの設置など具体的な項目について検討を行い、システムのモデル作りを行うことを目的としている。

成 果

初年度は、欧米等において実際に博物館等でIPM (Integrated Pest Management) の立案・実行に携わっている海外の研究者をイギリス、アメリカから招聘し、IPMについてのレビューを受けた。その結果、IPMの内容である、きめの細やかな清掃、被害のモニタリング、隔離スペースの設置と利用、被害が出たときの応急処置、スタッフの教育などの項目が現場でどのように行われているか、欧米の実例を詳しく知る一助となった。これをもとに議論を行った結果、欧米とは気候条件、および主な収蔵品の材質が異なる日本においては、欧米の方法論をそのまま取り入れることは不可能であること、従って日本においては欧米の方法論の良い点は取り入れつつも、風土に合った独自のIPMを確立していく必要があることが強く認識された。そこで、最初の取り組みとして、学芸員が被害のもととなった害虫を同定し、また的確に対処するための助けとなる日本の文化財害虫目録が必要と判断し、現在製作中である。

また、臭化メチル燻蒸のいくつかの代替法、低酸素濃度処理、二酸化炭素処理、温度処理、新規燻蒸剤や防虫・防黴剤などについて、各方法のおおまかな使い分けを一覧として整理した。これを今後の実験計画の基礎資料とし、活用していきたい。

研究組織

○三浦 定俊、木川 りか、山野 勝次、佐野 千絵、石崎 武志（以上、保存科学部）、青木 睦（国文学研究資料館・史料館）、岡部 央（群馬県立歴史博物館）、長谷川孝徳（石川県立歴史博物館）

IPMについてのワーク
ショップ風景



下張り文書剥離のための澱粉糊の老化技術

(2年計画の第1年次)

目 的

襖、屏風等の下張り文書の史的価値の認識が高まるにつれて、下張りを安全に短時間に剥離する技術が求められている。本研究は、澱粉糊の接着力の低下を利用して、下張り文書の剥離技術に応用しようとするものである。

成 果

澱粉糊に関して、60°Cと70°C、において澱粉糊は95%以上の糊化度のため、殆ど老化が起こらなかった。50°Cから0°C付近までは老化の進行が進み、さらに1時間の0°C環境温度暴露によって、約25%が老化することが判明した。しかし、低温インキュベータによって、0°C～10°Cまでの間で老化進行を測定すると、予想したような変化はなく、低温管理が容易である事が予想された。ただし、糊の含水率を少なくしていくと、老化速度が急速に低下し、実際の15%以下の含水率では、老化進行が認められなかった。

以上は、糊をガラス容器中で実験した結果であるため、実用に供するために、和紙に塗布する通常の濃度の澱粉糊を一度乾燥させ、再度湿潤状態に放置したところ、含水量は15%しか上昇せず、老化を進行させるに十分な含水率を得られなかった。冷水に浸漬することでやっと、老化進行を期待できる含水率に達することが判明した。

そこで、加熱加水による剥離の方向で、再検討することとし、刷毛で水を塗布して、低温アイロンで加熱直後に、剥離を試みたところ、剥離を順調に行うことが出来た。

塗布水分量を少なくするために、蒸気加熱により水分と熱を同時に与える条件での検討を始め、その機器を注文製作した。

来年度は、蒸気法による剥離を行い、併せて、剥離した文書の整理法についても検討を行い、実際の下張り文書の剥離と整理までを実施する。

研究組織

- 増 田 勝 彦 (修復技術部)
- 川野辺 涉 (修復技術部)
- 田良島 哲 (文化庁文化財保護部美術工芸課)
- 青 木 睦 (国文学研究資料館史料館)



屏風の下張り文書に反古が使用されている様子

極楽浄土を表象するモチーフとしての迦陵頻伽の 諸相とその文化的特質

—鳥と人からなる動物を通して見た東西文化の交流とその中国的受容—

(3年計画の第1年次)

目 的

迦陵頻伽とは、人の頭をもち、鳥の脚や翅を有する想像上の動物である。その形態はインドのキンナラや中国の鳳凰にも類似する。それらは極楽浄土の世界に棲んでおり、ときに美しい声で仏法を説き、ときに楽器を演奏するという。この想像上の動物について、絵画の分野では主に阿弥陀浄土变相や観経变相の中の図像として、工芸の分野では華鬘などの図柄として、建築の分野では斗キョウ飾りとして、そして音楽や芸能の分野では雅楽の曲目や舞踊として取り入れられてきた。

なぜ迦陵頻伽がこれほどまでに多方面の芸術の領域にわたって取り入れられたのであろうか。この問に対する答えはいまだに十分でない。その原因は迦陵頻伽に対する研究が美術史や工芸史においても音楽・芸能史においても必ずしも多くないことに由来する。

そこで、本研究は迦陵頻伽をメディアとした東西文化の交流や中国側の受容形態を明らかにすることを目的とする。そして迦陵頻伽が極楽のイメージやムードを構成するモチーフとしてはたしてきた役割や文化的特質について検討を試みたい。

成 果

3ヵ年計画の第1年次に当たる本年度は研究活動の重点を迦陵頻伽の概念の把握とそれに必要な基礎資料の収集に置いた。

1. 美術・工芸・建築に表れた迦陵頻伽

(1) 迦陵頻伽に関するデータの収集

日本・東洋美術関係文献から作例データを抽出し、作例名・制作年代・モチーフ・材質・寸法・既出図版の項目からなるリストを作成した。とくに中国における迦陵頻伽および共命鳥の作例については敦煌絵画を中心に50件ほどを網羅した。

中国作例の大半が敦煌絵画に集中することを考慮し、敦煌壁画を中心に画像データを蓄積するとともに、補助資料としての敦煌莫高窟関係年表の編集をすすめた。

また中央アジアやインドにおける関連図像のデータを収集した。

(2) 日本における迦陵頻伽像の調査

東本願寺・西本願寺・知恩院・方広寺の建築構造につくられた迦陵頻伽像を調査した。これらの建築意匠には飛天・迦陵頻伽・鳳凰が一定の序列をもって表現されるという傾向が認められた。

(3) 中国の迦陵頻伽像に対する分析

中国福建省泉州の開元寺には大雄宝殿と甘露戒壇という2つの大殿があり、その斗キョウに迦陵頻伽や飛天が施されていることが知られていた。これらに対する図像解釈はかねてよりすすめられてきた研究であったが、さらに考察を加えて、その研究成果の一部は泉州糸操り人形劇フォーラム(1998年10月8日 於東京ウィメンズ・プラザ)および『泉州糸操り人形劇』プログラムや『自然と文化』59号において公表した。

2. 音楽・芸能に表れた迦陵頻伽

(1) 舞楽迦陵頻に関するデータの収集

日本音楽・芸能関係文献から迦陵頻の舞に関する記述を抽出し、文字テキストデータを蓄積した。舞楽迦陵頻を仏に奉納するという仏寺儀礼に関する映像記録を収集し、それについて解析を行った。

(2) 美術資料にみえる楽器の調査

京都所在の近世寺院建築を調査し、迦陵頻伽の持物として表現された楽器を特定した。

組 織

○勝木言一郎(情報資料部)、樋口 昭(埼玉大学)、服部 等作(神戸芸術工科大学)

地方に残る雅楽・能楽の古楽器調査

(3年計画の第2年次)

目 的

地方の寺社には未調査の楽器が多く残され、最良とは言えない保存状況の中で朽ち果てようとしている。そのなかには従来知られていなかった特異な形態のものもあり、今日の規格に整う以前の過渡期の姿を留めたものも少なくない。本研究では鼓胴を対象を絞り、雅楽から能楽に至る楽器の変遷過程を明らかにすることを目的とする。

成 果

今年度も、昨年度に引き続き地方の寺社に残された鼓胴の実地調査をおこなった。

なかでも興味深かったのは飛騨古川の荒城神社所蔵の鼓胴二点である。この研究グループでは雅楽から能楽の大鼓胴に至る過渡期の遺物を何点か発見してきたが、今回の発見でまたひとつ過渡期の例が増えたことになる。ただ、奈良県石上神宮や香川県神谷神社が所蔵する鼓胴は、素材や形態、寸法がほとんど一致していたため、過渡期の楽器と言えどもある程度規格が固定していた、と考えていたのだが、この仮説を多少訂正しなければならなくなった。荒城神社所蔵の鼓胴は、今まで発見した過渡期の鼓胴とは寸法や形態が少々異なっていたのである。一点はほとんど同じだったが、もう一点は寸法も大きく、棹の中央に太い帯を三本突出させ、雅楽鼓の面影をより濃厚に残していた。当然の事だが、過渡期の作例が何段階かあったという結論になるだろう。

次に、興味深かったのは、細見美術館蔵の鼓胴である。これは形態、文様ともに教王護国寺蔵の鼓胴とほとんど同じであった。同一作者の可能性が考えられる。

また、実際に法量の計測は行えなかったが、五島美術館で行われた「益田鈍翁展」に出品された「伎楽鼓胴」は、形態や寸法の点で想像を絶する作例であった。従来の音楽史では報告されていなかった四鼓の実例、と考えられる。

今年度は能楽の大鼓胴の調査も並行して行い、名古屋能楽堂主催「大倉家伝来名品展」、早稲田大学演劇博物館主催「川崎九淵展」の鼓胴、神戸市博物館所蔵の「鉄砲蒔絵大鼓胴」を調査した。

研究組織

○高桑いづみ(芸能部)、加藤 寛(修復技術部)、勝木言一郎(情報資料部)、樋口 昭(埼玉大学教育学部)

写真2コマ



飛騨荒城神社蔵の鼓胴2点



京都府日吉町多治神社蔵の鼓胴

多孔質材料の凍結・融解による劣化機構の解明とその防止対策

(2年計画の第2年次)

目 的

石造文化財として知られる石仏や磨崖仏が大谷石などの多孔質の岩石で作られていて、凍結・融解作用のもとで著しく劣化することが知られている。この現象を詳しく調べて見ると、石材の内部で水分が移動し、温度の低い部分で氷晶析出が起り、石材を劣化させる大きな要因となっていることがわかる。研究目的は、多孔質体材料を一定の温度勾配、凍結速度のもとで凍結し、氷晶析出過程の観察を行い、劣化機構のメカニズムを明らかにすることである。また、材料の孔隙径分布や不凍水量の温度依存性などの物性値を測定し、材料の物性値と劣化特性の関係を明らかにする。

成 果

1. 石造文化財及びレンガ造建造物の凍結劣化に関して、重要文化財に指定されている旧旭川偕行社の煙突のレンガ、福島県柳津の銀精練所跡のレンガ煙突などで現地調査を行った。それぞれの文化財において、多孔質材料が、凍結融解の繰り返しにより激しく劣化していることが分かった。これらの現地調査から、冬季間の水分状況が凍結劣化の機構と防止対策を考える上で、重要であることが分かった。

2. 凍結劣化現象の基本的なメカニズムは、凍上現象である。この凍上現象は、多孔質材料が凍結する際に、凍結面へ水が吸い寄せられ、そこで氷晶析出することにより膨張し、この膨張圧が多孔質材料を劣化させる。このメカニズムを明らかにするため、ガラスビーズを用いた凍結実験を行い、温度条件と氷晶析出速度との関係を求め、結晶成長理論をもとにした凍上モデルとの比較を行った。

3. 石造文化財を構成する大谷石などの多孔質材料は、氷晶圧が、岩石の引張強度を上回ったときに、クラックは入り、破壊すると考えられる。この過程は、熱力学的には、クラペイロンの相平衡の式から説明される。大谷石を用いた凍結実験(図1)では、氷晶析出過程を顕微鏡で観察し(図2)、温度条件を精度良く測定することによって実験結果と熱力学理論との比較を行い、氷晶析出過程のモデルを提案した。この研究成果は、パリで開催された国際冷凍学会で発表した。

4. 塩類風化現象は、石材表面から水分が蒸発する際に、塩類が析出し、その析出圧で多孔質体が劣化すると考えられている。この現象は、凍結劣化と物理的な現象としては共通性があり、水分移動、塩分移動、熱移動を表現する偏微分方程式は類似している。現在までの研究成果は、タイの歴史的レンガ建造物などの塩類風化による劣化機構、保存対策を考える上で有効であり、今後は、塩類風化現象へも研究範囲を拡大していく予定である。

研究組織

○石 崎 武 志 (保存科学部)

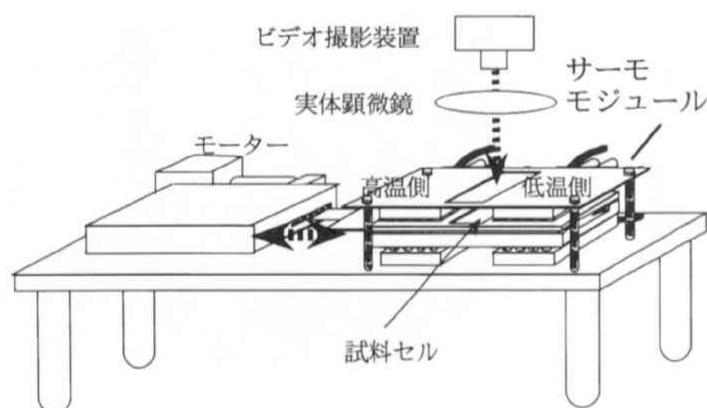


図1 実験装置の模式図

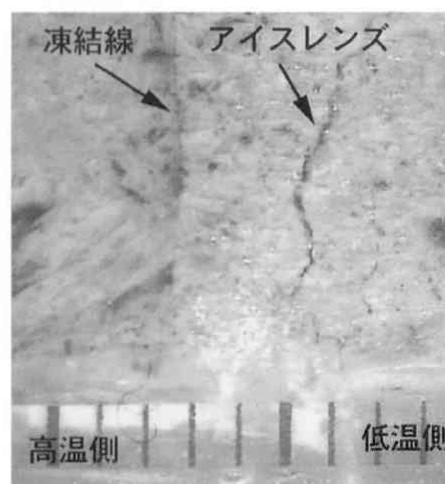


図2 試料中に生じた氷晶析出によるクラック

新史料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ

—大神楽から花祭りへ—

(3年計画の第1年次)

目 的

花祭りに関する文書史料(祭文・呪文類)を所蔵している7集落(愛知県北設楽郡豊根村4・東栄町3)の新史料を翻刻、その内容を分析して、それらが花祭り次第中どのような目的で使用されていたかを追究する。そのことによって、江戸時代末期に中断した数集落集合の式年祭である大神楽から各集落の花祭りへと定着した過程を明らかにし、花祭りの芸能史的な位置づけをおこなうことを目的とする。

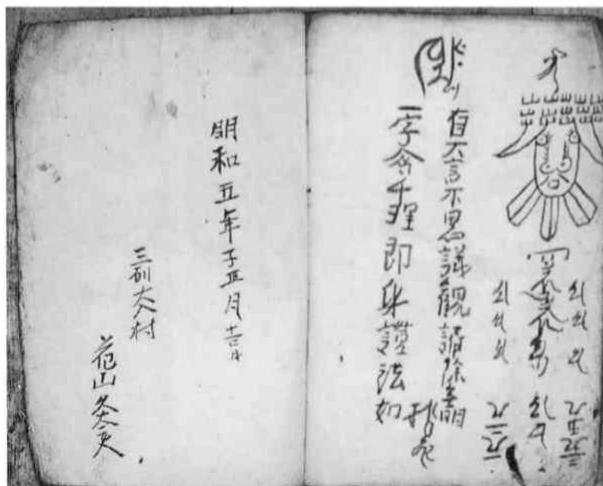
成 果

初年度である今年度は、桜井弘人氏の協力を得て東栄町小林・御園・大入の重要と思われる古文書約30点の撮影による収集を行った。また、武井正弘氏・伊藤善夫氏の協力を得て収集史料の翻刻・註釈・解題のための研究会と作業を進めている。現在翻刻しつつある史料は、大入文書の「御釜神祭文」「宝数エ(土公神祭文)」「道場勧請次第」「五臓五行祓・地五行祓」の4点、御園文書の「如是我聞」「月拜之大事」「仏頂尊勝陀羅尼」「理趣分私記」の4点、合計8点である。

古文書調査と併行して、東栄町各地・豊根村各地の現行花祭り調査、過去の花祭り・大神楽に関する伝承について聞き取り調査を実施し、収集済みの古文書類や聞き取り調査による資料を基に、大神楽から花祭りへ伝承された芸態に関する論考をまとめつつある。また、高知県香美郡物部村のいざなぎ流御祈禱神楽の調査を実施し、湯立てによる祈禱を中心とした神楽の比較研究のための資料収集を行った。

研究組織

○中 村 茂 子 (芸能部)



大入文書「諸符書秘伝」(愛知県北設楽郡東栄町)



花祭り「宝の舞」(愛知県北設楽郡上黒川)

古代東アジアにおける青銅器の変遷に関する 考古学的・自然科学的研究

(3年計画の第3年次)

目 的

古来から日本は中国から歴史の流れと共に多くのことを学んできた。いわば、日本文化の源流は中国文化にある。中国文化の発展の中で一つの重要な足跡は銅器文化である。銅器文化の発展を理解することは中国文化の本質に迫ることであり、国際学術研究として、有意義である。この種の研究は従来は考古学の分野で行なわれてきたが、本研究では自然科学的な方法および理解を加えようとしている。そして、今までとは異なった視野を考古学へ導入し、歴史の流れに関してより深い理解を進めようとしている。

成 果

本年度は西周時代資料に関して遺跡から出土した銅製資料約70点について鉛同位体比を測定することが出来た。また日本に伝わっている商時代・西周時代の青銅器約50点に関して、鉛同位体比を測定することが出来た。得られた成果は銅器生産と発展段階を如実に示すこととなり、非常に重要な結果であった。これらを総合して、科学研究費補助金成果報告書(pp.300)を作成し、提出した。

中国から研究者を招請し、鉛同位体比測定、および早期中国青銅器の発展に関して、討議を行った。3ヵ月に亘り、測定・討議を続けたことは学術交流として有意義であった。日本の研究者が北京・安陽・鄭州を訪れ、各所の研究グループと交流し、またそれぞれの地域における遺跡を見学した。特に鄭州では鄭州商城の発掘現場を見学でき、また商時代初期と思われる偃師商城の発掘現場を見学できた。普通には見せてもらえない発掘現場は貴重な資料であった。今後の研究に大きな成果であった。

研究組織

- 平尾 良光、早川 泰弘 (以上、保存科学部)
- 井上 洋一、高浜 秀 (以上、東京国立博物館)
- Tom Chase (フリーア美術館)
- 金 正耀、鄭 光貴 (以上、中国社会科学院)



新鄭発掘現場



出土銅製品

文化財の微量試料分析法の開発

(3年計画の第3年次)

目 的

文化財に関する近年の研究では、保存や修復のためだけでなく歴史的研究のためにも、材質や製作技法などに関する自然科学的研究が必須となっていて、様々な分野の研究者が総合的に文化財に取り組むことが必要となっている。本研究においては、対象とする文化財の歴史的・文化的研究とその課題をふまえた上で、無機質・有機質さまざまな文化財を、極微量ないし非破壊で精度良く正確に分析する手法を、ドイツの文化財研究機関との共同研究を通じて開発することを目的とした。

成 果

本年度は、日本国内でこれまで調査を行っていない東北地域を中心に漆の分析試料を収集し併せて技法に関する調査を行い、ドイツ国内ではベルリンやゴータ、ブラウンシュバイクの博物館などにある輸出漆器やイミテーションの調査を行った。またこのほか、関連の研究者を通じて数多くの輸出漆器の試料を収集して分析するとともに、日本国内では沖縄の琉球漆器の調査や分析を行った。その結果、ポルトガルで得た17世紀前後の資料の中には日本・中国産、ベトナム・台湾産、タイ・ビルマ産の3種の漆をそれぞれ使用した資料のほかに、ヨーロッパのラッカーを使用した資料もあるなど、東西文化交流史の観点から見てきわめて興味深い結果が得られた。

今年度は最終年度として、10月にライプツィヒの国際会議、1月に研究成果公開費による大学と科学シンポジウム「海を渡った文化財」、3月にミュンヘンで日独共同国際シンポジウム「東アジアとヨーロッパのラッカー技術」など多くの機会を利用して成果の発表を行った。特に3月の日独共同国際シンポジウムでは世界18カ国から350名もの漆やラッカーに関する関係者が集まって、世界各地に所在する輸出漆器やラッカーについて研究発表・討議を行い、これまでに開催されたこの関係の会議としては、最大のものとなった。本研究に対する国際的な関心の高さを示すものであると考えられた。このほか、日独共同出版として研究報告書(英語、ドイツ語)を編集中である。

研究組織

○三浦 定俊、佐野 千絵(以上、保存科学部)、渡邊 明義(所長)、加藤 寛(修復技術部)、沢田 正昭(奈良国立文化財研究所)、日高 薫(国立歴史民俗博物館)、竹内奈美子(東京国立博物館)、宮腰 哲雄(明治大学)、岡田 文男(京都造形芸術大学)、島口 慶一(石川県輪島漆芸美術館)、北村 昭斎、室瀬 和美(以上、漆芸家)、M・ベツェット、M・キューレントール、K・ヴァルヒ(以上、バイエルン州立文化財研究所)、C・ゼゲバード(国立金属材料研究所)、E・キューレントール(修復技術者)



国際シンポジウム「東アジアとヨーロッパのラッカー」
(1999年3月、ミュンヘン)

タイ国アユタヤ遺跡の保存修復に関する研究

(3年計画の第1年次)

目 的

人類 共通の遺産である文化財の保存のための国際協力を行うについては、十分な調査、研究と当事国との緊密な連携が必要不可欠である。本研究は、世界を代表するレンガ造遺跡であり、ユネスコの世界文化遺産に登録されているアユタヤ遺跡の保存修復について、日・タイ共同で研究し、その恒久的な保存のための国際協力事業の推進に資することを目的とするものである。

成 果

本年度行った調査研究活動は下記の通りである。

- ・アユタヤ遺跡において、日・タイ共同で協議を行い、具体的な調査研究の進め方を決定した。実験サイトとして、マハタート寺院とラチャブラナ寺院を選定した。
- ・ラチャブラナ寺院に無電源（電池稼働）自動環境計測システムを設置し、計測を開始した。計測項目は大気温度、大気湿度、雨量、日照強度、レンガ表面温度、レンガ内部温度の6項目で、1時間毎（24回/日）の計測データをデータ集積機のメモリーに保存している。
- ・マハタート寺院近くの一角にシミュレーション実験用のレンガ造柱を設置した。1柱はレンガ積みのものであり、もう1柱はそれにモルタル被覆したものである。これら構築柱の含有水分量の測定を開始した。また併せて、土中水分量および地下水位の測定も開始した。
- ・マハタート寺院の一角の特にレンガの劣化の激しい部分について、詳細な観察と含有水分の変化に関する測定を開始した。
- ・アユタヤ遺跡において今までに行われた保存修復対策についての資料収集と追跡調査を行っている。
- ・関連調査として、スコータイ遺跡および東北部のクメール石造遺跡の劣化と保存修復についての調査も行った。また併せて、関連の文献資料等の収集も行っている。

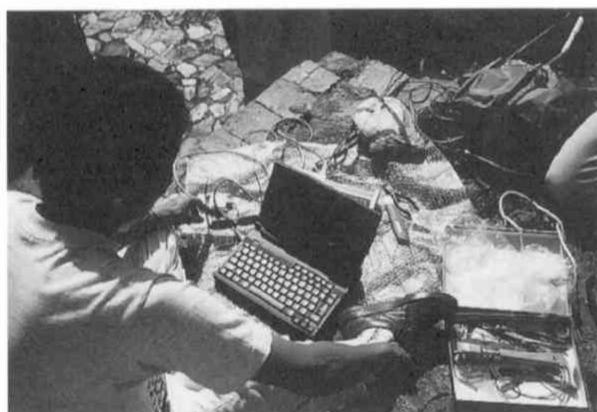
以上の調査研究により、アユタヤ遺跡のレンガ造遺構の劣化は主に雨水によるものであり、雨水に対する対策が、保存の基本であることが明らかになりつつある。来年度以降はこの線に沿って、より具体的な調査、研究を進める予定である。

研究組織

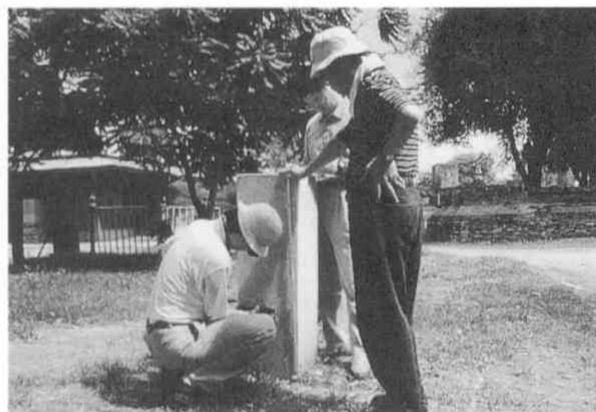
○宮本長二郎、西浦 忠輝、朽津 信明、松本 修自（以上、国際文化財保存修復協力センター）

石崎 武志（保存科学部）、今津 節生（奈良県立橿原考古学研究所）

チラボン・アラニャナク、シリチャイ・ワンチャレオントラクル（以上、タイ国立博物館）



ラチャブラナ寺院における環境計測



遺跡地域内に立てられた実験用柱での実験

絹などのたんぱく質材質試料の劣化状態の Py-GC-MS による評価手法の確立

目 的

Py-GC-MS 法は特に前処理が必要ないため微量の試料で十分に構造や物性研究、同定が可能であり、文化財のようなその性質上サンプリングが容易でない試料に対して大変有効な手法である。本研究では歴史資料への応用の前に必要な各種の検討を行うとともに、特に劣化の研究の上で検討を必要とするチロシン、セリン、トリプトファンのアミノ酸組成比を簡単に求める方法を検討する。その基礎的な研究の成果を歴史資料へ応用し、考古遺物から江戸期の小袖まで、その素材の同定とともに劣化状態を検討し、Py-GC-MS 法を用いた劣化状態の評価法の開発を行う。

成 果

分析法として確立させるためには、熱分解温度や試料量などの熱分解条件の他、カラム種類や分離ガス種類などがスクロマトグラフ分析条件などを検討し、再現性・精度を確認する必要がある、現在はこれらの基礎的な条件の検討をおこなっている。

(1) 染色処理後の絹布の Py-GC-MS 法分析条件の検討

Py-GC-MS 法によるアミノ酸分析の定量性と再現性について熱分解温度を変化させて検討したが、芳香族アミノ酸と飽和アミノ酸の熱分解特性が大きく異なり、いずれのアミノ酸についても同時に十分な再現性・定量性のある温度帯は認められなかった。絹タンパク質については、加水分解を促進させる反応熱分解などの他の手法も取り入れて分析すべきであることがわかった。

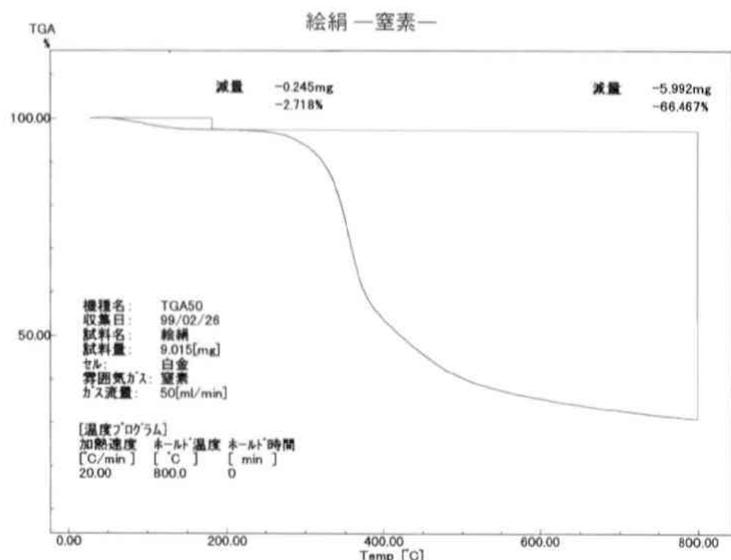
(2) 歴史資料の収集と分析

修復工房の協力により、わずかながら収集できた試料について Py-GC-MS 法で分析を行った（鎌倉期または南北朝時代、室町時代、鎌倉～室町時代、江戸時代、江戸末期のいずれも絹本および江戸期の黒染衣裳の 6 点）。古い試料ほど TIC チャートに熱分解ピークが多く現れ、特に低温での熱分解で芳香族アミノ酸由来の熱分解生成物が他種類検討できた。飽和アミノ酸についても経年劣化で切断が進みつつあることがわかった。

これまでの研究成果を The Fiber Society 全体会議 “International Conference on Advances in Fiber and Textile Science and Technology”、(1997 年 4 月、Mulhouse) にて発表した。また、文化財保存修復学会年次大会 (1997 年 6 月、山形) において、「熱分解—ガスクロマトグラフ/質量分析法を用いた絹の劣化状態の検討」の題目でポスター発表した。

研究組織

- 佐野 千絵 (保存科学部)、メアリー・アン・ベッカー (外国人特別研究員)



絵絹の窒素気流中での熱重量減量測定結果

7. その他の共同研究

シリア・アインダーラ神殿遺跡保存修復プロジェクト

目 的

アイン・ダーラ神殿遺跡は、アレッポの北西約 37 km にある石造遺跡で、紀元前 10 世紀に遡る重要な遺跡である。この遺跡を特徴づけるのは、玄武岩でできた神殿の外壁にくまなく彫られたスフィンクスとライオン像のレリーフや大理石の足跡石などであり、歴史のみならず美術的にも極めて価値の高いものである。しかし、これらの石彫物は、発掘直後から損傷が著しく、層状、ブロック状に剥離、剥落してその姿が失われつつあった。また、床面の不同沈下等があった。そこで、その保存、修復を行うために、1994 年に日本とシリアの共同プロジェクトが組織され、5 年計画で調査、研究および実際の保存、修復処置を行ってきた。この日本・シリア共同保存修復プロジェクトは、中近東地域における発掘後の遺跡の保存修復プロジェクトとして国際的にも注目を集めている。尚、本事業は住友財団「海外の文化財維持・修復事業助成」によっている。

成 果

1998 年度は 1994 年度から 5 年計画で行った本プロジェクトの最終年度である。レリーフの保存修復処置、大型石彫像の修復、不同沈下した床の嵩上げ、崩落断片の原位置同定と再接合、テル（遺跡のある丘）の補強、周辺整備等の再確認と仕上げを中心に現場作業を行った。また、環境計測データの回収と解析を行った。最終的に、プロジェクト終了後も継続して行うべき保存、修復、整備の内容と方法についての協議を、シリア政府考古総局との間で行った。本プロジェクトの総括報告書の作成に向けて資料の収集、整理を行った。

研究組織

○西浦 忠輝、朽津 信明（以上、国際文化財保存修復協力センター）、井上 洋一（東京国立博物館）、海老澤孝雄（榊ざ・エトス）、三輪 嘉六（文化庁）、ワヒード・ハイヤータ、サーメル・ハフォール（以上、アレッポ博物館）、山内奈美子



遺跡正面石彫レリーフ



足跡石



石彫ライオン像



テルの補強整備

3. 個人の研究業績

凡 例

氏 名

- (1) 公刊図書
- (2) 学術雑誌
- (3) 学会発表
- (4) 講演、研究会発表
- (5) 解説、翻訳

青 木 繁 夫 AOKI Shigeo (修復技術部)

- (1) 石ノ形古墳出土金属遺物の修復について(青木・犬竹)「石ノ形古墳」185-194 99.3
- (2) Influence of Air Pollution on the Great Buddha in Kamakura (Shigeo AOKI, Sadatoshi MIURA, Wataru KAWANOBE, Shirou MATUDA)「Metal Restoration」33-
- (2) 東京国立文化財研究所所蔵 X 線フィルムデータベースの構築(小倉、青木、三浦)「保存科学」38号 172-186 99.3
- (2) イギリス・ドイツの「近代の文化遺産」を訪ねて「月刊文化財」425号 51-55 99.2
- (4) 「保存科学と埋蔵文化財」栃木県埋蔵文化財センター研修会 98.06.26
- (4) 「館山市大寺山古墳出土遺物の保存」(森恭、青木)「日本文化財科学会研究大会特別講演」98.07.18
- (4) 「博物館のための保存科学」千葉県博物館協会研修 98.07.22
- (4) 「鎌倉大仏における環境汚染物質の影響」韓国保存学会研究大会特別講演 98.09.26
- (4) 「文化財の修復と合成樹脂」修理技術者講習会 98.10.14

石 井 倫 子 ISHII Tomoko (芸能部)

- (1) 『風流能の時代—金春禪鳳とその周辺—』東京大学出版会 98.9
- (1) 能・狂言鑑賞入門『日本の伝統芸能』放送用テキスト 日本放送出版協会 98.4
- (2) 作品研究「清経」『観世』65巻8号 32-38 98.8
- (2) 男装の舞姫・白拍子 第九回能劇の座公演パンフレット 98.10

石 崎 武 志 ISHIZAKI Takeshi (保存科学部)

- (1) 多孔質材料の凍結・融解による劣化機構の解明と防止対策、平成9、10年度科学研究費補助金研究成果報告書 pp.65 99.3
- (2) タイ国アユタヤの歴史的レンガ構造物中の水分移動解析(石崎・朽津・西浦・シムネック)「保存科学」38号 154-163 99.3
- (2) タイ国スコータイ遺跡のスリ・チュム寺院大仏の保存修復(1)(西浦・石崎・チラボン・キッチャ)「保存科学」38号 146-153 99.3
- (2) ガラスビーズ中におけるアイスレンズ形成過程の顕微鏡観察(武藤・渡辺・石崎・溝口)、農業土木学会論文集 194 97-103 98.4
- (2) Microscopic Observation of Ice Lensing and Frost Heaves in Glass Beads (Muto, Watanabe, Ishizaki, Mizoguchi) Proc. 7th International Conference on Permafrost 783-787 98.6
- (3) 多孔質材料の凍結劣化過程の微視的観察 日本文化財科学会第15回大会 98.7.18
- (3) 凍結しつつある大谷石中の水晶析出過程 1998年度日本雪氷学会全国大会 98.10.13
- (3) Experimental studies of frost deterioration process of porous materials during freezing, International Conference on Refrigeration, Paris 98.10.22

- (3) タイのレンガ建造物中の水分、塩分移動の解析、第2回岩石の風化に関するシンポジウム 京都大学防災研究所 99.2.20
- (3) タイ国スコータイ遺跡のスリチュム寺院大仏の保存修復(1)(西浦・石崎・チラボン・キッチャ) 第20回文化財保存修復学会大会 98.6.6
- (3) 示差熱量計を用いた細孔中における水の融点測定(内田・海老沼・石崎) 1998年度日本雪氷学会全国大会 98.10.13
- (3) タイ・アユタヤ遺跡の劣化と保存に関する応用地質学的調査(朽津・石崎・西浦) 日本応用地質学会平成10年度研究発表会 98.10.21
- (3) Dissociation pressure measurements of methane hydrates in porous media. (Uchida, Ebinuma, Ishizaki) Symposium of Japan National Oil Cooperation 98.10
- (4) 石造文化財の劣化に対する多孔質内の水分・塩分移動の影響、研究会「石造文化財、レンガ建造物の凍結劣化と塩類風化のメカニズム」 98.11.17
- (4) 石造文化財中の塩分、水分移動シミュレーション、研究会「石造文化財、レンガ建造物の凍結劣化と塩類風化のメカニズム」 98.11.17
- (4) タイ国アユタヤ遺跡におけるレンガの劣化現象(朽津・石崎) 平成10年度文化財保存修復研究協議会 99.1.14
- (4) 気候環境変動がアジアの遺跡に与える影響について、研究会「地球規模の気候変動と文化財の保存」 99.2.5
- (4) 文化財の保存に関する材料凍結の諸問題 日本雪氷学会 凍土分科会 98.10.13
- (4) 梱包の科学 文化庁 指定文化財(美術工芸品) 企画・展示セミナー 98.11.10
- (4) Analysis of Water Regime in Historical Brick Buildings and Monuments in Thailand. (Ishizaki, Kuchitsu, Nishiura) Thai-Japan Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand, Bangkok 99.3.8
- (4) Salt weathering of the brick monuments in Ayutthaya, Thailand. (Kuchitsu, Ishizaki, Nishiura) Thai-Japan Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand, Bangkok 99.3.8
- (5) 文化財科学と雪氷学との接点 日本雪氷学会 関東・中部・西日本支部ニュース 50号 98.10

井手 誠之輔 IDE Seinosuke (情報資料部)

- (1) 『南宋の絵画』 故宮博物院(構成・概説)「近景へのまなざし—杭州をめぐる絵画」 日本放送出版協会 98.5
- (1) 『五代・北宋・遼・西夏』 世界美術大全集・東洋編第5巻(共同執筆)「西夏の絵画」 小学館 98.12
- (2) 「境界」美術のアイデンティティ—請求仏画研究の立場から 第21回文化財の保存に関する国際研究集会報告書 99.3
- (2) 第二セッション報告—内なる他者としての東アジア 第21回文化財の保存に関する国際研究集会報告書 99.3
- (3) 明時代の仏伝図—鹿児島県歴史資料センター黎明館本をめぐる— 美術部・情報資料部研究会 98.6.17
- (4) 中国文人文化への接近—入元僧以亨得謙と禅林の美術— 第32回美術部・情報資料部公開学術講座(東京都美術館講堂) 98.10.21
- (5) 南宋絵画解説 29点 『南宋の絵画』 故宮博物院・日本放送出版協会 98.5
- (5) 西夏絵画解説 10点 『五代・北宋・遼・西夏』 世界美術大全集・東洋編第5巻 小学館 98.12
- (5) 五代・北宋絵画解説 12点 『五代・北宋・遼・西夏』 世界美術大全集・東洋編第5巻 小学館 98.12

岡田 健 OKADA Ken (美術部)

- (2) 東寺毘沙門天像—羅城門安置説と造立年代に関する考察—(下)『美術研究』 371号 99.3
- (2) 龍門石窟への足跡—岡倉天心と大村西崖 第21回文化財の保存に関する国際研究集会報告書 99.3
- (4) 日本で国宝となった中国の仏像—京都・清涼寺釈迦如来像の伝来とその信仰— 文京区区民大学講座「日本の国宝・仏像へのいざない」 文京区茗台生涯学習館 98.11.18
- (5) 兜跋毘沙門天立像/毘沙門天像のひろがり(京都・教王護国寺)『週刊朝日百科 日本の国宝』 65 98.5

勝 木 言 一 郎 KATSUKI Gen'ichiro (情報資料部)

- (2) 泉州開元寺における飛天と迦陵頻伽 『自然と文化』 59号 99.1.15
- (2) 二つの壁画を通して考えるホータン王のファッション戦略 大東文化大学国際関係学部・現代アジア研究所編『ASIA 21 基礎教材編』 No.8 99.3
- (3) 泉州における地獄と極楽のイメージ 泉州糸操り人形劇フォーラム 99.10.8
- (4) 大英博物館事情 ミュージアム利用研究会 98.6.5
- (5) 海のシルクロード泉州で出会った飛天と迦陵頻伽のハーモニー 『泉州糸操り人形劇』 プログラム 98.10.1

加 藤 寛 KATO Hiroshi (修復技術部)

- (2) 漆芸作品における修理方法についての一考察 「文化財の微量分析方法の開発」
- (2) 膠と漆による輸出漆器の修理について (加藤・川野邊・田口・五味) 「保存科学」38号 39-47 99.3
- (2) 塗料から見た輸出漆器の受容について 「保存科学」38号 60-67 99.3
- (2) 漆工品の螺鈿技法の研究―貝の整形技法とその工具について(1)― (加藤・五味) 「保存科学」38号 68-81 99.3
- (2) Restoration of Urushiware for Export with Animal Glue and Urushi (日独学術交流報告書)
- (2) Glossary of Urushi Terms (日独学術交流報告書)
- (2) Historical Study of the Restoration of Urushiware (日独学術交流報告書)
- (3) Restoration of Urushiware for Export with Animal Glue and Urushi (ドイツ連邦共和国ライプチヒ、国際文化財保存修復メッセ 98.10.21)
- (4) 海外で漆器を探す (第13回「大学と科学」シンポジウム 海を渡った文化財 99.1.30)
- (4) 茶道の漆器について (日本茶道会 98.6.19)
- (4) ピーボデイ・エセックス博物館所蔵の輸出漆器 (大田区教育委員会主催 98.5.20)
- (5) 蒔絵絵馬 (奥州藤原一族の工芸品に関する総合研究・東北大学文学部)

鎌 倉 恵 子 KAMAKURA Keiko (芸能部)

- (2) 東京国立文化財研究所芸能部所蔵 杵屋栄二旧蔵 歌舞伎附帳写真目録 (共編) 『芸能の科学』27 164-204 99.3
- (4) 近松門左衛門の浄瑠璃 芸能部夏期学術講座 98.7.7~7.10
- (5) 討入りにかかわった父二人 国立劇場文楽公演筋書 98.12
- (5) 日本の傀儡戯―江戸時代(17~19世紀中葉)的舞台技芸 『偶戯乾坤 1999 雲林国際偶戯節活動專輯』 29-34 99.3
- (5) 歌舞伎の幼少期 野郎歌舞伎の時代 『シアター・オリンピックス手帖 別冊劇場文化』 70-79 99.3

川 野 邊 渉 KAWANOBE Wataru (修復技術部)

- (2) 膠と漆による輸出漆器の修理について (加藤・川野邊・田口・五味) 「保存科学」38号 39-47 99.3
- (2) (旧)岩崎家住宅壁紙調査報告(Ⅰ) (井口・川野邊・朽津・大川) 「保存科学」38号 124-136 99.3
- (3) 九州装飾古墳の緑と青について (朽津・川野邊) 文化財保存修復学会第20回大会 98.6.7
- (4) 接着の科学 (修理技術者講習会・文化庁美術工芸課) 98.10.14
- (4) 人工木材について (主任技術者研修会・文化財建造物保存技術協会) 98.10.21
- (4) 文化財修理と自然科学 (国宝修理者研修会・国宝修理装こう師連盟) 98.11.20
- (5) 近代の文化遺産の保存と活用 月刊文化財 (425) 9-23 99.2

木 川 り か KIGAWA Rika (保存科学部)

- (2) 各種防虫剤、防黴剤、燻蒸剤等の顔料・金属に及ぼす影響 (木川・宮澤・小泉・佐野・三浦・後出・木村・富田) 「文化財保存修復学会誌」43 12-21 99.3
- (2) 窒素等不活性ガスによる文化財殺虫処理装置の試作と処理例 (木川・山野・三浦・前川) 「保存科学」38号

I-8 99.3

- (2) 低酸素濃度殺虫法—処理温度と殺虫効果の検討 (木川・永山・山野) 「保存科学」38号 9-14 99.3
- (2) 八幡宮来宮神社社殿修理工事報告書、生物科学調査 『八幡宮来宮神社社殿修理工事報告書』 p.61 99.3
- (3) 温度を利用した殺虫法(1)—低温処理および高温処理の殺虫効果の検討 (木川・永山・山野) 第20回文化財保存修復学会大会 98.6.6-7
- (3) 低酸素濃度殺虫法に関する基礎実験(3)—処理温度についての検討 (木川・永山・山野) 第20回文化財保存修復学会大会 98.6.6-7
- (3) 各種防虫剤、防黴剤、燻蒸剤の文化財材質へ及ぼす影響の検討 (顔料・金属に及ぼす影響) (木川・宮澤・小泉・佐野・三浦・後出・木村・富田) 第20回文化財保存修復学会大会 98.6.6-7
- (3) 防黴剤アリルカラシ油揮発成分の顔料に対する変色評価 (木川・宮澤・小泉・三浦・高田・関山) 第20回文化財保存修復学会大会 98.6.6-7
- (3) 和歌山・大谷古墳出土馬甲に付着した毛皮のDNA解析 (木川・小泉) 日本文化財科学会第15回大会 98.7.18
- (4) 臭化メチルの規制の動向と今後の代替策について 東京都三多摩公立博物館協議会 調布市文化会館 98.4.24
- (4) 燻蒸処理に代わる文化財害虫の殺虫法 第20回文化財(書籍・古文書等を含む)の虫菌害保存対策研修会 財団法人文化財虫害研究所 自治労会館 98.7.16
- (4) 文化財の虫菌害防除—臭化メチルの使用規制と博物館・美術館・図書館等における防虫・防黴(カビ)対策の今後—平成10年度文化財セミナー(第2回) 東京都立多摩社会教育会館 98.9.29
- (4) 文化財の生物被害と除去 文化庁 指定文化財(美術工芸品)修理技術者講習会 東京国立博物館 98.10.13
- (4) 文化財の虫菌害防除—臭化メチルの使用規制の動向と防虫・防黴対策の今後—第17回文化財保存研修会 群馬県歴史博物館 98.12.4
- (4) 脱酸素法等代替殺虫法の研究経過報告 生物被害防除研究会 「文化財生物被害防除の今後」 東京国立文化財研究所 98.12.14
- (4) 酸性紙封筒に落下・付着したカビについて 記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究会 国文学資料館史料館 98.12.17
- (4) 保存施設における害虫の種類・生態と防除の今後の展望 第4回記録史料の保存・修復に関する研究集会 ブリヂストン美術館 99.1.14
- (4) 出土有機質遺物のDNA分析とその問題点 保存科学研究集会 「有機質遺物の材質分析」 奈良国立文化財研究所 99.2.2
- (5) 燻蒸処理に代わる文化財害虫の殺虫法 「文化財の虫菌害」第36号 p.5-8 98.12
- (5) 燻蒸剤“臭化メチル”の使用規制と博物館等における防虫防黴対策の今後 「しが県博協だより」第11号 13-14 99.3
- (5) 文化財の虫菌害防除—臭化メチルの使用規制と博物館・美術館・図書館等における防虫・防黴対策の今後—新たな文化財保護の方向性を求めて 平成10年度文化財セミナー報告書 東京都立多摩社会教育会館 99.3

串田 紀代美 KUSHIDA Kiyomi (芸能部)

- (2) 状況に埋め込まれた芸能の見方—談話から分析する里神楽はぎわら会の現在— 『芸能の科学』27 33-75 99.3
- (2) 専門分野(美術史)における読解のケーススタディ:日本語学習ネットワークをめざして 『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』No.21 85-105 98.9
- (4) 江戸東京の里神楽—実演と話— 芸能部公開学術講座 矢来能楽堂 98.11.5

朽津 信明 KUCHITSU Nobuaki (環境解析研究指導室)

- (1) 石材強化用合成樹脂の耐久性評価に関する研究—福島県小高町・薬師堂石仏における現地調査から— (朽津・西浦) 科学研究費助成金結果報告書 99.3
- (1) 保存処置後の史跡・薬師堂石仏の経年変化と現状 科学研究費助成金結果報告書 99.3

- (2) 顔料鉍物の可視光反射スペクトルに関する基礎的研究 (朽津・黒木・井口・三石)「保存科学」38号 108-123 99.3
- (2) 千葉県・加曽利貝塚遺跡における遺構保存を目的とした環境調査(I) (朽津・吉田・青木)「貝塚博物館紀要」26号 1-9 99.3
- (2) 輸出漆器の修理材料の分析(I) (早川・朽津)「保存科学」38号 48-59 99.3
- (2) タイ国アユタヤの歴史的レンガ建造物中の水分移動解析 (石崎・朽津・西浦・シムネック)「保存科学」38号 154-163 99.3
- (2) (旧)岩崎家住宅壁紙調査報告(I) (受託研究報告第70号) (井口・川野邊・朽津・大川)「保存科学」38号 124-136 99.3
- (3) 九州装飾古墳の緑と青について (朽津・川野邊) 文化財保存修復学会第20回大会 98.6.7
- (3) 千葉県・加曽利貝塚遺跡における遺構保存を目的とした環境調査(I) (朽津・吉田・青木) 日本文化財科学会第15回大会 98.7.18-19
- (3) 重要文化財・下野煉瓦ホフマン窯の風化と保存 日本地質学会第105年学術大会 98.9.27
- (3) タイ・アユタヤ遺跡の劣化と保存に関する応用地質学的調査 (朽津・石崎・西浦) 日本応用地質学会平成10年度研究発表会 98.10.21
- (3) 凝灰質岩表面に発生した二酸化マンガンは微生物が作った: 史跡「フゴッベ洞窟」(余市町) (三田・朽津) 日本地球化学会平成10年度大会 98.10.9
- (4) 煉瓦の劣化について 近代の文化遺産保存研究会 東京国立文化財研究所 98.6.29
- (4) Survey of the Condition of Deterioration of a Brick Construction. (Kawanobe and Kuchitsu), 22nd International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property, TNRICP 98.11.5
- (4) タイ国アユタヤ遺跡におけるレンガの劣化現象 (朽津・石崎) 平成10年度文化財保存修復研究協議会 東京国立文化財研究所 99.1.14
- (4) 重要文化財・旧下野煉瓦窯における煉瓦の風化 第二回岩石の風化に関するシンポジウム 京都大学防災研究所 99.2.20
- (4) 鉍物から見た壁画顔料 青梅市フロンティアサイエンス会議 青梅市 99.3.5
- (4) Salt weathering of the brick monuments in Ayutthaya, Thailand. (Kuchitsu, Isizaki, and Nishiura), The First Seminar on Thai-Japanese Cooperation of Monuments in Conservation of Monuments in Thailand 99.3.8
- (4) Analysis of water regime in historical brick buildings and monuments in Thailand. (Ishizaki, Kuchitsu, Nishiura, and Shimnek), The First Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand 99.3.8

児玉竜一 KODAMA Ryuichi (芸能部)

- (1) 型の文脈 岩波講座 歌舞伎・文楽 第6巻『歌舞伎の空間論』(岩波書店)
- (2) 初代鴈治郎小考『歌舞伎 研究と批評』21号 150-161 98.6
- (2) 初代鴈治郎参考文献『歌舞伎 研究と批評』21号 116-130 98.6
- (2) 書評『知られざる芸能史 娘義太夫』(中公新書)『文楽道具帳』(国立文楽劇場)『歌舞伎研究と批評』22号 98.12
- (2) 書評 佐伯知紀『伊藤大輔』 富田美香編『千恵プロ時代』(フィルムアート社)「演劇学」40号 99.3
- (2) 東京国立文化財研究所芸能部所蔵 杵屋栄二旧蔵 歌舞伎附帳写真目録(共編)『芸能の科学』27 164-204 99.3
- (4) 近世における『大塔宮囃鏡』の上演・シンポジウム『『大塔宮囃鏡』の復活上演をめざして』歌舞伎学会フォーラム 98.10.10
- (5) 解題「雑誌『演芸月刊』」『歌舞伎 研究と批評』21号 98.6
- (5) 解題「雑誌『演芸世界』」『歌舞伎 研究と批評』22号 98.12
- (5) 脚注「座談会 義太夫狂言」歌舞伎学会編『歌舞伎の歴史—新しい視点と展望—』(雄山閣) 98.12

- (5) 大蔵卿転生譚—浄瑠璃から歌舞伎へ— 国立劇場歌舞伎公演プログラム 99.1
- (5) 郡司正勝業績一覧(昭和59年以降)・追悼文『劇評集』のあいまに『演劇学』 郡司正勝追悼特別号 99.3

佐野 千絵 SANO Chie (保存科学部)

- (1) 『文化財収蔵庫の庫内空気環境調査法の公定化のための基礎的研究』平成8~10年度文部省科学研究費補助金基盤研究(A)(2) 研究成果報告書 pp.176 99.3
- (2) 変色試験紙上に捕捉された化学種—陽イオン、陰イオンと有機酸— 「保存科学」38号 15-22 99.3
- (2) 博物館等施設の室内空気汚染—酢酸・ギ酸濃度— 「保存科学」38号 23-30 99.3
- (2) 展示公開施設の館内環境調査報告—平成9年度— (佐野・三浦) 「保存科学」38号 187-191 99.3
- (2) 各種防虫剤、防霉剤、燻蒸剤等の顔料・金属に及ぼす影響 (木川・宮沢・小泉・佐野・三浦・後出・木村・富田) 「文化財保存修復学会誌」43号 12-21 99.3
- (2) ホルムアルデヒドによる無機顔料の化学変化 (小瀬戸・佐野・三浦) 「文化財保存修復学会誌」43号 22-30 99.3
- (3) ホルムアルデヒドの日本画に与える影響 (小瀬戸・佐野・三浦) 文化財保存修復学会第20回大会 98.6.6
- (3) 近代日本画家の用いた絵絹の構造 (馬越・BACKER・佐野・小谷野) 文化財保存修復学会第20回大会 98.6.6
- (3) 空気環境調査法—特にホルムアルデヒドの濃度測定について (佐野・小瀬戸・三浦) 文化財保存修復学会第20回大会 98.6.6
- (4) 文化財の保存と環境 指定品(美術工芸品) 修理技術者講習会 文化庁文化財保護部美術工芸課 98.10.12
- (4) 文化財と保存科学 武蔵大学 98.11.4
- (4) 文化財と自然科学—科学のフロンティアシリーズ— 学習院大学 98.11.21
- (4) 色を染める—染色の化学— 国立科学博物館 99.1.9

塩谷 純 SHIOYA Jun (美術部)

- (4) 近代における屏風と金地表現 東京国立文化財研究所美術部・情報資料部研究会 98.5.27
- (5) 小堀鞆音 恩賜の御衣 『国華』 1234号 98.8
- (5) 同人評伝・彫塑 『日本美術院百年史』 9巻 98.10
- (5) 同人評伝・彫塑 『日本美術院百年史』 8巻 99.3

島尾 新 SHIMAO Arata (情報資料部)

- (1) 第三セッション報告—語る現在、語られる過去— 第二回文化財の保存に関する国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」報告書 99.3
- (2) 室町水墨画の再評価—三益齋図と聴松軒図について— 『国華』 1231 98.4
- (2) 禅の仏画と東福寺「禅寺の絵師たち」展カタログ 山口県立美術館 98.10
- (2) 雪舟等楊の研究(三)—「秋冬山水図」の情報学(上)— 『美術研究』 372 99.3
- (4) 雪舟筆「秋冬山水図」について 美術部情報資料部研究会 98.12.16
- (4) デジタル・アーカイブスの現状と問題点 静岡大学情報社会学科 99.2.24
- (5) 煎茶 vs 抹茶? 『茶道の研究』 44-2 99.2

鈴木 廣之 SUZUKI Hiroyuki (情報資料部)

- (5) ステファン・タナカ「見いだされたもの—日本と西洋の過去としての日本美術史」(翻訳) 東京国立文化財研究所編『文化財の保存に関する国際研究集会・今、日本の美術史学をふりかえる』 56-70 99.3

高桑 いづみ TAKAKUWA Izumi (芸能部)

- (1) 舞楽の楽器—その意匠と展開— 『日本の美術 舞楽装束』(共著) No.383 至文堂 98.4
- (1) 能・狂言鑑賞入門 『日本の伝統芸能』 放送用テキスト 日本放送出版協会 98.4

- (2) 翁の技法 『芸能の科学』27 95-141 99.3
- (4) 三味線の歴史 芸能部夏期学術講座 98.7.8
- (4) 能・狂言鑑賞入門 NHK 教育テレビでの放送 98.5~99.1
- (4) 能の音楽のしくみⅠ・Ⅱ 横浜国立大学公開講座 『能の世界』 98.7.17.24
- (4) シンポジウム「道成寺」の乱拍子 能劇の座第九回公演 98.10.29
- (5) 「恋の祖父」の「ちはやし」『鍬仙』 No.463 98.5
- (5) 大鼓の世界—その歴史と音楽— 花伝の会特別公演パンフレット 98.8
- (5) 乱拍子の技法とその源流 第九回能劇の座公演パンフレット 98.10
- (5) 新春能・狂言曲目解説ほか NHK 教育テレビでの放送 99.1.1~3
- (5) 曲目解説第五回ルネ小平能・狂言鑑賞会 99.2.28
- (5) 一調一管「江口」・長唄「八重霞賤機帯」曲目解説 国立劇場第20回音楽公演 パンフレット 98.4
- (5) 能楽『高校の音楽2 指導の手びき』 音楽之友社 99.3

田 中 淳 TANAKA Atushi (美術部)

- (2) 後期印象派・考(中の一)「美術研究」369号 98.11
- (2) 後期印象派・考(中の一)「美術研究」372号 99.3
- (2) 第一セッション報告—近代と美術/近代と美術史 第21回文化財の保存に関する国際研究集会「今、日本の美術史学をふりかえる」報告書 99.3
- (4) 「後期印象派」受容の諸相 所内総合研究会 98.4.14
- (4) 1930年代の洋画 石橋美術館 98.5.16
- (4) 和田英作とその時代 鹿児島市立美術館 98.10.4
- (4) 黒田清輝の生涯と芸術 成羽町美術館 98.11.3
- (4) 松本竣介の眼ざし 愛知県美術館 98.1.23
- (4) 翻訳・紹介・感想 木村荘八 美術・情報資料部研究会 99.2.17
- (4) 東文研美術部・情報資料部のデジタル化計画 東京国立近代美術館 99.3.30
- (5) 日本美術院100年展を見て 共同通信社「岩手日報」98.4.11

津 田 徹 英 TSUDA Tetsuei (情報資料部)

- (4) 横須賀市民大学講座・平安鎌倉の美術「中世の聖徳太子像」(横須賀市教育委員会) 横須賀市立博物館 99.1.23
- (4) 「中世の童子形と神」(横須賀市教育委員会) 横須賀市立博物館 99.1.30

中 野 照 男 NAKANO Teruo (美術部)

- (1) 不動明王像(黄不動尊)、五部心観 『日本の国宝 77 滋賀/園城寺(三井寺)近江神宮』 朝日新聞社 98.8
- (1) 西域北道の美術 『世界美術大全集 東洋編第15巻 中央アジア』 小学館 99.3
- (2) 敦煌学は、いま 『月刊しにか』100号 大修館書店 98.7
- (4) 芝山・観音教寺所蔵「施餓鬼図」について 美術部・情報資料部研究会 98.4.15
- (4) シルクロードの文化遺跡と美術 千葉市民文化大学 (助)千葉市文化振興財団 98.5.29 6.5
- (4) チベット仏教美術を訪ねて 美術部・情報資料部研究会 98.7.22
- (4) ドイツ・フランスの中央アジア探検 平成10年度秋期東洋学講座(中央アジア探検の先駆者たちⅡ) (助)東洋文庫 98.11.10
- (5) QIUCI, Silk Road Kingdom of Buddhist Art, NHK INTERNATIONAL, INC 98.10

中 村 茂 子 NAKAMURA Shigeko (芸能部)

- (2) 三信遠地域修正会の芸能構成と伝播 『芸能の科学』27 1-32 99.3
- (4) 風流踊一棒振り技を中心に— 國學院大學日本文化研究所公開講座 98.6.4

- (4) 民俗芸能の人形芝居 東京国立文化財研究所夏期学術講座 98.7.9
- (4) 江戸東京の里神楽—歴史と現状— 芸能部公開学術講座 矢来能楽堂 98.11.5
- (4) 森町の舞楽 全国民俗芸能大会研究公演 日本青年館 98.11.21
- (5) 国立劇場大1期太神楽研修修了生の現在と将来 本田安次著作集『日本の伝統芸能』付録16 98.8
- (5) 紀伊半島民俗芸能祭 98 「奈良新聞」 98.11.7
- (5) 遠州・森町の盆行事 『おんかん』 361 98.11

西 浦 忠 輝 NISHIURA Tadateru (国際文化財保存修復協力センター)

- (1) 古建築の保存を目的とした石材強化保存用合成樹脂の物性評価 科学研究費補助金研究成果報告書 99.3
- (2) タイ国スコータイ遺跡のスリ・チュム寺院大仏の保存修復 [1] (西浦、石崎、チラボン、キッチャ) 「保存科学」38号 146-153 99.3
- (2) タイ国アユタヤの歴史的レンガ建造物中の水分移動解析 (石崎、朽津、西浦、シムネック) 「保存科学」38号 154-163 99.3
- (2) 我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点 [1] (二神、西浦) 「保存科学」38号 164-171 99.3
- (3) 石造文化財保存のための合成樹脂含浸強化法の評価試験 マテリアルライフ学会第9回研究発表会 98.6.2
- (3) タイ国スコータイ遺跡のスリ・チュム寺院大仏の保存修復 [1] (西浦、石崎、チラボン、キッチャ) 第20回保存修復学会大会 98.6.6
- (3) 石材保存用樹脂の評価試験 [VI] (西浦、大石、吉川) 第20回保存修復学会大会 98.6.6
- (3) シリア・アインダーラ神殿遺跡保存修復国際プロジェクト (西浦、井上、海老澤、ハイヤータ) 日本文化財科学会第15回大会 98.7.18
- (3) タイ・アユタヤ遺跡の劣化と保存に関する応用地質学的調査 (朽津、石崎、西浦) 日本応用地質学会平成10年度研究発表会 98.10.21
- (3) Conservation Treatment to an Highly Bio-deteriorated Statue in Sukhothai, Thailand (Nishiura, Chiraporn), 4th International Conference on Biodeterioration of Cultural Property, Tehran, Iran 98.11.22
- (4) 遺跡の保存と観光開発 シリア総合観光開発計画ワークショップ 国際協力事業団 98.7.18
- (4) タイ国スコータイ遺跡のスリ・チュム寺院大仏の保存修復 アンコール遺跡保存シンポジウム「熱帯アジアの遺跡修復技術とアンコール遺跡」(財)日本国際協力センター他 98.10.31
- (4) レンガ造文化財の劣化と保存対策 (海外の事例) 平成10年度文化財保存修復研究協議会「レンガ造文化財の保存修復」東京国立文化財研究所 99.1.14
- (4) 岩のみほとけの心を現代に;国宝白杵石仏の保存修復 公開シンポジウム「文化財の保存修復—何をどう残すのか?—」文化財保存修復学会 99.2.7
- (4) Conservation Treatment for the Giant Buddha of Wat Sri Chum in Sukhothai, Thailand (Nishiura, Chiraporn, Ishizaki & Kitcha), The First Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand, Bangkok, The Fine Arts Department of Thailand and Tokyo National Research Institute of Cultural Properties 99.3.8
- (4) Salt Weathering of the Brick Monuments in Ayutthaya, Thailand (Kuchitsu, Ishizaki & Nishiura), The First Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand, Bangkok, The Fine Arts Department of Thailand and Tokyo National Research Institute of Cultural Properties 99.3.8
- (4) Analysis of Water Regime in Historical Brick Buildings and Monuments in Thailand (Ishizaki, Kuchitsu, Nishiura & Shimnek), The First Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand, The First Seminar on Thai-Japanese Cooperation of Monuments in Thailand, Bangkok, The Fine Arts Department of Thailand and Tokyo National Research Institute of Cultural Properties 99.3.8
- (4) Conservation of Excavated Monument in Syria—Conservation Project of Ain Dara Temple <BC10> (Nishiura, Ebisawa, Inoue, Yamazaki, Hammade & Khayata), The First Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand, Bangkok The Fine Arts Department of Thailand and Tokyo National Research Institute of Cultural Properties 99.3.8

- (5) 敦煌莫高窟保存のための日中共同研究の経緯、現状、問題点(西浦、増田) 第3回国際文化財保存修復研究会報告書 東京国立文化財研究所 98.9

羽田 昶 HATA Hisashi (芸能部)

- (1) 能 狂言鑑賞ガイド(監修) 小学館 98.12
(4) 新能と現代 武蔵大学公開講座 98.7.18
(4) 能の演技一扇を中心に 国立能楽堂講演と映画を観る会 98.8.26
(4) 能の復曲について 武蔵野女子大学能楽資料センター月例研究会 98.11.16
(4) 平成十年能楽界の話題(権藤芳一氏と対談) NHK TV 98.12.31
(5) 「悪太郎」と「首引」 WALK(水戸芸術館) 29 98.4
(5) 見物左衛門 友枝昭世の会パンフレット 98.4
(5) 公演活動と調査養成事業をふりかえる『国立能楽堂』181号 98.9
(5) 書評・西野春雄校注『謡曲百番』能楽タイムズ559号 98.10
(5) 狂言小歌「柴垣」「お茶の水」国立劇場邦楽鑑賞会パンフレット 98.10
(5) 鸚鵡小町のこと 浅見真州の会パンフレット 98.10

早川 典子 HAYAKAWA Noriko (修復技術部)

- (2) 輸出漆器の修理材料の分析(1)(早川、朽津)「保存科学」38号 48-58 99.3

早川 泰弘 HAYAKAWA Yasuhiro (保存科学部)

- (2) Lead isotope study of early Chinese bronze culture, (Jin Zhengyao, Zheng Guang, Hirao, Hayakawa and Tom Chase) "Proceedings of the Beginning of the Use on Metals and Alloys" 127-132 98.11
(2) A Study on the Location of Bronze Buckle Production discovered from the Chongtangdong Site using the Ratio of a Lead Isotope, Kang・Kim・Ham・Hirao・Enomoto・Hayakawa "Journal of the Institute of Korean Archaeology and Art History" 9 127-136 98.12
(2) ICP-AES/MSによる中国二里頭遺跡出土青銅器の多元素分析(早川・平尾・金・鄭)「保存科学」38号 98-107 99.3
(3) 蛍光 X線分析法による文化財試料の表面装飾の分析(早川・平尾) 第59回分析化学討論会 98.5.23
(3) 早期中国青銅器の鉛同位体比(金・鄭・平尾・早川・T. Chase) BUMA IV 国際会議(島根) 98.5.25
(3) 文化財資料測定に関する波長およびエネルギー分散型蛍光 X線分析法の比較(早川・平尾) 日本文化財科学会第15回大会 98.7.18
(3) 平安時代経筒に関する自然科学的研究(原田・平尾・鈴木・早川) 日本文化財科学会第15回大会 98.7.18
(3) アイヌ玉の考古化学的研究(齊藤・早川・平尾・中井・佐々木) 日本文化財科学会第15回大会 98.7.18
(3) Applications of Micro XRF for Analysis of Japanese Traditional Glass and Artifacts (K. Sugihara, M. Sato, Y. Hayakawa, A. Saito, T. Sasaki), The 47th Annual Denver X-ray Conference 98.8.3
(3) 文化財と分析化学—東京国立文化財研究所保存科学部化学研究室—(早川・平尾) 第2回分析化学東京シンポジウム 98.9.3
(3) ICP-AES/ICP-MSによる早期中国青銅器の多元素分析(早川・平尾・金・鄭) 日本分析化学会第47年会 98.10.6

平尾 良光 HIRAO Yoshimitsu (保存科学部)

- (1) 「化石・骨・木製品を探る」『文化財を探る科学の眼—1』平尾・山岸編 国土社(東京) pp.56 98.3
(1) 「石器・土器・装飾品を探る」『文化財を探る科学の眼—2』平尾・山岸編 国土社(東京) pp.56 98.3
(1) 「青銅鏡・銅鐸・鉄剣を探る」『文化財を探る科学の眼—3』平尾・山岸編 国土社(東京) pp.56 98.3
(1) 弥生時代青銅器の産地推定 平成8-9年度科学研究費補助金研究成果報告書 pp.173 98.3.30
(2) とりべ内壁付着物および熔滓(推定)の化学分析(平尾・泉谷・木村・馬淵)『飛鳥・藤原宮発掘調査報告

- IV—飛鳥水落遺跡の調査—』奈良国立文化財研究所編 141-142 (1995) 95.3
- (2) 鉛同位体比による水落遺跡出土銅管の原料産地推定 (馬淵・平尾) 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV—飛鳥水落遺跡の調査—』奈良国立文化財研究所編 143-150 (1995) 95.3
- (2) 鉛同位体比法を用いた小銅鐸の材料に関する一考察 (平尾・鈴木・井上・森田) 「考古学と自然科学」35 41-54 97.12
- (2) 長野県和手遺跡出土の火熨斗の科学的調査 (平尾・榎本・早川) 『和手遺跡—カインズホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書II』長野県塩尻市教育委員会 p.37-49 (1997) 97.3
- (2) 石川県藤江B遺跡から出土した小型銅鐸についての自然科学的研究 (平尾・鈴木・脇田) 『石川県立埋蔵文化財センター年報』18号 89-92 98.1
- (2) カマン・カレホユック第10次(1995年)調査で出土した銅製品の化学的測定 (平尾・榎本) 「アナトリア考古学研究」7 251-266 98.3.1
- (2) 三反田下高井遺跡出土の金属環の蛍光X線分析 (平尾・木村) 『一般国道6号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書IV 三反田下高井遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告書第128集 建設省・茨城県教育財団編 788-790 98.4
- (2) 磯辺王塚古墳出土金属製品の分析 C-1-2 鉛同位体比の測定 (平尾・鈴木) 『磯辺王塚古墳』豊橋市教育委員会編 86-89 98.3
- (2) 京都府大田南古墳群出土青龍三年銘鏡の鉛同位体比 (平尾・榎本) 『太田南古墳群／太田南遺跡／矢田城遺跡—第2次～第5次発掘調査報告書』京都府弥栄町教育委員会編 京都府弥栄町文化財調査報告第15集 i~iv 98.6
- (2) 椿井大塚山古墳出土鏡の化学成分と鉛同位体比(改訂) (山崎・室住・馬淵・平尾) 『昭和28年椿井大塚山古墳発掘調査報告書』京都府山城町教育委員会編 京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第20集 79-92 98.6
- (2) 各種の蛍光X線分析装置による文化財資料の分析 (早川・平尾) 「保存科学」37 137-145 98.3
- (2) 泉屋博古館が所蔵する中国古代青銅器の鉛同位体比 (平尾・鈴木・早川・佐々木) 「泉屋博古館紀要」15 25-46 98.10
- (2) 中国両河流域青銅文明間之関係 (金・平尾・楊・Chase・馬淵・三輪) 『中国商文化国際学術討論会論文集』中国社会科学院考古研究所編 中国大百科全集出版社(北京) 1995年中国偃師開催 425-433 98.10
- (2) 商代青銅器中の高放射性成因鉛:三星堆器物与沙可采(賽克勒)博物館藏品的比較研究 金・W. T. Chase・馬淵・三輪・平尾・陳・趙 『迎接二十一世紀的中国考古学国際学術討論会論文集』北京大学考古学系編 科学出版社 562-569 98.10.22
- (2) 福岡県八女市野田遺跡から出土した鉛製鐸の自然科学的研究 (平尾・榎本) 「MUSEUM」No.556 31-38 98.11
- (2) Lead isotope study of early Chinese bronze culture, (Jin Zhengyao, Zheng Guang, Hirao, Hayakawa and Tom Chase) "Proceedings of the Beginning of the Use on Metals and Alloys" 127-132 98.11
- (2) A Study on the Location of Bronze Buckle Production discovered from the Chongtangdong Site using the Ratio of a Lead Isotope, Kang・Kim・Ham・Hirao・Enomoto・Hayakawa "Journal of the Institute of Korean Archaeology and Art History" 9 127-136 98.12
- (3) カマン・カレホユック第10次(1995年)調査で出土した銅製品の化学的測定 (榎本・平尾) 中近東文化センター 98.3.8
- (3) 三星堆青銅器の自然科学的側面 『中国三星堆文化に関するシンポジウム』東京世田谷美術館 98.5.15
- (3) 蛍光X線分析法による文化財試料の表面装飾の分析 (早川・平尾) 1998年度分析化学討論会 98.5.23
- (3) 早期中国青銅器の鉛同位体比 (金・鄭・平尾・早川・T. Chase) BUMA IV 国際会議(島根) 98.5.25
- (3) アイヌ玉の考古化学的研究 (齊藤・早川・平尾・中井・佐々木) 日本文化財科学会第15回大会 98.7.17
- (3) 文化財資料測定に関する波長およびエネルギー分散型蛍光X線分析法の比較 (早川・平尾) 日本文化財科学会第15回大会 98.7.17
- (3) 平安時代の経筒に関する自然科学的研究 (原田・平尾・鈴木・早川) 日本文化財科学会第15回大会 98.7.17
- (3) 文化財と分析化学—東京国立文化財研究所保存科学部化学研究室 (早川・平尾) 第2回分析化学東京シンポ

ジウム 98.9.5

- (3) ICP-AES/ICP-MS による早期中国青銅器の多元素分析 (早川・平尾・金・鄭) 日本分析化学会第 47 年会 98.10.5
- (4) 鉛同位体比法を用いた早期中国青銅器の産地推定 中国合肥科学技術大学於中国合肥講演 98.3.12
- (4) 蛍光 X 線分析法を用いた文化財資料の測定 中国合肥科学技術大学於中国合肥講演 98.3.13
- (4) 三角縁神獣鏡の科学的側面 朝日カルチャーセンター講演 98.7.16
- (4) 古代中国青銅器の鉛同位体比 中国北京科学技術大学歴史金属教室講演 98.10.28
- (4) 鉛同位体比から見た古代中国青銅の産地 中国北京大学考古学部講演 98.10.28
- (4) 二里頭と殷虚出土の青銅器 第 9 回日本中国考古学協会 『分析化学と中国考古学』 98.11.14
- (5) ヒットタイトの白銅 『古代・中世の銅生産』「季刊考古学」62 80 98.2.1
- (5) 鉛同位体比法、『青銅鏡・銅鐸・鉄剣を語る』「文化財を語る科学の眼—3」平尾・山岸編 国土社(東京) 13-19 98.3.25
- (5) 自然科学が解き明かす古代金属の世界、『青銅鏡・銅鐸・鉄剣を語る』「文化財を語る科学の眼—3」平尾・山岸編 国土社(東京) 6-8 98.3.25
- (5) 科学の目で見た文化財 「市政」47 96-99 1998.11.5

星野 紘 HOSHINO Hiroshi (芸能部)

- (2) 書評・諏訪春雄著 『日中比較芸能史』(吉川弘文館) 『日本民俗学』 No.214 98.5
- (2) 階上町のナニャドヤラ 『民俗芸能』 79 6-11 98.11
- (2) 民俗芸能再生復活への方策 『芸能の科学』 27 77-94 99.3
- (4) 「民俗芸能」復活再生の努力 東京国立文化財研究所総合研究会 98.6.9
- (4) 人形劇の人形を展示して 泉州糸操り人形フォーラム東京国立文化財研究所 研究協議会 98.10.9
- (4) 日本と中国少数民族の田遊び 沖縄県立芸術大学国際学術研究(沖縄と中国雲南省少数民族の基層文化の比較研究) 調査研究会 99.1.18
- (4) ロシアのハンティ族の熊祭の芸能 東京国立文化財研究所芸能部研究会 99.3.16・18
- (4) 文化財としての人形浄瑠璃 東京国立文化財研究所夏期学術講座 98.7.9
- (4) 人形芝居の歴史 群馬県教育委員会ほか主催「ぐんま人形芝居'98」(群馬県高山村) 98.11.15
- (4) アジア理解講座「中国少数民族の民俗芸能から〈概説〉」国際交流基金 99.1.11
- (4) アジア理解講座「中国少数民族の民俗芸能から〈田遊び〉」国際交流基金 99.2.8
- (4) アジア理解講座「中国少数民族の民俗芸能から〈歌垣と輪踊り〉」国際交流基金 99.2.22
- (4) アジア理解講座「中国少数民族の民俗芸能から〈祭祀舞踊〉」国際交流基金 99.3.15
- (4) 地域文化伝承活動の意義 平成 10 年度国立江田島青年の家主催事業地域文化伝承推進事業 99.2.27-28
- (5) 民俗芸能とは何か ①花祭(神楽) 『音楽文化の創造』 No.9 98.6
- (5) 伝統的人形芝居復活への仕掛け 『上州文化』 76 98.11
- (5) 民俗芸能とは何か ②中世芸能の響宴(田楽・猿楽など) 『音楽文化の創造』 No.11 98.12
- (5) 民俗芸能の公開の諸相と問題点 『文化庁月報』 365 99.2
- (5) 「民俗芸能とは何か ③盆踊り」 『音楽文化の創造』 No.12 99.3
- (5) 一役人の目から見た郡司先生 早稲田大学演劇学会 『演劇学』 特別号 99.3

松本修自 MATSUMOTO Shuji (国際文化財保存修復協力センター)

- (2) ドイツと日本の建造物保存修復 「月刊文化財」419号 4-10 98.8
- (3) Preservation of traditional craftsmanship in Japan, German ICOMOS international conference, Leipzig 98.10.31
- (4) The outline of Japanese architecture and its restoration, National Technical University of Athens, Greece 99.3.22
- (5) 雲岡石窟と華嚴寺 Japan ICOMOS Information 4-3 98.9

- (5) ドイツイコモス主催の国際会議に出席して Japan ICOMOS Information 4-4 98.12
 (5) 坊さんとの対話 「国立博物館ニュース」617号 98.10

三 浦 定 俊 MIURA Sadatoshi (保存科学部)

- (1) 「各種の光学的探査法」『文化財探査の手法と実際』足立・中篠・西村編 真陽社刊 124-132 99.2
 (2) ICCROM—邁向世界文化財保存之路的橋梁(林煥盛訳) 歴史文物(中華民国国立歴史博物館) 8巻5期 72-75 98.5
 (2) 各種防虫剤、防黴剤、燻蒸剤等の顔料・金属に及ぼす影響(木川・宮沢・小泉・佐野・三浦・後出・木村・富田)「文化財保存修復学会誌」43 12-21 99.3
 (2) ホルムアルデヒドによる無機顔料の化学変化(小瀬戸・佐野・三浦)「文化財保存修復学会誌」43 22-30 99.3
 (2) [資料]文化財保存修復学会年表「文化財保存修復学会誌」43 127-130 99.3
 (2) 窒素等不活性ガスによる文化財殺虫処理装置の試作と処理例(木川・山野・三浦・前川)「保存科学」38 1-8 99.3
 (2) 金色堂の環境変化と漆膜に生じた亀裂の関する考察(三浦・小川)「保存科学」38 31-38 99.3
 (2) 黒田清輝「湖畔」調査報告(井口・加藤・歌田・三浦)「保存科学」38 137-145 99.3
 (2) 東京国立文化財研究所所蔵 X線フィルムデータベースの構築(小倉・青木・三浦)「保存科学」38 172-186 99.3
 (2) 展示公開施設の館内環境調査報告—平成9年度—(佐野・三浦)「保存科学」38 187-191 99.3
 (2) 蛍光 X線分析法による天正大判の表面変色に関する調査(早川・三浦・田尻)「文化財保存修復学会誌」43 96-105 99.3
 (3) ホルムアルデヒドの日本画に与える影響(小瀬戸・佐野・三浦)文化財保存修復学会第20回大会 98.6.6
 (3) 環境の湿度変化が金色堂に与えた影響の評価 文化財保存修復学会第20回大会 98.6.6
 (3) 空気環境調査法—特にホルムアルデヒドの濃度測定について(佐野・小瀬戸・三浦)文化財保存修復学会第20回大会 98.6.6
 (3) 各種防虫剤、防黴剤、燻蒸剤の文化財材質へ及ぼす影響の検討(顔料・金属に及ぼす影響の検討)(木川・宮澤・小泉・三浦・後出・木村・富田)文化財保存修復学会第20回大会 98.6.6
 (3) 防黴剤アリルカラン油揮発成分の顔料に対する変色評価(木川・宮澤・小泉・三浦・高田・関山)文化財保存修復学会第20回大会 98.6.6
 (3) 博物館における保存活動(井口・三浦)文化財保存修復学会第20回大会 98.6.6
 (3) 昼飯大塚古墳における電気探査と地温測定実験(森・亀井・三浦・中井・工藤)日本文化財科学会第15回大会(千葉) 98.7.18~19
 (3) Brief Introduction to the Conservation of the Golden Hall in Chusonji-temple, Seminar at denkmal '98 (Leipzig) 98.10.29
 (3) The Conservation of the Golden Hall in Chusonji-temple at Hiraizumi, East Asian and European Lacquer Techniques, International Conference of the German National Committee of ICOMOS together with the Bavarian State Conservation Office and the Tokyo National Research Institute of Cultural Properties (Munich) 99.3.11-13
 (4) 梱包の科学 指定文化財(美術工芸品)企画・展示セミナー(東京) 98.7.14
 (4) 臭化メチルの使用規制について 第20回文化財(書籍・古文書等を含む)の虫歯害保存対策研修会(東京) 98.7.16
 (4) 博物館施設における温湿度管理の考え方 平成10年度九州博物館協議会 第28回学芸員・事務職員研修会(長崎) 98.10.19
 (4) 古文化財研究と光技術—隠された画の発見 Photon Fair '98 セミナー(浜松) 98.11.13
 (4) 研究の始まり—忘れられた塗りの技術— 第13回「大学と科学」シンポジウム—海を渡った文化財— 99.1.30
 (4) 地震によるアッシジ文化財被災その後 IIC-Japan 講演会 99.2.24

- (5) 壁画劣化の原因は「砂漠の大雨」だった (Field Note Vol.3) 「SCIAS [サイアス]」 Vol.3 No.8 34-35 98.5
- (5) 随筆 文化財の非破壊調査 エネルギー・レビュー Vol.18 No.10 p.3 98.9
- (5) 金色堂を守る科学—徹底した温度・湿度の管理 週刊朝日百科「日本の国宝」98 234 99.1

宮本 長二郎 MIYAMOTO Nagajiro (国際文化財保存修復協力センター)

- (1) 平地住居と竪穴住居の類型と変遷 先史日本の住居とその周辺 3-22 同成社 98.12
- (1) 掘立柱建物の出現と展開 先史日本の住居とその周辺 261-272 同成社 98.12
- (1) 日本中世住居の形成と発展 建築史の空間 3-23 中央公論美術出版 99.1
- (1) 上菅荒神原遺跡の住居遺構 上菅荒神原遺跡 92-96 鳥取県教育文化財団 99.3
- (2) 縄文時代建築の種類と構造 「季刊考古学」64号 55-58 98.8
- (2) 東京国立文化財研究所による文化財保存修復 「NEWTON アーキオ」 Vol.2 180-187 98.8
- (2) 上野原遺跡—縄文時代早期の復元住居 「建築雑誌」9 1998 14-15 98.9
- (2) 縄文時代の建築技術—桜町遺跡— 「文建協通信」 No.49 2-6 99.1
- (2) 妻木晩田遺跡群の建物 「季刊邪馬台国」67号 15-20 99.3
- (4) 縄文時代建築の復原 北陸建築学会 98.6.27
- (4) 中世城郭建築 兵庫県相生市教育委員会 98.7.18
- (4) 桜町遺跡シンポジウム 読売新聞社 98.8.11
- (4) 先史時代の建築技術 竹中大工道具館 98.10.17

増田 勝彦 MASUDA Katsuhiko (修復技術部)

- (1) 和紙の色と時代「色彩から歴史を読む」 99.12.5
- (4) 「保存科学と装こうのかかわり」 国宝修理装こう師連盟定期研修会 98.11.20
- (4) 「海外の日本美術品の修復」 第13回「大学と科学」公開シンポジウム「海を渡った文化財」 99.1.31
- (4) 「高松塚古墳壁画の修復」 文化財の保存と修復 公開シンポジウム 99.2.7
- (4) 「文化財保存における模写と修復」 愛知県博物館協会 講演会 99.3.17
- (4) 「劣化損傷史料の保存修理Ⅰ」 国文学研究資料館史料館研修 98.9.11
- (4) 「史料の保存環境と劣化損傷要因」 国文学研究資料館史料館研修 98.9.14
- (4) 「文化財修理と科学」 美術工芸課修理者養成講習会 98.10.15
- (4) 「史料の保存科学」 埼玉県文書館主催平成8年度文書史料取扱講習会 99.2.3

松原 美智子 MATSUBARA Michiko (国際文化財保存修復協力センター)

- (5) The Exhibition of the Contemporary Japanese Ceramics in Traditional Style 「アジア友好古美術展：現代日本の伝統陶芸展」図録 文化庁 98.5
- (5) Annual Report on the Technical Survey of Angkor Monument 1998 「アンコール遺跡調査報告書1998」第2章、第9章、第10章 中川武監修 日本国政府アンコール遺跡救済チーム 98.7
- (5) 1997 Kobe/Tokyo International Symposium Risk Preparedness for Cultural Properties: Development of Guidelines for Emergency Response, Ed. Saito Hidetoshi, Chuo-koron Bijutsu Shuppan, Tokyo 99.2

山梨 絵美子 YAMANASHI Emiko (美術部)

- (2) ラグーザ・玉の“玉手箱” 「芸術新潮」589号 99.1
- (2) 日本近代洋画におけるオリエンタリズム 第21回文化財の保存に関する国際研究集会報告書 99.3
- (4) 大正末・昭和初期洋画の傾向—朝鮮美術展・台湾美術展との関連から 第32回東京国立文化財研究所美術部・情報資料部公開学術講座 東京都美術館 98.10.22
- (4) 日本洋画のあけぼの 逗子市民講座 逗子市民図書館 98.10.27
- (4) 黒田清輝と構想画 郡山市立美術館 99.1.24
- (5) タイモン・スクリーチ著『春画』書評 週刊ポスト

- 98?
- (5) 作品解説 黒田清輝筆「編み物する女」「案山子」山陽新聞 99.10
 - (5) 作家・作品解説 高橋由一「牧ヶ原望嶽」五姓田義松「清水の富士」(『巨匠が描く 日本の名山』第5巻 東海・北陸・近畿編 郷土出版社 98.11)
 - (5) 「美術旬報」解説(『近代美術雑誌叢書・第2期 美術週報/美術旬報/美術月報/国民美術』別冊 ゆまに書房 98.11)

山 野 勝 次 YAMANO Katsuji (保存科学部)

- (1) 『ネズミ・害虫の衛生管理』(共著) フジ・テクノシステム 98.10
- (1) 設立の目的 機関誌「しろあり」の発行及び広報活動 文化財の被害 アメリカカンザイシロアリ 『創立40周年誌』日本しろあり対策協会編 98.10
- (2) シロアリの話(3)—Q&A—「文化財の虫菌害」35号 8-15 98.6
- (2) 横浜市元町で発見されたアメリカカンザイシロアリ 「しろあり」113号 98.7
- (2) シロアリの話(4)—Q&A—「文化財の虫菌害」36号 19-24 98.12
- (2) 「第18回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会」報告「文化財の虫菌害」36号 42-44 98.12
- (2) 窒素等不活性ガスによる文化財殺虫処理装置の試作と処理例(木川・山野・三浦・前川)「保存科学」38 1-8 99.3
- (2) 低酸素濃度殺虫法—処理温度と殺虫効果の検討(木川・永山・山野)「保存科学」38 9-14 99.3
- (3) 温度を利用した殺虫法(1)—低温処理および高温処理の殺虫効果の検討—(木川・永山・山野) 文化財保存修復学会第20回大会 98.6.6
- (3) 低酸素濃度殺虫法に関する基礎研究(3)—処理温度についての検討—(木川・永山・山野) 文化財保存修復学会第20回大会 98.6.6
- (5) シロアリに関する実務的知識 平成10年度しろあり防除施工士資格第2次指定講習会 日本しろあり対策協会 98.9.11
- (5) 文化財虫菌害燻蒸処理仕様書ならびに危害防止措置について 第18回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会 文化財虫害研究所 98.10.8
- (5) 〈文献紹介〉博物館・古文書館・植物標本館所蔵品の窒素・アルゴン・二酸化炭素による害虫防除の比較検討「文化財の虫菌害」36号 9-18 98.12
- (5) 薬剤依存から転換迫られるシロアリ対策 日経アーキテクチュア 630号 98.12
- (5) シロアリの生体と被害 平成11年度しろあり防除施工士資格第1次指定講習会 日本しろあり対策協会 99.1.29
- (5) 昆虫の基礎知識 昆虫による文化財の被害と防除 文化財の殺虫燻蒸 第20回文化財虫菌害防除作業主任者の能力認定試験とその講習会 文化財虫害研究所 99.2.2

米 倉 迪 夫 YONEKURA Michio (情報資料部)

- (1) 伝源頼朝像再論 『肖像画を読む』角川書店 1998.7 p.53-80
- (4) 「泉州系操り人形劇博物館構想」へのノート(泉州系操り人形劇シンポジウム)於東京国立文化財研究所 1998.10.9
- (4) 法然伝絵の展開におけるいくつかの問題(絵本の会)於国文学研究資料館 1998.12.4
- (3) 伝「源頼朝像」が提起するいくつかの問題 東京国立文化財研究所総合研究会 1999.2.9

渡 邊 明 義 WATANABE Akiyoshi

- (2) 国際シンポジウム「近代の文化遺産の保存と活用」に学んだこと「月刊文化財」425号 99.2
- (4) 古代絵画の保存修復について 中国・中央美術学院 巻軸絵画修復高級研修講演 98.6.5
- (4) 水墨画を楽しむ 栃木県博物館 98.10.10
- (4) 文化財と国際交流 第13回「大学と科学」シンポジウム—海を渡った文化財— 99.1.30
- (5) 日本の国宝・文化財保護の歴史 週刊朝日百科「日本の国宝」98 99.2

4. 事業

1. 研究集会など

(1) 国際研究集会

「文化財の保存および修復に関する国際研究集会」は1977（昭和52）年度から毎年行われ、1998年で第22回を迎え、1998年度は修復技術部が担当した。なお、シンポジウムの詳細と内容の総括は、1999年度発行の報告書を参照されたい。

名 称 第22回文化財の保存および修復に関する国際研究集会
「近代の文化遺産の保存と活用」
日 時 1998（平成10）年11月4日（水）～6日（金）
会 場 東京国立博物館平成館大講堂
参加者数 163名

「近代の文化遺産」は日本の近代化を証言する貴重な資産として未来に継承すべきものである。しかし、形態や使用されている材料の多様性から従来の保存修復材料や技法だけでは対応し得ず、新たな材料・方法の開発が求められている。シンポジウムでは、「近代の文化遺産」の保存修復にすでに携わってきた国内外合わせて15名の発表により、「近代の文化遺産」の保存・活用にかかわる現在の状況を浮き彫りにし、今後の課題を提示する機会となった。

プログラム

11月4日（水）

- 9：30～10：00 参加者登録受付
10：00～10：30 開会式
10：30～11：00 大塚 英明（文化庁、日本）
「近代の科学・産業技術遺産の保存・活動の現状と課題」
11：00～11：30 磯村 幸男（文化庁、日本）
「近代遺跡の保存について—現状と課題」
11：30～11：45 休 憩
11：45～12：15 亀井 伸雄（文化庁、日本）
「近代化遺産（建造物等）の保護の現状と課題」
12：15～12：45 清水 真一（文化庁、日本）
「産業建造物保護の取組み」
12：45～14：00 昼 食
14：00～15：15 Mr. Martin Kaufmann (Conservator for technical heritage, ドイツ)
“From the scrapyard to the showcase”
15：15～15：45 休 憩
15：45～17：00 Ms. Hazel Newey (Science Museum, London, イギリス)
“The Conservation and Care of Scientific and Industrial Collections”
18：00～レセプション（会場：精養軒）

11月5日（木）

- 10：00～11：15 Mr. Kornelius Götz (Consultant Conservator, ドイツ)
“On the Art of Conserving a Factory”

- 11：15～11：30 休 憩
- 11：30～12：00 川野邊 渉・朽津 信明（東京国立文化財研究所、日本）
「煉瓦建造物の劣化状況調査」
- 12：00～12：45 鈴木 昭（日本工業大学、日本）
「日本工業大学工業技術博物館について—その歴史と現状」
- 12：45～14：00 昼 食
- 14：00～15：15 横山晋太郎（かかみがはら航空博物館、日本）
「航空機の保存・修復の現状について」
- 15：15～15：45 休 憩
- 15：45～17：00 Mr. John Kearon (National Museums and Galleries on Merseyside, イギリス)
“Preserving the Maritime Heritage”

11月6日(金)

- 10：00～11：15 Mr. Alfred Gottwaldt (German Technical Museum, ドイツ)
“Old Railway Objects and Museums. A Philosophy of Restoration and Display. Experiences from the Berlin Museum of Transportation and Technology”
- 11：15～11：30 休 憩
- 11：30～12：45 佐藤美知男（交通博物館、日本）
「交通博物館と鉄道文化財の保存」
- 12：45～14：00 昼 食
- 14：00～15：00 内田 星美（産業考古学会、日本）
「日本の産業遺産の現状と保存修復の問題」
- 15：00～15：30 休 憩
- 15：30～16：30 総合討議
- 16：30～16：50 閉会式

シンポジウムの最初にまず、文化庁文化財保護部美術工芸課・記念物課・建造物課の各課における活動の現況、また明らかになってきた課題への取り組みについての報告があった。

初日の午後は、海外における保存・活用の現状、理念にかかわるテーマを取り上げた。ドイツで保存コンサルタントとして活躍しているマーチン・カウフマン氏からは、具体的な処置例を挙げながら、調査、処置をどのように行い、遺していくかについての講演があった。ロンドンにある国立科学博物館保存部長のヘゼル・ニューイ氏からは実際の処置例を紹介しながら、保存処置の判断、動態保存の問題、収藏品管理におけるコンサバターの役割、記録の重要性、プラスチック材の品やコンピューターの保存に対するイギリスにおける現在の取り組み方など多岐に亘る講演があり、遺産保存の理念を確立し、実践していくことの重要性を考えさせられる内容であった。

2日の午前、工場や煉瓦窯といった大規模遺産保存の国内外の現状がテーマであった。コーネリウス・ゲッツ氏からはドイツラインライトにある織物工場全体を保存し博物館として活用する事業に保存コンサルタントとして携わった経験についての発表があった。日本ではなじみのない保存コンサルタントが実際にどのような働きをし、遺産の保存においてどのように役立っているかは興味深い話であった。日本からは東京国立文化財研究所の川野邊渉と朽津信明が、栃木県野木所在の重要文化財・旧下野煉瓦窯を調査事例として、修復・保存に向けた劣化原因調査について報告を行った。続いて、鈴木昭氏から日本でも有数のコレクションを維持管理している日本工業大学工業技術博物館がどのように創設されてきたかの経緯について発表があった。これは教育の現場としての博物館の役割の重要性を認識する講演でもあった。

2日目午後は、航空機と船舶（海事遺産）の保存をテーマとした。まず、かかみがはら航空宇宙博物館の横山晋太郎氏から、同館で行われた航空機の修復・復元・複製機製作についての解説と、その問題点や今後の課題について講演があった。次に、リバプールにある国立マージサイド博物館の海事・産業・交通部門の保存を担当するジョン・キーロン氏から船舶の保存を中心に実例を挙げながらの発表があった。ここでは、動態保存、部材の交換の問題な

どについて議論がされ、現場では文化財として保存しながら活用していく難しさに常に直面している現実が明らかになった。

3日目の午前中は鉄道施設の保存・活用・公開をテーマとした。ドイツ技術博物館の鉄道部門の上級学芸員であるアルフレッド・ゴットバルト氏から、同博物館において鉄道遺産の修復と展示がどのような考えによって進められてきたか、また現在もどのように取り組んでいるかについて講演があった。そして、日本からは交通博物館の佐藤美知男氏に日本鉄道文化財の保存の経緯と共に同館における鉄道文化財の保存についての講演があった。

シンポジウム最後に、産業考古学会元会長の内田星美氏より、期間中にしばしば議論された「遺産の年代設定」話から「遺産の保存と活用」にわたる広範囲内容の発表があった。産業遺産の保存・活用を今後進めていく上で考慮していかなければならない点を示す内容であった。

また、国際シンポジウムに併せて近代の文化遺産の保存を行っている機関団体などの活動内容を紹介するパネル展示を行った。新しい材料が複雑に組み合わさったもの、工場、鉱山、車両、航空機、工作機械等の保存活動についてのビデオや資料等の提供もあり、それらを加えた展示を行った。

協力機関団体は次の通りである。

大牟田市教育委員会、かかみがはら航空宇宙博物館、群馬県、交通博物館、社団法人研究産業協会、産業技術継承センター、産業技術記念館、産業考古学会、尚古集成館、中部産業遺産研究会、通信総合博物館、東京都写真美術館、トヨタ博物館、日本工業大学工業技術博物館、日本産業技術史学会・産業技術博物館誘致促進協議会（大阪）、財団法人日本ナショナルトラスト、船の科学館、文化庁、栃木県・野木町

(2) アジア文化財保存セミナー

人類共通の貴重な遺産である文化財を保存し、継承していくためには国際協力が不可欠であり、特にアジア地域においては、その必要性が高いとともに緊急性が求められている。

本セミナーは、アジアの文化財保存に関する種々の問題について報告と協議を行うものであり、文化財保護の分野での日本及びアジア各国間の相互理解を深め、国際協力の推進に貢献することを目的とする。1998年度はその第8回となる。

第8回 アジア文化財保存セミナー

主 題 アジア地域の世界文化遺産：考古遺跡の活用しながらの保存
日 時 1999（平成11）年2月23日（火）～27日（土）
場 所 奈良県新公会堂（セミナー）、奈良国立文化財研究所他（サイトセミナー）
主 催 東京国立文化財研究所、文化庁、奈良国立文化財研究所
協 力 （財）なら・シルクロード博記念国際交流財団

趣 旨

アジアの世界文化遺産をテーマとする。今回は考古遺跡を取り上げ、それらを活用しつつ保存する上での問題点を探る。

文化遺産を保存し後世に伝えることは、現在に生きる我々の責務である。一方、それらは文化的財産（文化財）として有効に活用されるべきものである。遺跡の保存においても、それらを保存しつつ、どう活用していくかを考えなければならない。世界遺産となれば観光資源として重要であり、特に発展途上国においては、地域開発と保存の問題を



アジア文化財保存セミナー

どう調和させるかは、直面する大きな問題である。文化遺産の賢明な活用を前向きに考えつつ、アジア文化財保存セミナー保存、修復、復元、整備を行うことが求められる。

セミナーでは、以上の認識の下に、各国が具体的にどのような保存、修復、整備を行っているのか、復元をどの程度、どういう方法で行っているのかなど、総合的な保存対策（計画を含む）について議論する。セミナーは、世界文化遺産となっている遺跡の保存と活用に携わっているアジア諸国の専門家による事例報告と、出席者による討議という形式で行った。

内 容

2月23日(火)

13:30~14:00 開会式

主催者挨拶

東京国立文化財研究所長 渡 邊 明 義

主催者挨拶

文化庁文化財鑑査官 町 田 章

出席者紹介等

14:00~14:40 基調講演

「記念物、遺跡の保存とそれらの最善の活用」

神戸芸術工科大学名誉教授 伊 藤 延 男

14:40~15:20 「文化財保存システム；スコタイと周辺の歴史都市」

タイ国芸術総局長 ニコム・ムシガカマ

15:50~16:30 「1975~1982年の修復以降のボロブドゥール寺院の保存と活用」

インドネシア文化局・考古歴史遺産保存開発部 サミディ

16:30~17:10 「モヘンジョダロ遺跡の保存修復」

パキスタン考古局長 サイド・ウル・レーマン

18:30~20:30 懇親会（於：三井ガーデンホテル）

2月24日(水)

10:00~10:40 「考古遺跡の保存と活用のためのユネスコの事業；さらに千年保たせる保存」

ユネスコ・文化遺産部 野 口 英 雄

10:40~11:20 「秦始皇帝と兵馬俑坑の保存と活用」

中国・秦始皇兵馬俑博物館・保管部 張 志 軍

11:20~12:00 「シーギリヤ古代都市遺跡の保存と活用」

スリランカ・イコモス国内委員会保存担当理事 アソカ・バリサ・ウィジェラン

13:30~14:10 「慶州古墳群の保存と活用」

韓国・昌原文化財研究所長 申 昌 秀

14:10~14:50 「平城宮遺跡博物館構想」

奈良国立文化財研究所・平城宮跡発掘調査部長 田 辺 征 夫

15:20~16:00 「アジャンタおよびエローラ石窟寺院の保存；活用の問題点」

インド・保存研究所評議会議長 O・P・アグラワル

16:00~16:40 「パハールブル仏教遺跡の保存と活用」

バングラデシュ・考古局・主席技術官 モハメド・アティクル・イスラム

16:40~17:20 「アンコール文化遺産の保存」

カンボディア・文化芸術省・文化財局長 ウオン・ヴォン

2月25日(木) サイトセミナー

9:30~11:30 平城宮跡、奈良国立文化財研究所視察

11:30~12:30 討議（奈良国立文化財研究所）

14:00~17:00 薬師寺、唐招提寺 視察

2月26日(金)

10:00~10:40 「西側諸国における考古遺産の公開；技術の選択、社会の圧力及び政治の要求」

イタリア文化環境省・文化財管理局・鑑査官 ジョバンニ・シキローネ

10:40~11:20 「ラオスのワット・プー遺跡など東南アジアの遺跡保存ユネスコプロジェクト」

ユネスコ・バンコク事務所・アジア地域担当官 マウロ・クアルツィ

- 11：20～12：00 総合質疑応答
 14：00～15：30 総合討議（Ⅰ）
 16：00～17：30 総合討議（Ⅱ）

2月27日(土)

- 10：00～11：45 総合討議（Ⅲ）
 11：45～12：00 閉会式

主催者挨拶
 出席者挨拶

東京国立文化財研究所長 渡邊明義
 海外出席者代表

(3) 各種の研究協議会

1) 文化財保存修復研究協議会

本協議会は、保存修復に関する研究成果を発表し、関係の専門家とともに協議することを目的として、毎年テーマを定めて開催している。1998年度が第28回にあたる。保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが交代で担当しているが、1998年度は国際文化財保存修復協力センターが担当した。

主 題：レンガ造文化財の保存修復
 会 場：東京国立文化財研究所別館会議室
 日 時：1999（平成11）年1月14日(木)
 10：00～16：50
 参 加 者：40名

趣 旨

レンガ造文化財は世界に多く存在し、その保存修復は大きな問題となっている。レンガの材質と劣化特性、構造物としてのレンガ造文化財の劣化と保存修復、日干しレンガの物性評価と保存対策等について、最新の研究成果を発表し討議する。

プログラム

- 10：00～10：05 開会挨拶（所長）
 10：05～10：10 趣旨、内容説明（センター）
 10：10～11：00 「煉瓦の材質と耐久性」 金沢学院大学助教授 水野信太郎
 11：00～11：40 「我が国のレンガ造文化財保存の現状と課題」
 文化庁建造物課主任文化財調査官 中村雅治
 11：40～12：20 「レンガ造文化財の劣化と保存対策（海外の事例）」
 国際文化財保存修復協力センター 西浦忠輝
 13：30～14：10 「歴史的環境における煉瓦建造物の構造補強」 京都府舞鶴土木事務所 矢谷明也
 14：10～14：50 「タイ国アユタヤ遺跡におけるレンガの劣化現象」
 国際文化財保存修復協力センター 朽津信明
 保存科学部 石崎武志
 14：50～15：30 「古代イランの日干しレンガの透水特性と劣化現象
 一日干しレンガの物性試験法の基準化を目指して」 埼玉大学教授 渡辺邦夫
 15：45～16：45 総合討議（センター）
 16：45～16：50 閉会挨拶（所長）

2) 国際文化財保存修復研究会

目 的

人類共通の遺産である文化財を守るためには、国家、民族を越えて保存修復に当たらなければならず、国際協力は不可欠である。世界、特にアジア地域の文化遺産の保存修復のために日本が果たすべき役割は大きく、海外の文化財の調査研究、保存修復事業への協力が多く行われている。しかし、社会体制、経済状況等が異なる中で文化遺産の保存修復を行う際には、様々な問題に直面しているのが現状である。

本研究会は、海外の文化財の調査研究、保存修復事業に携わるさまざまな分野の国内の専門家を招き、文化財保存修復の国際協力事業に関するさまざまな問題点について議論し、その解決に向けて方策を探ることを目的とする。また、本研究会は情報ネットワーク構築の一環としても位置づけている。

なお、平成10年度は第4回、第5回の研究会を実施した。

第4回国際文化財保存修復研究会

日 時：平成10年9月29日(火)

10：30～17：35

会 場：国立教育会館社会教育研修所・3階視聴覚研修室

出席者数：約75名

内 容

「中国・交河故城の保存修復協力の経緯、現状、問題点」

(株)文化財保存計画協会 矢野和之

「ヴェトナム・チャンパ王国遺跡の保存修復の経緯、現状、問題点」

日本大学 重枝 豊

「インドネシア・バンテン遺跡の保存修復の経緯、現状、問題点」

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 坂井 隆

総合討議

第5回国際文化財保存修復研究会

日 時：平成11年2月3日(水)

10：15～17：45

会 場：国立教育会館社会教育研修所・3階視聴覚研修室

出席者数：約80名

内 容

「グアテマラ・カミナルフユ遺跡及びエルサルバドル・チャルチュアバ遺跡の保存修復の経緯、現状、問題点」

京都外国語大学 大井 邦 明

「ホンジュラス、エル・プエンテ遺跡及びラス・ピラス遺跡の保存修復の経緯、現状、問題点」

ホンジュラス国立人類学歴史学研究所・ラス・ピラス遺跡調査団 中村 誠 一

「チリ・イースター島モアイ像の保存修復協力の経緯、現状、問題点」 奈良国立文化財研究所 沢田 正 昭

「メキシコにおける考古学と遺跡の保存；歴史と現状」

京都外国語大学 大井 邦 明

総合討議

3) 民俗芸能研究協議会

第一回 復活と継承

目 的

伝統文化を再評価する風潮が一般的となっている今日、地味ではあるがその発生の時代が古く、文化財として価値の高い民俗芸能が、伝承地の過疎や高齢化、少子化の波の中で、その継承保存が困難となっている。それらの中から重要無形民俗文化財、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財ほか、伝承の危機に直面しているながら継承に尽力している下記の16団体の代表者によって、それぞれの報告とその対策等について研究協議会を行い、現地における今後の継承発展に寄与することを目的とする。

開催日程

〈第1日〉

日 時 1999. 3.12(水)
10:00~17:00
会 場 東京国立博物館資料館セミナー室

〈第2日〉

日 時 1999. 3.12(水)
10:00~17:00
会 場 江戸東京博物館ホール

事例発表保護団体

- 01 王子田楽衆（東京都北区王子）
- 02 神沢田楽保存会（静岡県天竜市神沢）
- 03 永井大念仏剣舞保存会（岩手県盛岡市永井）
- 04 中宿糸操燈籠人形保存会（群馬県安中市中宿）
- 05 柏崎市綾子舞保存振興会（新潟県柏崎市）
- 06 寺野伝承保存会〈遠江のひよんどりとおくない〉（静岡県引佐郡引佐町波川寺野）
- 07 懐山おくない保存会〈遠江のひよんどりとおくない〉（静岡県天竜市懐山）
- 08 題目立保存会（奈良県山辺郡都祁村）
- 09 竹崎観世音寺修正会鬼祭保存会（佐賀県藤津郡太良町）
- 10 成仏寺修正鬼会保存会（大分県東国東郡国東町大字成仏）
- 11 岩戸寺修正鬼会保存会（大分県東国東郡国東町大字岩戸寺）
- 12 諸鈍芝居保存会（鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍）
- 13 与那国民俗芸能保存会（沖縄県八重山郡与那国町）
- 14 秋田万歳保存会（秋田県秋田市飯島）
- 15 物部いざなぎ流神楽保存会（高知県香美郡物部村）
- 16 巖原町盆踊保存会（長崎県下県郡巖原町）

アドバイザー

植 木 行 宣 須 藤 武 子 姫 田 忠 義 懸 田 弘 訓 武 井 正 弘

事例発表（実演者）柏崎市綾子舞保存振興会

成 果

それぞれの代表者が、伝承上の当面している問題点と、その解決策について事例報告を行った。報告者のほとんどに共通する問題点は、地域の過疎化、高齢化、少子化の進行による後継者難であり、それぞれが精一杯の努力を続けているが、効果的な成果を出せないでいるという内容であった。その他には、次のような報告があった。

- ・復活・継承には、強力な指導者の出現が不可欠である。

- ・次回の上演の参考資料となる記録を作成する。
- ・伝承者・行政・地域の事情に通じたコーディネーター的な存在が必要である。
- ・伝承地の事情に合致した変容の理論を確立しなければ、復活・継承は不可能である。

これらの諸問題に対して、解決策を見いだす場にはならなかったが、急遽研究を重ねていかなければならない事態であることだけははっきりした。なお、現在、報告書を準備中である。

担 当

星 野 紘 中 村 茂 子

4) 近代の文化遺産保存研究会

近代の文化遺産の保存に関する要請が増加している。これらは従来の文化財保存修復の仕事の中では、あまり関わることのなかった材質の物が数多く含まれている。

今回はそれらの材料の中で明治建築の特徴的な材料としての煉瓦を取り上げることにした。煉瓦の保存は、外国においても使用例が多く、国際的にも保存に関わる要請の多い材料である。煉瓦に関わる様々な分野の専門家を招請し、煉瓦に関する基礎的な情報交換を行い、今後の煉瓦建造物の保存について議論を行った。

主 題 近代の文化遺産保存研究会
—煉瓦の保存について—

日 時 1998 (平成 10) 年 6 月 29 日(月)
13:00~17:00

会 場 東京国立文化財研究所別館会議室
参加者数 30 名

プログラム

赤煉瓦の造り方と品質について	(株)クレー・バーン・セラミックス	居 上 英 雄
我が国における煉瓦の歴史と煉瓦造建造物について	金沢学院大学	水 野 信太郎
我が国における赤煉瓦製造史とホフマン窯について	栃木県小山高校	熊 倉 一 見
舞鶴市における煉瓦造建造物の活用の現状について	舞鶴市立赤れんが博物館館長	黒 田 悠 三
我が国における煉瓦造建造物の保存修復について	文化庁建造物課	大 和 智
煉瓦の劣化について	東京国立文化財研究所	朽 津 信 明
岩石の風化ポテンシャルおよび風化度の評価	筑波大学	松 倉 公 憲

(4) 研究会・講演会など

1) 総合研究会

総合研究会では毎年4、6、10、12、2月に各部・センターが順番に研究発表を行っている。

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名
98. 4. 14	後期印象派受容の諸相	美術部	田 中 淳
98. 6. 9	「民俗芸能」復活再成の努力	芸能部	星 野 紘
98. 11. 10	在欧州日本美術品の現状 —特に漆芸品を中心として—	修復技術部	加 藤 寛
98. 12. 8	蛍光 X 線分析法による文化財資料の分析 —その特徴と問題点—	保存科学部	早 川 泰 弘
99. 2. 9	神護寺蔵「伝源頼朝像」が提起するいくつかの問題	情報資料部	米 倉 迪 夫

2) 美術部・情報資料部

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名
98. 4. 15	芝山・観音教寺所蔵「施餓鬼図」について	美術部	中 野 照 男
98. 5. 27	近代における屏風と金地表現	美術部	塩 谷 純
98. 5. 27	近代日本画における点描法 —今村紫紅を中心に—	東京国立博物館	古 田 亮
98. 6. 17	中国・明時代の仏伝図—鹿児島県歴史資料 センター黎明館本をめぐって—	情報資料部	井 手 誠之輔
98. 7. 8	東寺兜抜毘沙門天像—伝説の系譜—	美術部	岡 田 健
98. 7. 22	チベット仏教美術を訪ねて	美術部	中 野 照 男
98. 9. 16	古賀春江と機械の眼	美術部招へい研究員・石橋美術館	杉 本 秀 子
98. 11. 4	視覚による勝利 —日本近世初期物語絵画における日中 関係の表象と絵画メディアの役割—	情報資料部招へい研究員・ハイデルベル グ大学	メ ラ ニ ー ・ ト レ ー デ
98. 11. 11	—五世紀の親鸞聖人絵伝が教えてくれるこ と	情報資料部招へい研究員・神戸市看護大 学	泉 万 里
98. 12. 16	雪舟筆「秋冬山水図」について	情報資料部	島 尾 新
99. 1. 20	東福寺所蔵の肖像画について	情報資料部招へい研究員・京都国立博物 館	山 本 英 男
99. 1. 20	東福寺の明兆系作品について	情報資料部招へい研究員・山口県立美術 館	福 島 恒 徳
99. 2. 17	翻訳・紹介・感想 木村荘八	美術部	田 中 淳
99. 2. 17	竹喬研究の課題と現状 —「竹喬」落款の変遷を中心として—	美術部招へい研究員・笠岡市立竹喬美術 館	上 蘭 四 郎
99. 3. 3	四川省の仏教彫塑	美術部	岡 田 健
99. 3. 3	仏教荘嚴美術の構成要素に関する一提言	美術部招へい研究員・中京女子大学	安 藤 佳 香
99. 3. 10	建築史誕生から東洋建築史へ —「法隆寺建築論」の二重性とその帰趨—	神戸芸術工科大学	青 井 哲 人
99. 3. 10	日本建築における近世と近代・史的立場と 技術的立場の間	早稲田大学理工総研	中 谷 礼 仁
99. 3. 17	鑑真和上と仏像	美術部招へい研究員・奈良国立博物館	井 上 一 稔
99. 3. 24	Symbol and Substance —アメリカで日本の漆工芸を紹介する—	美術部招へい研究員・ハーバード大学サッ クラー美術館	ア ン ・ ロ ー ズ ・ キ タ ガ ワ

3) 芸 能 部

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名
98. 10. 15	祭祀演劇について —目連戯を例にあげながら—	川劇学会	張 中 学
99. 1. 26	上方歌舞伎の伝承について	歌舞伎プロデューサー	中 川 芳 三
99. 2. 23	マルチメディア時代の芸能研究のための著 作権入門 —芸能研究に映像・画像などを利用する ときの注意点—	日本俳優協会	浅 原 恒 男
99. 3. 12	ハンティ族の熊祭りと芸能Ⅰ	オベコ・ウゴルスキー民族文化研究所	モ ル ダ ノ フ ・ ティ モ フ ェ イ
99. 3. 18	ハンティ族の熊祭りと芸能Ⅱ	オベコ・ウゴルスキー民族文化研究所	モ ル ダ ノ バ ・ タ チ ア ー ナ

4) 保存科学部

研究会「展示ケースの今後の課題」

日時：平成10年7月3日(金) 13:30~17:00

会場：東京国立文化財研究所 別館会議室

展示資料の被害事例

東京芸術大学大学院 小瀬戸 恵 美

国立歴史民俗博物館エアタイト展示ケース内の状況

東京国立博物館 神庭 信 幸

上野の森美術館『比叡山名宝展』における展示指導の内容

上野の森美術館 石塚 春 夫

建材の環境汚染能試験と文化財への影響試験の思案

東京国立文化財研究所 佐野 千 絵

総合討論

研究会「他機関との研究協力および連携」

日時：平成11年2月19日(金) 13:30~17:00

会場：東京国立文化財研究所 別館会議室

本研究会の成果と今後

東京国立文化財研究所 佐野 千 絵

最新技術情報

免震技術の現状

東京国立文化財研究所 三浦 定 俊

窒素ガス消火設備の現状

東京国立文化財研究所 佐野 千 絵

相互研究協力のあり方について

文化財保存活動

群馬県立歴史博物館 岡部 央

記録史料保存と文化財保存

一相互の研究協力のあり方と今後の展開一

国文学研究資料館史料館 青木 睦

京都府における文化財施設の保存公開について

京都府教育庁 石川 登志雄

総合討論

研究会「石造文化財、レンガ建造物の凍結劣化と塩類風化のメカニズム」

主催：東京国立文化財研究所

日時：平成10年11月17日(火) 13:00~17:00

会場：東京国立文化財研究所 別館会議室

石造文化財の劣化に対する多孔質内の水分・塩分移動の影響

東京国立文化財研究所 石崎 武 志

多孔質中の水分・移動のシミュレーション

米国塩類研究所 ユッカ・シムネック

砂質土壌への水分・塩分移動シミュレーションの適用

鳥取大学乾燥地域研究センター 井上 光 弘

佐賀大学農学部 取出 伸 夫

寒冷地における歴史的土建造物の保存対策：史跡志波城(しわじょう)跡の事例

鴻池組技研 武田 一 夫

土壌中における水分・熱・塩分の連結移動シミュレーション

岩手大学農学部 登尾 浩 助

石造文化財中の塩分、水分移動シミュレーション

東京国立文化財研究所 石崎 武 志

米国塩類研究所 ユッカ・シムネック

三重大学生物資源学部 溝口勝・槻瀬誠

総合討論

研究会「地球規模の気候変動と文化財の保存」

主催：東京国立文化財研究所

日時：平成11年2月5日(金) 13:30~17:00

会場：東京国立文化財研究所 別館会議室

気候環境変動がアジアの遺跡に与える影響について
過去1万年のアジアでの気候変動について
地球規模の気候変動の予測について
地球温暖化に伴う地域気候変化を予測する技術
総合討論

東京国立文化財研究所 石 崎 武 志
奈良女子大学 木 村 圭 司
国立環境研究所 高 田 久 美 子
電力中央研究所 加 藤 央 之

* IPM ワークショップ

博物館・美術館等における虫害の総合防除管理 (IPM)

日 時：平成10年6月22日(月)～6月23日(火)

場 所：6月22日 東京国立文化財研究所 別館会議室
6月23日 群馬県立歴史博物館

6月22日(月) 東京国立文化財研究所 別館会議室

開会挨拶

IPM についての概説

害虫の同定とモニタリング

東京国立文化財研究所 三 浦 定 俊

イギリス害虫コンサルタント David Pinniger

David Pinniger

(以上、テープとスライド)

国立民族学博物館における食害性昆虫の生物調査

—その歴史と現状そして課題—

わが国における薬剤を用いた防除法の現状

薬剤を用いない防除法

討 議

大英博物館と Victoria & Albert 博物館における IPM の実例

David Pinniger

(テープとスライド)

討 議

6月23日(火) ケーススタディ 群馬県立歴史博物館

開会挨拶

群馬県立歴史博物館の虫菌害防除対策について

施設見学

討 議

閉 会

群馬県立歴史博物館 唐 沢 至 朗

* 生物被害防除 特別研究研究会 文化財生物被害防除の今後

日 時：平成10年12月14日(月) 11:00～17:00

場 所：東京国立文化財研究所 別館会議室

博物館・美術館等の生物被害のモニタリングの具体的方法と現状

イカリ消毒エンジニアリングセンター 川 越 和 四

風土に応じたマネジメントの再考(仮題)

石川県立歴史博物館 長谷川 孝 徳

美術館の実態調査アンケートから

ブリヂストン美術館 田 中 千 秋

温度処理法：文化財材質への影響の見地からのレビュー

東京国立文化財研究所 石 崎 武 志

脱酸素法等代替殺虫法の研究経過報告

東京国立文化財研究所 木 川 り か

討 議

5) 「大学と科学」公開シンポジウム

文部省の平成10年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「研究成果公开发表(A)」(代表者 渡邊明義)を受けて、公開シンポジウムを実施した。発表された研究成果は主に、文部省科学研究費補助金(国際学術(共同研究))「漆・ニス等伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存に関する研究」(1993～95年度)および「文化財の微量試料分析法の開発」(1996～98年度)によるものである。

名 称 第13回「大学と科学」公開シンポジウム
「海を渡った文化財—様々なすがたとわざ」

日 時 1999(平成11)年1月30日(土)～31日(日)

会 場 朝日ホール(有楽町マリオン11階)

参加者数 530名

趣 旨

過去、異国から来た文化財がそれぞれの国の文化の中で、どのように受け取られたか正確に知ることは、わが国が国際交流を進めていく上で重要なことである。周囲を海に囲まれたわが国には古来から海を渡って様々な文化財がもたらされ、あるいは遠く運ばれて異文化との交流の担い手となってきた。しかし歴史の表舞台に現れたものはごく一部で、時が経つとともに多くは忘れられ、現在劣悪な保存環境下におかれている。それらの文化財に科学の光を当てて保存と修復を考え、シンポジウム参加者とともに文化財が国際交流の上で果たした役割を再認識する。

プログラム

第1日 1月30日(土)

挨 拶

第13回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員長 増 本 健
文部省学術国際局研究助成課長

基調講演

司 会	東京国立文化財研究所 宮 本 長二郎
文化財と国際交流	東京国立文化財研究所 渡 邊 明 義

特別講演

司 会	東京国立文化財研究所 中 野 照 男
ドイツの中の日本文化	ボン大学 ヨーゼフ・クライナー

一般講演

司 会	長岡造形大学 牛 川 喜 幸
研究の始まり—忘れられた塗りの技術—	東京国立文化財研究所 三 浦 定 俊
海外で漆器を探す	東京国立文化財研究所 加 藤 寛
司 会	浦添市美術館 宮 城 篤 正
ドイツで見つけた琉球漆器	那覇市経済文化部 宮 里 正 子
輸出漆器と東インド貿易	国立歴史民俗博物館 日 高 薫
司 会	奈良国立文化財研究所 沢 田 正 昭
小さなかけらで漆を同定する	明治大学 宮 腰 哲 雄
漆を切ると何がわかるか	京都造形芸術大学 岡 田 文 男

第2日 1月31日(日)

一般講演

司 会	東京国立文化財研究所 米 倉 迪 夫
海外の日本美術品の修復	東京国立文化財研究所 増 田 勝 彦

海外の浮世絵を修復する
 海外の漆器を修復する
 司 会
 三角縁神獸鏡ワシントンに眠る
 弾圧をくぐり抜けたキリシタン絵画
 司 会
 故郷に錦を飾った金唐革紙
 南蛮渡来の鋳山技術

山領絵画修復工房 山 領 ま り
 漆芸家 北 村 昭 斎
 奈良国立文化財研究所 工 楽 善 通
 奈良国立文化財研究所 村 上 隆
 東京国立博物館 神 庭 信 幸
 東京国立文化財研究所 三 浦 定 俊
 兵庫県教育委員会 村 上 裕 道
 国立科学博物館 鈴 木 一 義

2日間で530名の参加者があり、東西の文化の狭間でできた文化財を新たな文化として見直し、その保存を考えていく姿勢が大切だということ、その保存修復は、一国の伝統的な考え方や一部の専門家だけで決めるのではなく、材質の科学的調査、渡来から現在に至るまでの履歴の調査等に基づいて進められるべきであることなどが、それぞれの立場からわかりやすく解説された。

第13回「大学と科学」公開シンポジウム 報告書

第13回
大学と科学
公開シンポジウム
 明日の文化と産業を支える抜群的・最先端的研究の成果

先導材料の展開——希土類のすべて
 パーチャルリアリティ——人工現実感と人間のかかわり
 生き物の形づくり
 海を渡った文化財——埋めかたとわざ

遺伝子で生物の進化を尋ねる
 遺伝子産物(タンパク質)の形を調べる——構造生物学とは何か？
 検索・日本列島——自然ヒト、文化のルーツ
 生きている地球の新しい見方——地球・生命・環境の共通化

◆参加費—無料 ◆お問い合わせ—文部科学省国際学術情報課 ☎03-3581-4211 内線2501

第13回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会

第13回「大学と科学」公開シンポジウム
海を渡った文化財
様々なすがたとわざ

【開催日】平成11年1月30日(土)～31日(日)
 【会 場】朝日ホール/千代田区有楽町2-5-1 有楽町マリオン11F

平成11年1月30日(土)10:00～17:00
 A 開会式(10:00～10:15)
 B 特別講演(10:30～10:50)
 C 特別講演(10:50～11:30)
 D 一般講演(12:00～14:00)
 E 一般講演(14:00～15:00)
 F 一般講演(15:30～17:00)

平成11年1月31日(日)10:00～16:30
 G 一般講演(10:00～12:15)
 H 一般講演(13:30～14:50)
 I 一般講演(17:00～18:30)

◆参加費—無料 ◆お問い合わせ—文部科学省国際学術情報課 ☎03-3581-4211 内線2501

2. 調査指導など

(1) 所外経費による調査指導

公費・文部省科学研究費補助金・受託研究費などの所内の経費によらずに調査指導を行った事例は下記の通りである。

氏名	調査先	目的
青木 繁 夫	栃木県埋蔵文化財センター	栃木県市町村埋文職員研修講師
青木 繁 夫	千葉県加曾利貝塚博物館	千葉県博物館協会研究会講師
青木 繁 夫	群馬県月夜野町	史跡・矢瀬遺跡整備指導
青木 繁 夫	鹿児島市尚古集成館	尚古集成館所蔵文化財調査
青木 繁 夫	埼玉県吉見町	埼玉県指定「宝篋印塔」の調査
青木 繁 夫	岩手県立博物館	重文・蒔前遺跡出土品修理委員会出席
青木 繁 夫	檀原考古学研究所	重文・天神山古墳出土品修理委員会出席
青木 繁 夫	千葉県文化財センター	保存修復体制整備の指導
青木 繁 夫	群馬県月夜野町	史跡・矢瀬遺跡保存整備委員会出席
青木 繁 夫	奈良高松塚古墳	高松塚古墳壁画保存点検作業
青木 繁 夫	宮崎県西都原古墳	横穴墓保存処理指導
石崎 武 志	長野県辰野美術館	収蔵品の保存環境に関する調査
石崎 武 志	福島県柳津町	银山跡の煉瓦煙突の保存に関する調査
石崎 武 志	和泉市久保惣記念美術館	収蔵品の保存環境に関する調査
石崎 武 志	京都国立博物館	指定文化財企画展示セミナーの講師
石崎 武 志	東村山市ふるさと歴史館	東村山市ふるさと歴史館環境調査
井手 誠之輔	奈良国立博物館	奈良国立博物館所蔵及び寄託中国絵画の調査
井手 誠之輔	京都国立博物館	南宗仏画の調査研究
大久保 政 博	アメリカ	在外日本古美術品修復協力事業事前調査
大久保 政 博	ドイツ	在外日本古美術品修復協力事業事前調査
岡田 健	中国	中国陝西省唐代石窟造像の調査研究
岡田 健	京都国立博物館	京都国立博物館所蔵の中国石仏の調査
岡田 健	東北大学	東北大学所蔵河口慧海コレクションの調査
加藤 寛	アメリカ	在外日本古美術品修復協力事業絵画等損傷調査
加藤 寛	京都国立博物館	法界寺壁画修復について調査打合せ
加藤 寛	岩手県中尊寺	中尊寺保管の漆工品調査
加藤 寛	那覇市教育委員会	尚家関係資料調査
加藤 寛	奈良国立博物館	奈良国立博物館買い取り協議会出席
加藤 寛	ドイツ・イギリス	在外日本古美術品修復協力事業事前調査
加藤 寛	岩手県中尊寺	中尊寺金色堂保存環境調査
加藤 寛	高知県文化環境部	土佐山内家宝物館資料購入審査委員会出席
加藤 寛	岩手県中尊寺	奥州藤原文化圏の美術工芸品の総合的調査研究

氏名	調査先	目的
川野邊 渉	京都国立博物館	法界寺の修復材料の検討
川野邊 渉	国立民族学博物館	共同研究会出席
川野邊 渉	国立民族学博物館	共同研究会出席
川野邊 渉	国立民族学博物館	共同研究会出席
川野邊 渉	京都国立博物館	法界寺の修復技術の検討
川野邊 渉	鹿児島市尚古集成館	尚古集成館所蔵文化財調査
川野邊 渉	茨城県立歴史館	一橋徳川家銅製品の修復調査
川野邊 渉	国立民族学博物館	共同研究会出席
川野邊 渉	長崎市英国領事館ほか	煉瓦建造物の劣化調査
川野邊 渉	和歌山市東照宮	彩色剥落止めの指導
川野邊 渉	京都国立博物館	装潢材料の調査
川野邊 渉	大分県臼杵市	磨崖仏保存修理に関する指導
川野邊 渉	国立民族学博物館	共同研究会出席
木川りか	自治労会館	文化財虫菌害保存対策研修会講師
木川りか	群馬県立歴史博物館	第17回文化財保存研修会講師
木川りか	奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究保存科学
朽津信明	北海道余市町	史跡・フゴッペ洞窟保存調査委員会出席
朽津信明	京都国立博物館	法界寺の修復材料の検討
朽津信明	北海道余市町	史跡・フゴッペ洞窟保存に係る照明影響調査に伴う指導
朽津信明	北海道余市町	史跡・フゴッペ洞窟保存に係る土壌水分計設置に伴う指導
朽津信明	北海道余市町	史跡・フゴッペ洞窟保存調査委員会出席
朽津信明	平塚市薬師院	寺院壁画修復のための絵具層等の分析
朽津信明	北海道余市町	史跡・フゴッペ洞窟照明影響調査に係る現地調査
朽津信明	大分県臼杵市	磨崖仏保存修理に関する指導
朽津信明	熊本県相良村	十島菅原神社の保存修復に関する技術指導
佐野千絵	奈良市川島織物・古梅園	古美術研究旅行の引率
佐野千絵	アサヒビール大山崎山荘美術館	保存環境調査及び指導
佐野千絵	国立公文書館第二新館	保存環境調査
佐野千絵	愛媛県美術館	保存環境調査
佐野千絵	埼玉県立博物館	博物館学芸員等実務研修会（埼玉県）講師
佐野千絵	石川県立美術館	共同研究「博物館資料の保存環境」研究会出席
佐野千絵	大分県立歴史博物館ほか	博物館・美術館の保存環境調査
佐野千絵	福島県立博物館	国立歴史民俗博物館共同研究による研究会出席
佐野千絵	国立民族学博物館	標本資料の保存に関する指導・助言
佐野千絵	秋田市千秋美術館	美術館の保存環境調査
佐野千絵	群馬県立歴史博物館	第17回文化財保存研修会講師
塩谷純	岡山県成羽町美術館	黒田清輝巡回展作品撤収指導

氏名	調査先	目的
塩谷 純	郡山市立美術館	国立博物館・美術館巡回展の作品展示指導
塩谷 純	郡山市立美術館	国立博物館・美術館巡回展の作品撤収指導
島尾 新	山口県立美術館	雪舟研究会出席
島尾 新	静岡大学農学部藤枝農場	歴史系資料の基礎情報解析モデルに関する研究会出席
島尾 新	大和文華館ほか	中国元代絵画・日本仏教絵画の調査
島尾 新	山口県立美術館	雪舟研究会及びシンポジウム参加
島尾 新	鹿児島市立美術館ほか	雪舟研究会出席
島尾 新	静岡大学	歴史的絵画資料情報の分析とモデル化に関する調査
島尾 新	徳川美術館	源氏物語絵巻の調査
高桑 いづみ	名古屋市鈴木理之氏宅ほか	小鼓修理製作の実態調査ほか
高桑 いづみ	京都市八幡内匠宅ほか	能管製作修理の実態調査
田中 淳	岡山県成羽町美術館	黒田清輝巡回展に伴う講演会講師
中野 照 男	四街道市教育委員会	四街道市文化財審議会出席
中野 照 男	奈良国立博物館	奈良国立博物館陳列品買取協議会出席
西浦 忠輝	インド	アジャータ・エローラ保存整備計画諮問国際専門家会議出席
西浦 忠輝	大分県宇佐市、臼杵市	石造文化財保存調査
野久保 昌良	岩手県中尊寺	奥州平泉文化圏の美術工芸品に関する調査撮影
野久保 昌良	徳川美術館	源氏物語絵巻の撮影
早川 泰弘	奈良東大寺	金銅八角燈籠の調査
早川 典子	京都国立博物館	法界寺の修復材料の検討
早川 典子	京都国立博物館	法界寺壁画修復について調査打合せ
早川 典子	高松塚古墳	高松塚古墳壁画保存点検作業
平尾 良光	ペルー	クントウル・ワシ遺跡の発掘調査
平尾 良光	トルコ	アナトリア遺跡出土の銅・青銅製品の調査
平尾 良光	奈良東大寺	金銅八角燈籠の調査
平尾 良光	福岡大学	青銅器の調査
平尾 良光	福岡大学	弥生時代青銅器の調査
平尾 良光	佐賀県教育委員会	弥生時代青銅器の調査
星野 紘	中国	中国雲南省少数民族の基層文化の調査研究
星野 紘	山形市	国際民俗芸能フェスティバル山形公演開催指導
星野 紘	高知県須崎市	国際民俗芸能フェスティバル高知公演開催指導
星野 紘	沖縄県宮古市	国際民俗芸能フェスティバル沖縄公演開催指導
星野 紘	沖縄県那覇市	中国雲南省少数民族の基層文化調査研究会出席
星野 紘	札幌市アイヌ民族文化研究センター	北海道アイヌ民族文化資料調査収集
星野 紘	中国	国際民俗芸能フェスティバル招へい芸能事前調査
星野 紘	山形市	国際民俗芸能フェスティバル山形公演開催指導

氏名	調査先	目的
増田 勝彦	京都国立博物館	京都国立博物館文化財保存修理所運営委員会出席
増田 勝彦	アメリカ	在外日本古美術品修復協力事業絵画損傷調査
増田 勝彦	京都国立博物館	法界寺壁画修復について調査打合せ
増田 勝彦	京都国立博物館	平成10年度国宝修理装潢師連盟定期研修会講師
増田 勝彦	埼玉県立文書館	平成10年度文書資料取扱い講習会の講師
増田 勝彦	奈良国立博物館	文化財修理施設新宮に関する関係者会議出席
松本 修自	奈良国立文化財研究所	研究打合せ
松本 修自	奈良国立文化財研究所	木造建造物の保存修復の在り方と手法に関する研究会出席
松本 修自	松山市史跡来住廃寺跡	史跡来住廃寺跡調査に伴う現地指導
三浦 定俊	滋賀県立琵琶湖文化館	保存環境調査指導
三浦 定俊	イタリア	イクロム財政事業計画委員会ほか出席
三浦 定俊	奈良県法隆寺	百済観音堂及び東西宝蔵環境調査
三浦 定俊	市ヶ谷自治労会館	文化財虫菌害保存対策研修会講師
三浦 定俊	鹿児島県隼人町	史跡隼人塚整備保存のための指導
三浦 定俊	北海道余市町	フゴッペ洞窟保存調査委員会出席
三浦 定俊	長崎県立美術博物館	九州博物館協議会研修会出席
三浦 定俊	イタリア	イクロム財政事業計画委員会、理事会出席
三浦 定俊	イタリア	アッシジ震災文化財修復協力
三浦 定俊	国立民族学博物館	標本資料の保存に関する指導助言
三浦 定俊	奈良県高松塚古墳	高松塚古墳壁画保存点検作業
宮本 長二郎	滋賀県守山市	下之郷遺跡現地指導
宮本 長二郎	トルコ	ゴールディオン MM 古墳の状況と腐朽調査
宮本 長二郎	青森市三内丸山遺跡	三内丸山遺跡発掘調査委員会出席
宮本 長二郎	北海道小樽市ほか	縄文時代におけるストーンサークル及び関連記念物の設計とランドスケープ研究会出席及び関連遺跡調査
宮本 長二郎	三重県埋蔵文化財センター	六大 A 遺跡出土木製品の調査指導
宮本 長二郎	三重県埋蔵文化財センター	三重県内出土木製品の調査
宮本 長二郎	松本市教育委員会	史跡松本城整備研究会出席
宮本 長二郎	山形県天童市	史跡西沼田遺跡整備検討委員会出席
宮本 長二郎	群馬県伊勢崎市ほか	埋蔵文化財発掘調査の指導助言
宮本 長二郎	新潟県朝日村教育委員会	奥三面遺跡群の調査指導
宮本 長二郎	青森市三内丸山遺跡	三内丸山遺跡発掘調査現地指導
宮本 長二郎	長崎県壱岐郡石田町	原の辻遺跡保存整備委員会出席
宮本 長二郎	相生市教育委員会	感状山城跡整備委員会出席
宮本 長二郎	佐賀県鎮西町ほか	考古学発掘資料による建物の復原方法に関する研究
宮本 長二郎	栃木県南河内町教育委員会	下野薬師寺跡保存整備委員会出席
宮本 長二郎	群馬県北橋村ほか	波志江中屋敷東遺跡出土木材の調査指導

氏名	調査先	目的
宮本 長二郎	新潟県朝日村教育委員会	奥三面遺跡群の調査指導
宮本 長二郎	福岡市教育委員会	吉武高木遺跡調査指導委員会出席
宮本 長二郎	長崎県壱岐郡芦辺町	原の辻遺跡保存整備委員会出席
宮本 長二郎	国立歴史民俗博物館	重要歴史資料の情報収集に関する研究会出席
宮本 長二郎	青森市三内丸山遺跡	三内丸山遺跡発掘調査委員会出席
山梨 絵美子	岡山県成羽町美術館	黒田清輝巡回展展示指導
渡邊 明義	滋賀県守山市	国際文化交流サミット'98 パネルディスカッション出席
渡邊 明義	国立歴史民俗博物館	第35回国立歴史民俗博物館評議委員会出席

(2) その他の調査指導

1) 文化財の材質に関する調査

金属製文化財を中心に、その材質の化学組成、さびの組成、さらには材料の産地推定等に関する調査を行った。

総依頼件数 47件 310 試料

分析内容内訳 (1 試料当たり複数箇所分析あり)

蛍光 X 線分析 (XRF) 約 300 測定

鉛同位体比測定 (PBIR) 約 300 測定

X 線回折分析 (XRD) 約 10 測定

依頼元および調査対象は下記の通りである。

(1)	1998.04	東京都東村山市	「瓦塔片」1点	(XRF)
(2)	1998.04	東京国立博物館	「巴型銅器」4点	(PBIR)
(3)	1998.04	東京国立博物館	「揺銭樹試料」7点	(PBIR)
(4)	1998.04	東京国立博物館	「銅鏡」7点	(XRF, PBIR)
(5)	1998.04	富士通(株)	「鉛鉱石他」6点	(PBIR)
(6)	1998.05	東京国立博物館	「鍔試料」	(XRF)
(7)	1998.06	天草郷土資料館	「鐘」	(PBIR)
(8)	1998.06	東京国立博物館修理室	「馬具」20点	(PBIR)
(9)	1998.06	東京芸術大学	「近世ブロンズ像破片」2点	(XRF)
(10)	1998.06	東京国立博物館	「瓦塔片」5点	(XRF)
(11)	1998.07	東京国立博物館	「銅鏡」1点	(XRF, PBIR)
(12)	1998.07	岡山県教育委員会	「出土銅製品」15点	(XRF, X 線顕微鏡, PBIR)
(13)	1998.07	東京国立博物館	「銅剣」1点	(XRF, PBIR)
(14)	1998.07	茨城県結城郡千代川村	「出土銅製品」4点	(XRF, PBIR)
(15)	1998.08	東京国立博物館	「銅鏡」3点	(XRF, PBIR)
(16)	1998.08	東京国立博物館修理室	「馬具」10点	(PBIR)
(17)	1998.08	馬の博物館	「馬具他」15点	(XRF, PBIR)
(18)	1998.08	佐世保市教育委員会	「金銅仏」1点	(XRF, γ 線透過)
(19)	1998.09	埼玉県大里郡岡部町	「鉄製甲」1点	(XRF, ICP)
(20)	1998.09	辰馬考古資料館	「銅鏡」1点	(XRF, ICP, PBIR)
(21)	1998.10	山口県柳井市教育委員会	「玉製品」4点	(XRF)
(22)	1998.11	東京国立博物館修理室	「漆工彩色製品」	(XRF)
(23)	1998.11	東京国立博物館	「水瓶」	(XRF)
(24)	1998.11	元興寺文化財研究所	「銅鏡」1点	(XRF, ICP, PBIR)
(25)	1998.11	中近東文化センター	「カマン・カレホユック出土金属製品」50点	(XRF, PBIR)
(26)	1998.11	個人蔵	「銅製仏像」	(XRF)
(27)	1998.11	佐賀県吉野ヶ里遺跡発掘事務所	「銅鐸試料」1点	(XRF, PBIR)
(28)	1998.12	国立歴史民俗博物館	「青銅塊」2点	(ICP, PBIR)
(29)	1998.12	国立歴史民俗博物館	「青銅製品」5点	(ICP, PBIR)
(30)	1998.12	茨城県結城郡千代川村	「出土銅製品」4点	(XRF, ICP, PBIR)
(31)	1998.12	東京国立博物館	「新沢 126 号墳出土遺物」10点	(XRF, PBIR)
(32)	1998.12	文化庁	「東大寺八角灯籠」40点	(PBIR)

(33)	1999.01	東京国立博物館修理室	「鎧破片」1点	(XRF, PBIR)
(34)	1999.01	愛知県埋蔵文化財センター	「銅鍍」1点	(XRF, PBIR)
(35)	1999.02	東京国立博物館修理室	「漆工金銀飾製品」1点	(XRF)
(36)	1999.02	東京国立博物館修理室	「漆工金銀飾製品断片、黄色顔料他」8点	(XRF, XRD)
(37)	1999.02	修復技術部	「漆工製品金飾製品」1点	(XRF)
(38)	1999.03	国立歴史民俗博物館	「銅鐸」1点	(PBIR)
(39)	1999.03	鹿児島市教育委員会	「擬宝珠」1点	(XRF, PBIR)
(40)	1999.02	東京国立博物館修理室	「出土銅製品」3点	(PBIR)
(41)	1999.03	国立歴史民俗博物館	「銅鐸」1点	(PBIR)
(42)	1999.03	東京国立博物館修理室	「馬具他」18点	(PBIR)
(43)	1998.06	中国社会科学院	「銅さび」2点	(XRD)
(44)	1998.11	文化庁	「青銅製仏像」1点	(XRF)
(45)	1998.12	日本銀行金融研究所	「銀貨表面さび」3点	(XRF)
(46)	1999.02	醍醐寺	「青銅製塔鈴」1点	(XRF, X線透過)
(47)	1999.03	東京国立博物館	「弥生時代銅製品」40点	(PBIR)

2) 美術館・博物館等館内の環境調査

国宝・重要文化財などの指定品および東京国立博物館収蔵資料の借用に関して館内環境調査を行い、報告書を作成・提出した。(三浦・佐野・石崎)

茨城	国立公文書館つくば分館	大阪	泉南市埋蔵文化財センター
埼玉	さいたま川の博物館		歴史館いずみさの
	日本大学総合学術情報センター貴重書保存庫	大阪	青山短期大学歴史博物館
	入間市博物館	兵庫	太子町立歴史資料館
富山	新湊市博物館	島根	島根県立美術館
	富山県水墨美術館	愛媛	愛媛県美術館
長野	(財)碌山美術館	大分	大分県立歴史博物館
	辰野美術館		大分市美術館
三重	鈴鹿市考古博物館	鹿児島	鹿児島市維新ふるさと館
滋賀	(財)佐川美術館		
京都	園部町文化博物館		
	(財)細見美術館		

現地調査は秋田市立千秋美術館、国立公文書館つくば分館、東京国立近代美術館、江戸東京たてももの園、北区立飛鳥山博物館、東村山市ふるさと歴史館、物流博物館、(財)紙の博物館、新湊市博物館、辰野美術館、鈴鹿市考古博物館、朝日町歴史博物館、桑名市博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、琵琶湖文化館、(財)佐川美術館、アサヒビール大山崎山荘美術館、(財)茶道資料館、宇治市源氏物語ミュージアム、久保惣記念美術館、歴史館いずみさの、泉南市埋蔵文化財センター、法隆寺、和歌山県立近代美術館、成羽町美術館、愛媛県美術館、愛媛県立歴史博物館、福岡市アジア美術館、大分県立歴史博物館、大分市美術館、鹿児島市維新ふるさと館、岩崎美術館の32館。

またアイヌ民族博物館など、全国144館の新設既設美術館・博物館等文化財展示収蔵施設に対して環境改善に関する相談を受け、助言を行った。これらの館については各館ごとに環境調査ファイルを作成して調査を行っている。

北海道	アイヌ民族博物館	福井	織田町歴史文化館
岩手	花巻市博物館（仮称） 岩手県立美術館（仮称）	山梨	都留市博物館
宮城	宮城県生涯学習課 東北歴史博物館 村田町歴史みらい館 仙台市立図書館 瑞巖寺宝物館	長野	下諏訪町立諏訪湖博物館 真田宝物館 尖石考古博物館 辰野美術館 むれ歴史ふれあい館 （財）礫山美術館
秋田	秋田県立博物館 秋田市立千秋美術館 角館町平福記念美術館	岐阜	美濃加茂市教育委員会
山形	山形県立博物館 米沢市立博物館	静岡	MOA 美術館 静岡市アート館 ふじのくにベストアート
福島	福島県文化財センター白河館	愛知	三岸節子記念美術館 知多市民俗資料館 田原町博物館 ボストン美術館
茨城	国土地理院地図と測量の科学館 国立公文書館つくば分館 （財）水府明徳会徳川博物館	三重	鈴鹿市考古博物館 朝日町歴史博物館 桑名市博物館
栃木	日光市小杉放菴記念美術館 宇都宮美術館	滋賀	滋賀県立琵琶湖博物館 長浜市曳山博物館 近江商人博物館 市立長浜城歴史博物館 （財）佐川美術館 多賀町あけぼのパーク 能登川町立博物館
群馬	かみつけの里博物館 （財）天一美術館	京都	園部町文化博物館 宇治市源氏物語ミュージアム 城陽市歴史民俗資料館 （財）茶道資料館 （財）細見美術館 京都服飾研究財団 アサヒビール大山崎山荘美術館 平等院新宝物館 醍醐寺宝物館
埼玉	さいたま川の博物館 浦和市立美術館 人間市立博物館 行田市郷土博物館 日本大学総合学術情報センター	大阪	大阪市新博物館・考古資料センター 大阪市住まいの情報センター 和泉市いずみの国歴史館 和泉市久保惣記念美術館 歴史館いずみさの 泉南市埋蔵文化財センター 大阪青山短期大学歴史文学博物館
千葉	成田山書道美術館	兵庫	兵庫県立新美術館（芸術の館） 西宮市大谷記念美術館 姫路市立美術館 太子町歴史資料館 小野市好古館 高浜虚子記念文学館
東京	東京国立近代美術館 江戸東京たてももの園 日本銀行金融研究所貨幣博物館 葛飾区郷土博物館 世田谷区立郷土資料館 台東区立書道博物館・中村不折記念館 北区立飛鳥山博物館 東村山ふるさと歴史館 府中市立美術館 太田記念美術館 斎田茶文化振興財団 （財）紙の博物館 松岡美術館 印刷博物館 日本刀装具美術館 物流博物館 澤乃井櫛かんざし美術館 明治神宮宝物館	奈良	新庄町歴史民俗資料館 法隆寺百済観音堂・新宝蔵院
神奈川	平塚市美術館 相模原市立博物館 岡本太郎美術館 横浜人形の家 鶴ヶ岡八幡宮宝物館 横須賀市教育委員会	和歌山	和歌山県立近代美術館 熊野古道なかへち美術館
新潟	新潟県立近代美術館	鳥取	鳥取市立博物館
富山	新湊市立博物館 富山県水墨美術館	島根	島根県立美術館
石川	宮本三郎美術館 石川県七尾美術館 三方町縄文博物館	岡山	井原市平櫛田中美術館 成羽町美術館 華鶴美術館

広島	頼山陽史跡資料館 太田庄歴史館 厳島神社	浮羽市教育委員会
山口	山口県立萩美術館・浦上記念美術館 下関市立考古博物館 土門拳記念写真美術館	佐賀 佐賀県立名護屋城博物館 小城町立歴史資料館
香川	香川県立歴史博物館 寒川町教育委員会	長崎 長崎県立美術博物館
愛媛	愛媛県美術館 愛媛県立歴史文化博物館	熊本 熊本市美術館
高知	高知県立美術館	大分 大分県立歴史博物館 大分市美術館 安岐町三浦梅園資料館 中国陶磁美術館
福岡	ふるさと館ちくしの 福岡市アジア美術館 北九州市立自然史歴史博物館	鹿児島 鹿児島市維新ふるさと館 岩崎美術館 鹿児島市美術館
		沖縄 沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館 首里城公園管理センター

3) 文化財の虫害等被害に対する調査指導

文化財の虫・カビ等の被害について調査し、指導・助言を行った。(木川・山野・佐野・三浦)

調査先

東京国立博物館
東京国立近代美術館
北方民族博物館
紙の博物館
称名寺庭園
一橋大学社会科学古典資料センター

4) 文化財の修復および整備に関する調査指導

(1) 第五福竜丸船室の強化(川野邊 渉)

文化財建造物保存技術協会の依頼によって夢の島公園の展示館に展示中の第五福竜丸の船倉の壁の強化対策と手摺りを初めとする鉄製部分の防錆処理に関して指導を依頼された。諸条件を勘案していくつかの合成樹脂と天然樹脂によるテストを行い、その結果、木部の表面保護には、カシュー樹脂を主体とする天然樹脂の含浸処置を、鉄製部分にはタンニン酸処置を行うこととした。

(2) 第五福竜丸エンジン(川野邊 渉)

東京都の依頼によって海中からサルベージされたエンジンの保存処置について指導を行った。高圧洗浄、水道水による脱塩処置、タンニン酸による防錆処置を行うことを指示し、各段階でのチェックを行った。

(3) 高知市坂本龍馬像の修復について(川野邊 渉)

高知市の依頼によって桂浜に所在する坂本龍馬銅像の劣化状況調査と修復方針に関する相談を受けた。現地調査を行い、修復方法に関する相談を受けた。しかしながら、修復方法、期間などに関して文化財としての要件は満たされないと判断された。

(4) 茨城県立歴史館(川野邊 渉)

水戸徳川家から寄贈された鎧甲など金属製品の錆の発生が見られたために、その処置方法と保存方法に関して相談を受けた。現地調査を行い、現状で可能な処置方法と保存環境の改善に関して指導を行った。

(5) 首里城(加藤 寛・川野邊 渉・早川典子)

首里城本殿の塗装の劣化状況の調査とその原因について海洋博記念財団より調査依頼を受けた。現地調査の結果、塗装材料と方法に適切でない点がいくつか見受けられた。その結果、より広範な調査の必要性を指摘し、次年度以降に調査を継続することとなった。

(6) 近代美術館工芸館の壁面水分の測定(川野邊 渉)

工芸館壁面の塩類劣化に関する調査の依頼を受け、赤外線カメラを用いた水分量の測定を行った。

- (7) 称名寺木橋の修理（川野邊 渉）
横浜市の依頼によって木部の腐朽状況の調査と対策の立案を行った。
- (8) 臼杵磨崖仏の調査（川野邊 渉・朽津 信明）
現在の劣化状況の調査と修復計画立案に必要な種々の測定と材料の現場試験を企画した。次年度以降逐次実施の予定である。
- (9) 国宝東大寺金堂八角灯籠の修復指導（青木 繁夫）
八角灯籠の修復に際して、組成および錆の分析、X線調査、防錆処理方法などについて指導した。
- (10) 史跡原爆ドームの保存指導（青木 繁夫）
今後の保存計画を立案するための基礎的調査について指導した。
- (11) 史跡千葉県加曾利貝塚住居跡保存整備指導（青木 繁夫）
発掘された住居跡を展示保存するために土壌水分を調整する保存処理方法を指導した。
- (12) 史跡群馬県矢瀬遺跡保存整備委員会（青木 繁夫）
遺跡土壌の保存処理方法などを指導した。
- (13) 静岡県清水市出土丸木舟保存処理委員会（青木 繁夫）
水漬状態で出土した鎌倉時代の楠木製丸木舟の真空凍結乾燥法による保存処理について指導した。
- (14) 柿右衛門窯所蔵陶器型の保存処理指導（青木 繁夫）
柿右衛門窯に伝わる素焼きの陶器型が塩類風化により崩壊している。その強化処理法について指導した。
- (15) 重要文化財西都原古墳出土埴輪家修理委員会（青木 繁夫）
損傷状態のX線調査や修復材料などについて指導した。
- (16) 東京都史跡出山横穴古墳保存処理指導（青木 繁夫）
保存施設の整備計画の立案、施工上の問題点の指導およびローム土の保存処理方法について指導した。
- (17) 重要文化財京都府智恩寺鉄湯船の保存指導（青木 繁夫）
湯船の保存状態について調査した結果、防錆処理が必要であると判断された。電気防食法による保存処理方法を検討することになった。
- (18) 重要文化財島津斎彬銀板写真の保存指導（青木 繁夫）
集成館が収蔵している銀板写真を重要文化財に指定するにあたって今後の保存環境整備などについて指導した。
- (19) 重要文化財岩手県葺前出土縄文土器修理委員会（青木 繁夫）
縄文土器の修復材料や施工法、修復方針などについて指導した。
- (20) 重要文化財奈良県天神山古墳出土品修理委員会（青木 繁夫）
天神山古墳出土金属製品の修復方針及び修復材料、方法について指導した。
- (21) 史跡西都原古墳保存整備指導（青木 繁夫）
地下式横穴の保存整備について保存処理材料の選択実験の指導を行った。
- (22) 金色堂内の漆塗りに関する修復指導（加藤 寛）
平成5年に行われた中尊寺金色堂保存工事により、年間平均80パーセントを越えた堂内湿度が65パーセントの恒湿状態に変化した。そのために壁板や組物の亀裂や漆塗膜の剥落が起こっている。現在、修復計画を立案するための破損状況調査を行っている。
- (23) 在外日本美術修復に関する助言（加藤 寛）
平成9年度から3年連続の予定で行われている、米国クリーブランド美術館所蔵の「大般若経厨子」の修復事業で、当該館の学芸員および保存担当者を招き、解体状況の把握、修復方法の検討及び立案を行う。

3. 研 修

(1) 「紙の保存修復」国際研修

趣 旨

平成4年以来6回継続した「紙の保存修復」国際研修の参加者が、それぞれの国において実施している文化財修復に、研修成果をいかに応用しているかを披露してもらい、技術交流を図るとともに研修に対する意見を収集して、今後の研修の計画に役立てることを目的とする。

成 果

セミナー会場 京都市国際交流会館（京都市左京区粟田口鳥居町 2-1）

期 間 平成10年12月15日（火）～12月18日（金）

（招へい期間）平成10年12月14日～19日

参 加 者 過去のJPC参加者14名、イクロム ICCROM 代表1名、海外及び国内専門家4名

日 程

12月15日（火）

基調講演：フィリップ・メレディス

発表1：アルコック・ジョアンパメラ

発表2：マルシコ・マリアアパレシダデヴリエス

発表3：ヴァレントーヴァ・ライラヴラスタ

休 憩

発表4：ラロック・クロード

発表5：シモン・クラウス ウルリッヒ

発表6：エバンス・アン

2月16日（水）

発表7：ジャイン・リトゥ

発表8：パーケシル・マンダナ

発表9：マックグイン・ニーヴ

発表10：マッゲン・マイケル

発表11：アフメド・イルシャド

発表12：ウオッチャク・ミロスワーワ

発表13：エリクソン・マーティン

発表14：スタール・モニカマーガレサ マリア

発表15：ムネイ・イヴマリーカトレヌ

討 議

12月17日（木）討議、発表者とオブザーバー

午後3時 美濃へ出発 バスにて

12月18日（金）美濃和紙会館 常設展示及びライピチッヒ博所蔵和紙展見学、手漉き和紙体験
紙漉き工房見学 鈴木竹一工房、沢村正工房

12月19日(土) 文化財保存修理所4工房見学

12月20日(日)

帰 国

発表者14名(基調講演含む) 発表15件(1件代読、基調講演含む)

討論参加者 JPC参加者13名

イクロム	シミラ・カトリーナ	SMILA Katriina
オーストリア	クリスト・ガブリエラ	KRIST Gabriela
ドイツ	バニク・ゲアハルト	BANIK Gerhard
オランダ	メレディス・フィリップ	MERREDITH Philip
日本	尾立和則、増田勝彦	

発表者リスト及び発表内容

1. アルコック・ジョアンパメラ Ms. ALCOCK, Johann Pamela,
オーストラリア・ヴィクトリア州立図書館 「大型紙本油画の修復」
 2. マルシコ・マリアアパレシダデヴリエス Ms. MARSICO, Maria Aparecida de Vries,
ブラジル・ブラジル国立図書館 「ブラジルで入手可能な資材、日本製資材の代替として」
 3. ヴァレントオーヴァ・ライラヴラスト Ms. VALENTOVA, Laila Vlasta,
チェコ・プラハ国立美術館 「JPC-95の成果を基礎とした中国、本、インド紙製文化財の修復」
 4. ラローク・クロード Ms. LAROQUE, Claude,
フランス・パリ第一大学 「パリ第一大学で開催したコース(東から西へ:西洋版画類の日本式修復技術)」
 5. シモン・クラウスウルリッヒ Mr. SIMON, Claus-Ullrich,
ドイツ・交通と技術博物館 「トレーシングペーパーの補強に見られる日本技術応用の限界」
 6. エバンス・アン Ms. EVANS, Ann,
イギリス・大英博物館 「大英博物館におけるチベット・タンカの修復」
 7. ジャイン・リトゥ Ms. JAIN, Ritu,
インド・インディラ・ガンジー国立芸術センター 「インド手漉紙、手漉和紙との比較」
 8. バーケシル・マンダナ Ms. BARKESHLI, Mandana,
イラン・テヘラン芸術大学 「イラン13世紀のコーラン手稿本の修復に応用した手漉和紙技術」
 9. マックグイン・ニーヴ Ms. McGUINNE, Niamh,
アイルランド・アイルランド国立美術館 「日本の保存原則一天と地・縁(へり)を付足す」
 10. マッゲン・マイケル Mr. MAGGEN, Michael,
イスラエル・イスラエル博物館 「蜘蛛の巣に描かれた水彩画の修復」
 11. アフメド・イルシャド Mr. AHMED, Irshad,
パキスタン・パキスタン国立博物館 「絹織物文書の補強」
 12. ウオッチャク・ミロスワワ Ms. WOJTCZAK, Mirosława,
ポーランド・ニコラス・コペルニクス大学文化財保存修復研究所 「両面に描かれたバロック期の旗の修復」
 13. エリクソン・マーティン Mr. ERICSON Martin,
スウェーデン・スウェーデン西部地域文化財保存トラスト 「中国製壁紙の修復」
 14. スタール・モニカ・マーガレサ・マリア Ms. STAAL, Monica Margaretha Maria,
オランダ・紙保存専門家(フリーランス) 「壁紙修復のためのサポート法」
 15. ムネイ・イヴマリーカトレーヌ Ms. MENEI, Eve Marie Catherine,
フランス・紙保存専門家 「エジプト、バビルス文書修復における日本技術の利用」
- *都合により発表は Ms. Laroque によって行われた。

7月16日(木)

保存環境 各論	—大気汚染とその影響—	平尾良光
保存環境 各論	—室内汚染—	佐野千絵
劣化と保存 各論	—紙—	増田勝彦
修復材料 各論	—伝統材料—	増田勝彦
保存環境〈実習〉	—照度の測定と調節—	佐野千絵

7月17日(金)

劣化と保存 各論	—木—	西浦忠輝
劣化と保存 各論	—石—	西浦忠輝
劣化と保存 各論	—ガラス—	朽津信明
劣化と保存 各論	—漆工品—	加藤寛
修復材料 各論	—合成樹脂—	川野邊渉

7月21日(火)

劣化と保存 各論	—油彩画—	東京芸術大学	歌田真介
劣化と保存 各論	—染織品—	東京国立博物館	沢田むつ代
劣化と保存 各論	—金属1—		青木繁夫
劣化と保存 各論	—金属2—		青木繁夫
劣化と保存 各論	—考古遺物—		青木繁夫

7月22日(水)

調査手法 各論	—化学分析—	平尾良光
生物被害〈虫〉	—害虫の生態と被害—	山野勝次
保存環境〈実習〉	—環境調査—	佐野千絵・石崎武志

7月23日(木)

ケーススタディ (於: 山梨県立文学館)
—博物館・美術館における収蔵・展示の問題とその対策—
佐野千絵・石崎武志・三浦定俊

7月24日(金)

保存環境 各論	—防災—	三浦定俊
文化財の国際交流 閉講式		三浦定俊

研修参加者名及び所属

揚妻 昭一郎 (財)最上善光歴史館
石橋 健太郎 広島県立歴史博物館
伊藤 康晴 鳥取市教育委員会博物館建設課
岩佐 伸一 岐阜県博物館
小緑 祐子 平良市総合博物館
金光 直美 林原美術館
鎌田 真美 新居浜市立郷土美術館
澤井 智実 女子美術大学美術史料館
柴原 直樹 (財)防府毛利報公会毛利博物館
鈴木 幸人 大阪市立美術館

関口	満	上高津貝塚ふるさと歴史の広場
高室	有子	山梨県立文学館
田口	慶太	香川県文化会館
田中	伸一	四日市市立博物館
塚田	全彦	国立西洋美術館
寺尾	美保	尚古集成館
野中	浩二	MIHO MUSEUM
速水	豊	兵庫県立近代美術館
星野	尚文	文京ふるさと歴史館
村山	史歩	北海道立釧路芸術館
守田	均	(財)大原美術館
横尾	浩	国立歴史民俗博物館
横田	宏	岐阜市歴史博物館
渡部	淳	(財)土佐山内家宝物資料館

(3) 資料保存地域研修

趣 旨

博物館・美術館などの文化財公開施設における資料の保存は、保存を担当する学芸員の努力によっていることはもちろんであるが、学芸員以外の館長、事務官や警備員、監視員、空調機器の管理・保守作業員など、博物館の様々な業務に携わる多くの人々の理解がなければ、円滑に進まない。特に2005年の臭化メチルの全廃へ向け、IPM(総合的害虫管理)を実施するためには、できるだけ多くの館関係者に文化財の保存に関する基礎的な知識を理解してもらう必要がある。本研修は文化財保存に関する基礎的な知識を、文化財公開施設に勤務するできるだけ多くの職員に短い日数で学んでもらうため、各地の博物館協議会などの協力を得て1998年度より開催するものである。

名 称 第1回資料保存地域研修
 期 間 1998年(平成10年)11月26日(木)・27日(金)
 会 場 地方職員共済組合同山中保養所ほくりく荘
 協力機関 石川県博物館協議会
 参加者数 40名

プログラム

第1日目

13:00~14:30	保存環境調査の概要	三浦定俊
14:40~16:50	温湿度の制御と管理	石崎武志
17:00~17:30	質疑応答	

第2日目

9:00~10:10	照明の制御と管理	石崎武志
10:20~11:30	空気汚染物質の制御と管理	佐野千絵
11:30~12:00	質疑応答	
13:00~15:00	生物劣化の制御と管理	佐野千絵
15:10~15:30	まとめ	
15:00~16:00	質疑応答	

(4) 海外学術調査員および研究者のための保存修復講座

海外において日本人研究者による学術調査が多くなっている。その調査では保存の知識が必要不可欠なものであり、欧米の調査団では保存の専門家が同行する事が常識になっている。調査現場では、保存にかかわる問題がおおくあり、それらには調査に参加している保存知識のない人々によって解決されなければならないため支障が多い。このような状況を改善する事を目的に、学術調査に参加している調査員、研究者に対して文化財の保存修復に関する基礎的な講習会を行っている。

期 間 1998年5月11日～1999年2月8日

第1期 1998年5月～7月

第2期 1998年10月～12月

第3期 1999年1月～2月

場 所 別館会議室

担 当 青木繁夫（修復技術部）

講義内容

第1期 保存修復とは

保存計画

資料の調査方法

資料の保存方法と保存環境整備

遺跡における応急的保存処理

第2期 金属製品の保存処理

土製品の保存処理

石製品の保存処理

木製品の保存処理

第3期 染織品の保存処理

骨・象牙製品等の保存処理

参加者 12名

参加者及び所属

阿 部 百里子（昭和女子大学大学院博士課程）

石 津 菜 央（日本大学大学院修士課程）

入 江 由 香（早稲田大学建築研究室助手）

近 藤 舞（明治大学大学院修士課程）

柴 田 幸一郎（東京大学大学院修士課程）

辻 村 純 代（国士舘大学講師）

馬 場 匡 浩（早稲田大学大学院修士課程）

福 島 綾 子（早稲田大学大学院修士課程）

前 田 修（筑波大学大学院修士課程）

三 石 正 一（東京芸術大学大学院修士課程）

三 輪 悟（日本大学大学院修士課程）

和 田 浩一郎（早稲田大学古代エジプト調査室）

(5) 博物館学実習

博物館・美術館の学芸員資格を得るためには、博物館施設での実習が必須とされている。毎年、美術部と情報資料部は、近代美術を主な内容とする博物館学実習を行っている。

平成 10 年度博物館学実習

日 時 9月6日～9月11日

会 場 東京国立文化財研究所

参加者数 7名

プログラム

〈日本近代美術資料を中心とした実習〉

第1日 9月7日(月)

午前 オリエンテーション

美術館の情報

展示について

午後 東京国立文化財研究所所蔵の日本近代美術資料

黒田清輝記念室見学

近・現代美術資料の収集・作成の意義と現状

美術部第二研究室

美術部第二研究室長 田 中 淳

美術部第二研究室 塩 谷 純

美術部主任研究官 山 梨 絵美子

美術部第二研究室

第2日 9月8日(火)

午前 近・現代美術資料の収集・作成実習

(1) 新聞文献

(2) 雑誌文献

(3) 写真文献

午後 文化財保存について

近・現代美術資料の収集・作成実習

美術部第二研究室

保存科学部主任研究官 佐 野 千 絵

美術部第二研究室

第3日 9月9日(水)

近・現代美術資料の収集・作成実習

(1) 新聞文献

(2) 雑誌文献

(3) 写真資料

美術部第二研究室

第4日 9月10日(木)

午前 近・現代美術資料の収集・作成実習

午後 近・現代美術資料の収集・作成実習

美術品の調査について

美術部第二研究室

美術部第二研究室

美術部第一研究室

第5日 9月11日(金)

午前 美術文献と情報処理

美術史研究と画像処理

午後 美術関係情報処理の実習

文化財の修復について

実習のまとめ

情報資料部文献資料研究室長 鈴 木 廣 之

情報資料部写真資料研究室長 島 尾 新

情報資料部

修復技術部主任研究官 川野邊 渉

第6日 9月12日(土)

展覧会見学とまとめ

4. 文化財修復協力

(1) 在外日本古美術品保存修復協力事業

在外の博物館・美術館が所蔵する評価の高い作品の修理に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と協力して、保存修復に関連する研究を行う事業である。1991(平成3)年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、1997(平成9)年度から工芸品など欧米の修復技術では修理が困難な分野にも協力対象を拡げた。

この事業により修復した作品の公開によってわが国に修復技術に対する理解が深まり、修復技術の交流が促進している。本事業の立案のために、毎年欧米に出張し、作品調査のほかに修復技術の内容について所蔵博物館と討議し、併せて輸送の手続きについても協議を行っている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理・保存、国内外の輸送手続きに責任をもって当たっている。

この修復協力事業によって修理された作品の公開が増すことは当然であるが、修復協力事業が契機となって所蔵の日本古美術品に対する関心が新たに高まりつつあり、欧米諸国では日本古美術品を所蔵する博物館の間で協力関係を結ぶネットワークが構築しつつある。さらに、文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に対し、大きな役割を果たしている。

調査国	調査地	
アメリカ	ロサンジェルスカウンティ・ミュージアム ミネアポリス美術館 ネルソンアトキンス美術館	絵画 10点 工芸品 7点 絵画 12点 工芸品 35点 絵画 17点 工芸品 20点
ドイツ	ゴータ城博物館 ベルリン東洋美術館 ミュンスター塗物博物館 ビクトリアアンドアルバーツ美術館 アシュモリアン美術館	工芸品 28点 工芸品 15点 工芸品 5点 工芸品 6点 工芸品 5点

ジャンル	所蔵先		
絵画	ハーバード大学アーサー・M・サックラー美術館 ニューヨーク公立図書館 大英博物館 ベルリン東洋美術館	紙本著色 鼠草子1巻 紙本著色 源氏物語画帳1冊 紙本著色 太平記絵巻第八巻1巻 紙本著色 三十六歌仙絵巻1巻 絹本著色 涅槃図1面 絹本著色 頼朝像1幅 絹本著色 不動明王1幅 絹本著色 十一面観音1幅	室町時代 室町時代 江戸時代 室町時代 南北朝時代 南北朝時代 南北朝時代 南北朝時代
工芸	メトロポリタン美術館 ピーボディ・エッセクス博物館 ケルン東洋美術館 ドレスデン美術館 クリエブランド美術館	野郎形兜 鳳凰蒔絵螺鈿矢筒 菊水螺鈿鞍 兜(雑賀鉢) 鷲紋蒔絵螺鈿盆 桜蒔絵器局(2年継続の2年目) 瓢箪蒔絵鞍(同) 山水蒔絵花瓶(同) 大般若経厨子(3年継続の2年目)	江戸時代 江戸時代 江戸時代 江戸時代 江戸時代 江戸時代 江戸時代 南北朝時代

5. 講座など

美術部と情報資料部、そして芸能部はそれぞれ美術史研究と芸能研究の成果を一般に公開することを目的に、毎年1回公開学術講座を開いている。美術部・情報資料部の公開学術講座ではスライドを、また芸能部の場合では演者の実技を通じて、専門性の高い学術研究の内容をわかりやすく解説している。1966（昭和41）年度に始まった美術部・情報資料部の公開学術講座は本年度で第32回を数え、また1967（昭和42）年度に始まった芸能部の場合には本年度で第29回を数える。

(1) 公開学術講座

第32回 美術部・情報資料部公開学術講座

日 時 1998年10月21日(水)

会 場 東京都美術館講堂

入場者数 127名

発表者

井手誠之輔（情報資料部主任研究官） 中国文人文化への接近—入元僧以亨得謙と禅林の美術—

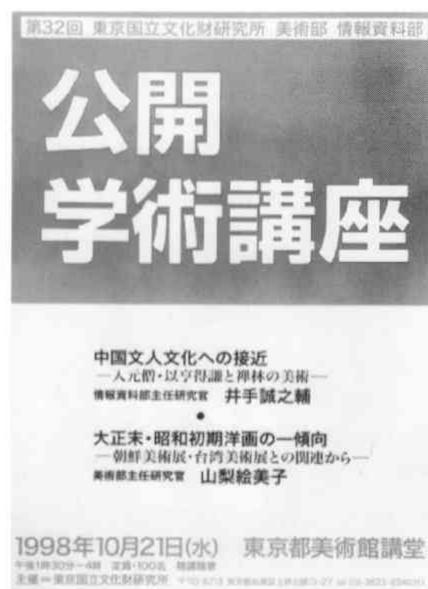
画家でも彫刻家でも構わない、そのように呼ばれる日本人が外国に長期滞在し、現地一流の作家のもとで修行したり、有力なパトロンのもとで美術を体験し、それを移入することは、近代以前では皆無に近い。ギリシア・ローマ以来の伝統を共有する西欧における美術交流の構図と、中国を中心とする東アジア世界における美術交流のそれとが異なるとすれば、それは、近代以前の日本における中国美術の移入が、画家や彫刻家より以上に、文化移入の主体者であった人や将来された「もの」の役割に大きく起因するからでもある。

南北朝時代は、多くの禅僧が鯨波を越えて中国へ渡り、長期にわたって禅林の五山や仏教の聖地をめぐる求法したほか、有力な中国僧の来朝が相次ぎ、とりわけ日中間の文化交流の盛んな時代でもあった。そのような有名無名の文化交流の主体者のなかに、入元が30年におよんだ以亨得謙がいる。

以亨得謙は、詩僧として名高い見心来復〔けんしんらいふく〕のもとで修行し、1365年に帰朝してから鎌倉の禅林で活躍し、度重なる詩会を主催して、中国の禅林をめぐる文人文化の移入を積極的にすすめている。当時、もっと



第32回美術部・情報資料部公開学術講座 会場風景



同 ポスター

も詩藻にあふれた五山文学僧に数えられ、また日本における詩画軸成立の実質的な創始者とみなされる人である。当時の中国では、宮廷周辺や在野の文人サークルを舞台に元末四大家に代表される文人画が隆盛し、以亨が身を置いた禅林も、そのような文人サークルと接触していた。中国の禅林をめぐる文人文化に、以亨はどこまで接近しえたのだろうか。この発表では、以亨得謙の足跡をたどりながら、彼が中国で体験した文人文化とその移入に果たした役割を、以亨の将来した書画をとおして考えた。

山梨絵美子（美術部主任研究官） 大正末・昭和初期洋画の一傾向—朝鮮美術展・台湾美術展との関連から

大正期後半から昭和初期にかけて描かれた洋画のモチーフに、朝鮮、台湾、中国、南洋といったアジアの国々の風景、風俗が多く登場する。こうした傾向は、明治維新から西欧に注目してきた文化の流れを揺り戻し、日清・日露戦争での勝利や国力の隆盛による自国に対する自信の回復、それにとまなう伝統の見直し、といった観点から従来は語られてきた。

しかし、この時期にはいわゆる「外地」と呼ばれた地域で、日本政府の意向を強く反映した展覧会が、日本の官展にならうかたちで開催されており、その審査には「内地」から主要な画家たちが派遣されている。大正11年(1922)から昭和18年(1943)まで朝鮮総督府主催で開催された朝鮮美術展、台湾総督府の外郭団体であった台湾教育会の主催により昭和2年(1927)から同13年まで開かれた台湾美術展がその例である。これらの展覧会に出品された作品には「内地」の官展の様式への強い意識が認められ、こうした状況が「内地」の画家たちの作品にもなんらかの影響を及ぼしていたと考えられる。

「内地」の画家たちは「外地」をどのようなイメージとして描いたのか。「外地」の洋画との関係は「内地」の洋画にどのような変化をもたらしたのか。本講座では朝鮮美術展、台湾美術展とそれにかかわった日本の洋画家に注目して、大正末・昭和初期の洋画の一傾向について考察した。

第29回 芸能部公開学術講座

日 時 1998年11月5日(木)

場 所 神楽坂 矢来能楽堂

入場者数 130名

発表者

中村茂子 江戸・東京の神楽—歴史と現状

現在、東京の祭りに奉納される神楽は、神職による太々神楽と專業者などによる江戸の里神楽である。その源流は埼玉県鷲宮町鷲宮神社に伝承する土師一流催馬楽神楽といわれている。江戸の里神楽伝承者は神楽師とその弟子、および神社の氏子団体の二種類の系統がある。江戸時代の神楽師は、神事舞太夫・陰陽師でもあった。

江戸時代から神楽師が伝承してきた芸能は、神話を題材にした演目を中心にその他の題材を加えた神楽芸、祭囃子・獅子舞・初午の庭神楽などの準神楽芸、その他に歌舞伎・面芝居・剣劇など非神楽芸であった。しかし、現在、非神楽芸を伝承している神楽師はほとんどいない。

江戸里神楽には江戸流と相模流があり、江戸流は旧江戸市中に居住の神楽師で、神社境内に常設の神楽殿で奉納してきたのに対し、相模流は江戸市中の周辺地域に居住の神楽師で、祭りの度に境内に花道付きの仮設舞台を設置し、昼は神楽、夜は歌舞伎を演じていた。戦後に発生した氏子団体の活動も神楽師の活動と同様であり、各地の祭礼に神社ではなく氏子に依頼されて奉納する形式である。

串田紀代美 「はぎわら会」について

はぎわら会は相模流を継承する四世萩原彦太郎に師事した同好の士が集まって里神楽の演技・演奏活動を行っている。彼等は里神楽の他に獅子舞・祭囃子なども伝承している。

萩原家の神楽は、相州愛甲郡(神奈川県)に生まれた萩原門次(1846~1929)により始められた。上京した門次は杉並区高井戸の斎藤家、新座市野火止の石山家などを経て、中野区江原町に居を構えて独立、今日の萩原家神楽の基礎を築いた。門次には弥門、彦太郎の子息があり、それぞれに奉仕の神社を分配した。現在、板橋区の萩原正義社中と、新宿区西落合の萩原彦太郎社中(「はぎわら会」)がその芸を継承している。

実演と話 はぎわら会 峯尾 茂
 奏演演目「花見（熊襲征伐）」
 出演者 矢作 錦吾（大拍子）
 峯尾 茂（従者）
 中村 幸一（大太鼓）
 木下 豊（笛）
 高見 進（熊襲建）
 水上万里子（小碓命）
 萩原 薫（従者）
 木下 千里（侍女）
 木下 千鶴（鉦）
 田中 照予（後見）



はぎわら会による「花見（熊襲征伐）」の舞台稽古

(2) 夏期学術講座

第23回 夏期学術講座

伝統芸能研究の発展と文化財保護に役立てるため、当研究所芸能部の研究員が大学生を対象に、その分野に関する無形文化財の調査研究の成果を講義する。下記のように1日3コマの講義を4日間にわたって行っている。

主 題 「近松門左衛門の浄瑠璃」

期 間 1998年7月7日～10日

10:30～12:00 13:15～14:45 15:00～16:30

場 所 別館会議室

参加大学 慶應義塾大学・実践女子大学・東京芸術大学・東京大学・桐朋学園大学・武蔵大学・明治大学・早稲田大学の各大学院生

参加数 15名

プログラム

7月7日（月）

近松の作劇法

「冥土の飛脚」(I)

「冥土の飛脚」(II)

鎌倉 恵子

鎌倉 恵子

鎌倉 恵子

7月8日（火）

三味線の歴史

「国性爺合戦」(I)

「国性爺合戦」(II)

高桑 いづみ

鎌倉 恵子

鎌倉 恵子

7月9日（水）

その後の近松

民俗芸能としての人形芝居

文化財としての人形浄瑠璃

鎌倉 恵子

中村 茂子

星野 紘

7月10日（水）

「冥土の飛脚」の伝承 封印切りの語りを中心に

義太夫節の風（ふう）について

「国性爺合戦」(II)

宮城教育大学教授 垣内 幸夫

宮城教育大学教授 垣内 幸夫

鎌倉 恵子

質疑応答

なお、今回は義太夫節の実技面について宮城教育大学教授、垣内幸夫氏の助力を得た。

6. 大学院教育

—東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学教室—

1995年（平成7年）4月より東京芸術大学大学院と連携して大学院教育に従事し、これからの文化財保存を担う人材を育成している。システム保存学は、文化財の保存環境を研究する保存環境学講座と、保存修復に用いる材料について研究する修復材料学講座に分かれている。各講座3名ずつ、所員が併任教官として指導に当たっている。

受入学生の定員は、修士課程・博士課程ともに各学年2名である。1998（平成10）年度は修士課程に2名、博士課程に1名が在籍している。

(1) 併任教官及び担当授業

保存環境学講座

併任教官	三浦 定俊（保存科学部長）	保存環境計画論（前期）
併任教官	平尾 良光（保存科学部化学研究室長）	保存環境学特論（Ⅰ）（後期）
併任助教授	佐野 千絵（保存科学部主任研究官）	保存環境学特論（Ⅱ）（前期）

修復材料学講座

併任教官	増田 勝彦（修復技術部長）	修復材料学特論（Ⅰ）（前期）
併任教官	青木 繁夫（修復技術部第三修復技術研究室長）	修復計画論（後期）
併任助教授	川野邊 渉（修復技術部第二修復技術研究室長）	修復材料学特論（Ⅱ）（後期）

客員教授	西川杏太郎	集中講義「文化財保存学の基本」（平成10年9月24日）
助手	小倉 淳一（平成10年4月～10月）	
	五味 聖（平成10年11月～）	

(2) 文化財保存学演習（併任教官が担当）

第1回（1998年12月15日）

第2回（1999年1月5日）

講義 「接着材料について」川野邊 渉併任助教授

- 実習
- ・天然接着材料の観察と各種接着剤の調整
 - ・接着剤の赤外スペクトル測定、接着の比較実験



実習風景

7. 出 版

当研究所は、毎年、学術雑誌・年鑑・国際研究集会プロシーディングス・研究会報告書・ニューズレターなど、多種多様な出版物を発行している。これらに掲載された研究論文や発表などは文化財の分野において最新の情報を伝えるものである。

(1) 定期刊行物

1) 美術研究

日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関連する西洋美術について、研究論文・解説・資料等を掲載している。

『美術研究』第371号

《光琳観の変遷》1815-1915

玉 蟲 敏 子

東寺毘沙門天像 — 羅城門安置説と造立年代に関する考察 — (下)

岡 田 健

『美術研究』第372号

後期印象派・考 — 一九一二年前後を中心に (中の二)

田 中 淳

雪舟等楊の研究(3) — 「秋冬山水図」の情報学 — (上)

島 尾 新

2) 芸能の科学

古典芸能に関する研究論文・調査報告・資料翻刻等を掲載している。

『芸能の科学』27号

三信遠地域修正会の芸能構成と伝播

中 村 茂 子

状況に埋め込まれた芸能の見方 — 談話から分析する里神楽はぎわら会の現在 —

串 田 紀代美

民俗芸能復活再生への方策 — 文化財愛護活動推進方策研究委嘱報告書をもとに —

星 野 紘

[調査記録] 翁の技法

高 桑 いづみ

山伏神楽の伝承 — 早池峰神楽の場合 —

イリット・アベルブッフ

杵屋栄二旧蔵 歌舞伎附帳写真目録

鎌 倉 恵 子・児 玉 竜 一

3) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究、受託研究報告等の論文報告および修復処置概報等を掲載している。

『保存科学』第38号

窒素等不活性ガスによる文化財殺虫処理装置の試作と処理例

木 川 り か・山 野 勝 次・三 浦 定 俊・前 川 信

低酸素濃度殺虫法 — 処理温度と殺虫効果の検討 —

木 川 り か・永 山 あ い・山 野 勝 次

変色試験紙上に捕捉された化学種 — 陽イオン、陰イオンと有機酸 —

佐 野 千 絵

博物館等施設の室内空気汚染 — 酢酸・ギ酸濃度 —

佐 野 千 絵

金色堂の環境変化と漆膜に生じた亀裂に関する考察

三 浦 定 俊・小 川 俊 夫

膠と漆による輸出漆器の修理について

加 藤 寛・川 野 邊 渉・田 口 善 明・五 味 聖

輸出漆器の修理材料の分析(Ⅰ)

早 川 典 子・朽 津 信 明

塗料から見た輸出漆器の受容について

加 藤 寛

漆工品の螺鈿技法の研究(Ⅰ) — 貝の成形技法とその工具について —

加 藤 寛・五 味 聖

伝統的焼付漆技法の研究 — 漆の焼き付け(高温度硬化)に関する研究(2)

木 下 稔 夫・上 野 博 志・加 藤 寛・宮 田 聖 子

ICP-AES/MSによる中国二里头遺跡出土青銅器の多元素分析

早川泰弘・平尾良光・金正耀・鄭光

顔料鉍物の可視光反射スペクトルに関する基礎的研究

朽津信明・黒木紀子・井口智子・三石正一

(旧)岩崎家住宅壁紙調査報告(I) (受託研究報告第70号)

井口智子・川野邊 渉・朽津信明・大川昭典

黒田清輝「湖畔」調査報告

井口智子・加藤淳子・歌田真介・三浦定俊

タイ国スコータイ遺跡のスリ・チュム寺院大仏の保存修復(I)

西浦忠輝・石崎武志・チラボン アラニャナク・キッチャ ユホー

タイ国アユタヤの歴史的レンガ建造物中の水分移動解析

石崎武志・朽津信明・西浦忠輝・ユッカ シムネック

我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点(I)

—国際文化財保存修復研究会からの知見(I)—

二神葉子・西浦忠輝

東京国立文化財研究所所蔵 X線フィルムデータベースの構築

小倉淳一・青木繁夫・三浦定俊

展示公開施設の館内環境調査報告—平成9年度—

佐野千絵・三浦定俊

平成10年度修復処置概報

修復技術部

4) 日本美術年鑑

日本美術年鑑は各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録する刊行物である。美術部では、当研究所の前身である帝国美術院付属美術研究所が昭和11年から始めた『日本美術年鑑』の編集を引き継ぎ、刊行を継続してきた。平成10年版の内容は以下の通りである。

平成9年美術界年史

平成9年主要美術展覧会(現代美術・西洋美術、東洋古美術)

美術文献目録(平成9年)

定期刊行物所載文献(現代美術・西洋美術、東洋古美術)

物故者(平成9年)

5) 音盤目録

芸能部所蔵の音盤(SP・LP)約7,000枚の詳細な目録を作成し、すでにV巻を刊行している。

既刊I・IIが残部僅少となったため、合本復刻して刊行した。

(2) シンポジウム等の報告書

1) 国際研究集会プロシーディングス

本書は毎年行われる「文化財保存および修復に関する国際研究集会」の基調講演や発表をまとめた報告書である。

《*International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property — Spectrometric Examination in Conservation —*》

1994年(平成6年)10月に行われた同タイトルの国際シンポジウムの発表内容をまとめた報告書で、以下の基調講演および研究発表が収録されている。

主 題 文化財保存における分光学的方法

目 次

〈Keynote Lecture〉

Non-destructive Gamma-ray Spectrometric Dating of Ancient Human Bones

YOKOYAMA Yuji

〈Session I〉

Applications of X-ray Spectrometry, Microdiffractometry and Fourier Transform Infrared Spectrometry to Canadian Art and Archaeological Conservation Studies Ian N. M. WAINWRIGHT

A Chemical Study on Body and Glaze of Ceramics SAITO Tsutomu

Use of Reflectance Techniques for Infrared Spectrophotometric Analyses and Examinations of Art Objects

B. V. KHARBADE

Application of TGA - FTIR on the Determination of the Chemical Composition of Ancient Thai Lacquer

Sirichai WANGCHAREONTRAKUL

〈Session II〉

Investigation of European Medieval Weapons — Two Swords and Two Helmets — Christian SEGEBADE

Surface Characterization of Archaeological Metal Artifacts by Auger Electron Spectroscopy

MURAKAMI Ryu

〈Session III〉

Non-destructive Imaging Spectroscopy of Drawings and Paintings Flourian BAYERER

A Spectral Method for Dampness Measurement of an Open-air Object HANAIZUMI Hiroshi

Fiber Optics Reflectance Spectroscopy and Spectral Imaging for Conservation Mauro BACCI

〈Session IV〉

Material Science Applied to Art and Archaeology Multidisciplinary Looking for the Past Michel MENU

Synchrotron Radiation X-ray Fluorescence Analysis of Cultural Properties NAKAI Izumi

〈Session V〉

The Contribution of Light Isotope Ratio Mass Spectrometry to the Study and Preservation of Museum Objects Noreen TUROSS

Application of Nuclear Magnetic Resonance Method on Conservation Science KAWANOBE Wataru

Application of Chemiluminescence Counting for Detection Deterioration of Organic Cultural Property

SANO Chie

〈Discussion〉

〈Poster Session〉

Investigation of Inorganic Pigments Used on the Shoso-in Objects by X-ray Analyses NARUSE Masakazu

《International Symposium on the Preservation of Cultural Property — The Present, and the Discipline of Art History in Japan —》

本書は、平成9（1997）年12月に、美術部・情報資料部が担当して開催された第21回国際研究集会《今、日本の美術史学をふりかえる》（The Present, and The Discipline of Art History in Japan）の報告書である。

目次

刊行にあたって

渡邊明義

序にかえて

国際シンポジウム事務局

第一セッション 近代と美術／近代と美術史

日本近代の文化財保護行政と美術史の成立

高木博志

「日本美術史」という枠組み

北澤憲昭

近代日本における美学と美術史学

加藤哲弘

1900年パリ万国博覧会と *Histoire de l'art du Japon* をめぐって

馬淵明子

見いだされたもの—日本と西洋の過去としての日本美術史
 近代日本美術教育の出発と風景画
 日本近代洋画におけるオリエンタリズム
 第一セッション報告
 第二セッション 内なる他者としての東アジア
 世界観の再編と歴史観の再編
 龍門石窟への足跡—岡倉天心と大村西崖
 日本近代のなかの中国絵画史研究
 雪舟に対する認識をめぐって
 「境界」美術のアイデンティティ —請来仏画研究の立場から
 韓国美術史研究の観点と東アジア
 中国を見せる
 第二セッション報告
 第三セッション 語る現在、語られる過去
 近代日本における画家にアイデンティティ—美術と非美術の境界の諸問題
 日本美術史言説と「みやび」
 「日本美術の装飾性」という言説
 浮世絵の善と悪
 「仏像の語り方」の境界—「弘仁」・「貞観」彫刻の語り方が示すもの
 日本の美術史言説におけるジェンダー研究の重要性
 日本美術の始まり
 第三セッション報告
 あとがき
 体 裁

ステファン・タナカ
 金子 一 夫
 山 梨 絵美子
 田 中 淳

 佐 藤 道 信
 岡 田 健
 宮 崎 法 子
 山 下 裕 二
 井 手 誠之輔
 洪 善 杓
 スタンリー・K・アベ
 井 手 誠之輔

 山 口 昌 男
 ジョシュア・S・モストウ
 玉 蟲 敏 子
 タイモン・スクリーチ
 長 岡 龍 作
 千 野 香 織
 木 下 直 之
 島 尾 新
 編集担当

B5版、319頁、口絵(モノクロ)10点、なお巻末に英文レジメ及び英語による発表者のフル・ペーパー 83頁を加えた。

制 作 株式会社平凡社



左：第 21 回国際研究集会プロシーディングス

右：同書市販本『語る現在、語られる過去』(平凡社)カバー

2) アジア文化財保存セミナー報告書

6th Seminar Proceedings Seminar on the Conservation of Asian Cultural Heritage

平成8年10月に奈良で行われた第6回アジア文化財保存セミナー—考古遺物の保存—の英文プロシーディングスである。アジア18カ国の代表による事例報告(カントリーレポート)および2件の基調講演の要旨、質疑応答、総合討議の内容が記載されている。

目次

Some Considerations about Archaeological Cultural Property	Marc Laenen (ICCRROM)...	1
Conservation and Restoration of Archaeological Artifacts	Migaku Tanaka (Japan)...	2
Status of the Conservation of Archaeological Objects in India	Tej Singh (India)...	5
The State of Conservation of Cultural Heritage in Jordan	Ziad Mohammad al-Saa'd (Jordan)...	7
Conservation of Archaeological Objects in Bangladesh	Md. Khalequzzaman (Bangladesh)...	9
Conservation of Archaeological Objects - Current Environment of Conservation Science in Japan	Takayasu Koezuka, Masaaki Sawada (Japan)...	12
Conservation of Archaeological Objects Retrieved from Burial Sites: Current Circumstances	Chalit Singhasiri (Thailand)...	15
Archaeological Field Conservation Report: Harappa Salvage Excavations (Dec. 1991 - Mar. 1992)	Mohammad Toseef ul Hassan (Pakistan)...	19
Conservation of Archaeological Objects from the Prehistoric Site of Arrajan in Southwestern Iran	Abdolrasool Vatandoust-Haghighi (Iran)...	25
An Investigation of Woods from Kooryo Dynasty's Shipwreck	Kim Ik-Joo (Korea)...	26
Field Conservation of the Human Skeleton of 'Perak Man', Found during an Archaeological Excavation at Gua Gunung Runtuh, in the State of Perak, Malaysia	Sanim Ahmad (Malaysia)...	30
Conservation of Ancient Ceramics in the National Museum of Vietnamese History	Nguyen Dinh Chien (Vietnam)...	31
Restoration and Maintenance of Archaeological Glasswork and Crockery in Syria	Omar Abdullah Henawi (Syria)...	32
Mechanism Corrosion of Bronze and Its Conservation Measures	Mananti Amperawan Marpaung (Indonesia)...	35
Case Studies on the Conservation and Restoration of Two Stone Objects; The Siloam Inscription and the Head of Aphrodite	İsmet Ok (Turkey)...	37
Conservation of Wall Paintings in Sri Lanka	Nanda Amara Wickramasinghe (Sri Lanka)...	40
Conservation of Archaeological Objects	Farahaath Ali (Maldives)...	41
Conservation of Archaeological Objects in Nepal	Riddh Baba Pradhan (Nepal)...	42
Conservation of Archaeological Objects	Dorji Wangchuk (Bhutan)...	43
Conservation of Wall Paintings in Cambodia	Ang Chouléan (Cambodia)...	44
Overall Discussion		46

3) 国際文化財保存修復研究会報告書

国際文化財保存修復研究会で行われた、日本の専門家が海外で行った文化財保存修復国際協力事業に関する事例報告、質疑応答、および総合討議の内容をまとめたものである。平成10年度は第3回、第4回研究会についてそれぞれ作成された。

第3回国際文化財保存修復研究会報告書

目次

プログラム

ゲティ中国プロジェクトの経験	アメリカ・ゲティ保存研究所	前川	信
敦煌莫高窟保存のための日中共同研究	東京国立文化財研究所	西浦忠輝・増田	勝彦
敦煌莫高窟保存国際協力事業に関する発表についての質疑応答			
エジプト王妃の谷ナファルタリ王妃の墓保存とその問題点	アメリカ・ゲティ保存研究所	前川	信
文化遺産の保護に関する国際協力と日本の貢献	ユネスコ・パリ本部文化遺産部	野口	英雄
総合討議			
アンケート調査結果			
出席者名簿			

第4回国際文化財保存修復研究会報告書

目次

プログラム

中国 交河故城保存プロジェクト	(株)文化財保存計画協会	矢野	和之
チャンバ遺跡の保存修復の経緯、現状、問題点	日本大学	重枝	豊
インドネシア・バンテン遺跡の保存修復の経緯、現状、問題点	群馬県埋蔵文化財調査事業団	坂井	隆
総合討議			
アンケート調査結果			
出席者名簿			

8. 公開・出品

(1) 公開

1) 黒田記念室

黒田記念室は本研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵公開している。

創立当時、主として黒田家から寄贈されたものは、油絵 125 点、素描 170 点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは、「湖畔」・「智・感・情」・「花野」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」などである。

一般公開(無料) 毎週木曜日

午後 1 時～4 時

特別公開 平成 10 年 11 月 5 日～11 月 11 日(上野の山文化ゾーンフェスティバル)

年間入館者数 2,990 人(平成 10 年度)



黒田記念館



黒田清輝筆 湖畔 1897 年

2) 資料閲覧室

当研究所所蔵の資料のなかで、情報資料部が管理するものについては、大学院生、文化財研究者を対象に閲覧に供している。閲覧は、原則として祝日・年末年始(12/25-1/7)を除く、毎週月・水・金曜日(am. 10:00-pm. 4:30)に、情報資料部において行われている。

〈図書資料〉

図書資料は、和漢書・要所のほか、展覧会カタログ・定期刊行物が、情報資料部に保管されている。

図書検索は現在、カードによっているが、データベースによる検索を準備中である。展覧会カタログは開催年別にかけて配架され、定期刊行物は巻号目録で検索できる。

また定期観光物所蔵の研究文献については、研究所で編集した『東洋古美術文献目録』・『日本東洋古美術文献目録』・『日本美術年鑑』で検索できる。

従来、開架資料として閲覧に供していた明治大正期の美術雑誌は、過度な閲覧集中にともなう劣化が進んでいる。情報資料部では資料の希少性と原本保存の必要を考慮して、現在、原本のかわりにマイクロフィルムによる閲覧を行っ

ている。

閲覧可能なマイクロフィルム

アトリエ、生活美術、みづゑ、新美術、美術（みづゑの続刊）、中央美術、日本美術、美術評論、美術（美術新論の続刊）、美之国、美術（美之国の続刊）、制作

〈写真資料〉

写真資料は、モノクロの焼付け写真（四切り）が分類・配架され、自由に閲覧できるようになっている。仏像、仏画は尊種別に、絵巻・肖像画は主題別に、室町時代以降の絵画で作者のわかるものについては作者別に、不明なものは主題別に、書籍も作者別と主題別とを交えて分類されている。これらをキーに写真を参照しながら検索することができる。

そのほか、希望者に対しては、売立目録図版（作者別分類）や探幽縮図、常信縮図などの焼付け写真を公開している。

(2) 黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作を多く所蔵している当研究所は、黒田清輝の功績を記念し、あわせて地方文化の振興に資するため、昭和52年からの事業として「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝」展を年1回地方において開催してきた。

平成10年度は次の会場において開催された。

会 場 成羽町美術館

会 期 平成10年10月16日～11月29日

主 催 東京国立文化財研究所

成羽町美術館

山陽新聞社

後 援 岡山県教育委員会

岡山県郷土文化財団

NHK 岡山放送局

山陽放送

TSC テレビせとうち

開館日数 40日間

入場者数 22,998名

陳列点数 油彩・パステル 61点

木炭デッサン 50点

写生帖 17冊

書簡 3点

日記 5冊



黒田清輝巡回展 成羽町美術館



黒田清輝巡回展 会場風景

図 録 A4 版変型、159 頁、原色図版 62 頁、単色図版 77

(3) 所蔵作品等の貸与

本年度の所蔵作品等の貸与は下記の通り 5 件 19 点であった。

「美の内景 美術解剖学の流れ～森鷗外・久米桂一郎から現代まで」(平成 10.7.11～9.15 久米美術館)

「写生帖 第 4 号」黒田清輝作 鉛筆・紙

「高村光太郎・智恵子」展(平成 10.7.25～8.31 礪山美術館)

「黒田清輝胸像」高村光太郎作 ブロンズ

「山下りんとその時代展」(平成 10.8.15～9.13 北海道立函館美術館)

(平成 10.9.22～10.18 豊橋市美術博物館)

「普通小学画学楷梯」岡村政子著

「平成 10 年度 国立博物館・美術館巡回展 名作が生まれる時 近代日本洋画 5 つの結晶」

(平成 11.1.15～2.14 郡山市立美術館)

(平成 11.2.25～3.22 北九州市立美術館)

「祈祷」 黒田清輝作 油彩・キャンバス

「裸体・女(全身)」 ” ”

「昔語り下絵(構図 II)」 ” ”

「昔語り下絵(舞妓)」 ” ”

「昔語り下絵(男)」 ” ”

「昔語り下絵(舞妓)」 ” ”

「昔語り下絵(仲居)」 ” ”

「昔語り下絵(僧)」 ” ”

「昔語り下絵(草刈り娘)」 ” ”

「昔語り下絵(清閑寺景)」 ” ”

「智・感・情」 ” ” (この作品のみ郡山展に出品)

「花野」 ” ”

「花野(画稿)」 ” ”

「もうひとつの美術史 画家と額縁」(平成 11.2.20～3.22 西宮市大谷記念美術館)

「少女 雪子十一歳」 黒田清輝作 油彩・板

「栗拾い」 ” 油彩・キャンバス

「案山子」 ” 油彩・板

9. 年度内主要事業一覧

期 日	事 業 名
1998. 4. 14～4. 14	能楽技法講座
1998. 5. 11～1999. 2. 8	海外学術調査員及び研究者のための保存修復講座
1998. 7. 7～ 7. 10	第20回芸能部夏期学術講座
1998. 7. 13～ 7. 24	博物館・美術館等の保存担当学芸員研修
1998. 9. 7～ 9. 11	博物館学実習
1998. 9. 29	第4回国際文化財保存修復研究会（社会教育研修所）
1998. 10. 5～10. 11	上野の山文化ゾーン黒田記念室特別公開
1998. 10. 16～11. 29	黒田清輝巡回展（岡山県成羽美術館）
1998. 10. 21	第32回美術部・情報資料部公開学術講座（東京都美術館）
1998. 11. 4～11. 6	第22回文化財の保存に関する国際研究集会（東博平成館講堂）
1998. 11. 15	第29回芸能部公開学術講座（矢来能楽堂）
1998. 12. 11	第1回研究評価委員会
1998. 12. 14～12. 19	紙の保存研修 JPC セミナー（京都市国際交流会館）
1999. 1. 14	平成10年度文化財保存修復研究協議会
1999. 2. 3	第5回国際文化財保存修復研究会（社会教育研修所）
1999. 2. 23～ 2. 27	第8回アジア文化財保存セミナー（奈良県新公会堂）
1999. 3. 10～ 3. 11	第1回民俗芸能研究協議会（東京国立博物館セミナー室および江戸東京博物館）

5. 研究交流

1. 職員の海外渡航

氏名	渡航先	期間	目的
青木 繁夫	中国	98.07.29～98.08.07	敦煌文化財保存修復協力事業に関する調査及び協議
青木 繁夫	大韓民国	98.09.23～98.09.29	文化財の環境汚染の影響と修復技術の開発の共同研究及び学会報告
青木 繁夫	英国・ドイツ・オランダ	99.02.13～99.02.24	近代化遺産の保存修復に関する研究交流
青木 繁夫	中国	99.03.01～99.03.05	河北省に所在する壁画の保存修復に関する調査及び協議
石崎 武志	タイ、カンボジア	98.08.31～98.09.09	文化財保存修復国際協力事業のレビュー
石崎 武志	フランス、ドイツ	98.10.20～98.10.28	文化財の凍結劣化現象と保存対策に関する調査・研究
石崎 武志	タイ	98.12.15～98.12.21	遺跡保存修復調査と日・タイ協力に関する協議
石崎 武志	中国	99.03.01～99.03.05	河北省に所在する壁画の保存修復に関する調査及び協議
石崎 武志	タイ	99.03.05～99.03.14	日・タイ研究セミナー出席及び遺跡保存修復に関する調査及び協議
井出誠之輔	大韓民国	98.04.10～98.04.24	国立中央博物館における中国絵画調査
大久保政博	米国	98.06.22～98.07.02	在外日本古美術品保存修復協力事業調査・協議
大久保政博	中国	98.07.29～98.08.07	第三期敦煌文化財保存修復協力事業に関する協議
大久保政博	ドイツ	98.12.05～98.12.11	在外日本古美術品保存修復協力事業調査
大久保政博	タイ	99.03.07～99.03.10	日・タイ研究セミナー出席及び日・タイ協力に関する協議
岡田 健	中国	98.07.15～98.08.07	中国仏教美術に関する調査・研究
岡田 健	中国	98.08.23～98.09.13	中国陝西省唐代石窟造像の調査・研究
加藤 寛	英国、ドイツ	98.12.05～98.12.14	在外日本古美術品保存修復協力事業調査・協議
加藤 寛	米国	98.06.22～98.07.02	在外日本古美術品保存修復協力事業調査・協議
加藤 寛	ドイツ	98.10.23～98.11.02	日独交流: 漆工品に関する共同研究
加藤 寛	ドイツ	99.03.10～99.03.15	日独交流: 漆工品保存に関する共同研究
鎌倉 恵子	台湾	99.03.20～99.03.29	台北及びその周辺における東南アジア人形劇の人形操りの技法及び伝承の保存に関する調査等
川野邊 渉	英国、ドイツ、オランダ	99.02.13～99.02.25	近代化遺産の保存修復に関する研究交流
川野邊 渉	中国	99.03.01～99.03.05	河北省に所在する壁画の保存修復に関する調査及び協議
朽津 信明	タイ、カンボジア	98.08.31～98.09.03	遺跡保存修復調査と日・タイ協力に関する協議
朽津 信明	タイ	98.12.16～98.12.19	遺跡保存修復調査と日・タイ協力に関する協議
朽津 信明	タイ	99.03.07～99.03.11	日・タイ研究セミナー出席及び遺跡保存修復に関する調査及び協議
小関 仁志	タイ	99.03.05～99.03.14	日・タイ研究セミナー出席及び日・タイ協力に関する協議
塩谷 純	イタリア	99.03.21～99.03.31	在外日本古美術品保存修復協力事業調査

氏名	渡航先	期間	目的
高桑いづみ	英国	98.08.24～98.09.07	在英日本古楽器及び古楽譜に関する調査
中野 照男	タイ、ネパール、チベット	98.07.02～98.07.11	チベット、ネパール仏教美術調査
中野 照男	中国	99.03.01～99.03.05	河北省に所在する壁画の保存修復に関する調査及び協議
西浦 忠輝	シリア、ハンガリー	98.05.13～98.05.30	シリア、アイン・ダーラ神殿遺跡の保存修復に関する調査及び中近東地域の遺跡に関する情報収集等
西浦 忠輝	タイ、カンボジア、パキスタン	98.08.23～98.09.09	文化財保存修復国際協力事業のレビュー
西浦 忠輝	ウズベキスタン	98.09.14～98.09.22	中央アジア文化遺産保存協力政府ミッション
西浦 忠輝	インド	98.10.25～98.10.30	アジャンタ、エローラ保存整備計画諮問国際専門家会議出席
西浦 忠輝	イラン	98.11.19～98.11.29	第4回国際文化財生物劣化会議での発表等
西浦 忠輝	タイ	98.12.14～98.12.24	遺跡保存修復調査と日・タイ協力に関する協議
西浦 忠輝	タイ、パキスタン	99.03.05～99.03.19	日・タイ研究セミナー出席及び遺跡保存修復に関する調査及び協議
長谷川洋一	中国	99.03.01～99.03.05	河北省に所在する壁画の保存修復に関する調査及び協議
早川 泰弘	米国	98.07.29～98.08.06	X線を用いた文化財分析手法の調査・研究
早川 泰弘	中国	98.10.20～98.10.29	古代中国青銅器の研究
早川 泰弘	米国	99.03.04～99.03.13	文化財の新しい分析手法に関する調査
平尾 良光	トルコ	98.08.27～98.09.09	アナトリア遺跡出土の銅、青銅製品の調査
平尾 良光	ペルー	98.08.10～98.08.19	クントゥルワン遺跡発掘調査
平尾 良光	中国	98.10.20～98.10.29	古代中国青銅器の研究
星野 紘	ロシア	98.04.25～98.05.02	ハンティ族の熊祭の芸能調査
星野 紘	中国	98.08.16～98.08.26	沖縄と雲南省少数民族の基層文化の比較研究
星野 紘	ロシア	98.12.17～98.12.27	熊祭芸能調査
星野 紘	中国	99.03.30～99.04.09	文化庁主催平成11年度国際民俗芸能フェスティバル招聘事前調査
増田 勝彦	米国	98.06.22～98.07.02	在外日本古美術品保存修復協力事業調査・協議
増田 勝彦	中国	98.07.29～98.08.07	敦煌文化財保存修復協力事業に関する調査及び協議
増田 勝彦	イタリア、英国	99.03.20～99.03.31	イクロムとの打合せ及び在外日本古美術品保存修復協力事業調査
松本 修自	中国	98.06.21～98.06.26	イコモス国際シンポジウム出席
松本 修自	ドイツ	98.10.28～98.11.08	イコモス国際会議出席
松本 修自	タイ	98.12.17～98.12.21	遺跡保存修復調査と日・タイ協力に関する協議
松本 修自	ギリシア、英国、ドイツ、イタリア	99.03.07～99.08.21	文部省在外研究員: 欧州における建造物保存修復理及び技術の史的研究
三浦 定俊	イタリア	98.05.24～98.05.30	イクロム財政事業計画委員会及びFPC・AAB合同委員会出席
三浦 定俊	ドイツ	98.10.23～98.11.02	日独交流: 漆工品に関する共同研究
三浦 定俊	イタリア	98.11.16～98.11.23	イクロム理事会出席
三浦 定俊	イタリア	99.01.17～99.01.23	アッシジ震災被害文化財修復協力
三浦 定俊	ドイツ	99.03.10～99.03.15	日独交流: 漆工品保存に関する共同研究

氏 名	渡 航 先	期 間	目 的
宮本長二郎	トルコ	98.04.10～98.04.24	ゴールディオン MM 古墳の状況と腐朽原因調査
宮本長二郎	タイ、カンボジア	98.08.31～98.09.09	文化財保存修復国際協力事業のレビュー
宮本長二郎	タイ	98.12.17～98.12.24	遺跡保存修復調査と日・タイ協力に関する協議
宮本長二郎	タイ	99.03.05～99.03.14	日・タイ研究セミナー出席及び遺跡保存修復に関する調査及び協議
山梨絵美子	イタリア	99.03.21～99.03.29	在外日本古美術品保存修復協力事業調査
米倉 迪夫	大韓民国	99.03.19～99.03.23	国立中央博物館における中国絵画調査
渡邊 明義	中国	98.06.03～98.06.08	中央美術学院主催「巻軸絵画保存修復高級研修」での講演及び指導

2. 招へい研究員等

(1) 海外

今年度における海外からの招へいは下記の通りである。

招へい期間	氏名	国籍	所属	招へい理由
98. 5.17～ 8.14	金正耀	中国	中国社会科学院世界宗教研究所助教授	早期中国青銅器の自然科学的研究
98. 6.20～ 6.26	前川 信	日本	ゲティ文化財保存研究所環境研究室主任研究員	無公害な文化財生物劣化防除法の研究
98. 7.13～ 7.26	WANG Yunli	中国	中国文物研究所助理研究員	考古遺物の保存修理に関する共同研究
98. 8. 3～ 8.11	ヴィラ・ロボチャナラト	タイ	タイ国芸術総局秘書室長	日タイ共同研究に関する調査研究
98. 8. 3～ 8.11	タナチャイ・スワン・ワッターナ	タイ	タイ国芸術総局考古博物館保存担当官	日タイ共同研究に関する調査研究
98. 8. 5～ 8.14	羅世平	中国	中央美術学院美術史系主任	早期中国青銅器の研究
98. 8. 5～ 8.14	陳振裕	中国	湖北省文物考古研究所長	早期中国青銅器の研究
98. 8. 5～ 8.15	ミヒャエル・ベツエツト	ドイツ	バイエルン州立文化財研究所所長	漆工品の保存に関する調査研究
98. 8. 5～ 8.15	ミヒャエル・キューレンタール	ドイツ	バイエルン州立文化財研究所部長	漆工品の保存に関する調査研究
98. 8. 5～ 8.15	エバァ・キューレンタール	ドイツ	修復技術者	漆工品の保存に関する調査研究
98. 8.29～ 9.10	キメーナ・ヴェラ・シスネロス	エクアドル	修復建築家	建造物保存修復の比較研究
98.10. 1～10.16	張中学	中国	川劇学会会長	アジアの無形文化財の伝承と発展についての研究
98.10. 5～10.10	呉金塔	中国	福建省泉州市道教協会会員	アジアの無形文化財の伝承と発展についての研究
98.10. 6～10.15	王連茂	中国	泉州海外交通史博物館長	アジアの無形文化財の伝承と発展についての研究
98.10.20～10.26	金正耀	中国	中国社会科学院世界宗教研究所助教授	古代中国青銅器の研究
98.10.28～11.08	メラニー・トレデ	ドイツ	ハイデルベルク大学助教授	日本の物語絵画における中国的なるものの展開
98.10.31～11.13	ジョン・キーロン	イギリス	マージサイド国立博物館船舶・産業・陸運機械保存担当主任	第22回文化財の保存に関する国際研究集会参加
98.10.31～11.15	アルフレッド・ゴットヴァルト	ドイツ	ドイツ科学技術博物館鉄道部長	第22回文化財の保存に関する国際研究集会参加
98.10.31～11.15	マルティン・カウフマン	ドイツ	保存コンサルタント	第22回文化財の保存に関する国際研究集会参加
98.10.31～11.15	ヘイゼル・ニューイ	イギリス	大英科学博物館保存部長	第22回文化財の保存に関する国際研究集会参加
98.11. 2～11. 9	コルネリウス・ゲッツ	ドイツ	保存修復コンサルタント	第22回文化財の保存に関する国際研究集会参加
98.11. 2～11.14	姜大一	韓国	国立文化財研究所研究官	文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究

招へい期間	氏名	国籍	所属	招へい理由
98.11. 2～11.14	金恩恵	韓国	国立文化財研究所主事	文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究
98.11. 2～11.19	ユッカ・シムネック	アメリカ	農務省塩類研究所研究員	石造文化財の塩類風化のメカニズムとその保存対策に関する研究
98.12. 2～ 1.30	李樹若	中国	敦煌研究員保護研究所館員	敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究研修員
98.12. 2～ 1.30	薛平	中国	敦煌研究員保護研究所館員	敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究研修員
98.12.12～12.20	ガブリエラ・クリスト	オーストリア	オーストリア連邦記念物局修復部技官	紙の保存修復国際セミナー出席
98.12.12～12.20	ニープ・マッグイン	アイルランド	アイルランド国立ギャラリー紙保存担当官	紙の保存修復国際セミナー出席
98.12.13～12.20	アン・エバンス	イギリス	大英博物館保存担当官	紙の保存修復国際セミナー出席
98.12.13～12.20	マルティン・エリクソン	スウェーデン	西部スウェーデン保存財団上級紙保存担当官	紙の保存修復国際セミナー出席
98.12.13～12.20	クラウス・ウルリッヒ・シモン	ドイツ	ベルリン交通技術博物館紙保存担当官	紙の保存修復国際セミナー出席
98.12.13～12.20	クロード・ラローク	フランス	パリ第一大学講師	紙の保存修復国際セミナー出席
98.12.13～12.20	フィリップ・メルデイス	オランダ	ライデン極東保存センター主任保存担当官	紙の保存修復国際セミナー出席
98.12.13～12.20	リトウ・ジャイン	インド	インディラガンディー国立芸術センター保存担当助手	紙の保存修復国際セミナー出席
98.12.13～12.20	ゲルハルト・バニク	ドイツ	シュトゥットガルト州立アカデミー教授	紙の保存修復国際セミナー出席
98.12.13～12.20	モニカ・マルガレータ・スタール	オランダ	オランダ文化財研究所紙保存担当官	紙の保存修復国際セミナー出席
98.12.14～12.19	ジョアン・オルコック	オーストラリア	ヴィクトリア文化財保存センター紙保存担当官	紙の保存修復国際セミナー出席
99. 1. 7～ 1.13	郭太原	中国	河北省文物研究所副所長	河北省所在古代壁画の保存修復に関する日中共同研究協議
99. 1.27～ 2. 4	ヨーゼフ・クライナー	ドイツ	ボン大学教授	日独学術交流:ドイツにおける輸出漆器に関する研究
99. 1.27～ 2. 5	アンジェラ・ツイーゲンバイン	ドイツ	ケルン東洋美術館非常勤学芸員	仏教美術を中心とした東アジア美術史に関する調査研究
99. 1.27～ 2. 5	スーザン・クーン	ドイツ	ケルン東洋美術館非常勤学芸員	東大寺由来の美術品についての調査研究
99. 1.27～ 2. 5	ベトラ・ヒルデガルト・ロシュ	ドイツ	ケルン東洋美術館非常勤学芸員	仏教彫刻に関する調査研究
99. 1.31～ 2. 6	前川 信	日本	ゲティ文化財保存研究所環境研究室主任研究員	文化財の保存に関する国際研究集会組織委員会出席
99. 2.18～ 3. 3	ナリーラット・ブリーチャピーチャ	タイ	教育省芸術総局学芸員助理館員	日タイ共同研究に関わる調査研究
99. 2.18～ 3. 3	プラチャモン・ダスリ	タイ	教育省芸術総局技官	日タイ共同研究に関わる調査研究
99. 2.18～ 3. 3	スラユート・ヴィリヤダムロン	タイ	教育省芸術総局技官	日タイ共同研究に関わる調査研究

招へい期間	氏名	国籍	所属	招へい理由
99. 2.21～ 2.28	アソカ・パリサ・ウィ ジュラン	スリランカ	イコモススリランカ保存部長	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.21～ 2.28	ウオン・ヴォン	カンボジア	文化芸術省文化財局長	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.21～ 2.28	モハメド・アティク ル・イスラム	バングラディ シュ	考古局首席技術官	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.21～ 2.28	サミディ	インドネシ ア	文化局考古歴史遺産保存開発 部保存修復課長	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.21～ 2.28	ジョバンニ・シクロ ネ	イタリ ア	イクロム文化環境省文化財管 理局鑑査官	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.21～ 2.28	野口 英雄	日 本	ユネスコパリ本部主席担当官	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.22～ 2.28	張志軍	中 国	秦始皇兵馬俑博物館副研究員	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.22～ 2.28	申昌秀	韓 国	昌原文化財研究所長	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.22～ 2.28	サイド・ウル・レー マン	パキスタン	考古博物館局長	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.22～ 2.28	セナカ・バンダラナ ヤケ	スリランカ	ケラニア大学副学長	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.22～ 3. 1	O・P・アグラワル	イ ン ド	インド保存研究所評議会議長	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.22～ 3. 3	ニコム・ムシガカマ	タ イ	タイ芸術総局長	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 2.23～ 2.28	マウロ・カージ	イタリ ア	ユネスコアジア上級コンサル タント	第8回アジア文化財保存セ ミナー出席
99. 3. 1～ 3. 8	ロバート・キャロル	アメリ カ	メトロポリタン美術館修復室 長	在外日本美術修復協力事業の 中間視察及び関連調査
99. 3.10～ 3.16	韓鐘哲	韓 国	湖巖美術館付設文化財保存研 究所研究員	金属文化財の研究
99. 3.10～ 3.16	金奎虎	韓 国	湖巖美術館付設文化財保存研 究所研究員	金属文化財の研究
99. 3.12～ 3.23	モルダノバ・タチア ーナ・アレクサ	ロ シ ア	オゴウスカ・ウゴルスキー民 族文化調査研究所地球民族基 金部長	熊祭りの芸能に係わる類似伝 承の保存継続方法の共同研究
99. 3.12～ 3.23	モルダノバ・チモフィ アレクセイビチ	ロ シ ア	オゴウスカ・ウゴルスキー民 族文化調査研究所文化担当副 所長	熊祭りの芸能に係わる類似伝 承の保存継続方法の共同研究
99. 3.14～ 3.18	金英淑	韓 国	東洋服飾研究院長	日韓染色紙保存の研究
99. 3.14～ 3.21	李明憲	韓 国	国立文化財研究所保存科学研 究室長	文化財における環境汚染の影 響と修復技術の開発研究
99. 3.14～ 3.21	姜大一	韓 国	国立文化財研究所研究官	文化財における環境汚染の影 響と修復技術の開発研究
99. 3.15～ 3.25	ジューン・リー	アメリ カ	ロサンゼルス・カウンティ美 術館副学芸員	日本及び中国漆器に関する比 較方法の共同研究
99. 3.15～ 3.25	ホリス・グダル	アメリ カ	ロサンゼルス・カウンティ美 術館副学芸員	漆工品の歴史と技法に関する 調査研究
99. 3.17～ 3.31	アン・ローズ・キタ ガワ	アメリ カ	ハーバード大学美術館副学芸 員	サッカー美術館のコレクション の共同研究

招へい期間	氏 名	国 籍	所 属	招 へ い 理 由
99. 3.23～ 3.27	徐萬哲	韓 国	国立公州大学校地質環境学部 副教授	古墳遺跡の保存に関する共同 研究
99. 3.24～ 3.31	チラポーン・アラン ヤナク	タ イ	タイ国芸術総局考古博物館局 保存科学部研究官	文化財の虫害対策に関する研 究交流

(2) 国 内

今年度における国内からの招へいは下記の通りである。

期 間	氏 名	所 属	理 由
98. 4. 6～ 4. 7	宗田 好史	京都府立大学助教授	アジア文化財保存セミナー実施打合せ
98. 4.20	湯山 賢一	京都国立博物館学芸課長	在外日本古美術品保存修復指導委員会出席
98. 5.13	林 良彦	文化庁文化財保護部建造物課文化財調査官	重文下野煉瓦製造・劣化調査中間報告会出席
98. 5.13	下間久美子	文化庁文化財保護部建造物課文部技官	重文下野煉瓦製造・劣化調査中間報告会出席
98. 5.18	湯山 賢一	京都国立博物館学芸課長	在外日本古美術品保存修復指導委員会出席
98. 5.27～ 5.29	中村 雅治	文化庁文化財保護部建造物課主任調査官	環境調査報告会出席
98. 6. 1～ 6. 2	千葉 光一	名古屋大学工学部助教授	ICP-MSによる考古遺物中極微量元素の定量に関する研究
98. 6. 1～ 6. 2	鈴木 一義	国立科学博物館研究官	近代の文化遺産の修復研究
98. 6.22	岡部 央	群馬県立歴史博物館学芸課長	博物館・美術館等における虫害の総合防除管理(IPM)研究会出席
98. 6.22～ 6.23	松田 隆嗣	福島県立博物館学芸員	博物館・美術館等における虫害の総合防除管理(IPM)研究会出席
98. 6.22～ 6.23	園田 直子	国立民族学博物館助教授	博物館・美術館等における虫害の総合防除管理(IPM)研究会出席
98. 6.22～ 6.24	中村 康	京都国立博物館文化財保存修復管理指導室長	博物館・美術館等における虫害の総合防除管理(IPM)研究会出席
98. 6.22～ 6.24	成瀬 正和	宮内庁正倉院事務所室長	博物館・美術館等における虫害の総合防除管理(IPM)研究会出席
98. 6.22～ 6.24	長谷川孝徳	石川県立歴史博物館学芸員	博物館・美術館等における虫害の総合防除管理(IPM)研究会出席
98. 6.22～ 6.24	宇治谷 恵	国立民族学博物館情報管理施設情報企画課標本資料係長	博物館・美術館等における虫害の総合防除管理(IPM)研究会出席
98. 6.23	青木 睦	国文学研究資料館・史料館助手	博物館・美術館等における虫害の総合防除管理(IPM)研究会出席
98. 6.23	森田 稔	文化庁文化財保護部美術工芸課文化財管理指導官	博物館・美術館等における虫害の総合防除管理(IPM)研究会出席
98. 6.23	奥 健夫	文化庁文化財保護部美術工芸課文部技官	博物館・美術館等における虫害の総合防除管理(IPM)研究会出席
98. 6.29	松倉 公憲	筑波大学地球科学系教授	近代の文化遺産保存研究会にて講演
98. 6.29	居上 英雄	・クレイ・バーン・セラミック ス代表取締役会長	近代の文化遺産保存研究会にて講演
98. 6.29	熊倉 一見	栃木県立小山高等学校教諭	近代の文化遺産保存研究会にて講演
98. 6.29～ 6.30	黒田 悠三	舞鶴市立赤れんが博物館長	近代の文化遺産保存研究会にて講演
98. 6.29～ 6.30	水野信太郎	金沢学院大学経営情報学部助教授	近代の文化遺産保存研究会にて講演
98. 7. 2～ 7. 3	千葉 光一	名古屋大学工学部助教授	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
98. 7. 3	岡部 央	群馬県立歴史博物館学芸課長	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
98. 7. 3	青山 訓子	岐阜県美術館学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席

期 間	氏 名	所 属	理 由
98. 7. 3～ 7. 4	小林 幸雄	北海道開拓記念館展示課学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
98. 7. 3～ 7. 4	平 利弘	北海道立帯広美術館学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
98. 7. 3～ 7. 4	中村 康	京都国立博物館文化財保存修復管理指導室長	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
98. 7. 3～ 7. 4	長屋菜津子	愛知県美術館学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
98. 7. 3～ 7. 4	松田 隆嗣	福島県立博物館学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
98. 7. 6～ 7. 7	桜井 弘人	飯田市美術館博物館学芸員	花祭り研究会
98. 7. 7～ 7. 8	北村 謙一	人間国宝・学識経験者	第1回在外日本美術（工芸）修復研究会出席
98. 7.24～ 7.25	下坂 守	京都国立博物館学芸課普及室長	文化財保存に関する現状及び対策についての打合せ
98. 7.24～ 7.25	河上 繁樹	京都国立博物館学芸課主任研究官	文化財保存に関する現状及び対策についての打合せ
98. 7.24～ 7.25	宮川 禎一	京都国立博物館学芸課文部技官	文化財保存に関する現状及び対策についての打合せ
98. 9. 1～ 9. 2	沢田 正昭	奈良国立文化財研究所埋蔵文化センター部長	研究打合せ
98. 9.14～ 9.19	杉本 秀子	石橋美術館学芸員	近代美術資料のデータ化と共同利用に関する協議会出席
98. 9.16～ 9.18	平沢 広	萬鉄五郎記念美術館学芸員	近代美術資料のデータ化と共同利用に関する協議会出席
98. 9.28～ 9.29	福田 正己	北海道大学低温科学研究所教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.28～ 9.29	矢谷 明也	京都府舞鶴土木事務所職員	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.28～ 9.29	新田 英治	鹿児島大学法文学部教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.28～ 9.29	佐々木達夫	金沢大学文学部教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.28～ 9.30	伊東 重剛	熊本大学工学部助教	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.28～ 9.30	山田 拓伸	宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主幹研究員	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	泉田 英雄	豊橋技術科学大学助教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	伊藤 延男	元所長	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	上野 邦一	奈良女子大学生生活環境部教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	内田 昭人	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	森田 恒之	国立民族学博物館教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	今津 節生	奈良県立橿原考古学研究所保存科学研究室長	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	海老澤孝雄	・ぎ・エトス代表取締役	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	小野 健吉	奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	坂井 隆	・群馬県埋蔵文化調査事業団主幹専門員	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	高瀬 要一	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部計測修景室長	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	伊達 仁美	・元興寺文化財研究所保存科学センター保存修復室長	第4回国際文化財保存修復研究会出席

期 間	氏 名	所 属	理 由
98. 9.29	千田 剛道	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部主任研究官	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	中田 英史	文化財保存計画協会主任研究員	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	西山 要一	奈良大学文学部教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	増井 正哉	奈良女子大学生活環境学部助教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	内田 俊秀	京都造形芸術大学文化財研究センター教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	大西國太郎	京都芸術短期大学客員教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	木村 勉	奈良国立文化財研究所建造物研究室長	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	小西 正捷	立教大学文学部教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	中尾 芳治	帝塚山学院大学教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	矢野 和之	文化財保存計画協会代表取締役	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98. 9.29	石澤 良昭	上智大学外国学部長・教授	第4回国際文化財保存修復研究会出席
98.10. 1～10. 3	三浦 正人	北海道埋蔵文化財センター研究員主査	考古資料保存検討会出席
98.10. 1～10. 3	細川 金也	佐賀県教育庁文化財保護課主事	考古資料保存検討会出席
98.10. 1～10. 3	尾立 和則	修復家	考古資料保存検討会出席
98.10. 4～10. 6	鈴木 昭	日本工業大学工業技術博物館館長	第22回文化財の保存及び修復に関する研究会出席
98.10. 4～10. 6	横山晋太郎	かがみはら航空宇宙博物館参事	第22回文化財の保存及び修復に関する研究会出席
98.10. 4～10. 6	内田 星美	東京経済大学名誉教授会出席	第22回文化財の保存及び修復に関する研究
98.11. 5	池田 春男	あとリエシトロエン	第22回文化財の保存及び修復に関する研究会出席
98.11. 5	早川 博康	三菱自動車・乗用車開発本部装備設計課主任	第22回文化財の保存及び修復に関する研究会出席
98.11. 8～11.14	泉 万里	神戸市看護大学看護学部助教授	中世やまと絵資料の共有化に関する研究
98.11.16～11.17	武田 一夫	鴻池組技術研究所主任研究員	石造文化財、レンガ建造物の凍結劣化と塩類風化のメカニズムに関する研究会出席
98.11.16～11.18	登尾 浩助	岩手大学農学部講師	石造文化財、レンガ建造物の凍結劣化と塩類風化のメカニズムに関する研究会出席
98.11.16～11.18	取出 信夫	佐賀大学農学部講師助教授	石造文化財、レンガ建造物の凍結劣化と塩類風化のメカニズムに関する研究会出席
98.11.16～11.18	溝口 勝	三重大学生物資源学部助教授	石造文化財、レンガ建造物の凍結劣化と塩類風化のメカニズムに関する研究会出席
98.11.16～11.18	井上 光弘	鳥取大学乾燥地域研究センター助教授	石造文化財、レンガ建造物の凍結劣化と塩類風化のメカニズムに関する研究会出席
98.12.10	宗田 好史	京都府立大学人間環境学部助教授	アジア文化財保存セミナー・ワーキンググループ会合出席
98.12.10	田辺 征夫	奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部長	アジア文化財保存セミナー・ワーキンググループ会合出席
98.12.11	陰里 鐵郎	横浜美術館長	平成10年度研究評価委員会出席
98.12.11	大河 直躬	千葉大学名誉教授	平成10年度研究評価委員会出席

期 間	氏 名	所 属	理 由
98.12.11	馬淵 久夫	くらしき作陽大学食文化学部長	平成 10 年度研究評価委員会出席
98.12.11	坂本 満	聖徳大学人文学部教授	平成 10 年度研究評価委員会出席
98.12.11	小林 責	武蔵野女子大学短期大学部教授	平成 10 年度研究評価委員会出席
98.12.11	沢田 正昭	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長	平成 10 年度研究評価委員会出席
98.12.13～12.15	寺嶋 弘道	北海道立帯広美術館学芸課長	第 2 回文化財生物被害防除の今後研究会出席
98.12.14	河村 康博	羽村市郷土博物館学芸員	第 2 回文化財生物被害防除の今後研究会出席
98.12.14	岡部 央	群馬県立歴史博物館学芸課長	第 2 回文化財生物被害防除の今後研究会出席
98.12.14～12.15	及川 規	東北歴史資料館学芸部技術主査	第 2 回文化財生物被害防除の今後研究会出席
98.12.14～12.15	小林 幸雄	北海道開拓記念館事業部展示課学芸員	第 2 回文化財生物被害防除の今後研究会出席
98.12.14～12.15	手塚 均	東北歴史資料館学芸部保存科学研究科長	第 2 回文化財生物被害防除の今後研究会出席
98.12.14～12.15	長谷川孝徳	石川県立歴史博物館学芸課学芸主査	第 2 回文化財生物被害防除の今後研究会出席
98.12.14～12.15	原田 和彦	松代藩文化施設管理事務所学芸員	第 2 回文化財生物被害防除の今後研究会出席
98.12.14～12.15	降幡 浩樹	長野市立博物館学芸員	第 2 回文化財生物被害防除の今後研究会出席
98.12.14～12.15	松田 隆嗣	福島県立博物館専門学芸員	第 2 回文化財生物被害防除の今後研究会出席
98.12.14～12.15	山田 拓伸	大分県立歴史博物館学芸課主幹研究員	第 2 回文化財生物被害防除の今後研究会出席
98.12.21～12.23	服部 等作	神戸芸術工科大学助教授	西アジアの鳥人像に関する資料の収集
99. 1.13～ 1.14	水野伸太郎	金沢学院大学経営情報学部助教授	文化財保存修理研究協議会出席及び研究発表
99. 1.13～ 1.14	矢野 明也	京都府舞鶴土木事務所	文化財保存修理研究協議会出席及び研究発表
99. 1.14	渡辺 邦夫	埼玉大学工学部教授	文化財保存修理研究協議会出席及び研究発表
99. 1.17～ 1.22	福島 恒徳	山口県立美術館	東福寺所蔵絵画についての共同研究
99. 1.19～ 1.21	山本 英男	京都国立博物館資料センター文部技官	東福寺所蔵絵画についての共同研究
99. 1.25～ 1.26	中川 芳三	松竹・常務取締役	上方歌舞伎の伝承研究会講師
99. 1.25～ 1.27	石川 充宏	高知大学教授	第 2 回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 1.25～ 1.27	岡 泰正	神戸市立博物館学芸員	第 2 回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 1.25～ 1.27	小野田一幸	神戸市立博物館学芸員	第 2 回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 1.25～ 1.27	勝盛 典子	神戸市立博物館学芸員	第 2 回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 1.25～ 1.27	塚原 晃	神戸市立博物館学芸員	第 2 回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 1.25～ 1.27	門田 由紀	安芸市立歴史民俗資料館学芸員	第 2 回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 1.25～ 1.27	北村 謙一	漆芸修復家	第 2 回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 1.25～ 1.27	小池 富雄	徳川美術館学芸員	第 2 回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 1.25～ 1.27	下川 達弥	長崎県立美術博物館次長	第 2 回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 1.25～ 1.27	高橋 隆博	関西大学教授	第 2 回在外日本古美術修復技術研究会出席

期 間	氏 名	所 属	理 由
99. 1.29～ 1.30	木村 勉	奈良国立文化財研究所建造物研究室長	センター保存計画研究会出席
99. 1.29～ 1.30	増井 正哉	奈良女子大学助教授	センター保存計画研究会出席
99. 1.29～ 1.30	西山 要一	奈良大学教授	センター保存計画研究会出席
99. 1.29～ 1.30	橋本 清勇	京都大学大学院工学研究科助手	センター保存計画研究会出席
99. 1.29～ 1.30	福田 敏郎	京都府教育委員会文化財保護課係長	センター保存計画研究会出席
99. 1.29～ 1.30	池亀 彩	京都大学大学院生	センター保存計画研究会出席
99. 1.29～ 1.30	寺本 礼子	寺本建築都市研究所	センター保存計画研究会出席
99. 1.29～ 1.30	飯田喜四郎	愛知工業大学客員教授	センター保存計画研究会出席
99. 1.29～ 1.30	村田 信夫	滋賀県教育委員会文化財保護課専門員	センター保存計画研究会出席
99. 2. 2～ 2. 3	杉 市和	能楽師笛方森田流	森田流笛「翁」の録音実施計画
99. 2. 2～ 2. 3	佐々木達夫	金沢大学教授	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 2～ 2. 3	矢谷 明也	京都府舞鶴土木事務所職員	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 2～ 2. 3	福田 正己	北海道大学低温研究所教授	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 2～ 2. 4	山田 拓伸	宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主幹研究員	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 2～ 2. 4	増井 正哉	奈良女子大学助教授	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	谷一 尚	共立女子大学助教授	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	中村 誠一	ホンジュラス国立人類学研究所ラス・ピラス遺跡調査団長	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	浅野 和生	愛知教育大学助教授	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	伊藤 延男	元所長	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	今津 節生	橿原考古学研究所保存科学研究室長	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	内田 昭人	奈良国立文化財研究所保存工学研究室長	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	内田 俊秀	京都造形芸術大学教授	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	大井 邦明	京都外国語大学教授	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	西藤 清秀	橿原考古学研究所総括研究員	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	坂井 隆	群馬県埋蔵文化財調査事業団主幹専門員	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	沢田 正昭	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	大西國太郎	京都芸術短期大学客員教授	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	中尾 芳治	帝塚山学院大学教授	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	海老澤孝雄	ざ・エトス代表取締役	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	坂本 勇	東京修復保存センター	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3	常木 晃	筑波大学歴史人類学系助教授	第5回国際文化財保存修復研究会出席
99. 2. 3～ 2. 4	田辺 征夫	奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部長	第5回国際文化財保存修復研究会出席及び第8回アジア文化財保存セミナー WG 会合出席

期 間	氏 名	所 属	理 由
99. 2. 3～ 2. 4	宗田 好史	京都府立大学人間環境学部助教 授	第5回国際文化財保存修復研究会出席及び第8回アジア文化財保存セミナー WG 会合出席
99. 2. 3～ 2. 5	横山伸太郎	かがみはら航空宇宙博物館参事	近代文化遺産の保存修復に関する研究交流
99. 2. 4	奥谷 禎一	神戸大学名誉教授	第23回文化財の保存及び修復に関する国際シンポジウム組織委員会出席
99. 2. 5	加藤 央之	電力中央研究所大気科学部上席 研究員	地球規模の気候変動と文化財の保存に関する研究会出席
99. 2. 5	高田久美子	科学技術振興財団	地球規模の気候変動と文化財の保存に関する研究会出席
99. 2. 5	木村 圭司	奈良女子大学文学部助手	地球規模の気候変動と文化財の保存に関する研究会出席
99. 2. 5～ 2. 6	登尾 浩助	岩手大学農学部講師	地球規模の気候変動と文化財の保存に関する研究会出席
99. 2. 5～ 2. 6	溝口 勝	三重大学生物資源学部助教授	地球規模の気候変動と文化財の保存に関する研究会出席
99. 2. 9～ 2.10	曾和 博朗	能楽師	幸流小鼓「翁」の録音実施計画
99. 2. 9～ 2.11	田中 秀吉	佐賀大学理工学部助教授	近代文化遺産の保存修復に関する研究交流
99. 2.10	曾和 尚靖	能楽師	幸流小鼓「翁」の録音実施計画
99. 2.15	日高健一郎	筑波大学芸術学系助教授	センター研究員採用二次試験選考委員会出席
99. 2.15～ 2.20	上蘭 四郎	笠岡市立美術館主任学芸員	日本の近代美術の発達に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集成研究協議会出席
99. 2.17～ 2.18	田中 正史	小杉放菴記念日光美術館学芸主任	日本の近代美術の発達に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集成研究協議会出席
99. 2.17～ 2.18	鈴木 日和	小杉放菴記念日光美術館学芸員	日本の近代美術の発達に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集成研究協議会出席
99. 2.19	岡部 央	群馬県立歴史博物館学芸課長	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
99. 2.19～ 2.20	中村 康	京都国立博物館文化財保存修復 管理指導室長	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
99. 2.19～ 2.20	小林 幸雄	北海道開拓記念館展示課学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
99. 2.19～ 2.20	石川登志雄	京都府教育庁文化財保存課管理 調査係	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
99. 2.19～ 2.20	田中 善明	三重県立美術館学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
99. 2.19～ 2.20	寺嶋 弘道	北海道立帯広美術館学芸課長	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
99. 2.19～ 2.20	松田 隆嗣	福島県立博物館学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
99. 2.19～ 2.20	宮 衛	石川県立美術館学芸主査	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
99. 2.19～ 2.20	宇治谷 恵	国立民族学博物館情報管理施設 情報企画課標本資料係長	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
99. 2.23～ 2.24	町田 章	文化庁文化財保護部文化財鑑査官	第8回アジア文化財保存セミナー出席
99. 2.23～ 2.24	西 和彦	文化庁文化財保護部建造物課技官	第8回アジア文化財保存セミナー出席
99. 2.23～ 2.27	井上 洋一	東京国立博物館学芸部考古課先 史室長	第8回アジア文化財保存セミナー出席
99. 2.23～ 2.24	伊藤 延男	元所長	第8回アジア文化財保存セミナー出席
99. 2.25～ 2.27	伊藤 延男	元所長	第8回アジア文化財保存セミナー出席

期 間	氏 名	所 属	理 由
99. 2.23～ 2.24	宗田 好史	京都府立大学人間環境学部助教授	第 8 回アジア文化財保存セミナー出席
99. 2.26～ 2.27	宗田 好史	京都府立大学人間環境学部助教授	第 8 回アジア文化財保存セミナー出席
99. 2.24～ 2.26	石澤 良昭	上智大学外国語学部長	第 8 回アジア文化財保存セミナー出席
99. 2.24～ 2.27	中川 武	早稲田大学理工学部教授	第 8 回アジア文化財保存セミナー出席
99. 2.25～ 2.26	四辻 秀紀	徳川美術館主任学芸員	源氏物語絵巻の共同調査・研究
99. 2.25～ 2.26	吉川 美穂	徳川美術館学芸員	源氏物語絵巻の共同調査・研究
99. 2.28～ 3. 6	安藤 佳香	中京女子大学助教授	日本における外来美術の受容についての研究会出席
99. 3. 1～ 3. 4	植野 健造	石橋美術館学芸員	日本の近代美術の発達に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集成研究協議会出席
99. 3. 8～ 3.11	三輪 英夫	九州大学文学部助教授	研究協議会出席
99. 3. 8～ 3.11	長岡 龍作	東北大学文学部助教授	研究協議会出席
99. 3. 9～ 3.11	青井 哲人	神戸芸術工科大学環境デザイン科助手	日本における美術史学の成立と展開に関する研究会出席
99. 3. 9～ 3.11	小笠原健吉	盛岡市永井大念仏剣舞保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	大桑 太作	天竜市懐山おくない保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	伊東 勉	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	松本 閏	長崎県巖原町盆踊り保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	安部 暁昇	大分県国東町成仏寺修正鬼会保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	石光 祐照	大分県国東町岩戸寺修正鬼会保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	玉城 孝	沖縄県与那国町与那国民俗芸能保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	高木 啓夫	高知県文化財保護審議会委員	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	澤 純滋	佐賀県太良町竹崎観世音寺修正鬼祭保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	北條貞次郎	秋田市秋田万歳保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	西久保忠勝	奈良県都祁村題目立保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	懸田 弘訓	福島県文化財保護審議会委員	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	植木 行宣	滋賀県文化財保護審議会委員	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	佐藤 輝男	安中市宿糸操灯籠人形保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	伊藤 信次	静岡県引佐町寺野ひょんどりおくない伝承保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席

期 間	氏 名	所 属	理 由
99. 3. 9～ 3.12	坪井理作雄	天童市神沢田楽保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3. 9～ 3.12	瀬沢 達也	鹿児島県瀬戸内町諸鈍芝居保存会	民俗芸能研究協議会における事例報告・協議会出席
99. 3.10～ 3.12	関 尚美	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	大野 智子	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	布施 恵	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	曾田ミヨ子	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	堀井 薫	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	丸山 正敏	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	高橋 和芳	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	高橋 和人	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	布施 武彦	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	大野 和重	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	松浦 明彦	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	高橋 典久	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	押田 貞信	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	関 一重	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.10～ 3.12	布施 富治	柏崎市綾子舞保存振興会	民俗芸能研究協議会における実演
99. 3.15～ 3.17	石田 正治	豊橋工業高等学校教諭	近代文化遺産の保存修復に関する研究交流
99. 3.16～ 3.18	井上 一稔	奈良国立博物館主任研究官	日本における外来美術の受容についての研究協力

3. 海外研究者等の来訪

(1) 来訪研究員

氏名	国籍	所属等
レイモンド・リーヴェンバーグ	オランダ	家具修復専門家
ポール・バーナード・ケネリー	オーストラリア	シドニー大学アジア学科博士課程
ニコム・シシガカマ	タイ	タイ国芸術総局長
ヴィラ・ロボチャナラト	タイ	タイ国芸術総局秘書室長
タナチャイ・スワンワッタナ	タイ	タイ国芸術総局考古博物館部保存担当官
范迪安	中国	中国中央美術学院副院長
朱竹	中国	中国中央美術学院外事弁公室主任
胡偉	中国	中国中央美術学院中国画材料技法工作室主任
スーザン・クーン	ドイツ	ケルン東洋美術館非常勤学芸員
アンジェラ・ツィーゲンバイン	ドイツ	ケルン東洋美術館非常勤学芸員
ベトラ・ヒルデガルト・ロシュ	ドイツ	ケルン東洋美術館非常勤学芸員

(2) 表敬訪問

日時	氏名	国籍	所属等	目的
1998年4月	W. F. ファイト	ドイツ	ベルリン東洋美術館長	在外日本古美術品の修理打合せ
1998年5月	K. J. ブラント	ドイツ	シュトゥットガルト・リンデン博物館	視察
1998年6月	ルパートフォークナー	イギリス	ヴィクトリア & アルバート美術館	視察
1998年8月	林金梅	台湾	国立文化資産保存研究所	視察
1998年10月	張文彬ほか4名	中国	国家文物局長	視察
1998年11月	胡偉	中国	中央美術学院	学院主催「巻軸絵画修復上級研修会」の協力依頼及び打合せ
1998年12月	ジェームス・T. ユーラック	アメリカ	フリーア美術館/アーサー・M・サックラー美術館	在外日本古美術品の修理打合せ
1999年1月	黄国鐘ほか1名	台湾	台湾国会議員	視察
1999年1月	范迪安ほか2名	中国	中央美術学院副院長	文化財保存修復研究の調査視察
1999年3月	シチュアート・ピア	アメリカ	メトロポリタン美術館	在外日本古美術品の修理打合せ

6. 主な所蔵資料

1. 図書資料

(1) 美術関係図書

日本・東洋・欧米の美術に関する書籍を中心に、各地方公共団体編集の文化財関係調査報告書、展覧会の図録・目録類、売立目録、美術関係雑誌（和文 1,962 種・韓文 34 種・中文 98 種・欧文 394 種）等を所蔵している。

特色としては江戸期の版本や明治大正期刊行の大型図録・明治期開催博覧会関係資料・明治から昭和初期にかけて発行された和文美術雑誌など、多くの貴重書を所蔵している。

(2) 芸能関係図書

雅楽・寺事と・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸、その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書 11,628 冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第 1 次）・テアトロ（第 1 次）・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌、また声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

(3) 保存科学・修復技術関係図書

伝統的生産および工芸技術書、技術史またはそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書および化学・物理学・生物学部門の保存科学の関連和洋書、合わせて 3,665 冊を所蔵している。

本年度における収集数と総計は次表の通りである。

区分 (1998 年度)	美術関係	芸能関係	保存科学・修復技術関係	計
和漢書	1,528 冊	1,286 冊	76 冊	3,030 冊
洋書	24 冊	8 冊	108 冊	

2. そ の 他

(1) 美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成と、購入写真・複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画・書籍・彫刻・工芸・建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ 26 万点、原板保有量はほぼ 3 分の 1 にあたり、別にマイクロ・フィルム 255 巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スナップ等と図書カード・図版カード・各種索引類など多数。

(2) 芸能関係資料

レコード、録音テープ、シネフィルム、ビデオテープ、写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには、毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、1960（昭和 35）年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションは、明治・大正・昭和 3 代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ、ビデオテープおよび写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真、テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。資料別の所蔵数は、次の通りである。

区 分	録音テープ		シネフィルム		ビデオテープ		
	analog	digital	8mm	16mm	VHS 方式	8mm	ベータカム
1998 年度	0 本	17 本	0 本	0 本	64 本	0 本	31 本
合 計	2,992 本	353 本	198 本	4 本	549 本	105 本	31 本

区 分	音 盤		
	SP・LP	CD	VHD・LD
1998 年度	0 枚	222 枚	0 枚
合 計	7,119 枚	804 枚	16 枚

(3) 保存科学・修復技術関係資料

考古遺物や美術工芸品など、諸部門の文化財を撮影した X 線フィルム多数を所蔵する。X 線透視撮影は昭和 20 年代から力を注いで行われており、近年それらのデータをデジタル化し、整理する作業を進めている。その一部は 1997（平成 9）年度に「X 線フィルム目録 一考古資料一」として公開された。

7. 研究所関係資料

1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、1952（昭和27）年4月1日に発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、1924（大正13）年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選択を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鎌二郎及び東京美術学校校長正木直彦とはかって諸方面の意見を徴し、またわが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

期 日	事 項
昭和元年12月	前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建物造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。
昭和2年2月	美術研究所準備事業を開始した。
同 年10月	東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192m ² の建物1棟を起工した（本館）。
昭和3年9月	前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
昭和4年5月	遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。
昭和5年6月28日	勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。
同 年10月17日	美術研究所開所式を挙行了した。
昭和7年1月	美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。
同 年4月18日	株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。
同 年5月26日	帝国美術院はこの申出を受理した。 明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。
昭和9年10月18日	毎年10月18日を開所記念日と定めた。
昭和10年1月28日	鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129m ² の書庫が竣工した。
同 年4月	『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。
同 年6月1日	勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

	研究資料閲覧規定を制定し、閲覧事務を開始した。
昭和12年 6月24日	勅令第 281 号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。
同 年11月29日	美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。
昭和13年 2月12日	木造、平屋建、延面積 97 m ² の写真室 1 棟が竣工した。
昭和19年 8月10日	黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。
昭和20年 5月28日	美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町 1 丁目本間家倉庫 3 棟に疎開した。
同 年 7～8月	酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。
昭和21年 3月29日	酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。
同 年 4月 4日	酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し、引揚げを完了した。
同 年 4月16日	東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。
昭和22年 5月 1日	美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。
	国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた（保存科学部の前身）。昭和 23 年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室（66m ² ）に設けた。
昭和25年 8月29日	文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。
同 年 8月29日	文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。
昭和26年 1月31日	美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。
昭和27年 4月 1日	文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の 3 部 1 室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。
	また文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。
同 年 7月 1日	芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室 2 室を同大学から借用し、研究を開始した。
昭和28年 4月26日	保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫 132 m ² を改造のうえ移転した。
昭和29年 7月 1日	東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。
昭和32年 3月22日	東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、8 m ² の保存科学部の薬品庫が竣工した。
同 年11月30日	従来の 2 階建書庫の上にさらに 1 階を増築 3 階建とし、増築分延面積 71 m ² が竣工した。
昭和34年 4月30日	東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。
昭和36年 9月16日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。
昭和37年 3月31日	東京国立博物館内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）として、鉄筋コンクリート造、2 階建、延面積 663 m ² の建物 1 棟が竣工した。
同 年 7月 1日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。
同 年 7月20日	芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。
昭和43年 6月15日	文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。
昭和44年 8月23日	保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延 1,950.41 m ² ）の起工式が行われた。
昭和45年 3月25日	前記の別館が竣工したので、同年 5 月 26 日竣工式が行われた。
同 年 4月22日	芸能部は、別館 3 階に移転した。
同 年 5月 8日	保存科学部は別館の地階～2 階に実験用機械類の移転据付を完了した。
同 年 6月29日	保存科学部庁舎の 1 階の模様替工事に着手し、同年 10 月 15 日工事が完了した。
同 年11月 2日	所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の 1 階に移転した（本館は、美術部庁舎となる）。これにより研究所の所在地表示は「12 番 53 号」が「13 番 27 号」に変更された。

昭和46年4月1日	保存科学部庁舎及び別館の敷地 2,658 m ² を東京国立博物館から所管換された。
昭和48年4月12日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。
昭和52年4月18日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。
昭和53年3月20日	本館構内の写場等（木造、平屋建、延面積 144 m ² ）を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積 569.95 m ² の建物が竣工した。
昭和53年4月5日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。
昭和59年6月28日	文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。
平成2年10月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、5部1室1課となった。
平成5年4月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、アジア文化財保存研究室は、国際文化財保存修復協力室となった。
平成7年4月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力室が廃止され、新たに国際文化財保存修復協力センターが設置された。同センターには、企画室及び環境解析研究指導室が置かれ、1センター5部1課となった。
平成7年4月1日	東京芸術大学と「東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の教育研究に対する連携・協力に関する協定書」が交わされ、連携併任分野として独立専攻大学院文化財保存学専攻（システム保存学）が設置された。
平成8年8月2日	新宮建物建築工事の着工式を挙行了した。
平成9年10月1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力センターに保存計画研究指導室が置かれた。

3. 歴代所長（昭和5年～平成10年）

役 職	氏 名	期 間
主 事	正 木 直 彦	昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24
主 事	矢 代 幸 雄	昭和 6.11.25～昭和 10. 5.31
所長事務取扱	和 田 英 作	昭和 10. 6. 1～昭和 11. 6.21
所 長	矢 代 幸 雄	昭和 11. 6.22～昭和 17. 6.28
所長事務取扱	田 中 豊 藏	昭和 17. 6.29～昭和 22. 8.15
所 長	田 中 豊 藏	昭和 22. 8.16～昭和 23. 5.10
所長代理	福 山 敏 男	昭和 23. 5.11～昭和 24. 8.30
所 長	松 本 栄 一	昭和 24. 8.31～昭和 27. 3.31
所長事務代理	矢 代 幸 雄	昭和 27. 4. 1～昭和 28.10.31
所 長	田 中 一 松	昭和 28.11. 1～昭和 40. 3.31
所 長	関 野 克	昭和 40. 4. 1～昭和 53. 3.31
所 長	伊 藤 延 男	昭和 53. 4. 1～昭和 62. 3.31
所 長	濱 田 隆	昭和 62. 4. 1～平成 3. 3.31
所 長	西 川 杏 太 郎	平成 3. 4. 1～平成 8. 3.31
所 長	渡 邊 明 義	平成 8. 4. 1～現在

4. 名誉研究員

氏 名	退 職 時 官 職 名	在 所 期 間	名誉研究員 発令年月日
白 畑 よ し		昭和 5. 6. 30～昭和 27. 8. 1	昭和 53. 10. 18
高 田 修	美術部長	昭和 27. 12. 1～昭和 44. 3. 31	昭和 53. 10. 18
登 石 健 三	保存科学部長	昭和 27. 10. 1～昭和 50. 4. 1	昭和 53. 10. 18
岡 畏 三 郎	美術部長	昭和 20. 5. 15～昭和 51. 4. 1	昭和 53. 10. 18
関 野 克	所長	昭和 40. 4. 1～昭和 53. 4. 1	昭和 53. 10. 18
秋 山 光 和	美術部第一研究室長	昭和 16. 10. 1～昭和 42. 2. 1	昭和 54. 10. 18
久 野 健	情報資料部長	昭和 20. 5. 31～昭和 57. 4. 1	昭和 57. 10. 18
川 上 涇	美術部長	昭和 21. 2. 28～昭和 57. 4. 1	昭和 57. 10. 18
関 千 代	美術部第二研究室長	昭和 18. 12. 15～昭和 58. 4. 1	昭和 58. 10. 18
横 道 萬 里 雄	芸能部長	昭和 28. 3. 16～昭和 51. 4. 1	昭和 59. 10. 18
上 野 ア キ	情報資料部文献資料研究室長	昭和 17. 11. 3～昭和 59. 4. 1	昭和 59. 10. 18
江 上 綏	情報資料部主任研究官	昭和 38. 5. 18～昭和 59. 3. 31	昭和 59. 10. 18
田 村 悦 子	美術部主任研究官	昭和 22. 6. 16～昭和 60. 3. 31	昭和 60. 10. 18
猪 川 和 子	情報資料部文献資料研究室長	昭和 22. 6. 27～昭和 60. 3. 31	昭和 60. 10. 18
伊 藤 延 男	所長	昭和 53. 4. 1～昭和 62. 3. 31	昭和 62. 10. 18
柳 澤 孝	美術部長	昭和 21. 9. 30～昭和 62. 3. 31	昭和 62. 10. 18
三 隅 治 雄	芸能部長	昭和 27. 10. 1～昭和 63. 3. 31	昭和 63. 10. 18
樋 口 清 治	修復技術部長	昭和 37. 11. 1～昭和 63. 3. 31	昭和 63. 10. 18
田 實 榮 子	美術部主任研究官	昭和 23. 3. 31～平成元. 3. 31	平成元. 10. 18
見 城 敏 子	保存科学部物理研究室長	昭和 34. 4. 1～平成元. 3. 31	平成元. 10. 18
濱 田 隆	所長	昭和 62. 4. 1～平成 3. 3. 31	平成 3. 10. 18
関 口 正 之	美術部長	昭和 42. 2. 1～平成 3. 3. 31	平成 3. 10. 18
佐 藤 道 子	芸能部長	昭和 34. 4. 1～平成 4. 3. 31	平成 4. 10. 18
馬 淵 久 夫	保存科学部長	昭和 50. 10. 1～平成 4. 3. 31	平成 4. 10. 18
新 井 英 夫	保存科学部長	昭和 45. 9. 1～平成 5. 3. 31	平成 5. 4. 1
石 川 陸 郎 ^{*1}	保存科学部主任研究官	昭和 32. 4. 15～平成 5. 3. 31	平成 5. 4. 1
西 川 杏 太 郎	所長	平成 3. 4. 1～平成 8. 3. 31	平成 8. 4. 1
門 倉 武 夫	保存科学部生物研究室長	昭和 32. 4. 1～平成 8. 3. 31	平成 8. 4. 1
三 輪 英 夫	美術部第二研究室長	昭和 53. 8. 1～平成 8. 3. 31	平成 8. 4. 1
蒲 生 郷 昭	芸能部長	昭和 56. 4. 1～平成 10. 3. 31	平成 10. 4. 1
中 里 壽 克	修復技術部第一修復技術研究室長	昭和 39. 4. 1～平成 10. 3. 31	平成 10. 4. 1

*1 1997年6月28日 逝去

5. 1998（平成10）年度予算等

（単位：千円）

事 項	予 算 額
1. 人件費	395,389
2. 運営費	526,834
事業管理	30,349
一般研究	47,491
特別研究	256,655
受託研究	2,414
文化財保存修復の国際交流事業の促進等	172,518
国際文化財保存修復協力センター運営	10,007
重要資料緊急修理	7,400
3. 施設費（補正予算分含む）	4,496,094
4. 文化財情報総合システムの整備	39,803
合 計	5,458,120

1998（平成10）年度特別研究一覧

（単位：千円）

事 項	予 算 額
日本における外来の美術の受容についての研究	5,014
日本近代美術の発展に関する明治後期から昭和初期の基礎資料作成	5,130
近代歌舞伎の伝承に関する研究	5,101
文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究	7,232
文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力	57,113
文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究	4,689
無公害な文化財生物劣化防除法の研究	7,342
近代の文化遺産の修復に関する調査研究	20,302
研究用機器維持費	11,032
研究用機器整備（補正予算分含む）	133,700
合 計	256,655

1998（平成10）年度科学研究費補助金交付一覧

（単位：千円）

研究種目	研究課題	研究代表者	交付額
基盤研究(A)	文化財収蔵庫の庫内空気環境調査法の公定化のための基礎的研究	佐野 千絵	4,300
〃	日本における美術史学の成立と展開	米倉 迪夫	3,500
〃	世界の文化財の保存	宮本長二郎	13,400
〃	古建築の保存を目的とした石材強化保存用合成樹脂の物性	西浦 忠輝	1,600
〃	文化財の新たな総合的虫菌害防除対策（IPM）のシステム構築に関する研究	三浦 定俊	7,700
基盤研究(B)	下張り文書剥離のための澱粉糊の老化技術	増田 勝彦	3,900
基盤研究(C)	極楽浄土を表家するモチーフとしての迦陵頻伽の諸相とその文化的特質—鳥と人からなる動物を通して—みた東西文化の交流とその中国的受容—	勝木言一郎	1,200
〃	地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究	高桑いづみ	700
〃	多孔質材料の凍結・融解による劣化機構の解明とその防止対策	石崎 武志	1,000
〃	新資料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ—大神楽から花祭りへ—	中村 茂子	1,600
国際学術研究	古代東アジアにおける青銅器の変遷に関する考古学的自然科学的研究	平尾 良光	4,900
〃	文化財の微量試料分析法の開発	三浦 定俊	4,800
〃	タイ国・アユタヤ遺跡の保存修復に関する研究	宮本長二郎	3,100
特別研究員奨励費	絹などのたんぱく質材質試料の劣化状態のPy-GC-MSによる評価手法の確立	佐野 千絵	3,100
合計			52,900

1998（平成10）年度受託研究一覧

（単位：千円）

研究課題	受入額
江戸期銀貨の品位と保存に関する研究	420
装潢材料の物性研究	300
花籠車蒔絵鞍・鎧の修復処置研究	530
武者塚古墳出土遺物の保存修復研究	399
国宝「源氏物語絵巻」調査研究	765
合計	2,414

6. 関係法規

◎文部省組織令（抄）（昭 59. 6. 28 政令第 227 号）

（最終改正 平 9. 8. 22）

第 2 章 文化庁

第 3 章 施設等機関

（施設等機関）

第 108 条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国語研究所を置く。

2 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第 114 条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

（研究施設の指定）

第 115 条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は、法第 5 条第 37 条に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則（抄）（昭 28. 1. 13 文部省令第 2 号）

（最終改正 平 9. 10. 1）

第 5 章 文化庁の施設等機関

第 4 節 国立文化財研究所

第 1 款 名称及び位置

（名称及び位置）

第 116 条の 9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第 1 款の 2 東京国立文化財研究所

（所 長）

第 117 条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

（内部組織）

第 118 条 東京国立文化財研究所に、庶務課次の 5 部を置く。

一 美術部

二 芸能部

三 保存科学部

四 修復技術部

五 情報資料部

- 2 前項に定めるもののほか、東京国立文化財研究所に、国際文化財保存修復協力センターを置く。
(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締りに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属さない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

- 2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

- 2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 4 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及び保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の三室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

- 2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

- 2 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 3 第二修復技術研究室においては、紙、布又は草を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 4 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

- 2 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。
- 3 写真資料室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

(国際文化財保有修復協力センター)

第122条の4 国際文化財保存修復協力センターにおいては、文化財の分野における国際的な貢献に資するため、世界の文化財の保存修復に関する国際協力、資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的、技術的な研

修を行う。

(国際文化財保存修復協力センターの長)

第122条の5 国際文化財保存修復協力センターに長を置く。

2 前項の長は、国際文化財保有修復協力センターの事務を掌理する。

(国際文化財保存修復協力センターの三室及び事務)

第122条の6 国際文化財保存修復協力センターに企画室、環境解析研究指導室及び保存計画研究指導室を置く。

2 企画室においては、世界の文化財の保有修復に関する国際協力及び研修について、企画及び実施に係る事務を処理する。

3 環境解析研究指導室においては、世界の文化財の保存環境の解析に関する資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的、技術的な研修を行う。

4 保存計画研究指導室においては、世界の文化財の保存計画に関する資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的及び技術的な研修を行う。

(客員研究員)

第122条の7 東京国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

2 客員研究員は、所長の命を受け、東京国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3 客員研究員は、非常勤とする。

東京国立文化財研究所年報 1998年度

1999（平成11）年11月30日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-27

TEL 03-3823-2241(代表)

FAX 03-3828-2434

<http://www.tobunken.go.jp>
